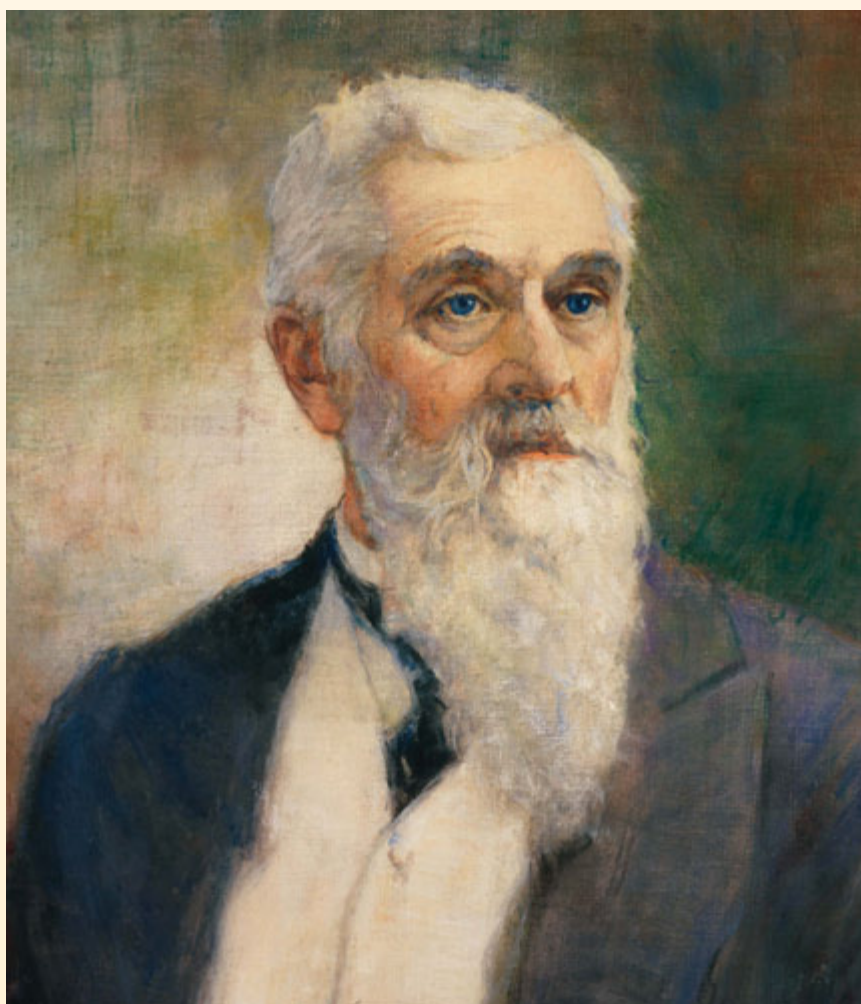




歴代大管長の教え

ロレンゾ・スノー





歴代大管長の教え

ロレンゾ・スノー

発行

末日聖徒イエス・キリスト教会
ユタ州ソルトレーク・シティ

『歴代大管長の教え』シリーズの書籍

『歴代大管長の教え—ジョセフ・スミス』（アイテム番号 36481 300）

『歴代大管長の教え—ブリガム・ヤング』（35554 300）

『歴代大管長の教え—ジョン・テラー』（35969 300）

『歴代大管長の教え—ウィルフォード・ウッドラフ』（36315 300）

『歴代大管長の教え—ロレンゾ・スノー』（36787 300）

『歴代大管長の教え—ジョセフ・F・スミス』（35744 300）

『歴代大管長の教え—ヒーバー・J・グラント』（35970 300）

『歴代大管長の教え—ジョージ・アルバート・スミス』（36786 300）

『歴代大管長の教え—デビッド・O・マッケイ』（36492 300）

『歴代大管長の教え—ハロルド・B・リー』（35892 300）

『歴代大管長の教え—スペンサー・W・キンボール』（36500 300）

これらの書籍を注文するには、地元の配送センターで購入するか、store.lds.org にアクセスしてください（訳注：store.lds.org での日本語版書籍の入手可能時期は未定）。電子版の書籍は、LDS.org で利用できます。

本書に関するご意見、ご提案をお寄せください。あて先は以下のとおりです。
Curriculum Development, 50 East North Temple Street, Room 2404, Salt Lake City, UT 84150-0024 USA.

またはご意見、ご提案を cur-development@ldschurch.org に電子メールでお寄せください。

お名前、ご住所、所属ステーク名、ワード名を明記してください。また本書の題名も忘れずにお書きください。ご意見やご提案には、本書の良い点や改善できると思われる点についてお書きください。

© 2012 Intellectual Reserve, Inc.

版權所有

印刷：日本

英語版承認：2002年8月

翻訳承認：2002年8月

原題：Teachings of Presidents of the Church: Lorenzo Snow

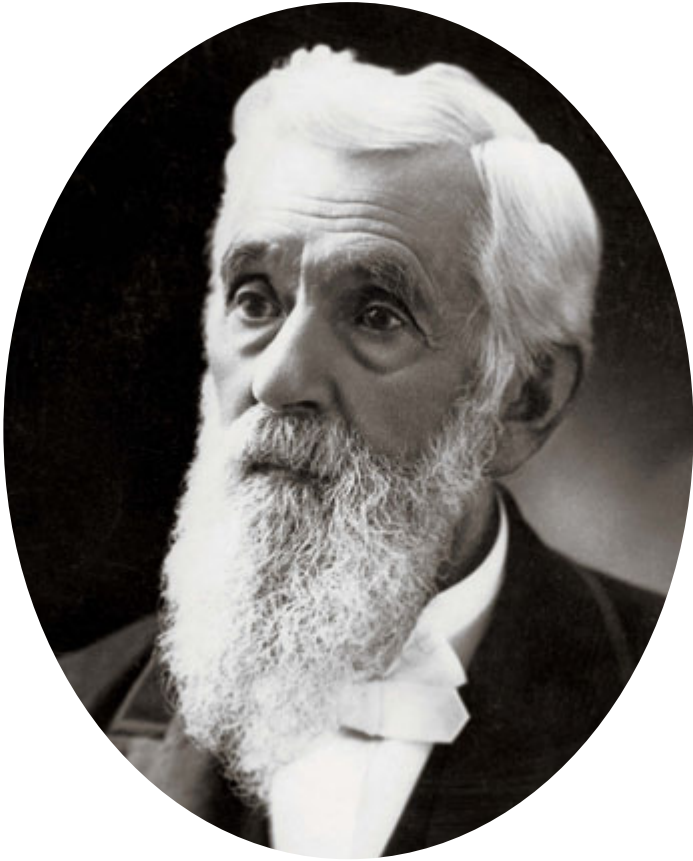
Japanese

36787 300



目次

序	v
経歴のまとめ	viii
ロレンゾ・スノーの生涯と教導の業	1
1. 信仰によって学ぶ	33
2. バプテスマと聖霊の賜物 ^{たまもの}	42
3. 生涯にわたる改心—真理の原則に従って絶えず進歩する	52
4. 聖霊の力によって強められる	63
5. 忠実な者のすばらしい行く末	74
6. 主の前に完全になる—「日々少しずつ良くなる」	84
7. 試練のときの忠実さ—「暗闇 ^{くらやみ} から輝かしい日の光へ」	96
8. 「神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り」	105
9. 神聖な家族関係	113
10. 「神殿に入ってください」	122
11. 「わたし自身の考えですのではなく、〔御父の〕み旨を求めている」	131
12. 什分の一 ^{じゅうぶん} 、わたしたちが守られ、進歩するための律法	140
13. 扶助協会—真実の慈愛と清い信心	149
14. 「神にはなんでもできない事はない」	157
15. 神の王国における忠実で活気に満ちた奉仕	165
16. 「一つとなれるように」	176
17. 「人類家族の救いのための」神権	185
18. 教会の指導者と無私の奉仕	194
19. 伝道活動—「あらゆる人の心に触れるために」	203
20. 神の王国は前進する	214
21. この世を愛する以上に神を愛する	224
22. 人々に善を行う	231
23. 預言者ジョセフ・スミス	240
24. イエス・キリストの使命について思うこと	249
絵画・写真リスト	257
索引	259



Lorenzo Snow,



序

大管長会ならびに十二使徒定員会は、教会員が末日の預言者たちの教えを通して、回復された福音への理解を深め、主にさらに近づけるように、『歴代大管長の教え』シリーズを作成した。本シリーズに新たな書籍が追加されるにつれ、家庭に福音の参考図書のコレクションを増やしていくことができるであろう。本シリーズの書籍は、個人学習と、日曜日のレッスンの両方における使用を目的として作成されている。また、そのほかのレッスンや話を準備する際、および教会の教義についての質問に答える際にも役立つであろう。

本書では1898年9月13日から1901年10月10日まで末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長を務めたロレンゾ・スノー大管長の教えを採り上げている。

個人学習

ロレンゾ・スノー大管長の教えを研究しながら、祈りをもって御霊の^{みたま}導きを求める。各章の最後に載っている質問は、スノー大管長の教えを理解し、生活の中で応用するうえで助けとなるであろう。これらの教えを研究しながら、それを家族や友人にどのように教えることができるかについて考えるとよい。そうすることで、読んだ事柄についての理解が深まるであろう。

本書から教える

本書は家庭または教会で教える際に利用することができる。以下の指針を参考にするとよい。

教える準備をする

教える準備をするときには、聖霊の導きを求める。該当する章を祈りをもって研究し、その章で採り上げられているスノー大管長の教えに対してよく理解できているという自信を持てるようにする。あなた自身がスノー大管長の言葉から影響を受けるとき、あなたはよりいっそう心から、力強く教えることになるであろう(教義と聖約 11:21 参照)。

メルキゼデク神権や扶助協会のレッスンを教える場合には、本書をわきに置

いて別の資料からレッスンを準備するべきではない。該当する章から、自分が教える人々にとって最も役立つと感じる教えを、祈りをもって選ぶ。章によってはクラスの時間内に十分話し合えない量の内容が含まれている。

参加者には、レッスンの前に該当する章を研究しておくように、また本書を携えて来るように勧める。そうすることによって、話し合いに参加して互いに教化し合うためのより良い備えをすることができる。

レッスンの導入を行う

該当する章についての導入を行うとき、またレッスン全体を通じて、御霊^{みたま}が参加者の心と思いと触れることのできる雰囲気を作るように努める。レッスンを始めるために、その章で採り上げられている教えに参加者が注意を向けるように助ける。その方法として、以下を行うことができる。

- 章の冒頭にある「ロレンゾ・スノーの生涯から」の項を読み、話し合う。
- 章に掲載されている写真や絵、引用されている聖句について話し合う。
- 関連する賛美歌を歌う。
- テーマに関する個人的な経験を簡単に紹介する。

スノー大管長の教えについての話し合いを進める

本書から教えるときには、自分の考えを話し、質問をし、互いに教え合うように人々に勧める。彼らが最もよく学ぶのは、積極的に参加するときである。これはまた、彼らが個人の啓示を受けられるように助ける良い方法でもある。すべての教えを採り上げるよりも、有意義な話し合いを続けてもらうようにする。話し合いを促すために、章の最後にある質問を利用する。これらの質問には章の中の参照箇所が記載されている。また、自分が教える人々のために特別に自分自身で質問を用意してもよい。

ほかにも以下のような方法が考えられる。

- 参加者に、その章について個人学習で学んだことを紹介してもらう。1 週間のうちに数人の参加者に連絡を取り、学んだことを紹介する準備をしておくように依頼するとよいであろう。
- 章の最後にある質問を幾つか選び、それを読むように参加者に割り当てる（個人または小さなグループで行わせる）。質問に関連のある教えを章の中から探すように言う。その後、自分の考えや理解したことをグループの人たちに話すように勧める。
- 章の中から選んだスノー大管長の言葉を一緒に読む。参加者に、スノー大管長が教えていることを示している例を、聖文や自分自身の経験から紹介してもらう。

- 参加者に、興味がある項を選んで黙読するように言う。同じ項を選んだ者同士で2, 3人のグループを作り、学んだことを話し合うように勧める。

分かち合いと応用を促す

スノー大管長の教えが最も意味を持つのは、参加者がそれをほかの人々に分かち合い、自分の生活の中で応用するときである。以下の方法について考えるとよい。

- 親としての責任、あるいはホームティーチャーや訪問教師としての責任を果たすうえで、スノー大管長の教えをどのように応用できるか参加者に尋ねる。
- スノー大管長の教えの幾つかを家族や友人に分かち合うように、参加者に勧める。
- 学んだことを応用し、その経験について次回のクラスの冒頭で分かち合うように、参加者に勧める。

話し合いを終える

あなたがレッスンを簡単に要約するか、または一人か二人の参加者に要約してもらおう。話し合ってきた教えについて証する。^{あかし}証を述べるようにほかの人に勧めてもよい。

本書で引用されている資料に関する情報

本書に収められている教えは、スノー大管長の説教、出版された書き物、手紙、日記から直接引用したものである。大管長の手紙と日記からの抜粋はすべて、句読点、語のつづり、大文字の使用、段落分けを標準なものに改めている。印刷物からの抜粋は、読みやすくするために編集上または印刷上必要な場合を除いて、原文で使われている句読点、語のつづり、大文字の使用、段落分けをそのまま使用している。このため、読者は本文に多少統一を欠く点があることに気づくかもしれない。例えば、“*gospel*”という語は大文字で始められている場合とそうでない場合とがある。

また、スノー大管長は度々、男性と女性の両方に対して“*men*”, “*man*”, “*mankind*”などの用語を使用している。また男女両方を指す代名詞として頻繁に“*he*”, “*his*”, “*him*”を使用している。これは当時の言葉遣いにおいて一般的なことであった。当時の言語慣習と現在の用法には相違があるものの、スノー大管長の教えは女性と男性の両方に当てはまるものである。



経歴のまとめ

以下の年表は、本書で紹介されているロレンゾ・スノー大管長の教えの歴史的な背景を簡単に紹介するものである。

- 1814年4月3日 オハイオ州マンチュアで、ロゼッタ・レオナ・ペティボーン・スノーとオリバー・スノーのもとに誕生する。
- 1832年 オハイオ州ハイラムで、預言者ジョセフ・スミスの説教を聞く。
- 1835年 オハイオ州オーバーリンのオーバーリン大学で学ぶために家を離れる。途中で十二使徒定員会のデビッド・W・パッテン長老に出会う。
- 1836年 ヘブライ語を学ぶためにオーバーリン大学を去り、オハイオ州カートランドへ移る。回復された福音を受け入れ、6月にバプテスマと確認を受ける。後に長老に聖任される。12月にジョセフ・スミス・シニアより祝福師の祝福を受ける。
- 1837年 オハイオ州で福音を^の宣べ伝える。
- 1838年10月–1840年5月 再び伝道に出る。オハイオ州、ミズーリ州、ケンタッキー州、イリノイ州で福音を宣べ伝え、1839年から1840年にかけての冬は学校の教師として働く。
- 1840年5月 イリノイ州ノーブーを去り、イングランドで伝道する。十二使徒定員会の指示の下、イングランドのロンドンとその周辺において教会を管理する。『救いを得るただ一つの道』(*The Only Way to Be Saved*)という題のパンフレットを発行する。
- 1843年4月12日 イングランドで改宗した250人の末日聖徒とともにイリノイ州ノーブーに到着する。

- 1843 年後半から 1844 年前半 イリノイ州リマの学校で教える。
- 1844 年 オハイオ州で、ジョセフ・スミスを合衆国大統領として選出するキャンペーンの統括者となる。6月27日にジョセフ・スミスとハイラム・スミスが殉教したことを知り、ノーブーに戻る。
- 1845 年 1月 オハイオ州を巡ってノーブー神殿建築のための寄付金を集めるよう、ブリガム・ヤング大管長より任命される。
- 1845 年 シャーロット・スクワイヤーズおよびメアリー・アダリン・ゴッダードと当時教会で実施されていた多妻結婚をする。
- 1846 年 2月 ノーブー神殿でエンダウメントと結び固めを受けた後、家族とほかの末日聖徒とともにノーブーを去る。
- 1846 - 1848 年 家族とともにマウントピスガと呼ばれるアイオワ州の入植地に住む。一時期、入植地を管理する。1848年の春に、ソルトレーク・シティーに向かう聖徒の一団を率いる。
- 1849 年 2月 12日 ソルトレーク・シティーにおいて使徒に聖任される。
- 1849 年 永代移住基金のために寄付金を集める。
- 1849 - 1852 年 イタリアで伝道する。さらにモルモン書のイタリア語版が出版されるのを監督したイングランドや、スイス、マルタでも奉仕する。『ジョセフの声』(*The Voice of Joseph*) という題のパンフレットを出版する。
- 1852 年 ユタ州議会に選出される。
- 1853 年 ユタ北部に位置するボックスエルダー郡の末日聖徒入植地を管理するよう、ブリガム・ヤング大管長に任命される。その地の中心都市をブリガム・シティーと名付ける。そこで教会と地域社会の指導者として長年にわたって奉仕する。

- 1864年3月-1864年5月 十二使徒定員会のエズラ・T・ベンソン長老が率いる一団とともに、ハワイ諸島で短期間の伝道を行う。
- 1872年10月-1873年7月 大管長会第一顧問のジョージ・A・スミス管長が率いる一団とともに、ヨーロッパの一部と聖地を含む中東を旅する。この旅行はブリガム・ヤング大管長の要請によって行われた。
- 1882年 アメリカ合衆国議会がエドマンズ法案を通過させ、多妻結婚を重罪とし、一夫多妻者が投票したり、公職に就いたり、陪審員を果たすことを禁じる。
- 1885年8-10月 合衆国北西部とワイオミング州でアメリカインディアンへの伝道を行う。
- 1886年3月12日-1887年2月8日 多妻結婚実施のために投獄される。
- 1887年 アメリカ合衆国議会が多妻結婚を禁ずるもう一つの法であるエドマンズ・タッカー法案を通過させる。これは、連邦政府が教会の不動産の多くを没収することを認めるものである。この法案は1887年3月3日に法律となる。
- 1888年5月21日-23日 ユタ州マンタイ神殿の奉献式で奉献の祈りを読む。これに先立ち、ウィルフォード・ウッドラフ大管長が5月17日にマンタイ神殿を奉献。
- 1889年4月7日 十二使徒定員会会長に任命される。
- 1893年5月19日-1898年9月 ソルトレーク神殿の最初の神殿会長として奉仕する。
- 1898年9月2日 ウィルフォード・ウッドラフ大管長の死去に伴い、前任使徒となり、教会を管理する指導者となる。ソルトレーク神殿の中で神の示しを受け、大管長会の再組織を進めるようにと主から指示を受ける。
- 1898年9月13日 十二使徒定員会から教会の大管長として支持を受ける。大管長としての奉仕を開始する。

- 1898年10月9日 総大会において教会の大管長として支持される。
- 1898年10月10日 末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長に任命される。
- 1899年5月 ユタ州セントジョージを訪問する。そこで、聖徒に^{じゅうぶん}什分の一の律法について説教するようにとの啓示を受ける。まずセントジョージでそのメッセージを伝え始め、そのメッセージが教会全体に伝わるように指導する。
- 1901年1月1日 20世紀を迎えるに当たり、『世界へのあいさつ』（“Greeting to the World”）という題の宣言を出版する。
- 1901年10月10日 ユタ州ソルトレーク・シティーにおいて87歳で死去。



ロレンゾ・スノーの生涯と教導の業

1835年のある日のこと、21歳のロレンゾ・スノーは両親の家を後にし、オハイオ州オーバーリンにあるオーバーリン大学を目指して馬を走らせていた。その短い旅で経験したあることが、自らの人生に転機をもたらすことになるとは思ってもいなかった。

オハイオ州にあった故郷マンチュアの道を走っていく途中で、ロレンゾは自分と同様、馬に乗った男性に出会った。その男性とは主イエス・キリストの使徒に聖任されて間もないデビッド・W・パッテンであった。彼は伝道を終え、末日聖徒の住むオハイオ州カートランドに戻るところだった。二人はおよそ30マイル（50キロ）の道のりを旅した。ロレンゾ・スノーはそのときのことを後にこう語っている。

「わたしたちの会話はいつしか宗教や学問のことに及びました。まだ年が若く、かなりの学歴があると自負していたわたしは、最初、彼の見解を軽視しがちでした。彼の言葉遣いに時々文法的な誤りがあったのでなおさらでした。しかし、救いの計画について語り続ける彼の熱意と謙遜けんそんさに触れ、わたしはこの男性が神の人であり、その証あかしが真実であるということ認めざるを得ませんでした。」¹

パッテン長老に会ったとき、ロレンゾ・スノーは末日聖徒イエス・キリスト教会の会員ではなかった。しかし、教会の教えについて幾らかの知識はあった。実際、スノー家は預言者ジョセフ・スミスの訪問を受けたこともあったのである。また、ロレンゾの母親、そして姉のレオノラとエライザはバプテスマと確認を受け会員となっていた。ただ、自らも語っているように、ロレンゾは当時「ほかのことをするのに忙しく」、教会に関連することには「まったく関心を示さなかった。」²このような状況を変えるきっかけとなったのがパッテン長老との会話だった。このときの経験についてロレンゾは次のように述べている。「それはわたしの人生にとって重大な転機となりました。」³パッテン長老との会話の中で何を感じたのか、ロレンゾは次のような言葉で語っている。

「わたしは強く心を刺される思いがしました。明らかに彼は自分の語っていることは真実だと知っていました。証を述べて、話し終えようとしていたとき、夜寝る前に主に心を向けて、主に直接尋ねるようにとわたしに勧めたからです。わたしはこれを実行に移しました。結果的に、この偉大な使徒に会ったその日



ロレンゾ・スノーの父親, オリバー・スノー

から、わたしの心の思いは、計り知れないほど大きくなり、高められました。」

パッテン長老の「どこまでも誠実で熱心な態度と霊的な力」⁴は、将来、使徒として奉仕することになる一人の若い男性に尽きることのない影響を及ぼした。また、パッテン長老との静かな会話が転機となり数々の経験をするに至ったロレンゾ・スノーは、末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長、すなわち地上における神の代弁者となるよう備えられた。

信仰と勤勉を伝統とする家庭に育つ

1800年5月6日、オリバー・スノーがロゼッタ・レオノラ・ベティボーンと結婚したときに、信仰にあふれ宗教的伝統を重んじる二つの強固な家族が一つに結び合わされた。新郎と新婦は最も初期にヨーロッパから合衆国へと移り住んだ開拓移民、すなわち1600年代に宗教的な迫害を逃れて大西洋を横断したイギリス人入植者の子孫だった。オリバーとロゼッタは結婚してから最初の数年間をマサチューセッツ州で過ごしたが、その間に娘のレオノラ・アビゲールとエライザ・ロクシーが生まれた。その後、家族は当時の合衆国で最も西部にあった開拓地の一つ、オハイオ州マンチュアに移った。彼らはこの地域に移り住んできた11番目の家族だった。マンチュアでさらに家族が増え、二人の娘、アマンダ・パーシーとメリッサが生まれた。オリバーとロゼッタの5番目の子供であり長男のロレンゾは、1814年4月3日にマンチュアで生まれた。後にロレンゾの弟、ルシアス・オーガスタスとサミュエル・ピアースが生まれた。⁵

家族の伝統に基づき、オリバーとロゼッタは子供たちに信仰、勤勉、そして教育の大切さを教えた。数々の困難を耐え抜き、堅固な家庭を築くに至るまでの話を両親から聞かされたことで、子供たちは落胆を克服し、日々の生活に注がれる神の祝福に感謝することを学んだ。エライザは次のように書いている。「わたしたちは両親について心からこう言うことができます。父と母は、紛れもなく高潔な人たちでした。周囲の人々とのつきあいにおいても、仕事上の取引においても全面的に信頼されていました。勤勉、節約、厳格な道徳観念を身に付けることができるように子供たちをよく訓練しました。」⁶ ロレンゾは、「思いやりと優しさ」が身に付くよう、いつも両親から訓練を受けたことに感謝している。⁷

ロレンゾは成長し、この世の活動にも知的な活動にも勤勉に取り組んだ。父親は地域社会に奉仕し「公的な仕事」に携わっていたために、家を空けることが多かった。オリバーが不在のとき、ロレンゾは、長男として、農場の切り盛りを任された。ロレンゾはこの責任を真剣にとらえ、立派にやり遂げた。仕事の手が空くと、ロレンゾはたいてい本を読んでいた。「ロレンゾが本を手放すことはありませんでした。」エライザはこう語っている。⁸

ロレンゾの人格がどのように形成されていったかについて振り返り、エライザはこう述べている。「幼いころから、〔彼は〕その後の生涯における成長を特徴づける行動力と決断力を発揮しました。」⁹

若者特有の望みを卒業する

オリバー・スノーとロゼッタ・スノーは、宗教について中立な立場で学ぶよう勧めた。子供たちに様々な教会について学ぶことを許し、「あらゆる宗派の善良で知性的な人々」に自分たちの家を開放した。そのような両親の勧めがあったにもかかわらず、ロレンゾは「宗教的な事柄にほとんど、あるいはまったく関心を示さなかった。ましてやある特定の宗教に加わりたいという望みなどなかった。」¹⁰ 軍隊の司令官になるのがロレンゾの夢であり、その夢は人生のいかなる影響力にも勝っていた。それは「彼が争いを好むからではなく、軍人として生きることに伴う冒険と騎士道精神にあこがれていた」からであったと歴史家のオーソン・F・ホイットニーは記している。¹¹ しかし、間もなくして、この望みは他の望みに取って代わった。「大学教育」¹² を受けるために、家を離れ、近くにあったオーバーリン大学に入学したのである。

ロレンゾはオーバーリン大学で学ぶうちに、新たな視点から宗教に興味を持ち始めた。パッテン長老と交わした会話の影響がまだ残っていたことから、回復された福音の教義について思い巡らし、さらにはオーバーリン大学の生徒と、また牧師となるために学んでいる生徒とすら、その教義を分かち合ったのである。カートランドの聖徒と合流していた姉のエライザにあてた手紙の中で、ロレンゾは次のように書いている。「牧師や牧師を目指す人々に対してモルモンの教えを擁護するという点で、わたしはかなりの成功を収めています。確かに、多くの人々を改宗に導いたわけではありませんし、わたし自身もまだ改宗していませんが、モルモンの教えに何か深遠な〔知恵〕を感じると九分どおり認めてくれた人たちもいます。しかし、オーバーリンの学生はモルモンの教えに対して根強い偏見を抱いており、その偏見を取り除くのは容易なことではありません。」

その同じ手紙の中で、ロレンゾはエライザから受けた勧めに返事を書いている。エライザはロレンゾがカートランドで自分とともに生活し、ジョセフ・スミスや十二使徒定員会の会員も参加するクラスでヘブライ語を学べるよう調整していたのである。ロレンゾはこう書いている。「お姉さんがカートランドでほんとうに幸福な生活を送っていることを知りうれしく思います。現在のところそちらに引っ越すつもりはありませんが、こちらと同様に教育を受ける機会があるのであれば、試しに引っ越してもかまわないような気がします。と言うのも、何より、このオーバーリンで自分がこれほど長い間擁護し、支持する努力を払ってきた教えを実際にこの耳で聞くのは、興味深く、無駄なことではないかもしれないと

思うからです。」

ロレンゾは末日聖徒イエス・キリスト教会の教義に感銘を受けてはいたが、教会に加わるのをためらっていた。しかし、興味はあった。エライザへの手紙の中で、ロレンゾは教会について幾つかの質問をした。牧師になるために準備をしているオーバーリンの生徒についてこう語っている。「彼らは、7年以上もの年月をかけて難しい勉強をしなければ、天に神がおられることを異教徒に伝えることができません。弁護士がある特定の資格を持っていなければ、法廷で語ることはできないのと同じです。」これとは対照的な姉の教会について、ロレンゾは次のような感想を述べている。「お姉さんの教会では、教義を宣べ伝えるときに、大学で得られる知識というよりは、天から授かる助けに頼っているように思います。」ロレンゾは御霊の働きについて知りたいという望みを口にし、「この現代の世界」に聖霊が授けられるなどということがあるかどうか尋ねた。また、聖霊を受けることができるという仮定の下に、彼はこう尋ねている。「神は常に別の人を通してそれを授けられるのですか。」¹³ 言い換えるならば、聖霊を受けるには神権の権能が必要なかどうかを知りたかったのである。

ロレンゾはオーバーリン大学で友人ができ、教育を受けたことには感謝した。



ここに描かれているカートランド神殿の奉献から2か月後の1836年6月、ロレンゾ・スノーはオハイオ州カートランドでバプテスマと確認を受けた。

しかし、そこで与えられる宗教上の教えに対しては不満が募る一方だった。とうとうロレンツは退学し、カートランドでヘブライ語を学ぶという姉の勧めに従った。彼は合衆国東部にある大学に行く準備ができるようヘブライ語のクラスにだけ出席したと語っている。¹⁴ しかし、エライザも指摘しているように、ヘブライ語の学習に加えて、「彼は永遠の福音について多くのことを学び、その福音を信じるいきいきとした信仰で満たされた。」¹⁵ やがてオーバーリン大学で尋ねた質問に対する答えを見いだしたロレンツは、1836年6月、この神権時代における最初の十二使徒定員会の一員であったジョン・ポイントンからバプテスマを受けた。また、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員に確認された。

2週間ほどたって、ロレンツは友人からこう尋ねられた。「スノー兄弟、バプテスマを受けた後で聖霊は受けましたか。」ロレンツはこう振り返る。「その質問に大きな衝撃を受けました。必要なものはすべて受けたはずですが、期待していたものは受けていなかったからです。」つまり、確認は受けたものの、聖霊の特別な現れは受けていなかったのである。「自分の取った行動には満足していましたが、自分自身には満足していませんでした。そのような気持ちを抱いたまま、夜になって、わたしは祈りをささげるために使っていたいつもの場所に入って行きました。」ひざまずいて祈り始めると、ロレンツはすぐに祈りの答えを受けた。「その経験が消し去られることは、記憶のあるかぎり絶対にありません。」彼は後にこう断言している。「……わたしは神がおられ、カルバリの丘で亡くなられたイエスが御子であられ、預言者ジョセフが、自らも公言したように、権能を受けたという完全な知識を受けました。その現れがもたらした満足と栄光は、いかなる言葉をもってしても表現することができません！ それからわたしは家に帰りました。今やわたしは、神の御子の福音が回復され、ジョセフが主の御名みなによって語る権能を授かった神の預言者であるということ、全世界に向かって何の疑いもなく証できるようになったのです。」¹⁶

この経験によって強められたロレンツは宣教師となる準備をした。姉のエライザが言うように、改宗したことによってロレンツの望みは変わり、「目の前に新しい世界が開かれた。」エライザはこう語っている。「彼は今やこの世の軍人として名を成すのではなく、天の軍勢とともに勝利者を選ぶ競技場へと足を踏み入れたのです。」¹⁷

専任宣教師として様々なチャレンジにこたえる

1837年の春、ロレンツ・スノーはオハイオ州で伝道活動を開始した。教会に入ろうと決心したときと同様、専任宣教師として奉仕しようと決心したときも、自分の物の見方や計画を変えなければならなかった。日記にこう記している。「1837年、〔わたしは〕自分が支持していたすべての考え方を完全に捨て

た。」¹⁸ ロレンゾは合衆国東部の大学で「古代ギリシャ・ラテン文学」の道に進む計画をあきらめた。¹⁹ また、財布も旅の袋も持たずに旅をする、言い換えれば、食物と住まいを提供してくれる人々の善意に頼り、金銭を持たずに出て行くという点に関して同意した。これはロレンゾにとって何よりも難しいことだった。父親の生活手段であった農場を手伝うことで収入を得、幼いころからいつも自分の出費は自分で賄うことが大切だと感じていたからである。彼はこう語っている。「信条的に、わたしは食物や住まいのことで人に依存する気にはなれませんでした。どれほどの距離を旅するにしても、父は必ず出費に見合う十分な金銭を持たせてくれました。わたしにとって、出かけて行き、食べる物や枕する所を人々に請い求めるのは、非常につらいことでした。それまでの生涯で受けた訓練とはあまりにも懸け離れていたからです。」²⁰ ロレンゾが「そうしようと決心した」のは、「そうすることを神が求めておられるという疑いような知識」を受けたからにほかならなかった。²¹

スノー長老のおじ、おば、いとこ、そして友人の中には、スノー長老が宣教師のときに行った最初の集会に出席した人たちがいた。初めて説教をしたときのことを振り返り、スノー長老は次のように語っている。「そのとき、わたしはかなり当惑していました。……そこに立ち、招待されていた自分の親戚や隣人に説教をするのはほんとうに容易なことではありませんでした。その日は夜に話をする責任がありましたが、そのときまでほとんど一日中祈っていたのを覚えています。一人外に出て、語るべきことを教えてくださるよう主に祈りました。立ち上がって話し始めるわたしの姿を見て不安を感じたと後でおばから聞かされました。しかし、わたしは口を開きました。自分が何を話しているのかまったく分かりませんでした。おばが言うには、およそ45分間、すばらしい話をしたということでした。」²² スノー長老は、感謝しつつ、次のように振り返る。「わたしには靈感の霊がわたしを助け語るべきことを教えてくれるという確信がありました。主の前にへりくだり、聖なる神権の力と靈感にあずかることができるように、祈りと断食をもって心から主に願い求めたのです。このようにして会衆の前に立ったところ、あらかじめ何を話すか考えもつかなかったにもかかわらず、口を開いた途端、わたしは聖霊の力をはっきりと感じました。それと同時に、わたしの心は光に満たされ、天よりの靈感とその靈感を伝えるための適切な言葉を与えられたのです。」²³ その地域を離れるまでに、スノー長老は一人のおじ、一人のおば、何人ものいとこ、数人の友人にバプテスマと確認を施した。²⁴

家族と友人に福音を分かち合ったスノー長老は、ほかの都市や町で伝道の働きを続け、1年あまりの間、奉仕した。スノー長老はこう報告している。「この伝道の期間中、わたしはオハイオ州の様々な場所を旅しました。その間、真理に忠実であり続けてきた大勢の人々にバプテスマを施しました。」²⁵

この最初の伝道から帰るとすぐに、スノー長老はもう一度福音を宣べ伝えた



ロレンゾ・スノー長老

いと思った。彼はこう語っている。「伝道の召しに伴う御霊を非常に強く心に感じ、この業に携わりたいと切望しました。」²⁶ 今度はミズーリ州、ケンタッキー州、イリノイ州、そしてもう一度オハイオ州で回復された福音を宣べ伝えた。

スノー長老とスノー長老が分かち合ったメッセージに反感を抱く人たちもいた。その一例として、スノー長老はケンタッキー州で経験した次のような出来事について語っている。彼の説教を聞くためある人の家に人々が集まったときのことである。説教を終えた後、スノー長老は、家を出たらすぐに自分を襲おうと計画している人たちがいることを知った。スノー長老は当時のことを振り返りこう語っている。その家で「大勢の人々がひしめき合っている中」一人の男性が「たまたまわたしのコートのすそポケットに手を触れ、突然恐怖に襲われたのです」。スノー長老のポケットに何か固いものが入っていると感じ、彼はすぐにこの宣教師は武装していると友人たちに警告した。スノー長老はこう記している。「もうそれで十分でした。無法者気取りの男たちは、その邪悪な計画を放棄したのです。」少し滑稽な感じで、スノー長老は語っている。「男たちに恐れを抱かせ、銃だと勘違いさせてわたしを守ってくれたもの、それは愛する祝

福師のジョセフ・スミス〔・シニア〕からもらった貴重な贈り物、すなわち携帯用聖書だったのです。』²⁷

スノー長老を歓迎し、彼が分かち合ったメッセージを喜んで受け入れた人たちもいた。ミズーリ州にあった入植地では、5人の人を教えたが、その人たちは真冬にバプテスマを受けた。スノー長老たちは儀式が行えるように川に張っていた氷を切り抜かなければならなかった。寒かったにもかかわらず、改宗者の中には、「水の中から出てきたとき、手をたたき、神をほめたたえた」人たちもいた。²⁸

スノー長老が行った最初の2回の伝道は、1837年の春から1840年5月までの期間に及んだ。スノー長老の手紙の抜粋には、主の業に携わったこの時期のことが記されている。「わたしはその年〔1838年－1839年〕の冬の残りを旅と説教に費やしました。成功の度合いや人々から受けた待遇はまちまちでした。これ以上ないほど丁重に受け入れられ、非常に熱心に説教を聞いてもらったこともありますし、口汚く下品な言葉でののしられたこともありました。しかし、わたしが従うと公言しているイエスが受けられたようなひどい仕打ちを受けたことは一度たりともありませんでした。』²⁹「自分が経験した様々な状況について、今振り返ってみると、……驚くとともに感動させられます。』³⁰「主はわたしとともにいてくださり、困難な働きを成し遂げるときに、大きな祝福を与えてくださったのです。』³¹

イングランドでの伝道

1840年5月の初め、ロレンツ・スノーはイリノイ州ノーブーの聖徒と合流したが、そこに長く滞在することはなかった。大西洋を横断し、イングランドで伝道する召しを受けたロレンツは、その同じ月、ノーブーを後にした。イングランドではすでに9人の使徒が伝道していたが、ロレンツは出かける前に、時間を取り、そのうち何人かの家族を訪問している。

ブリガム・ヤングの家族を訪れたときにロレンツが目にしたのは、彼らの住む丸太小屋だった。丸太の間にしっくい^{しっくい}が施されていなかったために隙間だらけで、「吹きさらし」の状態だった。ヤング姉妹は疲れている様子だった。家族の唯一所有する乳牛がいなくなり、捜しに行ったが見つからず帰って来たばかりだったのだ。厳しい状況に置かれていたにもかかわらず、ヤング姉妹はスノー長老にこう告げた。「見てのとおりですが、わたしのことで決して悩んだり心配したりしないようにと彼〔夫〕には伝えてください。名誉の解任を受けるまで、任地で働き続けてほしいのです。」スノー長老は、ヤング姉妹が「極度の貧困にあえいでいる有様^{ありさま}」を見て心を痛み、援助を申し出た。「わたしもごくわずかなお金しか持ち合わせていませんでした。任地までの距離の10分の1を

旅するにも窮するほどです。それを補うためのお金が入ってくる当てもありません。そのような状況で出発の前夜を迎えていたのです。わたしはポケットの中からわずかばかりのお金を取り出しました。……しかし彼女は受け取ってくれませんでした。どうしても受け取ってほしいと言いつ張りましたが、何度も断られました。そうこうしているうちに、故意にか偶然にか、そのお金が床に落ち、コロコロと音を立てて大ざっぱにはめ込まれた床板の継ぎ目に入り込んでしまったのです。それで押し問答は収まりました。わたしは彼女に別れを告げ、いつの日かそのお金を拾うかどうかは彼女に任せました。」³²

スノー長老はイリノイ州からニューヨーク州へと旅し、そこから船に乗って大西洋を渡った。42日間の航海中、船は猛烈な嵐あらしに3度も見舞われた。周りで乗客がおびえ、すすり泣く中、自分を守ってくださる神に信頼を寄せていたスノー長老はいつも平然としていた。船がイングランドのリバプールに入港したとき、スノー長老の心は「神へのこの上なく深い感謝の念で満たされ[た]。全世界の民に救いをもたらすために召され送り出される人たちを守り支えてくださるからである。」³³

イングランドでおよそ4か月宣教師として働いた後、スノー長老はさらにもう一つの責任を受けた。現在の地方部長に似た召し、ロンドン連盟のの会長として働くよう任命を受けたのである。その後も、スノー長老は福音を宣べ伝え続けた。また、割り当てられた地域において、例えば、支部会長など、神権指導者の働きを管理した。そのような指導的な立場で働いていたときに、スノー長老はしばしば十二使徒定員会の一員であったパーリー・P・プラット長老に報告書を送っている。その中には、「救いの道を尋ね求める」多くの人々、日曜日の集会で「あふれんばかりに人が集まる」部屋、「[改宗者に]バプテスマを施し、主、救い主イエス・キリストの囲いの中に入れる喜び」について記されている。この業に熱心で、そこに明るい未来を感じたスノー長老は次のように語っている。「他人などおかまいなしのあらゆる種類の悪が蔓延まんえんする中、シオンはこつ然としてその姿を現すのです。わたしは信じています。それはやがてこの都市にあって輝くともしびとなることでしょう。」³⁴

スノー長老が会長だったときに、ロンドン連盟は著しい発展を遂げた。この成功をスノー長老は喜んだが、その間、指導者としての責任に伴う苦しみも味わった。彼は、十二使徒定員会のヒーバー・C・キンボール長老にあてた手紙の中で、これらの試練を通して、「これまでとはまったく異なる方法で指導者としての責任に取り組んだ」ことを伝え³⁵、さらにこう語っている。「あなたや[ウィルフォード・]ウッドラフ長老が言ったとおり、人生とは様々な経験をする学校のようなものです。これはすでに事実となっていました。……わたしがここに来てからというもの、聖徒の間で次から次に何か新しいことが起こります。一つのことが終わるとすぐに次のことが起こるのです。」彼は新しい責任

を受けてすぐに学んだ一つの真理を分かち合っている。「神がかなりの部分を助けて〔くださらなければ〕、わたしは困難に立ち向かうことができません。」³⁶ 十二使徒定員会のジョージ・A・スミス長老とも同じような気持ちを分かち合っている。「自分が成し遂げたほんのわずかなことも、実は、自分ではなく神が成し遂げられたのです。イスラエルの教師としての職を尊んで大いなるものとする努力を払う中で、自らの経験を通して完全に理解していることが一つあります。それは自分一人の力では何も知ることができず、何もすることができないということです。また、教会を管理するよう召された人たちの教えや助言に従わなければ、いかなる聖徒も栄えることはできないということをわたしははっきりと理解しています。主の律法を守っているかぎり、主なる神はわたしをその職にあって支えくださるという確信があります。……へりくだり主の前を歩むときに、主はわたしに義にかなって助言を与える力と啓示の霊を授けてくださるのです。」³⁷

福音を宣べ伝え、ロンドン連盟の会長として働くことに加えて、スノー長老は回復された福音について宣教師が説明するのに役立つ教会用小冊子やパンフレットを作成した。『救われる唯一の道』(*The Only Way to Be Saved*)という表題の小冊子は、後に数多くの言語に翻訳され、19世紀後半を通して使用された。

スノー長老は1843年1月までイングランドで奉仕した。イングランドを離れる前に、彼はブリガム・ヤング大管長から与えられていた責任を果たした。彼はこの責任について日記の片隅に次のように簡単に記録している。「ブリガム・ヤング大管長の要請を受け、モルモン書を2冊、ビクトリア女王とアルバート公に献上した。」³⁸

イングランドを離れるとき、スノー長老はイギリス人の末日聖徒から成る移民団をノーブーへと引率した。そのときのことが日記にはこう書かれている。「わたしは250人から成る一団を預かった。その多くはわたしの親友で、わたしが教え導いたことにより主と聖約を交わしていた。友人に囲まれて大西洋を再度横断する今回の旅は、2年半前の一人旅に比べればはるかに恵まれたものだった。」³⁹ 客船「スワントン号」でのスノー長老の経験は、彼の指導者としての力量と神への信仰を証明するものだった。以下の記事は彼の日記からの引用である。

「わたしは〔聖徒〕を呼び集め、全員の承諾を得て、分隊と班を組織し、それぞれにふさわしい長を任命し、移民団を統括するための規範を定めた。何人もの大祭司、そして30人ほどの長老がいるということが分かった。わたしは、長老たちの多くが、だれかに命じられるまでもなく、少しでも貢献し、少なからず際立った存在になりたいと強く望んでいること、また彼らがどんな方法を使ってもその望みを必ず実行に移すことを知っていた。そこで、彼らがどのように行



初期の聖徒の中には、アメリカ合衆国の聖徒と合流するためにヨーロッパから移住した人たちが大勢いた。

動すればよいか、わたしの方で調整した方が無難だろうと判断した。したがって、わたしはできるかぎり多くの神権者を何らかの役目に就かせ、その全員に責任を持たせた。移民団の全員が毎晩祈るために集合した。わたしたちは週に2回説教をした。日曜日には集会を開き、聖餐にあずかった。

船長は、わたしとしては友好的な関係が築けたらと思ったのだが、無愛想で打ち解けにくい人だった。……わたしたちに対して偏見があることは容易に見て取れた。航海が始まってから約2週間がたったが、その間、さしたる大きな問題が起こることもなく、海上での日常的な生活が過ぎていった。そんなある日、次のような出来事が起こったのである。

船長の下で給仕係として働いていた若いドイツ人男性が瀕死の重傷を負う事故に遭った。きわめて品行方正、まじめで堅実、幾つもの航海〔で〕船長とともに働いた青年であり、船長、航海士、船員から大変気に入られていた。また聖徒も彼に対しては心からの親しみを感じていた。そんなわけで、瀕死の状態を見て、……乗船していた人は皆深い悲しみを覚えた。



「スワントン号」船上で、重傷を負った男性が
ロレンゾ・スノーによって執行された神権の祝福の結果、^{いや}即座に癒された。

口から血を吐き、激しいけいれんや発作も起きていた。いろいろと手当てをしたが、そのかいもなく、とうとう命を取り留める望みはすべて断ち切られた。船乗りたちは船長から、就寝前に、一人ずつ船室に入り、別れのあいさつをするように言われた。つまり、翌朝生きている彼に会えるという望みはまったくないという意味だった。船室から出て来るときに、大勢の人たちが目に涙を浮かべていた。

青年のベッドわきに一人で座っていたマーティン姉妹〔乗船していた末日聖徒の一人〕は、わたしが神権の祝福を施せば、もしかして癒されるかもしれないと心の思いを話して聞かせた。これを聞いて、彼はうれしそうにそうしてほしいと言ったのである。その知らせを耳にしたとき、わたしはすでに床に就いていた。夜の12時ぐら이었다。わたしはすぐに起きて船室へと向かった。その途中で、たった今彼に会ったばかりの副船長に会った。わたしとすれ違ったそのすぐ後で、彼はステインズ兄弟に会い、スノー氏が給仕係の頭に手を置きに行ったと告げた。そのとき副船長は（悲しそうな口調で）次のように付け加えた。『しかし、何をやっても無駄だ。かわいそうだが、もう彼はおしまいだ。』ステインズ長老はこう言った。『主は^{あんじゆ}按手を通じて彼を癒す力をお持ちです。』この船乗りから次のような素直な言葉が返ってきた。『ほんとうかい？』

わたしはさらに進み、船室のドアの所で船長に会った。泣いていたようだった。彼はこう言った。『スノーさん、来てくれてありがとう。しかし、もう無駄です。給仕係はきっともうすぐ死ぬでしょう。』わたしは部屋に入り、彼のベッドのそばに座った。息づかい是非常に荒く、死期は迫っているように見えた。大きな声で話すことはできなかったが、神権の祝福を施してほしい〔という〕彼の思いは伝わった。彼にはドイツのハンブルグに彼の経済的な支えを必要とする妻と二人の子供がいるということだった。彼は家族のことをとても心配しているようだった。

わたしは彼の頭に手を置いた。すると神権の祝福が終わるやいなや、彼は起き上ってベッドの上に座ると、両手を打ち〔たたき〕、癒してくださった主を大きな声で賛美した。彼は直ちにベッドから立ち上がる〔と〕船室から外に出てデッキを歩き回った。

翌朝、給仕係が生きているのを見て、皆、仰天した。また、いつものように仕事ができるようになった彼の姿を見て驚いた。船乗りたちは全員が口をそろえて、これは奇跡だと断言した。聖徒たちも彼が回復したことは奇跡だと知っていたので、喜び主を賛美した。船長はこの奇跡を固く信じ、深く感謝した。それからというもの、船長の心はわたしたちの心に結びついた。彼はわたしたちのためにありとあらゆる便宜を図ってくれた。常にわたしたちの必要と不足を心にかけ、教会の集会にはすべて出席し、教会の書籍を買って読んでくれたのである。船乗りたちも同様だった。彼らはニューオーリンズ〔ルイジアナ州〕で別れるときには、バプテスマを受けると約束した。それから1年がたって、わたしは副船長から1通の手紙を受け取った。その手紙には船乗りたちが……約束を果たしたと記されていた。船長も将来いつか福音を受け入れ、聖徒とともに住む〔こと〕を宣言した。あの給仕係はニューオーリンズに到着した時点でバプテスマを受け、別れるときには、わたしに新しい聖書をプレゼントしてくれた。その聖書をわたしは今でも保管している。』⁴⁰

スノー長老は次のように書いている。「船乗りの中には、わたしたちが『スワントン号』に最後の別れを告げるとき、涙を流す人が何人もいた。実際、わたしたち全員が非常に厳粛な思いになった。』⁴¹ ニューオーリンズから、スノー長老と仲間の聖徒たちはフェリーボートに乗り、ミシシッピ川をさかのぼり、1843年4月12日にノーブーへと到着した。

主の業に献身し続ける

7年間のほとんどを専任宣教師として働いた後、しばらくの間、ロレンゾ・スノーは異なる奉仕の機会を経験した。1843年から1844年にかけて、冬学期の間、地元の教育理事会から教師として働いてほしいという申し出を受けたの

である。その学校の生徒の多くが「自分たちの能力を鼻にかけ、教師に暴力を振り、学校を崩壊させている」という事実を知りながらも、彼はその申し出を受け入れた。彼は生徒からの尊敬を得るためには、生徒に対して尊敬の念を示すことだと確信した。姉のエライザは次のように語っている。「彼はそれらの少年たちを、あたかも最も尊敬すべき紳士のように扱いました。……彼は生徒に対して自分が抱いている関心」と「勉強を続けられるよう援助したいという」望みを「印象づけるために特別な努力を払いました。……そのような思いやりと説得により生徒の気持ちは和らぎ、生徒の信頼を得ることができました。また、うまずたゆまず働きかけたことにより、乱暴な若者たちは礼儀正しい生徒に変身しました。その学期が終了するずっと前の段階で、生徒は驚くべき進歩を遂げ、学問に励む習慣を身に付けたのです。」⁴²

1844年、ロレンツ・スノーは教会の新しい責任を受けた。オハイオ州へと旅し、ジョセフ・スミスを合衆国大統領として選出するキャンペーンの統括者として任命されたのである。預言者は合衆国政府の末日聖徒に対する処遇に失望し、当時の大統領候補者一人一人にあてて手紙を書き、教会についてのどのような考え方があるのか尋ねた。その答えに満足できなかったジョセフ・スミスは自ら大統領選に出馬しようと決心した。

十二使徒定員会は「大統領選挙に立候補するジョセフ・スミスを支援するためオハイオ州全域に政治団体を組織する」⁴³ようロレンツ・スノーやその他の人たちを任命した。そうすることによって、彼らは憲法で聖徒に保障された権利がどのような形で侵害されたかについて人々に周知させた。ロレンツは「非常に興味深い経験」⁴⁴をしたと語っている。預言者の立候補に猛反対する人がいるかと思えば、ジョセフ・スミスはこの国を成功と繁栄に導く力があると感じた人もいた。

ロレンツ・スノーは次のように振り返っている。「このような両極端の反応がある中、わたしの活動は突然終わりを迎えました。預言者と兄ハイラムの殉教じゆんきやうに関する信頼できる筋からの情報が入ってきたからです。」⁴⁵「悲しみに沈みながら」ロレンツ・スノーはノーブーへと戻った。⁴⁶

このような悲惨な事件が起こったときですら、聖徒は神の王国を築くため勤勉に働いた。ロレンツが後に述べているように、「全能の父なる神の導きの下、王国は前進していきました。」⁴⁷ 彼らは引き続き福音を宣べ伝え、互いに強め合った。そして自分たちの町に神殿を建築し完成するために協力した。

ロレンツ・スノーは、ノーブーで聖徒たちと合流したとき、結婚は絶対にせず、その代わり生涯をかけて福音を宣べ伝えようと決心していた。姉のエライザは後にこう語っている。「自らの時間と才能と持てるものすべてを教え導く業にささげること、それだけが彼の望みでした。」主の業を果たすとき家族を持

つと「十分な力を発揮できなくなる」のではないかと彼は感じたのである。⁴⁸

ロレンゾの結婚観と家族観に対する考え方は、ミシシッピ川の河畔で預言者ジョセフ・スミスと個人的に話した1843年から変わり始めた。預言者は多妻結婚に関して自分が受けた啓示について証をした。彼はロレンゾにこう言った。「主はあなたが日の栄えの結婚の律法を受け入れ、それに従うための道を開かれるでしょう。」⁴⁹ この勧告を受けたロレンゾは、結婚は主から与えられた戒めであり、天の御父の幸福の計画に欠かせない部分であることを理解し始めた。

1845年、ロレンゾ・スノーは、シャーロット・スクワイヤーズおよびメアリー・アダリン・ゴッタードと当時教会で実施されていた多妻結婚をした。後年、さらに何人かの女性と結び固められた。彼の妻たちと子供たちに対する献身は主の業への献身の一部となった。

聖徒たちはノーブーに神の王国を築き続けたが、迫害も続いた。1846年2月、彼らは冬の寒さの中で、暴徒により、自分たちの家と神殿を手放さざるを得なかった。新たな安息の地を目指し西部への長い旅が始まった。

ソルトレーク盆地に聖徒が集まるのを助ける

ロレンゾ・スノーと彼の家族はほかの聖徒とともにノーブーを去ったが、彼らがソルトレーク盆地に到着したのは、最初の開拓者団の到着から1年以上たった後だった。初期のほとんどの末日聖徒の開拓者と同様、彼らは旅の途中で仮の入植地に滞在した。ロレンゾの家族はガーデングローブというアイオワ州にある入植地に短い間だったが滞在した。そこで自分たちの後に続く聖徒のために丸太小屋を建てた。そこから彼らは、これもアイオワ州にあったが、マウントピスガという入植地に移動した。

マウントピスガで、ロレンゾは家族やほかの聖徒とともに働き、そこでも再び、自分たちならびにソルトレーク盆地へ向かって彼らの後に続く聖徒の必要を満たした。彼らは丸太小屋を建て、ほかの人たちが収穫にあずかることを確信し、作物まで植え、育てた。マウントピスガに滞在中、ロレンゾは入植地を管理するよう召された。自分の家族も含めて、悲しみ、病氣、そして死が人々を悩ませたが、ロレンゾは人々が希望を見いだし、互いに強め合い、主の戒めに従順であり続けることができるよう勤勉に働いた。⁵⁰

1848年の春、ブリガム・ヤング大管長はロレンゾに、マウントピスガを離れ、ソルトレーク盆地へ旅するよう指示した。ロレンゾは再び指導者、この度は開拓者団の隊長としての責任を与えられた。開拓者団は1848年9月にソルトレーク盆地に到着した。



ロレンツ・スノーは、1848年にソルトレーク盆地に到着した
開拓者団を統率する隊長として働いた。

十二使徒定員会の一員として奉仕する

1849年2月12日、ロレンツ・スノーは十二使徒定員会の集会に出席するようにとの知らせを受けた。彼はしていたことを途中でやめて、直ちに集会へと向かったが、集会はすでに始まっていた。その道すがら、どうして十二使徒定員会に呼ばれたのか不思議に思った。彼は困惑した。何か間違いでもしてかしたのだろうか。彼は自分が忠実に義務を果たしてきたことを知っていたので、その心配ははねのけた。しかし、何が自分を待ち受けているのか想像できなかった。到着したとき、彼は自分が定員会の一員として働くよう召されていた

ことを知って驚いた。その同じ集会で、彼とチャールズ・C・リッチ長老、フランクリン・D・リチャーズ長老、そしてロレンゾの遠縁のいとこ、エラスタス・スノー長老の4人が使徒に聖任された。⁵¹

使徒職への聖任は、ロレンゾ・スノーの残りの生涯を決定づけた。「キリストの名の特別な証人」として働く召しは彼の行動のすべてに影響を与えた(教義と聖約107:23)。使徒の責任の一つ一つについてどのように感じたか、彼は後にこう語っている。

「第1に、使徒は神からの啓示によって、イエスが生きておられ、生ける神の御子であられるという神から授かった知識を持っていなければなりません。

第2に、使徒は聖霊を約束する権能を天から授かっていなければなりません。聖霊とは神の原則であり、救い主が宣言されたように、神にかかわる事柄を明らかにし、神の御心みこころと目的を知らしめ、すべての真理をもたらし、来るべき事柄を啓示します。

第3に、使徒は神の力によって福音の神聖な儀式を執行するよう委任されています。これらの儀式は真実であると神の証によって一人一人に確認されます。今この盆地に住む何千人という人々は、わたしが執行の手助けをした儀式を受け、使徒は確かにそのような神の権能を与えられているということについての生ける証人となっています。」⁵²

召しに伴う個人的な責任に加え、スノー長老には十二使徒定員会の一員であることの意味について確固たる信念があった。「わたしたち12人は、義務の道からわたしたちの注意をそらすものはすべて捨てる覚悟ができています。そうであってこそ〔大〕管長会が一つであるようにわたしたちも一つとなり、神の御子と御父を結び合わせる愛の原則によって一つに結び合わせられるのである。」⁵³

そのように個人としての召しならびに十二使徒定員会の使命を理解していたロレンゾ・スノー長老は、この地上における神の王国建設を助けるためにその全生涯をささげた。多くの異なる方法、多くの異なる場所で奉仕する召しにこたえた。

イタリアでの伝道

1849年10月に行われた総大会で、スノー長老はイタリアに伝道部を開設するよう召された。この国とその文化ならびに言語についてよく知らなかったが、ためらうことなく召しを受けた。大会から2週間もたたないうちに、スノー長老は伝道へと出かける準備をし、なおかつ自分が不在の間、妻と子供たちが困らないようにと、全力を尽くして援助の手配をした。

スノー長老とその他の宣教師は合衆国東部へ向かって旅をした。そこで船に乗り、大西洋を渡った。そのとき彼の思いは自分の家族とやがて仕えること

になる人々に向けられた。姉のエライザにあてた手紙の中にこう書かれている。「わたしの心は多くの相反する気持ちでいっぱいでした。……わたしたちは強力な磁石、すなわち故郷から^{くらやみ}遠ざかって行きましたが、自分たちがこれから携わろうとしている業は、暗闇の中、死の陰の谷に座せる人々に光をもたらすということを知っていました。わたしたちの心は愛に満ちあふれ、わたしたちの涙はぬぐい去られたのでした。」⁵⁴

1850年7月、スノー長老と彼の同僚たちはイタリアのジェノバに到着した。ここでは主の業が遅々として進まないことが分かった。スノー長老はこう記している。「この巨大な都市で、わたしは孤独なよそ者だった。愛する家族から8,000マイル（1万2,875キロ）離れ、周囲の人々の習慣や特徴もよく理解できなかった。わたしは彼らの思いを照らし、義の原則を教えるためにやって来た。しかし、その目的を果たすための手段となりそうなものがまったく見いだせなかった。将来の見通しがまったく立たない状態だった。」自分が仕えるように召された民の「愚行、……罪惡、はなはだしい無知、迷信」に心を痛み、彼は次のように書いている。「この民に^{あわ}憐れみをかけてくださるよう天の御父にお願いいたします。主よ、彼らがことごとく滅びることのないように、彼らにあなた様の哀れみをおかけください。彼らの罪を^{ゆる}赦し、わたしが彼らの中にあって名を知られるようにお取り計らいください。彼らがあなた様を知るように、あなた様が御自分の王国を確立するためにわたしを送ってくださったことを彼らにお知らせください。……わたしが仕えるように召されたこの民の中に、選ばれた人々を準備しておられますか。そのような人々のもとへわたしをお導きください。そして、あなた様の名前が御子イエスを通して栄光を受けられますように。」⁵⁵

スノー長老はワルドー派と呼ばれる集団の中に、これらの「選ばれた人々」を見いだした。ワルドー派の人々は、イタリア・スイス国境の真南、イタリア・フランス国境の東に位置するビーモント地域にある山間の谷に住んでいた。彼らの先祖は迫害され、行く先々で追い立てられた。古代の使徒が持っていた権能を信じ、その当時の諸宗教に加わるよりもむしろ使徒の教えに従いたいと望んだからである。

ブリガム・ヤング大管長にあてた手紙の中で、スノー長老はワルドー派の人々について、彼らは長年にわたる「無知と残虐な行為」に苦しみながらも、「荒れ狂う大海原にあって波に打たれても動じることのない岩のように自分たちの信念を守り続けた」と記している。しかし、末日聖徒の宣教師がイタリアに到着する前に、ワルドー派の人々は「深い平穩の時代」を享受し始めた。イタリアのその他の宗派よりも多くの宗教的自由を与えられているように見えた。スノー長老はこう語っている。「したがって、道が開かれたのは伝道が開始される前のごく短期間だけでした。イタリアにおいては、ワルドー派の住む地域ほど好ましい法律によって統治されている所はありません。」

この民について知識を深めたいと思ったスノー長老は図書館に行き、この民について書かれている1冊の本を見つけた。彼はこう語っている。「応対してくれた図書館員と話したところ、わたしの探しているような本はあるけれども、だれかが借りて行っているということでした。彼がそう言い終わらないうちに、一人の女性がその本を持って入って来ました。図書館員は言いました。『これはまったく驚きだ。その本が欲しいとこの男性がたった今言ったところだった。』イタリアで最初に福音を受け入れるにふさわしいのは、まさしくこの民だとわたしはやがて確信しました。」⁵⁶

スノー長老と同僚たちはピーモント地域で熱心に福音を宣べ伝えたが、友情をはぐくみ、自分たちが信頼できる人間であることを人々に示しながら、慎重に事を進めるべきだと感じた。人々と良い関係を築いたと感じたときに、スノー長老たちは近くの山に登り、「天の神、ほめよ」を歌い、祈りをささげ、イタリアの地を伝道の地として奉献した。彼らはこの業に対し自らを奉献することを表明し、スノー長老はその責任を果たすための助けとして同僚たちに神権の祝福を授けた。山上での経験から靈感を受け、スノー長老はそこをマウントブリガムと呼んだ。⁵⁷

この経験の後ですら、教会に加わりたいという望みを表明する人が現れるまでにおよそ2か月待たなければならなかった。ついに1850年10月27日、宣教師たちはイタリアで最初のバプテスマと確認を見ることができ歓喜した。⁵⁸ スノー長老は後にこう報告している。「この地での御業は遅々としてなかなか先に進まない。……それでも、教会は確立された。木が植えられ、その根が伸び始めているのだ。」⁵⁹

ある夜のこと、スノー長老はイタリアにおける伝道の本質を理解させてくれる一つの夢を見た。その夢の中で、スノー長老は友人たちと魚釣りをしていた。「はるか遠くの方でしたが、水面の至る所に大きくて美しい魚を目にして喜びました。」彼はこう語っている。「たくさんの人たちが魚をとろうと網を張り、糸を垂れているのが見えました。しかし、彼らは皆、同じ釣り場に陣取り、じっとして動かないように見えました。一方、わたしたちは絶えず良い釣り場を求めて動き回っていました。釣り人がひしめき合っている中、一人の男性のそばを通り過ぎたとき、わたしは自分の釣針に1匹の魚がかかっていることに気づきました。おそらくこの男性は自分の釣り場からわたしに魚をとられ気分を害しているのではないかと思いました。それでもなお、魚のかかった釣竿を持ったまま、釣り人の間を縫って歩き続けると海岸に出ました。それから釣糸をたぐり寄せたわたしは、少なからず驚き当惑しました。とれた獲物が小魚だったからです。わたしはほんとうに奇妙に思いました。見かけが立派ですばらしい魚がこれほど大量に泳ぎ回っている中で、釣果ちようかがあまりにも貧弱だったからです。しかし、とれた魚が途方もなく上質の魚だということが分かったときに、その落胆

した気持ちはすべて消え去りました。⁶⁰

スノー長老の夢はイタリアにおける伝道の将来を預言するものだった。イタリアで多くの改宗を見ることはできなかったし、別の宣教師が後に述べているように、福音を実際に受け入れたのは、「地位も富もない人たち」⁶¹ だった。しかし、スノー長老とその同僚たちは主の御手に使われる者となり、善良で忠実な人々を神の王国へと導いた。それらの人々は「新しく終わりのない人生の道を歩み始め」たことに感謝した。⁶² そしてスノー長老の指導の結果、モルモン書がイタリア語に翻訳された。

およそ1世紀半後、使徒の一人であるジェームズ・E・ファウスト長老が、スノー長老とその同僚たちの働きの結果、教会に加わった人々について語っている。「その中にはソルトレーク盆地にきた最初の手車隊に加わった人々もいます。……こうした家族の子孫の多くは、新たに回復された教会のぶどう園で働き、今日でもその祖先と同じように、使徒がさびることはない鍵を持っていると信じ、世界に広がる教会に大きな貢献をしています。」⁶³

教会を築き上げる

スノー長老は後にそのほかの地にも伝道に赴いた。「大管長会の指示の下に〔働き〕……教会を築き上げ、すべての国々において教会の諸事をすべて整える」という十二使徒定員会会員としての召しを尊んで大いなるものとしたのである（教義と聖約 107:33）。

1853年、ブリガム・ヤング大管長は、ロレンゾ・スノーを召し、家族の集団をユタ州北部のボックスエルダー郡にある定住地まで導く責任に当たさせた。その時点でこの定住地は小さく、無秩序で、活気もなかった。スノー長老は直ちに任務に取りかかり、預言者ジョセフ・スミスが教えた奉獻の律法の原則に基づいて人々を組織した。町は繁栄した。スノー長老はヤング大管長に敬意を表して、この町をブリガムシティと名付けた。皆、ともに働き、支え合い、学校制度、工場、灌漑システム、商業組合、さらには劇団まで築き上げた。市民は奉獻の律法を完全に守って生活したわけではなかったが、その原則は彼らの指針となった。また、一つの共同体が協力し勤勉に働くことによってどれほど多くのことを成し遂げられるかが明らかになった。スノー大管長の娘レスリーは次のように記している。「ブリガムシティに怠惰な人はいなかった。この期間にこの町で行われた活動とその繁栄に匹敵するものは、ユタ州のどの定住地の歴史にも決して見いだすことができないだろう。」⁶⁴

スノー長老と彼の家族は長年にわたってブリガムシティに住んだ。スノー長老はこの町に住む聖徒を管理し、時折、ほかの地への短い伝道に赴いた。1864年、彼は約3か月間町を離れた。短期間ではあったが、スノー長老と同じく十二使徒定員会会員であったエズラ・T・ベンソン長老、またジョセフ・F・



長靴、靴、馬具、帽子がユタ州ブリガムシティーにあったこの建物で製造された。

スマス長老、アルマ・スマス長老、ウィリアム・W・クラフ長老とともにハワイ諸島で伝道するためだった。⁶⁵ 1872年から1873年にかけて、スノー長老はそのほかの長老たちとともに、大管長会第一顧問であったジョージ・A・スマス管長に同行し、ヨーロッパならびに中東諸国を9か月にわたって歴訪した。その間に聖地も訪問した。それは彼らの義にかなった影響力によって、回復された福音を受け入れる備えがほかの国民にできるようにと望んだブリガム・ヤング大管長の要請によるものだった。⁶⁶ 1885年、スノー長老は合衆国北西部とワイオミング州に点在する集落に住むアメリカンインディアンを訪問する責任に召された。8月から始まり10月に終わったが、スノー長老はその地域に伝道部を確立し、バプテスマと確認を受けた人々に対する教会指導者の支援体制を整えた。

神殿活動

第7代大管長ヒーバー・J・グラント大管長は、ロレンゾ・スノー大管長についてこう述べている。「[[彼は] 神殿における働きに何年もの歳月をささげまし[た]。』⁶⁷ スノー大管長の神殿の業を愛する気持ちは、改宗したてのころに芽生え、使徒として働いたときに深まった。彼はバプテスマと確認を受けて間もなくカートランド神殿で行われた集会に出席した。後に、ノーブーに神殿を建設するための寄付金を集める召しを心から喜んで受けた。ノーブー神殿が建つと、そこで儀式執行者として奉仕し、西部に向かう旅の前にエンダウメントや結

び固めの儀式を受ける末日聖徒を助けた。使徒として働く召しを受けた後も、神殿における責任は続き、多岐にわたった。ユタ州ローガン神殿の奉獻式で話をした。ウィルフォード・ウッドラフ大管長がユタ州マントイ神殿を奉獻したときには、その後のセッションで奉獻の祈りを読み上げた。ソルトレーク神殿の最も高い尖塔の上にかさ石が置かれたとき、大勢の会衆を指揮してホサナ斉唱を行った。ソルトレーク神殿の奉獻後、この神殿の神殿会長として働いた。

スノー大管長が80歳の誕生日を迎えたとき、地元の新聞に次のような賛辞が掲載された。「晩年にあっても、〔彼は〕依然として忙しくまた精神的に、若いころからずっと携わってきた大義を推し進めている。また、神聖な神殿の中で、彼とその仲間たちが自らを奉獻して行ってきた輝かしい働きを続けている。彼は現在の罪と死に苦しむ世界にとってほんとうに大きな意義を持つ働きを続けているのである。」⁶⁸

個人を教え導く

スノー大管長は方々を旅し、大勢の人々から成るグループを幾つも教えたが、その際、個人や家族に仕えるために時間を割いた。例えば、1891年3月、ブリガムシティーにおいて開かれた大会で話していたときのことである。当時、スノー大管長は十二使徒定員会会長として働いていた。話の最中、説教壇の上に1枚のメモが置かれた。その場にいた人は次のように証言している。彼は「話を途中でやめ、そのメモを読むと、深い悲しみに包まれている人々を訪問するようという召しを受けたと聖徒たちに説明した。」スノー大管長は、いとまごいをし、説教壇を降りると、その場を去った。

そのメモというのは、ブリガムシティーの住民、ジェーコブ・ジェンセンからのものだった。そのメモには、しょうこう熱にかかり何週間も苦しんだ末、娘のエラがその日に亡くなったと書かれてあった。ジェンセン兄弟がメモを書いたのは、ただその死についてスノー大管長に知らせ、葬儀の手配を頼むためだった。しかし、スノー大管長は、たとえそのために話を早めに切り上げ、自分が管理している集会をやむを得ず立ち去ることになったとしても、この家族を一刻も早く訪問したいと思った。集会を去る前に、スノー大管長は当時ボックスエルダーステークのステーキ会長だったラジャー・クロウソンに同行を依頼した。

ジェーコブ・ジェンセンは、スノー大管長とクロウソン会長が自分の家に到着した後、何が起こったか次のように語っている。

「スノー大管長は、エラのベッドわきにほんの数分でしたが立っていました。それから家の中に聖別された油があるかと尋ねました。わたしは大変驚きましたが、ありますと答え、聖別された油を取りに行きました。スノー大管長は、油の瓶をクロウソン兄弟に渡すと、エラに油を注ぐよう言いました。それから〔スノー大管長は〕油注ぎを結び固め、祝福を宣言しました。

儀式の執行中、特にスノー大管長が口にした幾つかの言葉に感銘を受けました。その言葉は今でもはっきりと記憶しています。彼はこう言いました。『愛するエラ、わたしは主イエス・キリストの御名^{みな}によって、あなたに命じます。生き返りなさい。あなたにはまだ使命が残っています。偉大な召しを果たすために、まだ死んではなりません。』

彼は娘にまだ死んではならず、これから多くの子供たちを育て、両親や友人に慰めを与える者とならなければならないと告げたのです。その言葉をはっきりと記憶しています。……

……スノー大管長は、祝福を終えると、妻とわたしの方を向いて、こう言いました。『もう嘆き悲しまないでください。大丈夫です。クローソン兄弟とわたしはなすべきことがあるので行かなくてはなりません。最後まで見届けることはできませんが、とにかく忍耐し待ってください。嘆かないでください。大丈夫ですから。』……

スノー大管長が儀式を施してくれてから1時間以上、亡くなってから合計3時間以上たっても、エラに何の変化もありませんでした。わたしたちは、ベッドわきに座ったまま様子を見守っていました。そこには彼女を案じる母親と父親の姿がありました。すると突然、娘が目を開けたのです。彼女は部屋を見回し、座っているわたしたちに気づきました。しかし、まだほかのだれかを捜しました。そして開口いちばん、こう言ったのです。『あの人はどこにいるの？ あの人はどこにいるの？』わたしたちは尋ねました。『だれだって？ だれがどこにいるかって？』彼女はこう答えました。『スノー兄弟よ。彼がわたしを呼び戻してくれたの。』⁶⁹

霊界にいたとき、エラはあまりにも平安で幸福な気持ちを感じたため、現世に戻りたくないと思いました。しかし、スノー大管長の声に従ったのです。まさにその日以来、彼女は家族と友人に慰めを与え、たとえ愛する人が亡くなっても嘆く必要はないということを彼らが理解できるように助けました。⁷⁰後に彼女は結婚して8人の子供を産み、さらには教会の召しを受けて忠実に働きました。⁷¹

主の預言者、聖見者、啓示者として教会を導く

1898年9月2日、ウィルフォード・ウッドラフ大管長が9年以上大管長として働いた後亡くなった。当時、十二使徒定員会会長として働いていたロレンゾ・スノー大管長はブリガムシティにいるときにその知らせを聞いた。彼はすぐにソルトレーク・シティ行き列車に乗った。彼は教会を導く責任が今や十二使徒定員会に課せられていることを知っていた。

自分はふさわしくないが主の御心^{みこころ}に従う備えはできていると感じていたス



1898年当時の大管長会および十二使徒定員会。

後列、左から右——アンソン・H・ランド、ジョン・W・テラー、ジョン・ヘンリー・スマイス、
 ヒーバー・J・グラント、ブリガム・ヤング・ジュニア、ジョージ・ティースデール、ラド
 ガー・クロウソン、マリナー・W・メリル。中列——フランシス・M・ライマン、ジョー
 ジ・Q・キャンノン、ロレンゾ・スノー、ジョセフ・F・スマイス、フランクリン・D・リ
 チャーズ。前列——マサイアス・F・カウリー、アブラハム・O・ウッドラフ

ノー大管長は、ソルトレーク神殿に入り祈った。その祈りの答えとして、彼は主御自身の訪れを受けた。スノー大管長は後に自分は「神殿で……実際に、主にまみえ、主と顔と顔を合わせて語り合った」と証^{あかし}している。主は彼に、大管長の死に際してそれまで慣例としてきた、一定の期間を置くことはもはや必要なく、直ちに教会の大管長会を再組織するように告げられた。⁷² 1898年9月13日、スノー大管長は十二使徒定員会から教会の大管長として支持され、その後、大管長として務めに着手した。また、10月9日、全教会員から支持され、10月10日、教会の第5代大管長として任命を受けた。

スノー大管長の模範を通して、また彼が受けた啓示を通して、末日聖徒は彼が自分たちの預言者であることを知るようになった。信仰を異にする人々も彼を紛れもない神の人として尊敬するようになった。

末日聖徒との交流

スノー大管長は、大管長のときに、ステーキ大会をよく管理した。聖徒と会合を持つときに、彼は聖徒に愛と尊敬の意を表した。彼の言葉と行いから、彼が自分に与えられた召しの神聖さを認識し、自分のことを自分が仕える人々よりも優れているとは考えていなかったことが分かる。

あるステーキ大会で、スノー大管長はステーキの子供たちのために開かれた特別な会合に出席した。子供たちはきちんと整列するように言われた。一人ずつ預言者に近寄って握手できるようにするためだった。すると子供たちがそうする前に、スノー大管長は立ってこう言った。「わたしが皆さんと握手するときに、わたしの顔を見上げてください。わたしのことをいつも忘れないようにするためです。ここにわたしはほかのたくさんの人と何ら変わるところがありません。しかし、主はわたしに大きな責任をお与えになりました。主がその完全な方法でわたしに御自身のことをお知らせになってからというもの、わたしは自分に課せられたあらゆる責任を果たそうと努力してきました。皆さんにわたしのことを覚えおいてほしいと思います。それはまさしくわたしが身に余る責任を与えられているからです。皆さんにイエス・キリストの教会の大管長と握手したことを覚えておいてほしいと思います。忘れることなく、わたしのため、わたしの顧問であるキャノン管長やスミス管長のため、また使徒のために祈ってほしいと思います。」⁷³

スノー大管長の息子、ルロイはユタ州リッチフィールドのステーキ大会で起こった以下の出来事を紹介している。「ロレンゾ・スノー大管長と〔十二使徒定員会の〕フランシス・M・ライマン会長はリッチフィールドで行われた大会に出席していました。開会の歌が終わり、ステーキ会長はだれに開会の祈りを依頼すべきかライマン兄弟に尋ねました。ライマン兄弟はこう答えました。『スノー大管長に尋ねてください。』だれが祈りをささげるべきかについては、自分ではなくスノー大管長に尋ねてくださいと言ったつもりでした。ところが、ステーキ会長はスノー大管長に祈りをささげることができるかどうか尋ねたのです。スノー大管長は快くその依頼に応じ、祈り始める前に、祈りを依頼されたことに喜びを表明し、そのような機会にあずかったのは久しぶりだと言いました。彼はすばらしい祈りをささげたそうです。」⁷⁴

信仰を異にする人々との交流

スノー大管長の影響は同胞^{はらから}である末日聖徒以外の人々にも及んだ。信仰を異にする人々が彼に会うときには、彼と彼が代表する教会に敬意を表した。W・D・コーネル牧師は、別の教会の牧師だったが、ソルトレーク・シティーを訪問し、スノー大管長とひとときを過ごした。彼は次のように記している。

「礼儀正しいベテランの秘書がわたしを威厳に満ちた彼のもとへと連れて

行ってくれた。気がつけば、わたしはいまだかつて会ったこともないような親しみやすく愛想の良い男性と握手をしていた。その前にいると窮屈な気持ちがちどころに消え去ってしまう、そんな特異な能力を持った人だった。一緒にいる人をくつろがせ、歓迎されていると感じさせる非凡な才能を有し、話術にたけた人だった。

スノー大管長は知性、感情、肉体、すべての面で洗練された人である。よく吟味され、そつがなく、友好的かつ知識の深さを感じさせる言葉を使う。その立ち居振舞いには優れた教育機関で身に付けた品位が漂っている。人となりは子供のように柔和である。彼に会うと彼が気に入る。彼と話すとき彼が好きになる。彼を訪問し長い時間を共にすると彼を愛するようになる。」教会に対して明らかに偏った考えを持っている読者に対して、コーネル牧師は次のようにコメントしている。「そのような彼が、実は、『モルモン』なのである！ さて、もし『モルモニズム』がスノー大管長を粗暴かつ野蛮な人間にするとしたら、確かに、この宗教には改善すべき点が多くあるということになる。しかし、もし『モルモニズム』に人の心を穏和にし、スノー大管長のように規律正しく、知的に洗練された人間を生み出す力があるとするならば、確かに『モルモニズム』には何か善なるものがあるに違いないということになる。」⁷⁵

もう一人の牧師、プレントイス牧師もスノー大管長と会ったときのことについて次のように記している。「その顔を見れば、平和の君が彼という人間を統治しておられることが手に取るように分かる。これまでいろいろな人を観察してきたが、幾度かそのような雰囲気のある人に出会ったことがある。今日わたしが目にしたのもまさしく同じような雰囲気のある人だった。末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長の顔には、知性、思いやり、威厳、平常心、精神力がにじみ出ているだろうと期待していた。しかし、ロレンゾ・スノー大管長に引き合わされたとき、わたしは一瞬驚いた。……彼の顔には平安をもたらす力を感じられた。彼の存在そのものが平安を求める祈りだった。その穏やかな目の奥には、『静かな祈りの源』だけでなく、霊的な力の源もうかがうことができた。彼が『いっそう確実な預言の言葉』、自分が抱いている希望の確かさ、悲劇的な人生に伴う試練と苦難を乗り越えるための力となった揺るぎない信仰について語るとき、彼の顔に現れる感情の移り変わりを目の当たりにし、彼の感情の動きを実ははっきりと物語る表情やしぐさの微妙な変化から目を離すことができなかった。そしていまだかつてないほど不思議な気持ちに包まれた。それは『聖なる地に立っている』という気持ちだった。この男性は既存の方針、自らの興味、個人的な都合といったありきたりの動機で行動しているのではなく、『周囲の人々とはまったく異なる動機で行動している』という気持ちだった。……もしそのような雰囲気のある人を生み出すことができるとすれば、モルモン教会は優秀な作家の能力も偉大な伝道師の雄弁もあまり必要ないだろう。」⁷⁶

じゅうぶん
什分の一の啓示

ロレンツ・スノー大管長を最も有名にしているのは、彼が什分の一の律法に関して受けた啓示であろう。1899年5月、スノー大管長はほかの教会指導者とともにユタ州セントジョージへ旅しなければならないと強く感じた。どうしてそこへ行く必要があるのかスノー大管長自身も分からなかったが、大管長ならびに中央幹部はその促しにすぐ応じ、2週間足らずのうちにセントジョージに到着した。5月17日、セントジョージに到着後、スノー大管長は什分の一の律法について宣べ伝えるべきだという啓示を受けた。翌日、彼はすべての聖徒に向けて次のように宣言した。「皆さんに対する主の言葉は何ら新しいものではありません。その言葉とはこれだけです。『今や、将来に備え、正しい土台の上に確固として立ちたいと望むすべての末日聖徒が、主の御心みこころを行い、什分の一を完全に納める時が来た。』これは皆さんへの主の言葉です。また、シオンの地の至る所、すべての定住地に住む人々に対する主の言葉となるでしょう。』⁷⁷

このメッセージをセントジョージで伝えた後、スノー大管長と同行した中央幹部はユタ州南部の町々やセントジョージとソルトレーク・シティーの間に位置する地域でも同じメッセージを分かち合った。5月27日にソルトレーク・シティーへ帰り着くまでに、彼らは24の集会を開いた。それらの集会で、スノー大管長は26の説教をし、4,417人の子供たちと握手をした。汽車で420マイル(676キロ)を旅し、馬や馬車で307マイル(494キロ)を旅した。⁷⁸ スノー大管長は、この経験から力を得、教会の至る所で熱心に什分の一の律法について宣べ伝えた。「わたしは今回の訪問の結果に非常に満足し、近い将来、シオンのステーキをすべて訪問したいと願っています。」⁷⁹ スノー大管長は、多くのステーキ大会を管理し、それぞれの大会で、この律法に従うならば、教会員は物質的にも霊的にも祝福を受ける備えができると約束した。⁸⁰ また、什分の一の律法に従うならば、教会員は負債から抜け出すことができると約束した。⁸¹

教会の至る所で、会員はもう一度自らを奉献し、スノー大管長の勧告に従った。後に十二使徒定員会会員として働く歴史家のオーソン・F・ホイットニーは、1904年にこう記している。「こうした動きの効果は即座に表れた。あっという間に、また計り知れないほど大量の什分の一とささげ物が、何年にもわたって集まったのである。その結果、多くの点で教会の状況が改善され、将来の見通しが明るくなった。スノー大管長は以前から会員に愛され信頼されていたが、今やそうした好感情は深く強くなった。」⁸² スノー大管長が什分の一に関する啓示を受けたとき十二使徒定員会会員であったヒーバー・J・グラント大管長は、後に、こう断言している。「ロレンツ・スノー大管長が大管長会で働くよう召されたのは、彼が85歳のときでした。その後の3年間で彼が果たした業績には想像を絶するものがあります。……3年という短い年月で、また世の人であればすでに引退しているはずの年齢で、金融業務に携わったこともなく、

生涯の多くの年月を神殿での奉仕にささげた男性が、生ける神の靈感によりキリストの教会の財政を把握し、すべてを暗闇から光へと変えたのです。」⁸³

在任期間の最後の日に証をする

1901年1月1日、スノー大管長はソルトレーク・タバナクルで行われた20世紀の到来を祝う特別な集会に出席した。あらゆる宗教に属する人々が出席するよう招待された。スノー大管長はこの行事のためにメッセージを準備していたが、悪性の風邪を引いていたため自分で読むことができなかった。開会の賛美歌、開会の祈り、タバナクル合唱団による国家斉唱の後、スノー大管長の息子、ルロイが立って、「スノー大管長による世界へのあいさつ」と題するメッセージを読んだ。⁸⁴ メッセージの最後の言葉に、主の業に対するスノー大管長の思いが如実に表れている。

「この地上に生まれて87年がたち、わたしの心は人類の救いと昇栄を願う強い望みで満たされています。……わたしは両手を挙げ、この地上に住む人々のうえに天の祝福を呼び求めます。太陽の光が皆さんに天上からほほえみかけてくれますように。地の宝と産物が惜しみなく与えられ皆さんの益となりますように。真理の光が皆さんの心から暗闇を追い払いますように。義が栄え、悪が衰えますように。……正義が勝利を得、腐敗が一掃されますように。そして徳と貞潔と誉れが尊ばれ、罪悪が打ち負かされ、地が不道德から清められますように。これらの思いが、ユタの山々に住む『モルモン教徒』の声となって、全世界に広まり、わたしたちの願いとわたしたちの使命が全人類に祝福と救いをもたらすことであることをすべての人々に知らしめることができますように。……罪、悲しみ、不幸と死を打ち負かす勝利によって神があがめられますように。すべての人々に平安が与えられますように。」⁸⁵

1901年10月6日、ロレンゾ・スノー大管長は総大会の最後の部会で、同胞である聖徒に語りかけるために立ち上がった。何日もの間、体調はかなり悪く、やっとのことで説教壇の前に立ったとき、彼はこう語った。「愛する兄弟姉妹の皆さん、今日の午後、こうして皆さんに語りかけてみようという気になったことにかかなり驚いています。」彼は教会における指導について短いメッセージを伝えた。その後で彼が語った言葉は、一般の教会員が聞く最後の言葉となった。「神が皆さんを祝福なさいますように。アーメン。」⁸⁶

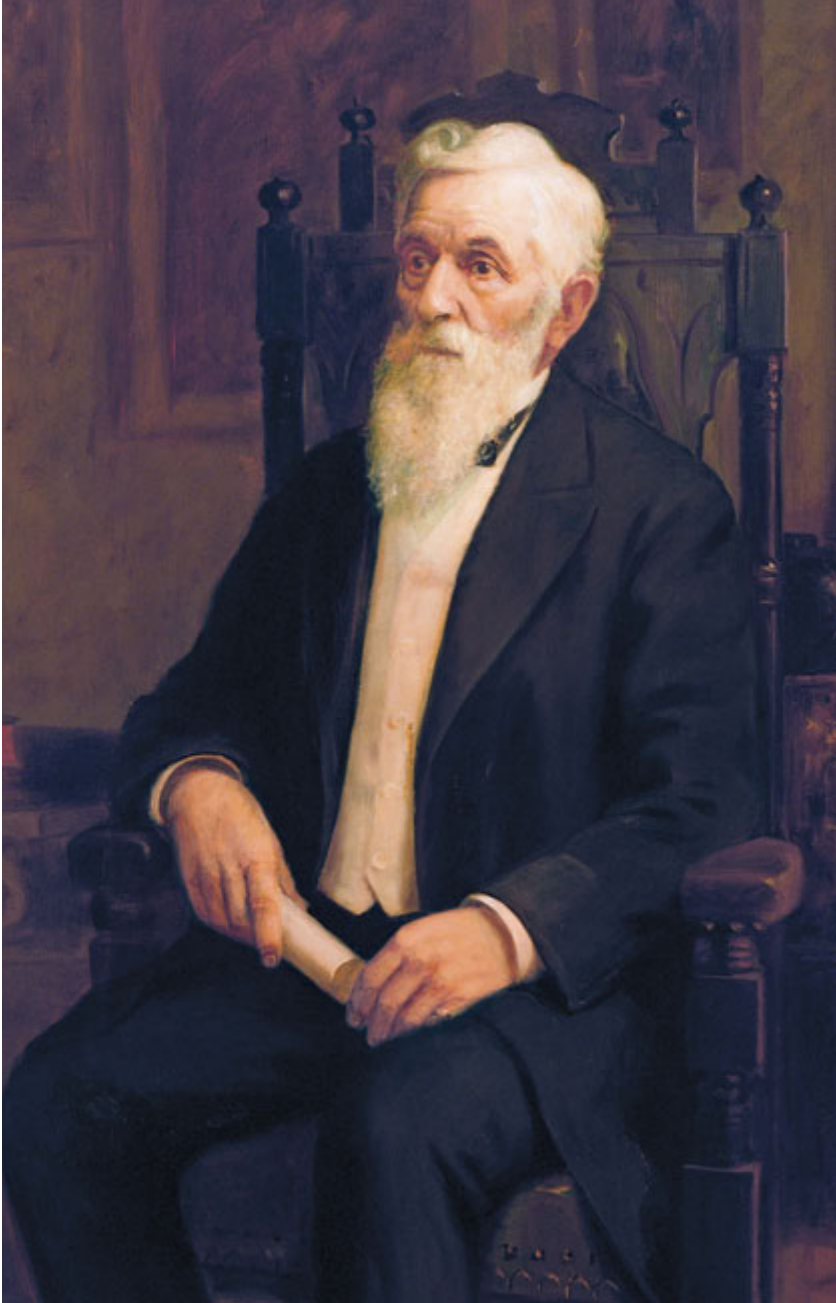
4日後、スノー大管長は肺炎のために亡くなった。ソルトレークタバナクルでの葬儀後、彼のなきがらは愛するブリガムシティーの墓地に葬られた。

注

1. ロレンゾ・スノー、ライカーガス・A・ウィルソン、*Life of David W. Patten, the First Apostolic Martyr* (1900年)、vで引用
2. ロレンゾ・スノー、"The Grand Destiny of Man," *Deseret Evening News*, 1901年7月20日付、22

3. ロレンゾ・スノー, *Life of David W. Patten, the First Apostolic Martyr*, v で引用
4. ロレンゾ・スノー, *Life of David W. Patten, the First Apostolic Martyr*, v で引用
5. エライザ・R・スノー・スミス, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow* (1884年), 1-2 参照
6. エライザ・R・スノー・スミス, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 2
7. ロレンゾ・スノー, *Journal and Letterbook*, 1836-1845, 教会歴史図書館, 18
8. エライザ・R・スノー・スミス, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 2-3
9. エライザ・R・スノー・スミス, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 3
10. エライザ・R・スノー・スミス, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 2, 3
11. オーソン・F・ホイットニー, *History of Utah*, 全4巻 (1892-1904年), 第4巻, 223
12. *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 4 参照
13. ロレンゾ・スノー, *Journal and Letterbook*, 1836-1845, 57-62
14. ロレンゾ・スノー, *Journal and Letterbook*, 1836-1845, 32 参照
15. エライザ・R・スノー・スミス, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 6
16. ロレンゾ・スノー, "The Grand Destiny of Man," 22。ロレンゾ・スノーの改宗について詳しくは, 3章参照
17. エライザ・R・スノー・スミス, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 6
18. ロレンゾ・スノー, *Journal and Letterbook*, 1836-1845, 33
19. ロレンゾ・スノー, *Journal and Letterbook*, 1836-1845, 33; "The Grand Destiny of Man," 22も参照
20. ロレンゾ・スノー, "The Grand Destiny of Man," 22
21. ロレンゾ・スノー, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 15で引用
22. ロレンゾ・スノー, "The Grand Destiny of Man," 22
23. ロレンゾ・スノー, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 16で引用
24. *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 16, 19参照
25. ロレンゾ・スノー, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 19で引用
26. ロレンゾ・スノー, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 30で引用
27. ロレンゾ・スノー, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 37-38で引用
28. ロレンゾ・スノーからオリバー・スノーへの手紙, エライザ・R・スノーからアイザック・ストリーターへの手紙で引用, 1839年2月22日付, 教会歴史図書館
29. ロレンゾ・スノー, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 37で引用
30. ロレンゾ・スノーからオリバー・スノーへの手紙, エライザ・R・スノーからアイザック・ストリーターへの手紙で引用, 1839年2月22日付
31. ロレンゾ・スノー, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 19で引用
32. ロレンゾ・スノー, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 47で引用
33. ロレンゾ・スノー, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 50-51で引用。イングランドへの航海について詳しくは, 14章参照
34. ロレンゾ・スノー, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 58-59で引用
35. ロレンゾ・スノーからヒーバー・C・キンボールへの手紙, 1841年10月22日付, ロレンゾ・スノー, *Letterbook*, 1839-1846で引用, 教会歴史図書館
36. ロレンゾ・スノーからヒーバー・C・キンボールへの手紙, 1841年10月22日付, ロレンゾ・スノー, *Letterbook*, 1839-1846で引用, 教会歴史図書館
37. ロレンゾ・スノーからジョージ・A・スミスへの手紙, 1842年1月20日付, ロレンゾ・スノー, *Letterbook*, 1839-1846で引用
38. ロレンゾ・スノー, *Journal and Letterbook*, 1836-1845, 45
39. ロレンゾ・スノー, *Journal and Letterbook*, 1836-1845, 65-66
40. ロレンゾ・スノー, *Journal and Letterbook*, 1836-1845, 72-83
41. ロレンゾ・スノー, *Journal and Letterbook*, 1836-1845, 91
42. エライザ・R・スノー・スミス, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 74-75。73ページも参照
43. ロレンゾ・スノー, *Journal and Letterbook*, 1836-1845, 49
44. ロレンゾ・スノー, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 79で引用
45. ロレンゾ・スノー, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 79で引用
46. ロレンゾ・スノー, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 79, 82で引用
47. ロレンゾ・スノー, "Laid to Rest: The Remains of President John Taylor Consigned to the Grave," *Millennial Star*, 1887年8月29日付, 549で引用。ジョセフ・スミスの殉教に関するロレンゾ・スノーのコメントについて詳しくは, 23章参照

48. エライザ・R・スノー・スミス, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 84 参照
49. ジョセフ・スミス, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 70 でロレンゾ・スノーにより引用
50. マウントピスガでの経験について詳しくは, 7 章参照
51. *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 94 - 95 参照
52. ロレンゾ・スノー, "Address of Apostle Lorenzo Snow," *Millennial Star*, 1886 年 2 月 15 日付, 110
53. ロレンゾ・スノー, *Deseret News*, 1857 年 1 月 14 日付, 355
54. ロレンゾ・スノーからエライザ・R・スノーへの手紙, *The Italian Mission* (1851 年), 5 で引用
55. ロレンゾ・スノーからフランクリン・D・リチャーズへの手紙, *The Italian Mission*, 8 - 10 で引用
56. ロレンゾ・スノーからブリガム・ヤングへの手紙, *The Italian Mission*, 10 - 11 で引用
57. ロレンゾ・スノーからブリガム・ヤングへの手紙参照, *The Italian Mission*, 15 - 17 で引用
58. ロレンゾ・スノーからブリガム・ヤングへの手紙参照 *The Italian Mission*, 17 で引用
59. ロレンゾ・スノーからフランクリン・D・リチャーズへの手紙, *The Italian Mission*, 20 で引用
60. ロレンゾ・スノーからオーソン・ハイドへの手紙, *The Italian Mission*, 23 で引用
61. ジャベツ・ウッダードからロレンゾ・スノーへの手紙, *The Italian Mission*, 26 で引用
62. ジャベツ・ウッダードからロレンゾ・スノーへの手紙で引用, *The Italian Mission*, 26 で引用
63. Conference Report, 1994 年 10 月, 97; または「さびつかない鍵」『リアホナ』1995 年 1 月号, 80
64. レスリー・ウッドラフ・スノー, "President Lorenzo Snow, as the Silver Grays of Today Remember Him," *Young Woman's Journal*, 1903 年 9 月, 391
65. ハワイ諸島におけるスノー長老の経験について詳しくは, 4 章参照
66. 聖地におけるスノー長老の経験について詳しくは, 24 章参照
67. ヒーバー・J・グラント, Conference Report, 1919 年 6 月, 10
68. *Deseret Evening News*, 1894 年 4 月 3 日付, 4
69. ジェーコブ・ジェンセン, ルロイ・C・スノー, "Raised from the Dead," *Improvement Era*, 1929 年 9 月号, 884 - 886 で引用
70. ルロイ・C・スノー, "Raised from the Dead," 886; ルロイ・C・スノー, "Raised from the Dead (Conclusion)," *Improvement Era*, 1929 年 10 月号, 975 - 979 参照
71. ルロイ・C・スノー, "Raised from the Dead (Conclusion)," 980 参照
72. ルロイ・C・スノー, "An Experience of My Father's," *Improvement Era*, 1933 年 9 月号, 677 参照; ジョン・A・ウイツォー長老とアリス・アーミーダ・スノー・ヤング・ボンドの夫であるノア・S・ボンドとの往復書簡も参照, 1945 年 10 月 30 日付および 1946 年 11 月 12 日付, 教会歴史図書館。ブリガム・ヤング大管長は預言者ジョセフ・スミスの殉教後 3 年以上もたって大管長会を組織した; ジョン・テラー大管長はヤング大管長の死後 3 年以上もたって大管長会を組織した; ウッドラフ大管長はテラー大管長の死後およそ 2 年たって大管長会を組織した。スノー大管長が神殿で受けた天からの現れについて詳しくは, 20 章参照
73. ロレンゾ・スノー, "President Snow in Cache Valley," *Deseret Evening News*, 1899 年 8 月 7 日付, 1 で引用
74. Biographical Notes on Lorenzo Snow, ルロイ・C・スノー編, 教会歴史図書館, 2
75. W・D・コーネル, "Mormonism in Salt Lake," *Millennial Star*, 1899 年 9 月 14 日付, 579 で引用
76. プレンティス牧師, ニーファイ・アンダーソン, "Life and Character Sketch of Lorenzo Snow," *Improvement Era*, 1899 年 6 月号, 569 - 570 で引用
77. ロレンゾ・スノー, *Millennial Star*, 1899 年 8 月 24 日付, 533; *Deseret Evening News*, 1899 年 5 月 17 日付, 2; *Deseret Evening News*, 1899 年 5 月 18 日付, 2 も参照。 *Millennial Star* にはスノー大管長がこの説教を行ったのは 5 月 8 日であると記されているが, 同時代に書かれた他の文献によるとその日は 5 月 18 日だったということが分かる。また, スノー大管長は 5 月 17 日に什分の一じゅうぶんのいちに関する説教を行っている。什分の一の啓示に関するより完全な記録については, 12 章参照
78. "Pres. Snow Is Home Again," *Deseret Evening News*, 1899 年 5 月 27 日付, 1 参照
79. ロレンゾ・スノー, "Pres. Snow Is Home Again," 1 で引用
80. 一例として, *Deseret Evening News*, 1899 年 6 月 24 日付, 3 参照
81. 一例として, *Improvement Era*, 1899 年 8 月号, 793 参照
82. オーソン・F・ホイットニー, *History of Utah*, 第 4 巻, 226
83. ヒーバー・J・グラント, Conference Report, 1919 年 6 月, 10
84. "Special New Century Services," *Deseret Evening News*, 1901 年 1 月 1 日付, 5 参照
85. ロレンゾ・スノー, "Greeting to the World by President Lorenzo Snow," *Deseret Evening News*, 1901 年 1 月 1 日付, 5
86. ロレンゾ・スノー, Conference Report, 1901 年 10 月, 60, 62



生涯を通じ、ロレンゾ・スノー大管長は「研究によって、また信仰によって」
学問を求め続けました（教義と聖約 88：118）。



信仰によって学ぶ

「兄弟姉妹、日々知恵と英知を蓄え、
主なる神の名によって努力し続けようではありませんか。
そうすれば、どのような事態も
わたしたちの益となって働くでしょう。」

ロレンゾ・スノーの生涯から

ロレンゾ・スノーは子供のころ、家族の農場で仕事をしていないときはいつも本を読んでおり、それを家族は「本を抱えて雲隠れ」とよく言ったものだった。姉のエライザは、彼は「学校だけに限らず家でも、常に学生のように」だったと言っていた。¹ 成長するに従い、彼の学習意欲はさらに高まっていった。実際、教育は青少年時代の「最大の関心事」だったと彼は話している。² 幾つか公立学校に通った後、1835年にオハイオ州にある私立のオーバーリン大学で学び、1836年には、エライザの招きを受けてオハイオ州カートランドに移ることとなった。彼がまだ教会に入る前のことである。カートランドで履修したヘブライ語のクラスには預言者ジョセフ・スミスをはじめ大勢の使徒が出席していた。

バプテスマと確認を受けた後、スノー大管長の関心の中心は「書物による勉強」³ から「御霊による教育」⁴ へと移っていった。学問を続けていく中で、学ぶことへの情熱を失うことはなかった。例えば、十二使徒定員会会長を務めていた1894年のことである。10月の総大会で、当時80歳だったスノー大管長は聖徒たちの前に立っていた。その日、自分より経験の浅い兄弟たちが述べた説教について思い巡らしながら、彼は次のように言った。「これまでわたしが考えたこともなかった意見が幾つか出ましたが、どれも非常に有益でした。」⁵ 6年後、大管長となっていた彼は、日曜学校の組織が開いた大会に出席した。幾人かの話聞いた後、最後に説教壇に立った彼は、開口一番、次のように語った。「これまで目にし、耳にした事柄に、わたしはこの上ない喜びと驚きを感じています。……実のところ、教えを受けたと言ってよいでしょう。そして、86歳のこのわたしが教えを受けることができるなら、一般的な成人の皆さんが集会で、役立つことも喜びも得られない理由など、見つかりません。」⁶ [39ページの提案1参照]

ロレンゾ・スノーの教え

学ぶには信仰と努力と根気が必要である

皆さんとわたしが受け入れたこの宗教体系は壮大で輝かしく、日々何かしら新しいことを学ぶことができ、大きな価値があるものです。この宗教から日々学んで得る新たな知識や考え方を受け入れ、蓄えることはわたしたちの特権であるだけではなく、なすべきことなのです。⁷

そもそもモルモニズムとは何かと言えば、進歩すること、すなわち精神的、肉体的、道徳的、霊的に進歩することです。中途半端な教育は末日聖徒にとって十分ではありません。⁸

地上で長く生きて経験を積み、知識を得ることは有益です。それは主が言われたように、わたしたちがこの世の人生で得るどのような英知も、復活のときにわたしたちとともによみがえり、人がこの世で知識と英知を多く得れば得るほど、それだけ来るべき世で有利になるからです〔教義と聖約 130 : 18 - 19 参照〕。⁹

中には学ばない人もいれば、もっと速く進歩できるのに、それほど進歩しない人もいます。それは、目と心が神に向いていないからです。物事を深く考えないために、得られるはずの知識を得ていないのです。受けられるはずのものを多く取り逃すのです。永續する幸せを手に入れる前に、わたしたちは知識を得なければなりません。神にかかわる事柄に関して、神経を研ぎ澄まさせていなければなりません。

わたしたちは、今は、時間の使い方を改善したり、知力を向上させたりする努力を怠っているかもしれませんが、いつか、取り組まなければならない時が来ます。歩くべき行程は長く、^{きょう}今日進まなければ、明日ははるかに長い距離を歩かなければならなくなります。¹⁰

頭を働かせなければなりません。つまり、神から与えられた才能を大いに発揮して実際に活用しなければなりません。そうすることで、^{たまもの}聖霊の賜物と力から導きを受け、わたしたちは将来、つまりこれから起こる出来事に備えるうえで必要な考え方や理解力、祝福を得ることができます。

同じ原則が、神にかかわる事柄に関連するわたしたちのあらゆる行動に当てはまります。わたしたちは努力しなければなりません。……行動を起こさず、怠惰な生活を続けていては何の益も生まれません。どっちつかずのままじっとしては、何も達成できません。天から示された原則はすべて、わたしたちの人生や救い、幸福にとって益となるのです。¹¹

神がわたしたちに求めておられることを知る努力、言い換えれば、非常に重



「^{みたま}御霊による教育」は、わたしたちが「最大の注意」を払う価値があります。

要な祝福を得るために神が明らかにされた原則を探求する努力は必要ないと、わたしたち末日聖徒は考えているかもしれませんが。末日聖徒を昇栄に導き、多くの^{かんなん}艱難と苦しみから守るために、簡潔かつ明確に啓示された原則があります。しかしわたしたちが十分忍耐してそれらの原則を学んで従わなければ、原則に従順であることで得られる祝福を受けることはできません。¹²

兄弟姉妹、日々知恵と英知を蓄え、主なる神の名によって努力し続けようではありませんか。そうすれば、どのような事態もわたしたちの益となって働き、わたしたちの信仰と英知を増し加えてくれるでしょう。¹³ [39 ページの提案 2 参照]

^{みたま}御霊による教育は最大の注意を払う価値がある

何にも増して最大の注意を払う価値のある教育があり、あらゆる人がその教育に励むべきです。それは御霊による教育です。¹⁴

たとえわずかであっても、霊的な知識は、単なる意見や概念、考え、あるいは入念に練り上げた論法より、はるかに価値があります。たとえささいであっても、霊的な知識は非常に重要で、最も重んじられなければなりません。¹⁵

わたしたちはこの世の富を求める一方で、自らの霊的進歩をおろそかにしてはなりません。この世での祝福と快適さを追い求めるのと同様に、光と知識の原則に従って成長するという目的に向けてあらゆる努力を傾けることは、わたし

たちの義務なのです。¹⁶

この世の財産を得ることに熱心なあまり、思いが一方に傾きすぎて、霊的な富を顧みなくなるとしたら、わたしたちは賢い管理人ではありません。¹⁷ [39ページの提案3参照]

福音の原則を繰り返し聞くことによって益を得る

〔幾つかの原則については〕これまでに恐らく何百回も聞いていることでしょう。それでもわたしたちは、これらの原則を何度でも教わる必要があるようです。それはわたしが教義と聖約の書を読んでいて気づいたことと似ています。この書物に書かれている啓示を繰り返し読んでいながらもかかわらず、その同じ啓示を読む度に新しい考察を得るのです。皆さんも同じ経験をしていることと思います。もしそうでないとすれば、わたしの経験とはずいぶん違います。¹⁸

わたしたちはアルファベットを習っている子供と同じです。先生が子供に言います。「これがaです。ちゃんと覚えましょう。」すると子供は「はい、覚えます」と答えます。先生は次の文字を指して、「これはbです。よく見て覚えるように」と言い、「はい」と子供が言います。その後先生はaに戻って聞きます。「この字は何ですか。」しかし、子供は忘れていました。すると先生はもう一度それがaという字であることを教えて、bに進みますが、子供はそれも忘れていました。そこで先生はもう一度bを教えます。朝の授業はこのような様子でした。午後になって子供はまた質問されますが、またしても二つの文字を忘れていて、再度教えてもらわなければなりません。こうして、レッスンは何度も繰り返す必要があります。経験の浅い先生なら、これからも同じことを繰り返し教えなければならないのかと考え、がっかりしてしまうに違いありません。末日聖徒にも同じことが言えます。同じことを繰り返し聞いてうんざりするかもしれませんが、完全に理解するには、何度も学ばなければなりません。わたしたちは学ばなければならないのです。末日聖徒は最終的に神のすべての律法と戒めを学び、それらを厳格に守ることができるようになることをわたしは知っています。しかし、わたしたちはまだその段階に到達していません。¹⁹ [39ページの提案4参照]

ともに福音を学ぶとき、教師と生徒の双方に御霊の導きが必要である

〔教師〕が人の前に立つとき、知識を伝えるためにその場にいることを自覚していなければなりません。そうすることで、人々はさらなる光を受け、聖さきよという原則において教育を受けることで進歩し、そうすることにより、真理をその霊に受け入れ、義のうちに成長するでしょう。

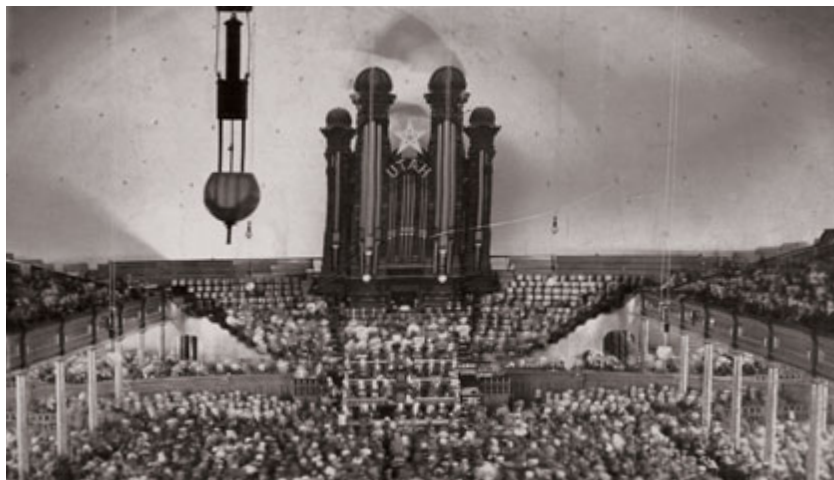
それを可能とするために、教師は頭を働かせ、信仰の力を働かせなければなりません。また、心を尽くして主なる神の御霊みたまを求めなければなりません。それ以外の方法ではなしえません。同様のことが教えを聞く者にも言えます。この壇上から説教を行う人々から折々求められる事柄に特別な注意を払わなければ、そしてさらに、一人一人が主の前にささげる祈りの中で、勢力と力を尽くし思いを働かせなければ、当然受けられるはずの良いものや益となるものを得ることはできないのです。²⁰

わたしが末日聖徒に望むことは、この大会で長老たちが前に立って話をするときに、話者一人一人のために信仰を働かせて祈ることです。それは、話者がわたしたちのすべてに益となる話ができるようにするためであり、そして、わたしたちも益となるものを受け入れる霊を持つことができるようにするためです。これはわたしたちの特権であり義務です。わたしたちは偶然ここへ来たものではありません。わたしたちは何かしら有益なものを得ることを期待してこの大会に来ているのです。²¹

〔話者が〕皆さんの知りたい事柄を語るよう、また皆さんに役立つ事柄を提案できるように、皆さんは主に求めるべきです。皆さんが理解できない何らかの答えを求めている場合には、その悩みに関して導きとなる言葉を〔話者が〕語れるように祈ってください。そのようにするなら、大会は皆さんにとってすばらしい、輝かしいものとなります。過去のどの大会より良いものとなるでしょう。不思議に思えるかもしれませんが、すぐ前の大会がいつも最高の大会だったように思えます。今回の大会がそのような大会になりますように。そして兄弟姉妹の皆さん、幹部の兄弟たちが皆さんに話をしている間、心を高めて主の方に向け、信仰を働かせてください。そうするならば、失望することはありません。必ずや、大いなる祝福を豊かに受けたと感じながらこの大会を後にし、家路に就くでしょう。²²

今わたしの前にいる会衆の中に、総大会でともに集うために遠くから来た人も大勢いると思います。皆さん一人一人が、純粋な動機に促されてこの場に集まっているでしょう。神の王国で役立つ者として完全となるように成長することを願って来ているのです。その思いがかなわずに落胆しないためには、大会の進行中、話者が主の御霊に導かれて提案することを受け入れて益とするよう、自身の心を備えなければなりません。わたしたちが教化されることに関しては、話者の責任にも増して、わたしたち自身に責任があると思ってきましたし、今もそのように思っています。²³

わたしたちが……ともに集うとき、話をする人たちから教えを受けることは、わたしたちの特権となります。何ら教えを受けなかったとしたら、普通、落ち度はわたしたちにあります。²⁴



わたしたちは総大会とその他の集会で語られるメッセージを「受け入れて益とするよう、自身の心を備え」なければなりません。

一部の人の中に見られる態度は、わたしが弱さだと考えてきたものです。彼らは集会にやって来ても、役立つ教えや、義にかなって成長させてくれる教えを受けることよりもむしろ、……話者の雄弁さを楽しんだり、鮮やかな弁舌に酔いしれたりしています。また、話者の姿を見たいために、あるいは、話者の人格をあれこれ憶測しようという目的で来ています。……

……たとえどんなに大切に価値ある考えが語られたとしても、わたしたちに与えられている能力を働かせず、主の御霊を得なければ、話者を通して得られるものはほとんどありません。反対に、聞く者が努力するなら、話者の話し方は非常につたなくても、……話者によって思いを満たされないまま会場を後にすることなど決してないとすぐに分かるでしょう。²⁵

末日聖徒に最も役立つものは、長い説教によって常にもたらされるとは限りません。わたしたちは様々な説教を聞きながら知識や教えを受けたり、ある原則が突然理解できたりすることがあります。それが後になって価値あるものとなるのです。²⁶

わたしたちは神を礼拝し、地上で真理の大義を推し進めるのに必要な務めを行うために集まっています。どのような教えを受けるかは、おもにわたしたちの心の状態にかかっています。この世的な事柄を心から払いのけ、この大会の目的に注意を集中するべきです。²⁷

知識と霊的な理解を得ることにに関して、わたしたちは完全に主に頼っています。わたしたちはそのように感じています。ですから、自らの信仰をどれくらい働かせているかに応じて、わたしたちは主の僕から^{しもべ}教えを受けます。……主は

御自分の僕を通してわたしたちに語られ、僕は、わたしたちが神を礼拝するために集まるこのような集会で語ります。²⁸ [下記の提案5 参照]

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。そのほかの提案については、v - vii ページを参照する。

1. 33 ページに書かれている、スノー大管長が学ぶために生涯を通じて払った努力について復習してください。人は何に促されて一生学び続けるのでしょうか。あなた自身がどのように学んでいるか考え、生涯学び続けられる方法について深く考えてください。
2. 福音を学ぶための努力と忍耐に関するスノー大管長の勧告を研究してください (34 - 35 ページ)。真剣に努力するとき、あなたの個人学習はどのように変わりますか。子供や青少年が努力して学ぶために、どのように助けることができますか。
3. スノー大管長は聖徒に対し、「御霊による教育」を熱心に求めるよう勧めています (35 - 36 ページ)。「御霊による教育」はあなたにとってどのような意味がありますか。世の富に焦点を当てすぎた教育はどのような結果を招くでしょうか。
4. アルファベットを学ぶ子供の例 (36 ページ) は、福音を学ぼうと努力するわたしたちとどのような共通点がありますか。これまで古代と末日の預言者の言葉を研究してきて、繰り返し教えられてきた原則にはどのようなものがありましたか。
5. 教会のクラスや集会で学ぶためには、どのように心を備えたらよいでしょうか。聖餐会や大会でただ話を聴いているときにも学ぶには、どのように努力すればよいでしょうか (例として、36 - 39 ページ参照)。

関連聖句 —— 2 ニーファイ 9 : 28 - 29 ; 28 : 30 ; モーサヤ 2 : 9 ; 教義と聖約 50 : 13 - 22 ; 88 : 118, 122 ; 136 : 32 - 33

教える際のヒント —— 「聖典と預言者の言葉から教える助けとして、教会はレッスンテキストなどの資料を発行している。注解書や参考書はほとんど必要がない。」 (『教師、その大いなる召し：福音を教えるための資料集』 [1999 年] 52)

注

1. エライザ・R・スノー・スミス, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow* (1884年), 3
2. *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 28で引用
3. *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 28で引用
4. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1868年3月31日付, 2
5. "Glory Awaiting the Saints," *Deseret Semi-Weekly News*, 1894年10月30日付, 1
6. "Tithing," *Juvenile Instructor*, 1901年4月号, 214 - 215
7. Conference Report, 1898年4月, 13
8. "'Mormonism' by Its Head," *The Land of Sunshine*, 1901年10月, 257
9. "Old Folks Are at Saltair Today," *Deseret Evening News*, 1901年7月2日付, 1で引用; ロレンゾ・スノーが書き, 息子 **ルロイ** が読み上げた。
10. *Deseret News*, 1857年10月21日付, 259
11. *Deseret News*, 1857年1月28日付, 371
12. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1878年7月16日付, 1
13. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1869年12月7日付, 7
14. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1868年3月31日付, 2
15. *Deseret News*, 1882年11月22日付, 690
16. *Deseret News*, 1865年7月19日付, 330
17. *Deseret News*, 1865年7月19日付, 330
18. *Deseret Semi-Weekly News*, 1897年3月30日付, 1
19. *Deseret Semi-Weekly News*, 1899年7月28日付, 10; 強調付加
20. *Deseret News*, 1857年1月28日付, 371
21. Conference Report, 1899年10月, 2
22. Conference Report, 1900年10月, 5
23. Conference Report, 1898年10月, 1 - 2
24. Conference Report, 1898年4月, 61
25. *Deseret News*, 1857年1月28日付, 371
26. Conference Report, 1899年4月, 2
27. *Deseret News*, 1888年4月11日付, 200; 1888年4月の総大会におけるロレンゾ・スノーの説教の詳細な記録から
28. *Salt Lake Daily Herald*, 1887年10月11日付, 2



イエス・キリストは水に沈めるバプテスマを受け、わたしたちに模範をお示しになった。



たまもの バプテスマと聖霊の賜物

「イエス・キリストへの信仰、悔い改め、罪の赦しのために
水に沈めるバプテスマ、聖霊の賜物を受けるための^{あんしゆ}按手、
これは……使徒の時代における福音の秩序でした。
この秩序を理解し、適切に従うとき、力、賜物、祝福、
そして栄光に満ちた特権が直ちに付与されました。」

ロレンゾ・スノーの生涯から

ジョセフ・スミスが預言者であるという証^{あかし}を受けてからでさえ、ロレンゾ・スノーは末日聖徒イエス・キリスト教会へ入る決心ができずに悩んでいた。教会員になれば、この世における大望を幾つかあきらめなければならないことを知っていたからである。しかし、「心と意思の最も激しい苦闘」と彼が呼ぶ体験を経て、バプテスマを受けることに同意した。そのときのことを次のように述べている。「主の助けを通して（なぜならわたしは、主がわたしを助けてくださったに違いないと感じているからです）、わたしの高慢な心、この世的な大望と願望は祭壇に置きました。そして、子供のように謙遜^{けんそん}になってバプテスマの水に入り、福音の儀式を受けました。……神の権能を持っていると公言する人によってバプテスマと按手の儀式を受けたのです。」¹

スノー大管長は自分が受けたこの祝福を人々に伝えたいと強く願った。イタリアでの宣教師時代に書いた手紙で次のように語っている。「ほとんどの国で、神の王国の扉を開けることに大変な困難と不安が伴います。わたしたち自身も少なからずその状況を経験しましたから、永遠の命を受けたいと願う最初の人と水に入ったときのわたしの喜びは、非常に大きなものでした。神聖な儀式を執行してだれも閉じることのできない扉を開けた、そのすばらしいときほど、イタリア語が耳に快く響いたことはありませんでした。」² [50 ページの提案 1 参照]

ロレンゾ・スノーの教え

神が定められた原則に従うとき、わたしたちは神から祝福を受ける

神によって定められた幾つかの原則があります。それを理解し、守ることで、人は霊的な知識、賜物、祝福を得ることができます。この世の初めにも使徒の時代にも、主が定められた規則を理解し、忠実に守ることによって、人は霊的な力と様々な特権を持つようになりました。例えばアベルです。アダムの息子の一人であったアベルは、犠牲をささげることは神が定められた秩序であり、その秩序を通して人は祝福を得るといふ教えを受けました。アベルは自ら実行し、その秩序を守って犠牲をささげ、それにより、いと高き御方の栄光に満ちた現れを受けました〔創世4:4；ヘブル11:4参照〕。

またノアの洪水の前、人々は墮落し、破滅の時が彼らに訪れようとしていたとき、主は義人が逃れられるように、一つの方法をお示しになりました。結果として、その方法を理解し、示されたとおりに従ったすべての人は約束された祝福を確かに受けたのです〔創世6-8章参照〕。

エリコを手に入れる前に、ヨシュアは神が指示された段階を踏まなければなりませんでした。その段階は命令どおり適切に実行され、エリコはすぐに彼のものとなりました。〔ヨシュア6章参照〕

もう一つ、スリヤ軍の長ナアマンの例を見てみましょう。彼は重い皮膚病にかかっていたようです。預言者であるエリシャのことを耳にしたナアマンは、その苦しみを取り除いてほしいとエリシャに訴えました。預言者エリシャは、神の御心みこころを〔伝える〕聖霊を受けており、ヨルダンの水で7回体を洗えば快復するとナアマンに伝えました。しかし、ナアマンはその方法があまりに簡単に思えて不快に感じ、その方法を言われたとおりに実行する気にはなりませんでした。しかし、よく考えた末、謙遜けんそんになって、決められたことに従いました。すると何と、その後すぐに祝福がもたらされたのです。〔列王下5:1-14参照〕……

福音の神権時代が始まったとき、同様の原則、つまり、定められた律法に従順であれば祝福が与えられるという原則に従って、賜物と祝福が与えられました。その後も、主は、行うべきことを幾つか定め、それを行うすべての人に特定の特権を約束されました。そして、定められた行為を細部に至るまで完全に実行したとき、約束された祝福は確かに現実となったのです。³

バプテスマや確認という外形上の儀式は、
信仰や悔い改めといった内面の働きと密接なかかわりがある

福音の神権時代には、賜物たまものと祝福は形式的な儀式、つまり形式上の業を行うことで得られたのではなく、単に信仰や悔い改めといった、姿形のない精神的な働きを通して得られたという、むなしい思いを抱く人たちがいます。しかし、しきたり、迷信、人の信条を捨てて神の言葉に注意を払うなら、福音の神権時代において、形式上の業、つまり外形上の儀式は信仰と悔い改めという内面の働きと密接なかかわりがあったことが分かります。このことを証明するために、わたしの考えを話しましょう。

救い主は言われました。「わたしを主よ、主よ、と呼びながら、なぜわたしの言うことを行わないのか。」「[ルカ 6：46] また次のようにもおっしゃっています。「わたしの言葉を聞いて行うものを、岩の上に自分の家を建てた人に比べることができる。」「[マタイ 7：24 参照] さらに、「信じてバプテスマを受ける者は救われる。」「[マルコ 16：16] 同じようにこうも言っておられます。「だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない。」「[ヨハネ 3：5] 主のこれらの言葉は、救いを得るために形式上の業を行うことを人に求めています。

五旬節ごじゆんせつの日、ペテロは周りの群衆に語りました。「悔い改めて、罪のゆるしを得るためにバプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受け得るであろう。」「[使徒 2：38 参照] この預言者の言葉から、人は罪の赦しを受け、その後聖霊の賜物を得るためには、水に入るバプテスマという形式的な業を行わなければならないことが分かります。しかし、外形上の業を行う前に、信仰と悔い改めという内面の働きがなされなければなりません。信仰と悔い改めはバプテスマに先行し、バプテスマは罪の赦しと聖霊の賜物を受けることに先行します。……

バプテスマを、罪の赦しを得るために神が定められた重要な原則の一つとするのは間違いであると考える人たちがいます。これに対し、わたしたちは次のように言います。わたしたちより前に救い主はバプテスマを受けられ、使徒たちも受けました。ですから、彼らの模範あがなに従うことは義務である、わたしたちは感じています。……バプテスマは……大いなる贖あがないを信じる信仰によって、わたしたちを罪と汚れから今引き離してくれます。……

福音の特権を得るためには、信仰と悔い改めと同様に、形式上の業も行わなければならないことは明白です。⁴ [50 ページの提案 2 参照]



こじりんせつ
五旬節の日、およそ3,000人がバプテスマを受けた。

バプテスマは水に沈める方法で行われ、
聖霊たまものの賜物あんしゆは按手によって授けられる

水の中で行うバプテスマはキリストの福音の一部であり、初期の神しもべの僕たちはその方式を厳格に守ってバプテスマを施していたことが分かっています。
.....

ではここで、昔行われていたバプテスマの方式について正しく理解できるように少し時間を取りましょう。この儀式を執り行う方式は一つしかないことは明らかです。その方式について使徒たちは説明を受けており、儀式を行うときにはいつも厳格にその方法に従っていました。わたしたちがこの問題について正しい認識を得るためには、バプテスマが行われていた当時の状況について話す必要があるでしょう。

〔バプテスマの〕ヨハネについては、彼はたくさん水があるという理由からアイノンでバプテスマを施していたと言われています〔ヨハネ3:23参照〕。もし水を振りかける方法を取っていたのであれば、水がたくさんあるからという理由でヨハネがアイノンまで出かけたとはとても考えられません。わずかな水があればユダヤ全地域でバプテスマを行うことができたわけで、そのわずかな水のためにアイノンまで旅をする必要はなかったのです。また、ヨルダン川でバプテスマを施していたヨハネからこの儀式を受けた救い主は、その後水から上がられた、とわたしたちは教えられています。つまりそれは、正しい方法で儀式を執り

行うために、主は水の中に入られたことを意味しています〔マタイ 3：16 参照〕。もう一つ例を挙げましょう。ある宦官はピリポとともに水の中に降りて行き、水から上がったと書かれています〔使徒 8：26 - 38 参照〕。額に少量の水を振りかけることで目的が達せられるとするなら、この人たちがこの儀式を受けるために水の中に入る必要はまったくありませんでした。自分自身の理性と一貫性を主張するすべての人はこのことを認めるべきです。聖徒にあてた手紙の中でパウロは、水に沈める方法を正しいとする証を簡潔に述べています。……この使徒は、聖徒たちはバプテスマによってキリストとともに葬られたと明言しています〔ローマ 6：4；コロサイ 2：12 参照〕。

完全に水に沈められなければ、あるいは覆われなければ、人はバプテスマによって葬られることができなかつたことは明らかです。何かを埋葬するとき、覆われていない部分が少しでもあれば、それは葬られたと言うことはできません。その人の全身が水の中に入らなければ、バプテスマによって水の中に葬られたことにはなりません。バプテスマの方式に関するこの使徒の説明は、「水から生れなければ」と救い主が言われたことと見事に一致しています。何かから生まれるとは、その何かの中に入れられ、そこから身を起こすこと、つまり出て来ることを意味します。水から生まれるとは、水の子宮に入れられ、再び生み出されるという意味もあるに違いありません。

福音が純粋で完全なままに宣言されていたキリスト教初期の時代には、バプテスマの儀式は水に沈める方法で行われていました。理性的で偏見のない知性を持つすべての人にそのことを確信させるために必要なことは、これで十分に語られたと確信しています。ですから、このことに関して述べることはこれで終わりとなります。

ヘブル人への手紙第 6 [章] により、按手が福音の原則の一つに挙げられていたことが分かります。この儀式は罪の赦しのために水に沈めるバプテスマと同様、今日のキリスト教会で非常に軽んじられていることは周知のとおりであり、そのため、これから述べる 2、3 の考えが役立つことを願っています。キリストが病人に手を置いて癒された例が幾つかあります。また、マルコの最終章で使徒たちへ指示を与え、主は「信じる者には、このようなしるしが伴う。……病人に手をおけば、いやされる」ということなどを教えておられます。アナニヤはサウロに手を置き、この儀式が施されるとサウロはすぐに再び目が見えるようになりました〔使徒 9：17 - 18 参照〕。難破してマルタ島に上陸したパウロは、島の首長ポプリオの父親に手を置き、赤痢を患っていた父親を癒しました〔使徒 28：8 参照〕。これらの記述により、按手が天からの祝福を得る [手段] の一つとして神が決められたものであることがはっきり分かります。

病人の癒しはこの儀式の執行に結びついていたものですが、このテーマをさらに掘り下げていくと、この儀式にはさらに大きな祝福が伴っていたことが

分かります。サマリヤの町では何人もの男女がピリポからバプテスマを受け、彼らはバプテスマを受けたことで大変喜んだと書かれています。恐らく彼らの喜びは、信仰と悔い改めとバプテスマによって罪の赦しを受けた結果として、また神の聖なる御霊の幾分かを受けた結果としてもたらされたのでしょう。神の御霊がそれらの後に来るのは自然なことです。罪が赦されることにより明らかな良心を得て、その後で神の御霊を受けるからです。こうして受けた聖なる御霊の一部を通して、彼らは神の王国が見えるようになったのです。だれでも新しく生まれなければ神の国を見ることはできないと救い主が宣言されたことが思い起こされます。それに続く節で、人はまず初めに水から、そして次に霊から、つまり2度生まれなければ神の国に入ることはできないと言われました〔ヨハネ3:3-5参照〕。

サマリヤの人々は第一の誕生であるバプテスマを受け、すでに水によって生まれていたのに、神の王国を見ることができずの状態にありました。信仰の目をもって神の王国の様々な祝福、特権、栄光をしっかりと見ることができずの状態だったのです。しかし、彼らは第二の誕生を経験していませんでした。つまり、霊によって生まれていなかったのに、神の王国には入っていませんでした。福音の完全な特権を得ていなかったのです。エルサレムでピリポの成功について聞いた使徒たちは、按手を授けるためにペテロとヨハネをサマリヤに遣わしました。二人はサマリヤに着くと、バプテスマをすでに受けていた人々に手を置き、人々は聖霊を受けました。〔使徒8:5-8, 12, 14-17参照〕⁵〔50ページの提案3参照〕

バプテスマと確認に伴う祝福は、 正しい権能によって儀式が施されたときにのみもたらされる

〔儀式〕は神から実際に遣わされた人が執行するのでなければ、祝福をもたらしません。人々が儀式を通して永遠の世に属する賜物と祝福を享受できるように、使徒と七十人は、福音の儀式を行うためにイエス・キリストによって聖任されました。それは、あなたがたが赦す罪はだれの罪でも赦され、あなたがたが赦さずにおく罪は、そのまま残るとキリストが使徒たちに言われたとおりです〔ヨハネ20:23参照〕。すなわち、謙遜な心で来て、誠心誠意罪を悔い改め、使徒からバプテスマを受ける者はだれでも、イエス・キリストの贖いの血を通して罪の赦しを受け、按手によって聖霊を受けます。しかし、この秩序ある事柄を使徒から受けることを拒む者の罪はそのままとどまります。……福音を施すために必要なこの力と権能は使徒によってほかの人に授けられました。つまり、この責任ある職を保持していたのは使徒だけではなかったのです。……さて、このような職を持つ人が見つかるまで、すなわちバプテスマと按手を施す権能を持つ人が見つかるまでは、それらの儀式を受ける義務はだれにもありません



わたしたちは^{あんしゆ}按手により聖霊の賜物を受ける。

し、律法にのっとって儀式を受けることがないかぎり、祝福を期待することもできません。

……福音の儀式を執行する権能は何世紀もの間失われていました。……使徒によって確立されていた教会は次第に道をそれ、荒野に迷い込み、権能と神権を失い、神の秩序から離れた結果、賜物と恵みも失いました。教会は律法に背き、福音の儀式を変えました。水に沈めるバプテスマの方式を、水を振りかける方式に変え、按手を行わなくなりました。預言に敬意を払わず、しるしを信じませんでした。……

^{やみ}闇をさまよう教会を見て、その様子を語ったヨハネは、黙示録……〔14章6節〕で福音の回復について「わたしは、もうひとりの御使が^{みつかい なかぞら}中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者〔に〕永遠の福音をたずさえて〔来た〕」と語っています。ですから、いつか救い主の再臨の前に、この啓示が成就するはずであったことは明らかです。

……わたしは神の啓示によってこれ以上ないほどの確信をもつて、^{あかし}証いたします。この預言はすでに成就しました。この終わりの時に神から遣わされた一人の御使が人類を訪れ、長く失われていたものを回復しました。それは、神権

であり、王国の鍵^{かぎ}であり、完全な永遠の福音です。⁶〔51 ページの提案 4 参照〕

**バプテスマの聖約を守り、聖霊の導きを求めるとき、
約束された祝福は必ずもたらされる**

イエス・キリストへの信仰、悔い改め、罪の赦しのために水に沈めるバプテスマ、聖霊の賜物^{たまもの}を受けるための按手^{あんしゅ}、これは使徒の時代における福音の秩序でした。この秩序を理解し、適切に執行したとき、力、賜物、祝福、そして栄光に満ちた特権が直ちに付与されました。時代や時期を問わず、これらの段階に適切な場所で秩序正しく行われたとき、同じ祝福が必ずもたらされます。しかし、その全部が、または一部でも軽視されれば、これらの祝福のすべて、あるいは多くが失われます。

使徒への指示の中でキリストは、この秩序に従順であった人が受けた、幾つかの人知を超えた賜物について話しておられます〔マルコ 16: 15 - 18 参照〕。またパウロは……完全な福音に付随する様々な賜物についてさらに詳しく述べています。彼はそのうちの9つについて語り、それらは聖霊の影響力であり、実であると述べました〔1コリント 12: 8 - 10 参照〕。さて、聖霊はあらゆる人、すなわち主の召しにあずかるすべての人に約束されていました〔使徒 2: 37 - 39 参照〕。この賜物は、その本質も働きも不変であるため、また事物の法則や秩序に伴う約束と分かち難く結びついているため、主やパウロによって教えられたそれらの賜物と祝福を期待することは理にならなくなり、矛盾なく、聖文に基づいたことでもあります。箱船を造り終えたノアが、もし、約束に従って現世の救いを求め手に入れることができたのならば〔モーセ 7: 42 - 43 参照〕、また、エリコの周囲を命じられたとおりの回数回ったヨシュアが、崩れ落ちた石垣を上って町の住人を攻め取ることができたのならば〔ヨシュア 6: 12 - 20 参照〕、命じられた犠牲をささげたイスラエルの民がその後、約束されたように自分たちの罪を赦されたのであれば〔レビ 4: 22 - 35 参照〕、ナアマンが、ヨルダンの水で7回体を洗うようにというエリシャの勧告に従った後、病の快復を願ってそれを手に入れることができたのなら〔列王下 5: 1 - 14 参照〕、そして最後に、盲人がシロアムの池で洗った後、約束されていた祝福を願ってそれが実現したのであれば〔ヨハネ 9: 1 - 7 参照〕、それとまったく同じように、人が先入観や諸教派の考え、誤ったしきたりを捨て、イエス・キリストの秩序に完全に従うときはいつでも、聖霊の賜物と使徒の時代の福音に結びついたすべての祝福を願い、受けることを妨げるものは日の栄えの世界の下に何もありません。

神のもとに救う宗教を得るためには、聖霊を得なければなりません。聖霊を得るためには、主イエスを信じて、罪を悔い改める、つまり罪を捨てなければなりません。そして、前に進み、罪の赦しのために水に沈められ、その後按手を

受ける必要があります。⁷

この福音を受け入れたとき、わたしたちは神の前で次の聖約を交わしました——わたしたちは神に導かれます——わたしたちは治められ、聖なる御霊の助言に従います——わたしたちは、命を与え、知識を与え、神にかかわる事柄についての理解を与え、神の御心^{みこころ}を伝えてくれる原則によって提案される事柄に従います——わたしたちは「神の王国かそれとも無か」を人生のモットーとして、神の目的である人類家族の救いを達成するために努力します——と。これらの……聖約をどれくらい守り、聖なる御霊が命じることを守ってきたか、わたしたちは自分自身でその評価を下さなければなりません。聖約に対する忠実さに応じて、わたしたちの思いは全能者の祝福を受け、教化されてきました。理解力が増し、聖さへの道、完成への道を進んできました。聖約に対して忠実でなかった分、永遠の命を得るための努力ができませんでした。周りを取り囲む悪と誘惑の流れに押し流されないための知恵や知識、そして神の英知を得ることができませんでした。この神の御霊の助言に従ってきた分だけ、わたしたちは心の平安と喜びを経験し、敵を打ち破り、虫も食わずさびもつかない宝を自分自身のために蓄え、日の栄えの王国への道を前進してきたのです。⁸ [51ページの提案5 参照]

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。そのほかの提案については、v - vii ページを参照する。

1. 42 ページを読み、あなた自身がバプテスマと確認の儀式を受けたときのこと、あるいはほかの人がそれらの儀式を受けたときのことを思い出してください。これらの儀式を受けたとき、あなたはどのような聖約を交わしましたか。それらの聖約はあなたの生活にどのような影響を及ぼしてきましたか。
2. 儀式を伴わない信仰と悔い改めが十分でないのはなぜですか。信仰と悔い改めが伴わない儀式が十分でないのはなぜですか。これらの質問について深く考え、話し合うとき、内面の働きと外形上の儀式に関するスノー大管長の教えを復習してください (44 ページ)。
3. 45 - 47 ページにあるスノー大管長の教えを研究し、そこで引用されている聖句について考えてください。これらの聖句は、水に沈めることの必要性についてあなたの理解をどのように深めましたか。聖霊の賜物を授けるための按手が病人を祝福するための按手より「さらに大きな祝福」であるのはなぜだと思いますか。

4. 47 ページで始まっている項を読んでください。神権が回復されたことで、あなたの生活にはどのような「賜物と恵み」がありますか。
5. 本章の最後の二つの段落を研究してください。「聖なる御霊の助言」によって導かれ、治められるとは、あなたにとってどのような意味がありますか。
6. 教義と聖約 68：25 - 28 は本章の教えとどのように関連していますか。子供が信仰、悔い改め、バプテスマ、聖霊の賜物を理解できるように親はどのように助けることができますか。

関連聖句 —— 2 ニーファイ 31：12, 17 - 20；モーサヤ 18：8 - 10；アルマ 5：14；教義と聖約 20：37；36：2；39：6；130：20 - 21

教える際のヒント —— 「あまりにも多くのことを詰め込もうとする誘惑〔を避けてください〕。……わたしたちは人々を教えているのであって、教材それ自体を教えているわけではないということ、……今まで見てきたレッスンの手引きには、割り当て時間内ではとうてい取り扱うことができない量の内容が含まれているということです。」(ジェフリー・R・ホランド「教会で教え、学ぶ」『リアホナ』2007年6月号, 59 参照)

注

1. "How He Became a 'Mormon,'" *Juvenile Instructor*, 1887年1月15日付, 22
2. "Organization of the Church in Italy," *Millennial Star*, 1850年12月15日付, 373
3. *The Only Way to Be Saved* (1841年発行のパンフレット) 2 - 3；原文にあった強調の斜体は正体に、句読点は標準化した。ロレンゾ・スノーはこのパンフレットを使徒に召される8年前に書いた。その後、パンフレットはイタリア語、フランス語、オランダ語、ドイツ語、デンマーク語、スウェーデン語、ベンガル語、トルコ系アルメニア語、トルコ系ギリシャ語に翻訳された。スノー大管長が使徒の職に就いていた1800年代の終わりまで幾度も再版された。
4. *The Only Way to Be Saved*, 3 - 4, 6；原文にある斜体は正体にした。
5. *The Only Way to Be Saved*, 6 - 9
6. *The Only Way to Be Saved*, 10 - 23；原文にある斜体は正体にした。
7. *The Only Way to Be Saved*, 9 - 10
8. *Conference Report*, 1880年4月, 79 - 80



生涯にわたる改心— 真理の原則に従って絶えず進歩する

「わたしたちの宗教は、わたしたちの中に取り込まれて、引き離すことのできない、わたしたちの一部となるべきものです。」

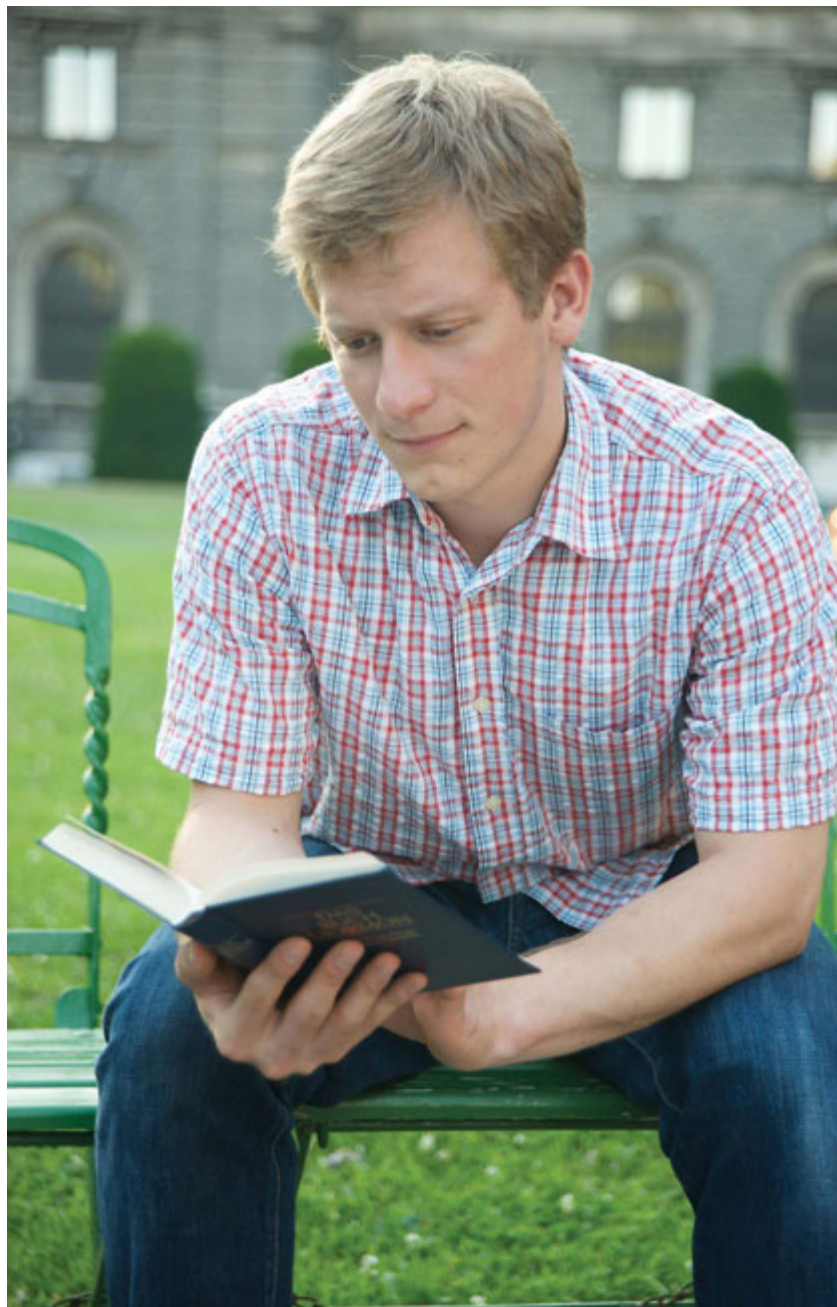
ロレンツ・スノーの生涯から

1836年6月、ロレンツ・スノーはバプテスマと確認を受けた。後年、自分が証をどのように強めたかについて次のように語っている。「わたしは彼ら〔末日聖徒〕の宗教が真実であることを信じたので、教会員となりました。その時点までこの改心は、単なる理性の問題でした。」¹ また、「あの状況でわたしにとって賢明なことを行ったことで、完全に満足でした」² と述懐している。この思いにしばらくは満足していたものの、すぐに彼は、聖霊の特別な現れを強く望むようになった。「それまで現れを受けたことはありませんでしたが、受けるに違いないと思っていました」と述べている。³

さらにこう語っている。「期待に反し、バプテスマの直後に御霊の現れはありませんでした。しかし、期待したよりは遅かったものの、それを受けたとき、それはわたしの最大の望みをもってしても予期できなかったほどの、完全ではっきりした、奇跡的なものでした。バプテスマを受けて2、3週間たったある日のことです。勉強している最中に、この業が真実であるという知識をまだ得ていないことについて、また、『神のみこころを行う者はこの教えが分かるであろう』〔ヨハネ7:17 参照〕という約束を実現させていないことについて真剣に考え始めました。すると大きな不安が襲ってきました。

本を傍らに置いて家を出ると、憂鬱で絶望的な気持ちに押しつぶされそうになりながら野原を歩き回りました。その間、言語に絶する暗雲に取り巻かれているようでした。わたしは一日の終わりに家から少し離れた森へ行って、ひそかに祈ることを習慣としていましたが、そのときはそうする気持ちになれませんでした。

祈りの精神は去り、天は閉じてわたしの頭上で青銅となってしまったかのようでした。しかし、ひそかに祈るいつもの時間になっていることに気づいたとき、夕べの祈りを怠らないようにしようと思いました。そこでただ形式的に、いつも



「わたしたちは、心の中で永遠の命の潤れることのない泉となる水に到達するまで、岩の上に土台を据え、神にかかわる事柄を研究して深く掘り下げていかなければなりません。」

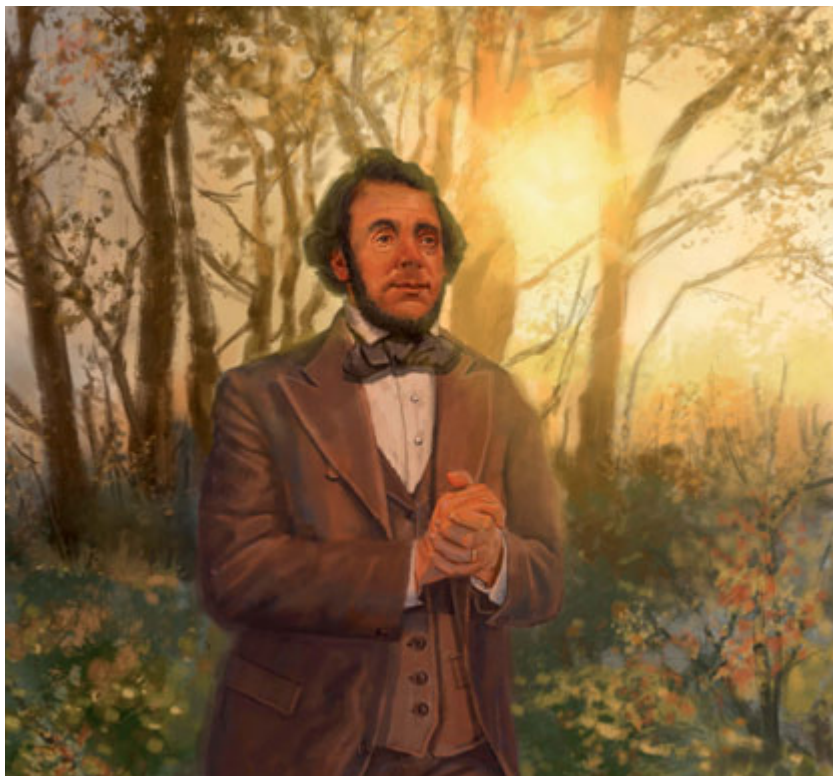
の場所でいつものようにひざまずきました。しかし普段と同じようには感じませんでした。

わたしが祈ろうと口を開いた瞬間、頭上で衣擦れのような音が聞こえました。するとたちまち神の御霊がわたしに降り、全身を完全に覆い、頭からつま先まで満たしました。何という喜び、何という幸福感だったことでしょう！それを理解したときに一瞬にして起こった、精神的、また霊的な深い闇から輝ける光と知識への変転は、どのような言葉をもってしても表すことはできません。神が生きておられること、イエス・キリストが神の御子であられること、聖なる神権が回復されたこと、そして完全な福音、これらについての完全な知識をそのときわたしは受けました。

それは、天の原理、原則、つまり聖霊の中に実際に沈められた完全なバプテスマでした。水に沈められたときよりも、肉体的にさらに確かに体の隅々にその力が及ぶのを感じました。『ベツレヘムの幼子』がほんとうに神の御子であるという事実、また、その御方が、使徒の時代と同じように今も人の子らに御自分を明らかにして知識を与えておられる事実を疑い、恐れる可能性はすべて、理性と記憶力がある限り、永遠に消え去りました。わたしはこれ以上ないほど完全に満足でした。期待した以上のことがなかったのです。限りなく確かにそう言うことができると思います。

このあふれんばかりの至上の喜びと聖なる導きの中にどのくらいの間とどまっていたのか分かりませんが、わたしを満たし、取り巻いていた日の栄えの力が徐々に退き始めるまで数分ありました。言い尽くせない神への感謝で胸を満たして、ひざまずいていた姿勢から立ち上がったときにわたしが感じたのは、いや、知ったのは、全能者だけが授けになれるものを、神がわたしに授けてくださったということでした。この世が与えることのできるあらゆる富と栄誉に勝る、偉大な価値あるものをわたしは受けたのです。⁴

ロレンゾ・スノーはこの日受けた証に忠実であり続け、熱心に努力して霊的知識を増し、ほかの人たちも同じことができるように助けた。「そのとき以来、聖なる御霊を失うことなく、常に御霊に導かれて生活するように努力しました。利己心と不当な野心を捨て、主のために働くよう努めました」⁵と語り、こう宣言している。「記憶力が続くかぎり、そして理性が働くかぎり、わたしに与えられたこの力強い証と知識を沈黙させたままにしておくことはできません。」⁶〔6ページの提案1参照〕



バプテスマと確認を受けて間もなく、
ロレンゾ・スノーは聖霊の静かな、生涯を変える現れを受けました。

ロレンゾ・スノーの教え

あかし
証を得ることは末日聖徒にとって最良の出発点である

わたしたちが信仰のよりどころとするものは、偉大で栄光に満ちています。わたしはこのことを自分で知っています。わたしはまだ教会に入って間もないうちに、神がおられ、御子イエス・キリストがおられ、ジョセフ・スミスが神の預言者として神に認められた者であるという、最も完全な知識を得ました。これは、人が教えることのできない知識です。全能者から啓示を通して与えられたものだからです。末日聖徒にとって、この知識を得ることは最良の出発点です。また、この道を進もうという大望を少しでも持つ人はだれでも、いつか、この完全な知識が必要となります。人はいずれ必ず力を必要とする状況に立たされます。そしてその力は、自分の進んでいる道を行けば最も高く善い望みを得られるという事実を知ることによりもたらされます。⁷

兄弟姉妹、皆さんもまたわたしも、考えなければならないことが幾つかあります。すべての男性女性が、自分の立っている土台に関して自分で知らなければならぬ時が来ています。わたしたちは皆、もう少し主に近づく努力をするべきです。もう少し前に進み、もっと理解しなければならない事柄について完全な知識を得ることが必要です。これはあらゆる末日聖徒の特権です。⁸ [60ページの提案2参照]

わたしたちは信仰を深め、霊的な知識を増すことができる

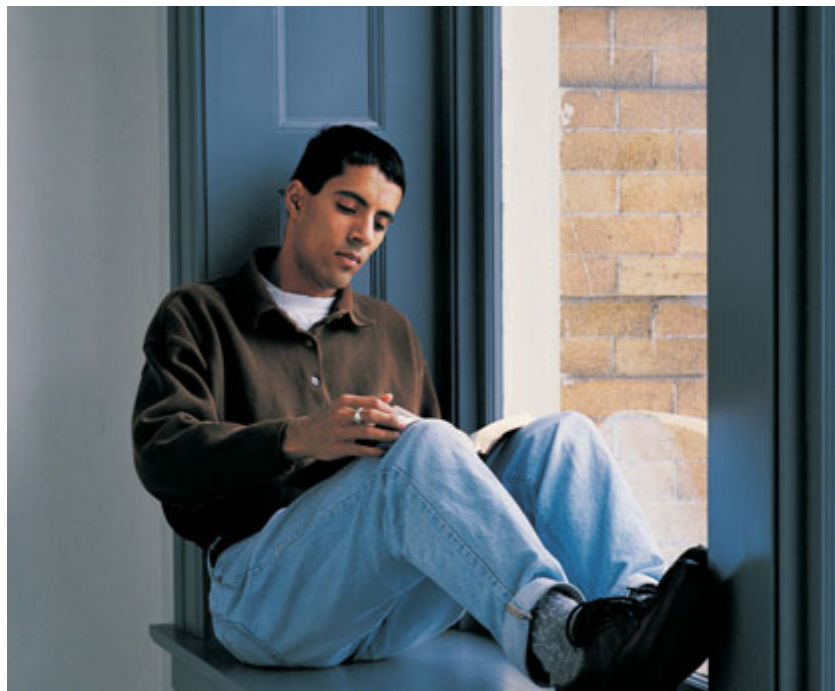
男性も女性も、霊的な知識を増すことができます。年齢を重ねるごとに成長することができます。⁹

末日聖徒は進歩しており、教育を受けているとわたしは感じています。わたしたちはより高く、さらに高く上昇しています。より高い状態、高い世界、高い次元へと向上しています。末日聖徒はその受けている教育によって、この世が得てきた知識や誤った教義と原則、それらすべてを含むこの世の知恵の影響を何ら受けることはありません。末日聖徒は人の作り出す理論や仮説を超越しつつあるからです。真理にかかわる事柄を考えることで思いは高まり、理解力は向上しています。そして、命と栄光の真の原則にさらにしっかりと自らを確立しています。わたしたちはこれらの真理で心を満たしています。信仰がどの日、どの時間に深まったのかは分かりませんが、その前の週、前の月、そして前の年を振り返ってみれば、自分が確かに信仰を増し、信仰や神の力についての知識が増したことを知るのでした。自分が神に近づいたことを知り、父なる神と親しく交わっていると感じるのです。¹⁰ [60ページの提案3参照]

信仰を深め、霊的な知識を増す望みがあるのなら、努力しなければならない

だれでも、自分自身の知識で立てるようになるべきです。隣りの人の知識に頼ることはできません。だれでも自立しなければなりません。完全に自分一人で神に頼らなければならないのです。困難を克服できるかどうか、また、進歩を妨げるため人生の旅路におかれた障害を乗り越えるかどうかはその人にかかっています。人は聖なる御霊みたまの働きによって知識を得ることができます。人はその勤勉さに応じて神に近づくことができ、信仰を増すことができます。¹¹

推察力を働かせ、適切な方法で努力〔しなければ〕、真理の原則に従って進歩し、天の知識を増すことはできません。この原則に関し、オリバー・カウドリが誤解した事例が教義と聖約に記されています。主はオリバーに古代の記録を翻訳する賜物たまものを授けると約束なさいました。今日、わたしたちの多くがそうであるように、オリバーもこの賜物をどのように使えばよいか、正しく理解していませんでした。神からこの賜物が約束されているかぎり、努力するまでもなくた



男性も女性も霊的な知識を増すことができ、
また、年齢を重ねるごとに成長することができます。

だ漫然と待ってさえいれば、自然に翻訳ができると考えていたのです。しかし、実際に記録が彼の前に置かれたとき、何一つ知識は与えられず、記録はずっと封じられたままでした。翻訳の力はオリバーに与えられなかったからです。

翻訳の賜物が授けられたものの、彼は翻訳を行うことはできませんでした。それは単に、神の前で自分の内にある賜物を伸ばそうとする努力をしなかったからです。オリバーの失望は大きなものでした。しかし、慈しみと憐れみに満ちた主は、次のような言葉をもって彼の誤りを指摘されました。

「見よ、あなたは理解していなかった。あなたはわたしに求めさえすれば、何も考えなくてもわたしから与えられると思ってきた。しかし見よ、わたしはあなたに言う。あなたは心の中でそれをよく思い計り、その後、それが正しいかどうかわたしに尋ねなければならない。もしそれが正しいければ、わたしはあなたの胸を内から燃やそう」などのような言葉です。〔教義と聖約 9 章参照〕

では、わたしたちに関して、わたしたちが今取り組んでいる事柄について話しましょう。今日の前にある務めを果たす能力を改善して高め、最終的にこれらの賜物と栄光を得て、待ち望む昇栄という状態に到達することを期待するので

あれば、熟考に熟考を重ね、努力しなければなりません。それも、能力の限りを尽くして行わなければなりません。¹²

わたしたちは……御霊を自分で得るべきであり、ほかの人の光に頼ることで満足してはいけません。自分自身の霊が御霊と一体にならなければなりません。

フルートが吹けるように練習する人は、初めは音を出すことだけでも難しいと感じます。メロディーを正確に吹くには、相当の努力と忍耐が必要です。その人は練習しては一息入れ、元に戻ってまた新たに始めなければなりません。しかし、一生懸命努力することで、しばらくすればそのメロディーを吹けるようになります。その後で、そのメロディーを演奏するように頼まれても、指を置く場所を思い出す必要はなく、すらすら吹けます。初めはぎこちなかったのです。メロディーが楽に吹けるようになるまでには、かなりの忍耐と練習が必要でした。

神にかかわる事柄についても同じです。わたしたちは努力し、少しずつ進歩しながら行動の法則を身に付けなければなりません。そうすれば、わたしたちに求められる事柄を楽に行うことができるようになるでしょう。¹³ [60 ページの提案 4 参照]

**神にかかわる事柄を深く研究し、忠実であり続けるなら、
わたしたちの宗教は自分自身の一部となる**

表面的な進歩、つまり外見上の成長に満足する、という危険性があります。御霊みたまの光の中を歩くことと、その光を身に受けていると感じることについてわたしたちは話しますが、実際にその経験をしているのでしょうか。わたしたちは、心の中で永遠の命の涸れることのない泉となる水に到達するまで、岩の上に土台を据え、神にかかわる事柄を研究して深く掘り下げなければなりません。¹⁴

わたしたちの中に、かつて全能者の御霊が力強くどまっていた男性たちがいます。かつて彼らの思いは天使の思いと同じように善良で純粋であり、いかなる状況にあっても神に仕え、神の戒めを守ると神に聖約した人たちでした。……しかし、そのうち何人かの長老たちの今の様子はどのようなのでしょうか。今、彼らに同じ気持ちはありません。彼らは、主がその所有を可能にくださったこの世のものに愛着を感じています。そのような状態ですから、召しが来るのを待っている今も、多くの場合召されたときでさえ、彼らが従うのは、召された務めを純粋に心から愛しているからではなく、地位や身分を保持したいという願望があるからなのです。

どれほどすばらしい第一歩をしるしたとしても、思いと愛情をこの世とこの世

の道に向けるならば、人は皆同じ状態に陥るのです。そのような状態は、その人が、主と地上における主の業よりも、この世を愛していることの明白で確かな証拠です。永遠の福音の光を受け、王国の善きものを享受し、イスラエルの子孫であり、大いなる栄光に満ちた約束を受け継ぐ者であるわたしたちは、神がわたしたちを通して行おうと計画されている事柄を成し遂げるために、誠実に勤勉に働かなければなりません。わたしたちは良い働きをすると同時に信仰と力を有する男性、女性であるべきです。そして、少しでも自分が不注意であったり無頓着むとんちやくであったりすることに気づいたときには、行いを改めて義務の道に戻るために、自分の状態を自覚すれば十分です。¹⁵

人がまるでコートや衣服を脱ぎ捨てるように自分の宗教を脱ぎ捨てるなどという考えほど愚かなものはありません。自分自身を捨てないかぎり、自分の宗教を捨てることなどあり得ません。わたしたちの宗教は、わたしたちの中に取り込まれて、引き離すことのできない、わたしたちの一部となるべきものです。人が自らの宗教を捨てるようなことがあるとしたら、その人はたちまち自分のまったく知らない領域に足を踏み入れて、暗黒の力に身を任せることとなります。そこは自分とはまったくかわりのない場所です。イスラエルの長老たちがののしり、うそをつき、酒に酔うことなど、とうてい考えられないことです。彼らはそのような行動を超越した存在でなければなりません。すべての悪を捨て、神の口から出る一つ一つの言葉によって生きようではありませんか〔教義と聖約 98:11 参照〕。神の御霊、真理の光、イエス・キリストの啓示が常にわたしたちの内にあるように、割り当てられたすべての務めを意欲的に力強く果たしましょう。¹⁶

シオンの船にしっかりとどまっています。何そうもの小舟がそばに寄って来て、いかにも魅力的なものをちらつかせたり、心引かれる約束を持ちかけたりしても、船から降りないでください。どんな小舟にも乗り移って上陸してはいけません。シオンの船にとどまるのです。健全な精神を持たない乗船者のだれかから不当な扱いを受けても、船自体には何も支障がないことを忘れてはなりません。同じ船に乗る人々が自分にどのような態度を執ったとしても、怒ってはなりません。この船は万全です。航海士にも問題はありません。わたしたちはこの船に乗ってさえいれば大丈夫です。わたしは、この船が皆さんを栄光の国へまっすぐに連れて行ってくれることを保証します。¹⁷

では、このような精神を自身の内に取り入れて宿し、さらに深く根付かせることによって、嵐あらしのときにも吹き飛ばされないようにすることについて、例〔を使って説明し〕ましょう。酢の入った樽たるにキュウリを漬けます。1時間たっても12時間たってもほとんど変化は見えません。よく見れば、わずかに表面だけに酢の効果が出てきているのが分かります。キュウリが漬かるにはもっと長い時間が必要なのです。バプテスマを受けて教会員になった人はある程度の影

響を受けますが、その影響はすぐに内部まで浸透する性質のものではありません。バプテスマを受けて12時間や24時間では、その人の内に正しいことに関する律法や義務の律法は定着しないのです。正しい精神がすっかり身に付くまで、モルモニズム、つまり神の律法が十分に浸透するまで教会にとどまらなくてはなりません。それはキュウリを酢に漬けておかなければならないのと同じです。わたしたちはこれらのものを自分の中に取り込まなければなりません。

……兄弟姉妹、わたしは……わたしたちの先祖の主なる神がその民に御霊を注がれるように祈りながら、このテーマを皆さんのもつに置いていきます。ですから皆さんはこのテーマについて細心の注意を払い、考察し、冥想してください。皆さんは、主の前で主をたたえるために、主がお選びになった人々です。主が皆さんを祝福し、その御霊で満たしてくださいますように。そして、皆さんの理解力が明らかになって、自分の救いにかかわる事柄を識別できますように。まだ十分に目覚めていない人がいるなら、彼らのうえに御霊がとどまり、聖霊の力が注がれて、過去、現在、未来にかかわる事柄について教える時が早く来ますように。そして主の助けによって彼らに義が植えつけられ、また真理の原則が植え付けられて、これからやって来る困難に自らを備えることができますように。¹⁸ [61 ページの提案5 参照]

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。そのほかの提案については、v - vii を参照する。

1. 52, 54 ページのロレンズ・スノーの経験を復習してください。皆さんの証はどのようにして本物になりましたか。あなたの経験を、家族やあなたがホームティーチャーや訪問教師として仕えている友人に伝えることを考えてください。
2. スノー大管長は、証を得ることは「末日聖徒として最良の出発点」である、と言いました（55 ページ）。なぜ証は最終目的地ではなく、単なる出発点なのでしょう。
3. 56 ページの下の上から7行目から始まる項で、スノー大管長は世俗の教育と、主からもたらされる「より高い」教育を比べています。この「より高い教育」を得るにはどのようにすればよいのでしょうか。「より高い教育」が得られたとき、どのような祝福が得られましたか。
4. 56 ページの下から13行目から始まる項を読んでください。これまでいつ、「自分自身の知識で立つ」ことが必要でしたか。子供と青少年が自分自身の知識で立つのを助けるために、親や教師は何ができますか。

5. 本章の最後の項（58 - 60 ページ）に書かれているスノー大管長の勧告を復習してください。「神にかかわる事柄を深く研究する」とはどのような意味があると思いますか。わたしたちの宗教を「自分自身に取り込む」とはどのような意味があると思いますか。

関連聖句 —— 2 ニーファイ 31:20；モーサヤ 5:1-4, 15；アルマ 12:9 - 10；3 ニーファイ 9:20；モロナイ 10:5；教義と聖約 50:24

教える際のヒント —— 「教会で行われているレッスンの多くは、堅苦しすぎるようです。講義のようなレッスンでは受け答えをすることができません。聖餐会や大会では、そのような教え方をしますが、レッスンは質問ができるように双方向でなければなりません。クラスでは気軽に質問するよう勧めることができます。」（ボイド・K・パッカー「教え、学ぶことの原則」『リアホナ』2007年6月号, 55）

注

1. フランクリン・G・カーベントナー, "A Chat with President Snow," *Deseret Semi-Weekly News*, 1900年1月5日付, 12で引用
2. "The Grand Destiny of Man," *Deseret Evening News*, 1901年7月20日付, 22
3. "A Chat with President Snow," 12
4. *Juvenile Instructor*, 1887年1月15日付, 22 - 23
5. "The Object of This Probation," *Deseret Semi-Weekly News*, 1894年5月4日付, 7
6. *Millennial Star*, 1887年4月18日付, 242
7. "Glory Awaiting the Saints," *Deseret Semi-Weekly News*, 1894年10月30日付, 1
8. *Millennial Star*, 1887年4月18日付, 244
9. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1868年3月31日付, 2
10. *Salt Lake Daily Herald*, 1887年10月11日付, 2
11. *Deseret News*, 1888年4月11日付, 200; 1888年4月の総大会におけるロレンゾ・スノーの説教の詳細な記録から
12. *Deseret News*, 1877年6月13日付, 290
13. *Deseret News*, 1857年1月28日付, 371
14. *Deseret News*, 1857年1月28日付, 371
15. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1882年8月15日付, 1
16. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1868年3月31日付, 2
17. *Deseret Semi-Weekly News*, 1897年3月30日付, 1
18. *Deseret News*, 1857年1月28日付, 371



ハワイ諸島における初期の伝道の業



聖霊の力によって強められる

「^{けんそん}謙遜に、常に主の^{みたま}御霊を友として生きる決心をしてください。」

ロレンゾ・スノーの生涯から

大管長として臨んだ最初の総大会でロレンゾ・スノーは次のように教えた。「わたしたちを取り巻く特殊な状況でわたしたちを助け、何を成し遂げるべきかを折に触れて示す存在として、わたしたちは主の御霊に頼っています。」¹この日をさかのぼること 34 年前、もし、スノー大管長の二人の友人が、ある特殊な状況で主の御霊に頼らなかったとしたら、彼は生きてこの声明を述べることはなかったかもしれない。

1864 年、十二使徒定員会会員であったロレンゾ・スノー長老とエズラ・T・ベンソン長老はハワイ諸島への伝道に向かっていた。3 人の宣教師、ジョセフ・F・スミス長老、ウィリアム・クラフ長老、アルマ・L・スミス長老が二人に同行していた。船がマウイ島沖に停泊し、ジョセフ・F・スミスを残して全員が上陸用の小船に乗り移った。島に近づいたとき高波を受け、操舵手は小船のコントロールを失って船は転覆し、乗っていた全員が海に投げ出された。間もなくスノー長老を除く全員が海面に浮かび上がって来た。救助に駆けつけた数人の島民はウィリアム・クラフとアルマ・L・スミスを救命ボートに引き上げ、彼らの友人を探した。クラフ長老は次のように語っている。

「スノー兄弟を発見したとき最初に見えたのは、転覆した船の先端辺りに浮かんでいる髪でした。彼を船に引き上げ、船員にありったけの力で早く岸に着けるように言いました。彼の体は硬直して、絶命しているように見えました。」

A・L・スミス兄弟とわたしは並んで座り、スノー兄弟をわたしたちのひざの上に横たえました。岸に着くまでの間小声で癒しの儀式を行いました。スノー兄弟の命を助けて彼が故郷の家族のもとに帰れるようにしてほしいと主に願い求めました。

岸に着くと、わたしたちは彼を砂浜の少し離れた所にあった大きな樽まで運び、その樽の一つにうつぶせにしました。スノー兄弟が飲み込んだ水を吐き出すまで、彼の体を揺すり続けました。……

しばらく蘇生処置を施しましたが、息を吹き返す様子はまったくありませんで



ロレンゾ・スノー長老がハワイ諸島で伝道を行ったときに命が助かったのは、
同僚たちの靈感に導かれた働きのおかげだった。

した。見守っていた人たちは、これ以上手の施しようがないと言いましたが、わたしたちはあきらめる気にはなりませんでした。主がきつと耳を傾け、こたえてくださると確信して、祈りながら手当てを続けました。

そして最後に、自分の口で彼の口を覆って彼の肺を膨らませたらどうだろうかという考えが浮かびました。自然の呼吸にできるだけ近い形で、息を吹き込み、そして吸い出しました。彼の肺をうまく膨らませることができるまで根気よく続けました。しばらくすると、かすかに息を吹き返す気配が感じられました。それまで、死んだように見開いたままだった目がわずかにまばたき、のどが弱々しくゼーゼーと音を立てました。生命が戻りかけている最初の兆候でした。それは次第にはっきりしたものになり、ついに完全に意識が戻ったのです。」

ウィリアム・クラフ長老はそのときの経験を振り返り、自分とアルマ・L・スミ

ス長老がスノー長老の命を救うことができた理由を理解した。こう語っている。「わたしたちはこのような場合に必要とされる通常の処置を施しただけでなく、御霊のささやきによって知らされた方法を試みたのです。」²〔71 ページの提案 1 参照〕

ロレンゾ・スノーの教え

わたしたちは聖霊の賜物たまものを通してあらゆる真理に導かれ、信仰を強める

福音に従順に従うことによるのみ与えられる祝福があります。それは、聖霊の賜物です。……この賜物の本質と特質を最もよく御存じであった救い主は、この賜物はこれを受けた人々をあらゆる真理に導き、来るべきことを彼らに示すものであると言われました〔ヨハネ 16：13 参照〕。神から発せられる御たま霊は広大な空間を満ちし、この世に来るすべての人を照らします〔教義と聖約 84：46 参照〕。しかし、聖霊の賜物はその御霊よりさらに偉大であり、あらゆる真理に導き、来るべきことを彼らに示します。

さらに、この賜物がもたらす益について使徒〔パウロ〕は次のように言っています。「各自が御霊を賜わっているのは、全体の益になるためである。ある人には、信仰が与えられている。」〔1 コリント 12：7, 9 参照〕信仰と言っても、今の時代に時折見られる見せかけの、どこにでもある普通の信仰ではありませんでした。その信仰ゆえに、信者はのこぎりで引き裂かれ、ライオンの穴や火の燃える炉に投げ込まれ、あらゆる拷問を受けました。ここで言うのはそのような信仰です。聖霊から授けられる信仰とは、信奉する大義のためならあらゆる困難のただ中に立ち、あらゆる敵に戦いを挑み、必要ならば命をささげることができるような信仰でした。この信仰には人を鼓舞する絶大な力がありました。それは主が聖霊を通じて授けてくださったもので、それ以外のどのような方法を使っても与えることはできませんでした。ある人には信仰が与えられ、ほかの人には知識が与えられました〔1 コリント 12：8 参照〕。しかし、この知識は単に書物を読んで得る知識ではなく、全能者から与えられる知識です。彼らは自らを鼓舞する明らかな法則を持ち、それによって自分が擁護する大義に関する知識を得ていました。自分が従う大義が真理であることを、彼らは神の啓示によって知りました。疑いを差し挟む余地のない方法で明らかにされ、それが真理であることを自分自身で知ったのです。そこで彼らは啓示という岩の上に……確立されました。³

ペテロは説教の中で、次のように言いました。「悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けらるであろう。この約束は、われらの主なる神の召しにあずかるすべての者、すな

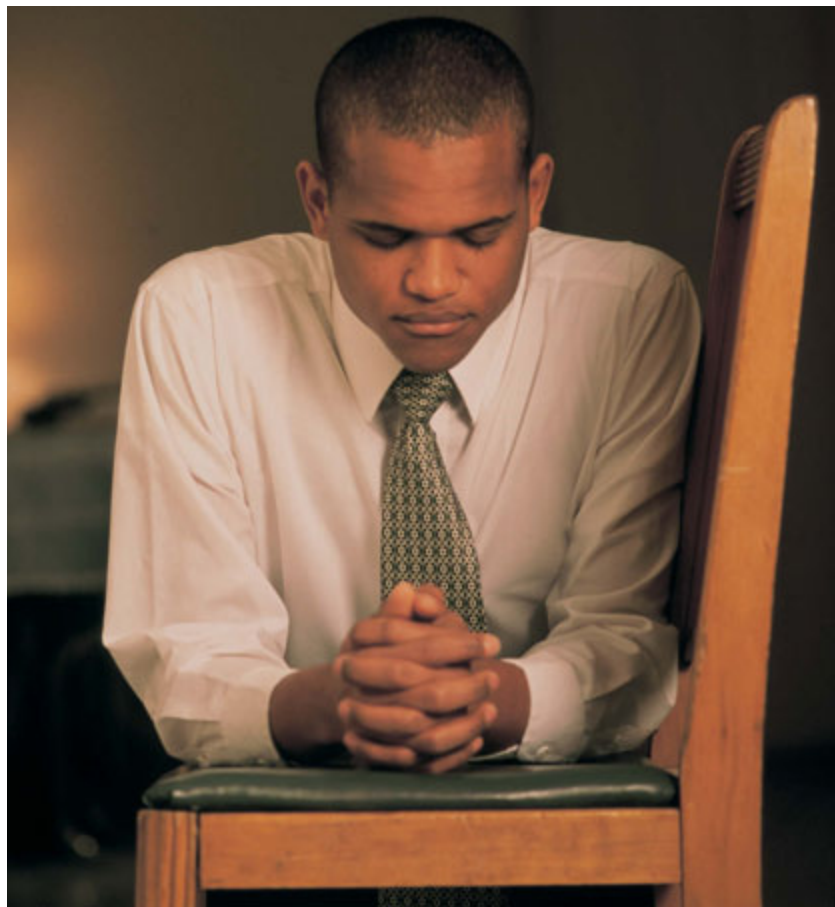
わちあなたがたと、あなたがたの子らと、遠くの者一同とに、与えられているものである。〕〔使徒 2：38 - 39〕この聖霊の賜物に関する原則は、教派社会が示したいかなるものとも異なっています。これは英知の原則であり、啓示の原則です。過去、現在、そしてこれから来るべきことを明らかにする原則です。ペテロの時代に明らかにされたように、また、今日末日聖徒イエス・キリスト教会の長老たちによって明らかにされたように、これら聖霊の賜物は、福音が要求する事柄に従順であることを通して授けられました。彼らが信仰の土台としたのはこの岩であり、これによって自分が擁護する教義に関する知識を得たのです。救い主はわたしたちに「地獄の門もこれらの者に打ち勝つことはない」と言われました〔3 ニーファイ 11：39 参照〕。……

……末日聖徒イエス・キリスト教会の土台は啓示の岩です。イエスは、この岩の上に教会を建てると言われ、黄泉の力もそれに打ち勝つことはできないと言われました〔マタイ 16：17 - 18 参照〕。わたしたちはこの知識を肉体を持つ人を通して受けたのではありません。この証は人から受けたのでもなく、聖書……やモルモン書を読んで得たのでもありません。神にかかわる事柄を教え、過去、現在、未来の事物を教える聖霊の働きを通して受けたのです。聖霊は神にかかわる事柄をはっきりとわたしたちに示してください。牢獄に入れても、どのような迫害を加えても、だれもこの知識をわたしたちから取り上げることはできません。わたしたちは命を捨ててもこれを守り通すのです。⁴〔71 ページの提案 2 参照〕

すべての末日聖徒は、友から受けるように聖霊から勧告を受けることができる

神と人の前で良心を清らかに保つ方法があります。それは、すべての男性、女性に与えられる啓示の霊である神の御霊を心に持つことです。神の御霊は、どんなに単純なことに關してでさえ、何をなすべきかを明らかにしてくれます。わたしたちは、御霊からの助言を理解できるようにこの御霊の本質を学ぶよう努めなければなりません。そうすると常に正しいことができるようになります。これは、すべての末日聖徒にとってこの上ない特権です。日々の暮らしの中で御霊の現れを受けることがわたしたちの権利であることをわたしたちは知っています。

様々な問題に対する助言をぜひ受けたいと人々がわたしのもとにやって来ます。しかし、いつもわたしのところに来る必要はないのです（もちろん事情によっては、わたしの助言を求めることがきわめて適切なこともあります）。それは、御霊が彼ら自身の内に宿っていて善をもたらし、神の目的を果たすことができるからです。……助言を得るためにいつも、大管長や十二使徒、あるいはイスラエルの長老のもとへ行く必要はありません。助けは彼ら自身の中にあり



「日々の暮らしの中で御霊の現れを受けることはわたしたちの権利です。」

ます。彼らに何を言うべきかを正確に知っている友がいるのです。福音を受け入れ、バプテスマの水に入り、その後聖霊の賜物を得るために^{あんしゆ}按手を受けたそのときから、間違っ^{あやまち}たことをして追いやってしまわないかぎり、わたしたちには友がいます。その友とは、聖なる御霊、つまり神にかかわる事柄を有しそれをわたしたちに示してくださる聖霊です。これは主がわたしたちのために備えてくださったすばらしい方法です。この方法によってわたしたちは光を知ることができ、いつまでも^{やみ}闇の中で^は這いずっていなくてもよくなります。⁵〔71 ページの提案 5 参照〕

聖霊はわたしたちに幸福と心の安らぎをもたらすことがおできになる

主はわたしたちの心の中に、ある種の願望と感情を備えてくださいました。それはすべての人、人類家族に共通のもので、喜びを得たいという欲求や喜びを感じる能力、特定の事柄を望む思いが人の中に植え付けられ、組み込まれています。それは、わたしたちの平安と幸福を増すために元来人に与えられているもので、自身の感情を満足させ、幸福感を高めてくれます。しかし、どのようにすればそれらの能力や欲求を満足させられるのか、この世は知識を持たず、理解していません。しかし、主は、わたしたちが忠実に、聖なる御霊の光の中を歩み、真理を受け入れることでこれらを理解できる環境、場所にわたしたちを置くことを良しとされました。⁶

福音に従った生活をし、神に認めていただいていると感じられることは、末日聖徒の特権です。もちろん時には、考えてみると恥ずかしくなるようなことをすることもあります。しかし、心から悔い改め、二度としないと決心します。主がわたしたちに求めておられるのはただそれだけです。そのような生活を送っている男性、女性は罪の宣告を受けることはありません。聖霊にあって義と喜びを得ているのです。⁷

心の中に御霊の光を保ち続けられれば、福音に従って歩むことができ、この世において自分で認識できるほどに平安と幸福を享受することができます。前に向かって進むその道すがら、ずっと先にある平安と幸福を得ようと努力するとき、わたしたちは、聖なる御霊に満たされた人だけが得られる心の安らぎを得るのです。⁸〔71ページの提案3参照〕

試練を耐え、義務を果たし、日の栄えの栄光に備えるために、 聖霊の助けが必要となる

わたしたちには多くの重要な事柄を果たすよう求められています。そして、主の御霊の助けがあるとき、時として成し遂げられないように思える多くのことをわたしたちは果たすことができます。⁹

わたしが兄弟、姉妹に思い起こしてほしいことは……知識や英知を得ようとするときに、わたしたちが神の御霊に依存しているということです。靈感、つまり啓示の霊は、わたしたちが適切に養うなら自らの内に宿るでしょう。その霊は、神の思いと御心みこころをわたしたちにはっきりと示し、わたしたちの義務と責任、そして、わたしたちに求められている事柄を教えてください。……わたしたちには助けが必要です。わたしたちは自らを苦しみや暗闇くらやみの中に誘い込んだり、自分の益にならない行動を取ったりしがちです。しかし、主が聖徒に約束された慰め主の助けを受けて、そのささやきに注意深く耳を傾け、語られる言葉の真

意を理解するなら、多くの苦しみと深刻な問題を避けることができるでしょう。¹⁰

わたしたちは靈感の霊に完全に頼っています。アダムがエデンの園で暮らすようになって以来、神の御霊が現代以上に必要とされた時代があったのでしょうか。わたしにはそのような時代があったという認識はありません。時のしるしが現れ、末日聖徒の心と誠実さが試される出来事が急速に迫りつつある今、わたしたちは神の御霊と神の助けを熱心に求めるよう命じられています。神の御霊の助けが必ず必要となる出来事がすぐにもやって来るからです。過去にわたしたちが神の助けを必要としていたことをわたしたちは知っています。過去に経験してきた多くの出来事を通して、神の御霊の導きを受けていなかったなら、わたしたちが現在抱いているような昇栄と栄光を待ち望む喜びを持つことなどなかったことは明らかです。また、わたしたちの環境も、今よりずっと好ましいものではなかったでしょう。わたしたちが過去に聖なる御霊を必要としていたのであれば、将来も御霊が必要となることは十分に理解できます。¹¹

地上での人生におけるわたしたちの務めは、たとえそれが神の栄光のためであっても、あるいは、自分自身の満足のためであっても、生まれながらに持っている英知だけを頼りにして果たすことはできません。そのことをわたしたちは理解すべきであり、また、多くの人が理解していることと思います。わたしたちを助け、わたしたちを取り巻く特殊な状況で何を成し遂げるべきかを折に触れて示す存在として、わたしたちは主の御霊に頼っています。¹²

人知を超えた〔天の〕力による支えがないかぎり、現代の末日聖徒に日の栄えの律法と神から出た律法に従うこと、さらには人を神のもとに引き上げる神の計画に従うことを期待するのは、まったく愚かなことです。福音が約束しているものはこれです。聖霊の賜物たまものを約束しています。神聖な特性を備えたこの賜物の恩恵にあずかるのは、末日聖徒以外だれもいません。この賜物が、これを持つ人々をあらゆる真理に導き、靈感を与え、イエスと御父に関する知識、また日の栄えの世界にかかわる事柄についての知識を与えるものであることを、わたしたちは救い主から教えられています。聖霊の賜物はこれから来るべきことと過去のことに関する知識を靈感によって与えます。また、わたしたちが異言の賜物や預言の賜物といった人知の及ばない賜物を享受し、按手によって病人を癒いよすことができるように靈感を与えます。

この福音を受け入れた人には、自分の宗教の真理を知るために、だれにも、またどのような人々にも頼らなくてもよいように、これらの人知を超えた力と賜物を受け、自分で知ることができるということが約束されました。知識は御父から受けるべきものです。この宗教と福音が御父から出たものであるという知識、御父の僕しもべがこれらの儀式を執り行う権利と権能を持っていたという知識を、神から受けるのです。そうすれば、どのような教えの風にも吹き回されることも、歩んでいた道から足を踏み外すこともありません。これから明らかにされ

る栄光に備え、栄光を享受する者となります。どのような試練や苦難をも堪え忍ぶことができます。日の栄えの栄光を受ける備えがさらによくできるよう、試練や苦難を受けることは神の御心なのです。暗闇ではなく、神の光と威勢の中で歩くことができ、この世の事物から引き上げられて周囲の事物より優れた存在となります。こうして日の栄えの世界の下で、神と天の目から見て自由な者として自分の力で歩み、知識と力を高められるように聖霊が印を付けてくださった道をたどることができるのです。こうして人は、神が授けると約束された栄光を受け、神が定められた昇栄を手にするのです。¹³

自分の人生が神に受け入れられていると分かる生き方をしなければなりません。聖なる御霊の声とささやきを理解しなければなりません。雲がなく空が晴れ渡っている日には、自分の周りに何があるかが分かり、その美しさと目的を発見します。同じように、真理と救いの原則に光を当ててくれる神の御霊にわたしたちは頼っているのです。このように生きないかぎり、神の導きを受けないかぎり、いくら末日聖徒であると公言したところで大きな幸福を得ることはできません。¹⁴ [71 ページの提案 4 参照]

謙虚に生きる時、聖霊はわたしたちが前進するのを助けてくださる

謙虚に、常に主の御霊を友として生きる決心をしてください。御霊は、あなたが置かれるかもしれない特殊な状況で必要となる導きを折に触れて示してくれます。……

……わたしがこれからどれくらい生きるのか、わたしにはまったく分かりませんが、心配はしていません。わたしが心から望むのは、また、それは皆さんも望むべきことですが、啓示の霊を享受できるように、これまで話した謙虚な心と柔和な心、そして純真さを身に付けることです。自分が何をすることが正しいのかを正確に知るために必要な啓示の霊を受けることは、皆さん一人一人の特権です。それは、明日になって、わたしがその日何をすることが教会全体にとっていちばん益となるかを知るために啓示の霊を受けることがわたしの特権であるのと同じです。¹⁵

わたしたちを悲しませ、悩ませるこの世の事柄をすべて忘れて思いをしっかり主に注ぎ、主の聖なる御霊を十分に受けるよう、できるかぎり熱心に努めなければなりません。そうするならば、前進するわたしたちの助けとなる知識と助言を受けることができるでしょう。¹⁶ [71 ページの提案 5 参照]

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。そのほかの提案については、v - vii ページを参照する。

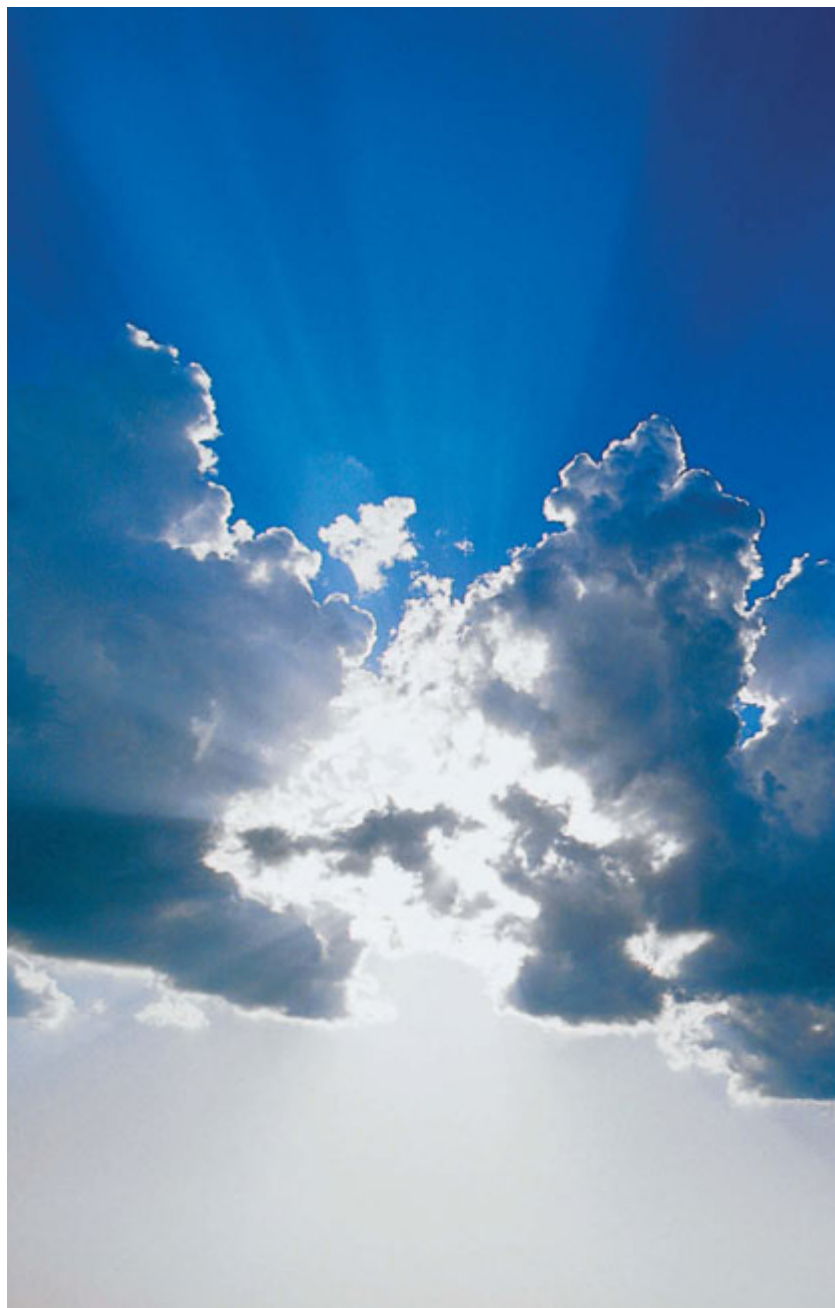
1. 63 - 65 ページの話を復習し、ほかの人が聖霊の促しに従ったことであなたが祝福を受けたときのことを思い出してください。また、あなた自身が促しに従ってほかの人を助けたときのことについて考えてください。
2. 65 ページから始まる項を読んでください。「啓示という岩の上に……確立され[る]」とはどのような意味だと思えますか。(65 - 66 ページにある幾つかの例を参照してください。) 個人の啓示はどのように「あらゆる困難のただ中に立ち、あらゆる敵に戦いを挑[む]」力をわたしたちに与えることができますか。
3. わたしたちが「この世において、……平安と幸福を享受することができ[る]」ように聖霊はお助けになるとスノー大管長は言っています(68 ページ)。あなたが幸福になり、平安を感じるように聖霊が助けてくださったのはいつでしたか。聖霊はほかにどのような方法でわたしたちを助けることができになりますか。(68 - 70 ページにある幾つかの例を参照してください。)
4. 68 ページから始まる項を研究するとき、どのように聖霊の促しに気づくようになったかについて考えてください。家族や友達^{みたま}が御霊の促しを認識することを学べるように、あなたはどのように助けることができますか。
5. 本章には聖霊が友であると2度書かれています(67と70 ページ)。聖霊を友とするために、謙虚な心と純真さが必要なのはなぜだと思いますか。

関連聖句 —— ルカ 12 : 12 ; ヨハネ 14 : 26 - 27 ; ローマ 14 : 17 ; 1 コリント 12 : 4 - 11 ; ガラテヤ 5 : 22 - 25 ; 1 ニューファイ 10 : 17 - 19 ; 2 ニューファイ 32 : 5

教える際のヒント —— 「話し合いを促すために、章の最後にある質問を利用する。……自分が教える人々のために特別に自分自身で質問を用意してもよい。」(本書 vi ページから)

注

1. Conference Report, 1898年10月, 2
2. エライザ・R・スノー・スミス, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow* (1884年), 276 - 279 参照
3. *Deseret News*, 1872年1月24日付, 597
4. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1879年12月2日付, 1
5. Conference Report, 1899年4月, 52
6. *Deseret News*, 1857年10月21日付, 259
7. *Deseret Weekly*, 1893年11月4日付, 609
8. *Deseret News*, 1857年10月21日付, 259
9. Conference Report, 1898年4月, 12
10. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1878年7月16日付, 1
11. *Deseret Semi-Weekly News*, 1889年6月4日付, 4
12. Conference Report, 1898年10月, 2
13. *Deseret News*, 1880年1月14日付, 786
14. *Millennial Star*, 1895年10月31日付, 690 - 691; 1895年10月の総大会におけるロレンゾ・スノーの説教の詳細な記録から
15. "Anniversary Exercises," *Deseret Evening News*, 1899年4月7日付, 9
16. *Millennial Star*, 1889年11月25日付, 737; 1889年10月の総大会におけるロレンゾ・スノーの説教の詳細な記録から



「神が御自身の息子娘に授けようとしておられる偉大なものについて語るのは
大きな喜びです。」



忠実な者のすばらしい行く末

「神が御自身の息子娘に授けようとしておられ、
忠実であればわたしたちが手に入れるであろう
偉大なものについて語るの大きな喜びです。」

ロレンゾ・スノーの生涯から

1840年春、ロレンゾ・スノーはイリノイ州ノーブーで、イングランドに伝道に行くための準備をしていた。彼は友人であるヘンリー・G・シャーウッドの家を訪ねて、シャーウッド兄弟に、ある聖句の説明を頼んだ。スノー大管長はそのときのことを後にこう語っている。「シャーウッド兄弟の説明にじっと聞き入っていたときに、主の御霊が力強くわたしに降り、理解の目が開けました。そして、非常に驚いたことに、神と人を結ぶ小道が真昼の太陽のようにはっきりと見えたのです。わたしはそのときに啓示で示されたことをそのまま表現して、以下の対句を作りました。……

「人が現在あるがごとくに神もかつてあり、
神が現在あられるごとくに人もなり得るのである。」¹

ロレンゾ・スノーは心して守らなければならない「神聖なメッセージ」を受けたと感じ、預言者ジョセフ・スミスがこの教義について教えたということが分かるまで、これについて公に教えることはなかった。² この教義が公になったことが分かっていたら、これについてよく証した。

スノー大管長はこの真理をテーマにした説教を数多く行っただけでなく、この真理を自分の生涯のテーマとした。息子のルロイはこう語っている。「明らかにされたこの真理にだれよりも感動したのはロレンゾ・スノー自身だったと思います。この真理は彼の心に深く刻み込まれ、その人生にとって靈感の源となりました。そして彼は、自分自身の偉大な未来と教会の力ある使命と業を広い視野に立って見ることができるようになったのです。」³ これはロレンゾにとって「常に光となり指針となり、いかなるときにも目の前を明るく照らす星となって、その心も魂も、その存在すべてをも貫くものとなりました。」⁴

本章でスノー大管長は、人は天の御父のような者になれるという教義を教え、第6章では、その教義をどのように生活に応用することができるかについて

て実践的な勧告を与えている。

ロレンゾ・スノーの教え

わたしたちは神の特質を秘めているのだから、
天の御父のような者になることができる

わたしたちは父なる神の姿形に生まれました。神は御自身にかたどってわたしたちをお造りになりました。わたしたちの霊の組織には神の性質が組み込まれています。わたしたちが霊的に誕生したとき、御父は御自身が持つておられる才能と力と能力をわたしたちに授けてくださいました。母親に抱かれた子供が、未発達ではあるものの、親の持つ才能や力、感覚を譲り受けているのと同じです。⁵

わたしたちが神の息子娘であること、無限の知恵と知識を得る能力を神から授かっていることを、わたしは信じています。なぜなら、神は御自身がお持ちの特質の一部をわたしたちに下さったのですから。わたしたちは神にかたどって造られたと言われています。人の魂には永遠の特質があることをわたしたちは知っています。この幕屋〔肉体〕には霊が宿まはっており、霊は、未熟な状態であろうとも神の特質を持ち、母親に養われる幼子おなごのように、進歩成長する力を内に秘めています。幼子は無知かもしれませんが可能性を持つており、子供から大人に成長する過程で様々な試練をくぐり抜けて成長し、無知のころから見れば驚くほどの完成の域に達するのです。⁶

わたしたちは神の特質を内に秘めています。永遠の特質を持つているのです。わたしたちの霊は不死不滅です。霊を滅ぼすことはできません。消滅させることもできません。わたしたちは永遠から永遠にわたって生きるのです。⁷

神が御自身の息子娘に授けようとしておられ、忠実であればわたしたちが手に入れるであろう偉大なものについて語るのは大きな喜びです。……この昇栄への道を歩むならば、主イエス・キリストの完全が与えられます。御父の前に立ち、御父の完全を受け、世々限りなく子孫が続くという喜びを味わい、この世で楽しんだ交流を同じように楽しみ、息子や娘たちとともに、夫と妻と一緒に、天で得られるあらゆる喜びに囲まれます。そして、救い主のように栄光ある肉体を受け、この世の病気やあらゆる苦しみから解放され、失望や悩みもなく、この世で払うつらい犠牲を払う必要もなくなるのです。⁸

天の御父はたゆまず進歩して昇栄と栄光を得られ、わたしたちにも同じ道を指し示しておられます。御父は力と権能と栄光をまとめておられるので、「あなたがたも来て、わたしが今得ている同じ栄光と幸福にあずかりなさい」と言われます。⁹



聖文を研究すると、人が持つ神のような特質について分かるようになる。

神の民は神の目に貴いものです。神の愛は常に彼らのうえにあり、彼らは神の勢力と力と愛情を受けて勝利を得、勝利者以上の者となります。彼らは神にかたどって造られた神の子であり、神の律法に従うことによって神のような者になるよう定められているのです。

……これこそまさに、勝利し、神の戒めに従い、神の清さにまで清められた神の息子たちの行く末です。彼らは神のような者となり、ありのままの御姿の神にまみえます。神の顔を見、神の栄光をもって神とともに治める、いかなる点においても神のような者になるのです。¹⁰ [81 ページの提案 1 参照]

神のような者になる可能性について、聖文から学ぶことができる

主はわたしたちの前に最大の原動力を用意しておられます。神がお与えになった啓示を見ると、この知識の道を進み、神の御霊に導かれる者がどのような存在になれるのかが分かります。わたしはこの教会に入った〔ばかりの〕ころ、人は神の御子の福音にたゆまず従うことによってどのような者になれるのかをはっきりと示されました。その知識は常にわたしの前に星として輝き、その知識のためにわたしは神にとって正しいこと、受け入れられることを行おうと細かい点にまで気を配りました。……日の栄えの世界のことについてすべて教わっているのに、この業が真実であることを知っただけで満足してしまう末日

聖徒がいるようです。わたしたちの偉大な行く末についてそのような人に言っても、彼らは驚いた様子を見せ、それは特に自分には関係ないことだと考えるのです。啓示者ヨハネは、ヨハネ第一の手紙第3章で次のように言っています。

「わたしたちは今や神の子である。」〔1ヨハネ3:2〕

……そして、こう続きます。

「しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである。

彼についてこの望みをいただいている者は皆、彼がきよくあられるように、自らをきよくする。」〔1ヨハネ3:2-3 参照〕

……神の御霊は、このような言葉の中に厳然たる真理が存在することを、わたしたちに教えてきました。パウロはピリピ人への言葉の中で、ある望みを育てるよう勧めました。この望みは、現代の人々には非常に奇妙に映りますが、末日聖徒にとっては奇妙なものではありません。神に関する知識において子供であることに満足しない人にとっては特にそうです。パウロは次のように言っています。

「キリスト・イエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。

キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わ〔れなかった。〕」〔ピリピ2:5-6〕

……これがパウロの教えたことでした。そして、パウロは自分が何について語っているか十分に理解していました。パウロは第三の天にまで上げられ、人間が語ってはならないことを聞いたと言っています〔2コリント12:1-7 参照〕。……ここにいる人にこのような望みを育てるよう勧めるのは間違ったことでしょうか。聖書、特に新約聖書には、主の御霊を持っていない人には奇妙に思える言葉がたくさん出てきます。

「勝利を得る者は、これらのものを受け継ぐであろう。」〔黙示21:7〕

これは何を意味しているのでしょうか。これを信じるのはどのような人でしょうか。父親が息子にこう言ったとしましょう。「息子よ、忠実でありなさい。わたしの勧めに従いなさい。そうすれば、時が来たらおまえにはわたしの持てるものをすべて譲ろう。」これは重要なことを意味しているのではないのでしょうか。父親の言葉がほんとうであれば、息子は喜んで忠実になるでしょう。イエスはこのように言って、わたしたちを欺こうとしたのでしょうか。この言葉に偽りはないとわたしは断言します。イエスはまさに、言葉どおりのことを言われたのです。イエスは重ねてこうおっしゃいました。

「勝利を得る者には、わたしと共にわたしの座につかせよう。それはちょうど、わたしが勝利を得てわたしの父と共にその御座みざについたのと同様である。」〔黙示 3:21〕

これはすばらしい言葉です。この中に真実はあるでしょうか。すべて真実です。全能の主がこれを言われたのです。使徒パウロは聖文でこう言っています。

「わたしたちの住んでいる地上の幕屋がこわれると、神からいただく建物、すなわち天にある、人の手によらない永遠の家が備えてあることを、わたしたちは知っている。」〔2 コリント 5:1〕

わたしはこれを信じています。また、「〔イエスは〕わたしたちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じかたちに変えて下さるであろう」とパウロは言っていますが〔ピリピ 3:21〕、これについてもわたしは信じています。わたしが言っているこれらのことを末日聖徒は信じているのではないのでしょうか。もちろん信じているはずです。主はまたこう言っておられます。

「わたしの僕たちしもべを受け入れる者は、わたしを受け入れるからである。

また、わたしを受け入れる者は、わたしの父を受け入れる。

そして、わたしの父を受け入れる者は、わたしの父の王国を受けるのである。それゆえ、わたしの父が持つておられるすべてが、彼に与えられるであろう。」〔教義と聖約 84:36 - 38〕

与えられ得るものとして、これ以上のものを考えられる人がいるでしょうか。……パウロはこれらのことを非常によく理解していました。なぜなら「目標を目ざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めている」と言っているからです〔ピリピ 3:14 参照〕。

わたしが語った言葉から、この「上に召して下さるキリスト・イエスの召し」が何なのか理解することができるかもしれません。

……これらの事柄の知識を実際に持っている人がここにどれほどいるのかわたしには分かりません。この知識を持っている人には、それがどのような影響を及ぼすのか話しましょう。ヨハネはこう言っています。

「彼についてこの望みをいだいている者は皆、神がきよくあられるように、自らをきよくする。」〔1 ヨハネ 3:3 参照〕

……神はこの栄光と昇栄への道を進むとどうなるのかを示しておられ、約束は確かです。主は、御自分におできになることを正確に知っておられました。何を用いればよいのかを知っておられ、御自分の言われたことをよく理解しておられたのです。主から任されたことをわたしたちが行って第二の位を保つならば、これらの約束はことごとく実現し、わたしたちの理解を超えた祝福が注がれることでしょう。¹¹〔81 ページの提案 2 参照〕



使徒パウロは手紙の中で、人には天の御父やイエス・キリストのような者になる可能性があることを証している。

主がわたしたちのために用意しておられる祝福を思うと、
人生の煩いや悩みの中であって、喜びを見いだすことができる

わたしの声を聞いている末日聖徒は皆、第一の復活の朝に出て来て栄光を受け、神の前に昇栄し、地上の父親と話すように天の御父と話すという特権にあずかる可能性を持っています。¹²

聖徒たちの前に置かれた可能性ほど輝かしいものはほかにありません。死すべき人間には、これ以上偉大なものや、究極的にこれほど申し分のないものを望むことはできません。完全な平安と幸福、栄光、昇栄にかかわるものがすべて末日聖徒の前にあるのです。このすばらしい可能性の意味をよくかみ締め、常に心に留めておくべきです。主の前に受け入れられないことを行ってこの可能性をほんの少しでも狭めるべきではありません。¹³

将来の生活について、わたしの望みは非常に大きく輝いています。この明るい望みを持ち続けられるようわたしは努めています。これはすべての末日聖徒

の特権であり、義務なのです。¹⁴

福音の中でわたしたちに用意されている祝福と特権を、わたしたち皆が完全に理解しているわけではありません。わたしたちは永遠の世で何が待ち受けているのかを完全には理解していませんし、目で見ることができません、ましてや、この世でどのようなことが今後起きて平安と幸福が増し加わり、心の望みがこたえられることになるのかは分からないのです。……

わたしたちは、多くの煩い事の中であって大切なことを忘れてしまいがちです。そして、目に見えるわけではないため、福音が栄光と栄誉と昇栄に導き、幸福と平安と栄光をもたらすものを人に与えてくれることをわたしたちは理解していません。わたしたちは人生の煩いや悩みの中でこれらのことを忘れてしまいがちで、常に平安をもたらす福音を求めることがわたしたちの特権であり、主はわたしたちがその特権を行使できるようにしてくださっていることを十分に理解していません。……

悲しむ理由がどこにあるでしょうか。浮かぬ顔をする理由が聖徒たちにあるでしょうか。泣いたり不満を言ったりする理由がどこにあるでしょうか。どこにもありません。しかし、わたしたちの前には生と死があります。続けて忠実であれば、公国と力はわたしたちのものですが、福音に心を留めなければ、悲しみが訪れ、追放されます。

わたしたちの宗教に含まれていること以上にどんなことを望めるでしょうか。岩の上しっかりと立ち、胸に宿る御霊みたまに従うならば、わたしたちは義務の道を正しく歩み、自分に託された人々と正しく接し、光の中だろうと暗闇の中だろうと正しいことを行うのです。

わたしたちが受けた福音に含まれる可能性を無視したり捨てたりする人間がどこにいるでしょうか。この中には充足感があり、喜びがあり、安定があり、足を休める場所があり、その上に築くべき確かな基、求められたものをささげる確かな基があるのです。¹⁵

決して自分の可能性を狭めてはなりません。昼に夜に、自分の可能性を新たに見いだそうではありませんか。そのようにすれば、必ずわたしたちは日ごと、年ごとに驚くべき成長を遂げることでしょう。¹⁶

わたしたちは皆、日の栄えの栄光を目指しています。わたしたちには壮大な可能性が開けていて、人間の言葉でそれを表現することはできません。携わっている業に忠実であり続ければ、あなたはこの栄光を得るでしょう。そして、神と小羊の前でとこしえの喜びを得るのです。これは努力する価値のある目標、犠牲を払う価値のある目標であり、これを得ることを目指す男女は幸いです。¹⁷
〔81 ページの提案 3 参照〕

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。そのほかの提案については、v - vii ページを参照する。

1. ロレンゾ・スノー大管長は、わたしたちが神の子供であることを頻繁に教えました（75 - 76 ページ）。この真理は自分自身やほかの人に対する感じ方にどのような影響を与えるでしょうか。どのようにしたら、自分が神の息子娘であることを心に留めるよう子供や青少年を導くことができるでしょうか。
2. 人には神になる可能性があることを教えるためにスノー大管長が引用した聖句について、あなたはどのように考えますか（76 - 78 ページ参照）。
3. 79 ページから始まる項を読んでください。「人生の煩いや悩み」のためにわたしたちが福音の永遠の祝福を忘れてしまうのはなぜでしょうか。自分の可能性を「新たに見いだし」、「常に心に留めておく」ために、わたしたちにはどのようなことができるでしょうか。自分の行く末を心に留めることによって、わたしたちの生き方はどのように変わるでしょうか。
4. あなたは本章を研究して、天の御父についてどのようなことを学びましたか。神の娘または息子としての自分の行く末について、あなたはどのようなことを学んだでしょうか。

関連聖句——ローマ 8 : 16 - 17 ; 1 コリント 2 : 9 - 10 ; アルマ 5 : 15 - 16 ;
モロナイ 7 : 48 ; 教義と聖約 58 : 3 - 4 ; 78 : 17 - 22 ; 132 : 19 - 24

教える際のヒント——「レッスンの最後だけでなく、御霊^{みたま}に促されたときはいつでも証^{あかし}をする。また、生徒にも証を述べる機会を与える。」（『教師、その大いなる召し』 45）

注

1. エライザ・R・スノー・スミス、*Biography and Family Record of Lorenzo Snow* (1884 年)、46 : "The Grand Destiny of Man," *Deseret Evening News*, 1901 年 7 月 20 日付、22 も参照
2. *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 46 - 47 参照 : "Glory Awaiting the Saints," *Deseret Semi-Weekly News*, 1894 年 10 月 30 日付、1
3. ルロイ・C・スノー、"Devotion to a Divine Inspiration," *Improvement Era*, 1919 年 6 月号、656
4. ルロイ・C・スノー、"Devotion to a Divine Inspiration," 661
5. *Deseret News*, 1872 年 1 月 24 日付、597
6. Conference Report, 1898 年 4 月、63
7. "Anniversary Exercises," *Deseret Evening News*, 1899 年 4 月 7 日付、10
8. *Millennial Star*, 1899 年 8 月 24 日付、530
9. *Deseret News*, 1857 年 10 月 21 日付、259
10. *Deseret Semi-Weekly News*, 1898 年 10 月 4 日付、1
11. "Glory Awaiting the Saints," 1
12. Conference Report, 1900 年 10 月、4
13. Conference Report, 1898 年 10 月、3

第5章

14. Conference Report, 1900年10月, 4

15. *Deseret News*, 1857年10月21日付, 259

16. Conference Report, 1899年4月, 2

17. "Prest. Snow to Relief Societies," *Deseret Evening News*, 1901年7月9日付, 1



山上の垂訓で救い主はこう言われた。「それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」(マタイ 5:48)



主の前に完全になる — 「日々少しずつ良くなる」

「一度に完全になれると思っはなりません。
そんな期待をしたら、失望するでしょう。今日は昨日より
良くなり、明日は今日よりも良くなるようにしなさい。」

ロレンゾ・スノーの生涯から

あるとき、スノー大管長が出席していた神権会で、各長老定員会の代表が
立って定員会の働きについて報告していた。青年たちの報告を聞きながら、ス
ノー大管長はずっと昔の自分のことを思い出していた。彼は立ち上がると、次
のように言った。

「もし良ければ、皆さんが決して忘れないだろうことを申し上げます。恐らく
忘れないように話すことができますと思います。」

若い長老たちの集まりや、実際には、中年の長老たちの集まりでも必ずと
言っているほど見られるのですが、聴衆の前で話すことを嫌がるような傾向が
あります。その傾向は、今朝この場で立って意見を述べ、自分たちのしてきたこ
とについて報告した若者たちの中にも見られました。

わたしの経験を少し話しましょう。恐らく的外れな話ではないと思います。
長老にすらなっていないころに初めて人前で話したときのことで、証するよ
う初めて言われたとき……それはわたしにとって非常に恐ろしいことでした
が、同時に、立ち上がって証することは自分の義務だとも思いました。しかし、
わたしは躊躇しました。一人が証を述べ、一人、また一人と証を述べていきま
した。そこにいたほとんどの人の証が終わっても、わたしはまだ恐ろしくて立ち
上がることができませんでした。聴衆の前で話したことが一度もなかったのだ
です。……〔ついに〕わたしは、自分の番が来たと判断し、立ち上がりました。さ
て、どのくらい話したと思いますか。30秒ほどだったと思います。1分以上話
したとは思えません。これがわたしの初めての試みでした。そして、2度目の
試みも同じようなものだったと思います。わたしは恥ずかしがり屋でした……
が、固く、固く決心しました。このような義務やそのほかの義務を果たすよう言
われたら、どのような結果になろうとも必ずそれを果たそうと。これは、わたし

がイスラエルの長老として成功するための基の一つとなりました。]

スノー大管長はこの経験から程なくして専任宣教師として最初の集会を開いたことを青年たちに話した。そのときのことを思い出してこう語ったのである。「あれほど恐ろしく思えた集会はありませんでした。一日中祈りました。一人で行って主に祈り求めたのです。あの証会以外、それまで〔人前で〕話したことはありませんでした。怖かったのです。そのときのわたしほど物事を怖がる人はまずいないだろうと思います。人が集まり始め、部屋はいっぱいになりました。……わたしは話し始めました。45分くらい話したと思います。』¹ 同じ集会について、スノー大管長は別の記録にこう記している。「集まった人々の前に立ったとき、何を話せばいいのか、わたしには皆目分かりませんでした。にもかかわらず、口を開いて話し始めるやいなや聖霊が力強く降られ、わたしは光に満たされました。そして、伝えるべき内容と、それを伝えるにふさわしい言葉で頭の中がいっぱいになったのです。人々はひどく驚き、また集会を開いてほしいと言ってきました。』²

スノー大管長は、自分の経験から学んでもらいたい教訓を青年たちに伝えた。「若い友人の皆さん、皆さんには偉大な人物になる機会があります。皆さんが望めば、そのような人物になれるのです。人生のスタートラインにあって、皆さんは非常に困難ではあるけれども不可能ではない事柄を達成しようと心に決めることができます。その望みを遂げようと努力して、最初は失敗するかもしれない。努力し続けても、成功とは言い難い状況に陥るかもしれません。しかし、誠実に努力するかぎり、そして皆さんの望みが義に基づいたものであるかぎり、心の望みを遂げようと努める過程で経験することは、必ず皆さんのためになります。失敗したとしても、失敗でさえも皆さんの益となるのです。』³

これは、スノー大管長が好んで話すテーマだった。スノー大管長はよく聖徒たちに、完全になるという主の戒めについて話し、本人の勤勉さと主の助けによって、必ずその戒めに従うことができると言った。こう教えている。「わたしたちは神が自分の御父であられることを心で感じなければなりません。間違いを犯したり、力が足りなかったりしても、できるかぎり完全になれるように努めれば、すべてはわたしたちの益となるでしょう。』⁴

ロレンゾ・スノーの教え

勤勉と忍耐と神の助けによって、わたしたちは完全になるという
主の戒めに従うことができる

「アブラムの九十九歳の時、主はアブラムに現れて言われた、『わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ。』」〔創世 17:1〕

これに関連して、救い主の山上の垂訓の言葉を一部引用します。マタイ第5章の最後の節です。

「それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」〔マタイ5:48〕……

主がアブラハムに現れて非常に偉大な約束をなされたことと、その約束を成就するために、アブラハムにある条件が課せられたことが分かります。〔アブラハムは〕主の前に完全な者とならなければなりません。救い主は弟子たちに同じ条件を課されました。弟子たちは主と天の御父が完全であられるように完全な者にならなければならなかったのです。これは末日聖徒の課題でもあるとわたしは考えています。そこで提案ですが、末日聖徒の皆さんに、わたしがこれから述べることをよく考えてみるよう勧めたいと思います。

主は末日聖徒に最高の祝福を与えようとしておられます。しかし、その祝福にあずかるためには、アブラハムのように準備をしなければなりません。この準備のため、わたしたちはアブラハムが主から受けたと同じ律法を受けており、それを守るよう求められています。わたしたちはまた、主の前に完成の域に達しなければなりません。その場合に主は、どの場合もそうですが、できないような要求をなさることはありません。神聖な命令に従うことができるよう、末日聖徒のために手段を用意しておられるのです。アブラハムにこの条件を課されたとき、主は、アブラハムが律法に従い、しかも条件も完全に満たすことのできる手段をお与えになりました。アブラハムには聖なる御霊みたまを受ける特権がありました。わたしたちが聞いているとおり、アブラハムは福音の教えを受けていたので、福音を通して神の助けを受けることができました。そのため神にかかわることを理解することができたのです。神の助けなしにそれを理解できる者はなく、神の助けなしに主の前に完成の域に達することのできる者はいません。

末日聖徒についても同じことが言えます。末日聖徒も、超自然的な〔天の〕助けなしにそのような道徳的、霊的に高いレベルに到達することはできません。またわたしたちは、いかなる状況にある末日聖徒もこの律法に一度に従うようになるとは思っていませんし、そんなことができるとも思いません。この戒めに従うには時間がかかりますし、かなりの忍耐が必要です。また、思いと心を律しなければなりません。努力しても最初はうまくいかないかもしれませんが、末日聖徒はひるまずに決意を貫き、この大変な条件を満たせるよう努力するべきです。アブラハムはこの神聖な律法に従って主の前を歩む信仰を持っていたにもかかわらず、非常に厳しい信仰の試練を何度も受けました。それでもひるまなかったのは、神の御心みこころに従うという決意を貫こうと努めたからです。

わたしたちは完全な者になるという律法を達成不可能だと考えがちです。完全な者になるなど難しすぎると考えてしまうのです。これはある意味で確か



主はアブラハムに命じられた。「あなたはわたしの前を歩み、全き者であれ。」(創世 17:1)

なのかもしれませんが、この律法が全能者から与えられた戒めであってないがしろにはできないという事実は依然として残ります。試練に遭ったら、それは主に力と理解力、知恵と恵みを求めるという偉大な特権を活用する時です。そうすることによって肉の弱さを克服することができます。肉の弱さとは常に戦わなければなりません。⁵ [93 ページの提案 1 と 2 参照]

主から求められることを行うとき、わたしたちはその点に関しては完全である

アブラハムは親族から離れ、国を離れるよう命じられました〔アブラハム 2: 1-6 参照〕。この命令に従わなければ、主から認められなかったことでしょう。しかしアブラハムは従いました。そして、国を離れたということは、確かに、完全な者になるという神聖な律法に従って生活していたのです。そうでなければ、決して全能者のこの命令に従うことはできなかったはずですが、父の家を離れ、その試練に身を任せるといことは、自分の良心に恥じることなく、神の御霊からも義とされる行いでした。アブラハムはこれを行うに当たって何の間違^{みたま}いも犯しませんでした。これほどよく神の命令に従うことのできる者はほかになかったと言えるでしょう。

世界中の国々で末日聖徒が福音を受け入れ、全能者の声が彼らに聞こえて、

アブラハムのように父の家を離れ、親族のもとを離れるよう命じられた場合、それに従うならば、完全な者になるという律法に従って歩んでいることとなります。この場合、その状況で、その行動の影響力が及ぶ範囲で、できるかぎり完全な者になっているのです。これは知識や力などが完璧だという意味ではありません。気持ちのうえで、誠実さの点で、動機と意志の強さの点で完全なのです。また、海を渡っているときに、与えられた勧告に文句も不平も言うことなく従い、いかなる点においてもふさわしく行動したのであれば、彼らは神から要求された完成の域に達していたこととなります。

わたしたちが永遠の世界で生まれた神の子孫であり、神の前に戻って御父の完全な栄光を得るという特別な目的のためにこの世に来ていることを、主は直接啓示によって知らせてくださいました。ですから、わたしたちは完全な者になるという律法を守る能力を願い求め、自分の動機や望み、考え、感情を清めて純粋で純聖なものにし、すべてのことについて自分の思いを主の御心に従わせ、御父の御心を行うこと以外にはどんな望みも持たないという状態になれるようにしなければなりません。これを願い求める人はその望みにおいて完全であり、何を行おうとどこへ行こうと神から祝福を受けます。

しかし、わたしたちは肉の弱さのために愚かなことをしてしまいます。それに、程度の差こそあれ無知ですから、間違いを犯しがちです。確かにそうなのですが、だからといって完全になるという神の戒めに従う資格がないと感じる必要はありません。特に、この業を成し遂げる手段が神から与えられていることを考えると、なおさらです。わたしはこれこそが、救い主であり主である御方がアブラハムに言われた、完全な者になるという意味だと理解しています。

人はある点では完全であっても、別の点では完全でない場合があります。知恵の言葉に忠実に従っている人は、その律法に関しては完全です。わたしたちが罪を悔い改め、その赦しのためにバプテスマを受けたならば、その点についてわたしたちは完全です。⁶ [93 ページの提案3 参照]

失敗してもひるまず、悔い改めてさらに良くなれるよう 神に力を求めることができる

さて、わたしたちは使徒ヨハネから次のように言われています。「わたしたちは……神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである。彼についてこの望みをいだいている者は皆、彼、つまりキリストがきよくあられるように、自らをきよくする。」「[1ヨハネ3:2-3 参照] 末日聖徒は、このような完成の域に達することを望んでいます。御父であり神である御方のような者、神の前に住むにふさわしい神の子

供になりたいと望んでいるのです。神の御子が御姿を現されるときには自分の肉体が更新されて栄光を受け、「この卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じかたちに変えて下さる」と信じているのです〔ピリピ3:21 参照〕。

これがわたしたちの望みです。では、ここにいるすべての皆さん、次のように自問してみましょう。これらの望みに十分な根拠はあるのでしょうか。言い換えれば、わたしたちは自分を清めようとしているのでしょうか。自分を神の清さにまで清め、神に対しても人に対しても良心に責められることのないように日々の生活で努めていないとしたら、末日聖徒は義とされていると自負することができますでしょうか。確かにわたしたちの多くは、毎日、毎週、毎月、神の前に罪の宣告を受けることなくふさわしい行いをし、神の御霊みたまから日々歩むべき道を教えてもらえるよう熱心に謙遜けんそんの限りを尽くして祈り求めています。しかしそれでも、人生のどこかで大きな試練に遭い、打ち負かされてしまうことが一度や二度はあるかもしれません。たとえそのようなことがあったとしても、再度試みてはならないということはないのです。力と決意を倍加して、わたしたちの目標を達成しようではありませんか。⁷

主は地に住む神の子供たちに慈悲を示そうとおられますが、罪を犯したり、義務を果たさなかったりした場合には、心からの悔い改めをお求めになります。神の子供たちが従順になり、すべての罪を捨て、自らを清めてまさに主の民、主の聖徒になれるよう努めて主の前に行く用意ができ、あらゆる点で主に似た者となり、主の栄光の中で主とともに治めるようになることを望んでおられるのです。これを成し遂げるためには、細くて狭い道を歩み、自分の生活をさらに輝かしく良いものにしていき、信仰に満たされ、キリストの純粋な愛である慈愛に満ちるようになって、福音のすべての義務を忠実に果たすようにならなければなりません。⁸

アブラハムの生涯や、ほかの偉大な清い人々の生涯を細かく読むことができたとしたら、義にかなった者になろうと努力しても、必ずしもうまくいくときばかりではないことがきっと分かるでしょう。ですから、たとえ気が緩んで打ち負かされたとしても落胆すべきではないのです。反対に、誤りや間違いを犯した場合にはすぐに悔い改めのできるかぎり償い、そして新たな力を神に祈り求めて前進し、さらに善い行いをしてください。

アブラハムは父親の家を離れてから、日々神の前を完全な者として歩むことができました。自分の牧者と、おいであるロトの牧者との間で争いが起こったときに、治める者としての風格と自制心を示して解決策を示したのです〔創世13:1-9 参照〕。しかし、アブラハムの人生に、とてつもない試練の時がありました。実際、これほどつらい試練はほかに考えつきません。それは、愛する独り子を犠牲としてささげるよう主から命じられたときのことです。主の偉大な約束の成就だと思っていた独り子のイサクです。しかし、アブラハムはふ

さわしい態度を示してこの試練を乗り越え、神に対して信仰を持っていることと、誠実であることを証明しました〔創世 22：1－14 参照〕。アブラハムが偶像礼拝の親からこのような精神を譲り受けたとはとうてい考えられませんが、わたしたちと同じように肉との戦いを経て、神の祝福の下で獲得できたと考えることはできます。戦いの過程で時に打ち負かされたこともあったに違いありません。しかし、克服し続けました。その結果、これほど厳しい試練に立ち向かえるようにまでなったのです。

使徒パウロはこう言っています。「キリスト・イエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互^{たがい}に生かしなさい。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わ〔なかった。〕」〔ピリピ 2：5－6 参照〕そうである以上、完全な者になるという目標を持つ人はだれでも、神のごとくに自分を清め、神の前に完全な者として歩もうとすることでしょう。少々愚かな行動や弱さがあるにしても、できるかぎり早くそれらを克服するよう努めるべきです。そして、子供たちにもそのような気持ちを心に植え付けて神に対する畏怖の念がごく幼いころから育つようにし、あらゆる状況において主の前にふさわしい行いができるように育てるべきなのです。

夫が妻とけんかをせず、だれに対しても不親切な対応をすることがなく、いかなる点でも神の御霊を悲しませるようなことのないまま一日過ごすことができたとしたら、それはすばらしいことです。その一日は完全でした。次の日もそのように過ごしてみましょう。次の日にできない点があったとしても、3日目はうまくいくかもしれません。……

末日聖徒は昔の使徒たちが明確に示したこの望みを絶えずはぐくんでいくべきです。だれに対しても良心に責められることなく歩めるよう、日々努めるべきなのです。それに、神はわたしたちが助けを受けられるよう、教会の中に手段を備えておられます。それはつまり、使徒や預言者、伝道者であり、「聖徒たちをととのえ〔る〕ため」です〔エペソ 4：11－12 参照〕。また、主はわたしたちに聖なる御霊を与えてくださっています。御霊は神の天使に似た、間違いない導き手であり道しるべであって、傍らにいてわたしたちにすべきことを教え、わたしたちを力づけ、難しい状況に陥ったときには助けてくれます。自分の弱点が見つかる度に意気消沈してはなりません。古今の預言者の輝かしい模範をくまなく調べてみても、悪しき者に打ち負かされて意気消沈した例はまず見ることはできません。逆に彼らは、悪しき者の影響力に打ち勝とうと常に努め、褒美を得て完全な栄光を得られるよう常に努力していました。⁹〔93 ページの提案 4 参照〕



わたしたちは、家族関係を良くするために日々努力しなければならない。

神の助けによって、この世の愚かしさや虚栄に 惑わされずに生きることができる

自分は福音を受け入れたのだから、激情や欲望に打ち勝ち、あらゆることにおいて自分の思いを天の御父の御心みこころに従わせることができる、家族や親交のある人を不快にするようなことをせず、地上に小さな天国を作るために大いに働くことができると確かに思えるようになったとき、わたしたちは戦いに半分勝利したと言えるのかもしれません。多くの人が悩む大きな問題の一つは、自分が召された聖なる召しはおろか、人生の大きな目標も、天の御父が自分を死すべき状態でこの世に送ってくださった理由も忘れてしまいがちだということです。そのためわたしたちは、つかの間の物事に心を奪われて、この世的な生活に埋没してしまうことがあまりにも多いのです。神が用意された聖なる助けに頼る以外にこれを克服できる方法はないのですが、それに頼るといことがありません。天の御父が完全であられるように完全な者になろうという気持ちを育てていかないとしたら、わたしたちは世の人々と何ら変わりがないのです。

これは古い時代の聖徒たちへの救い主の勧告です。わたしたちと同じような望みを持ち、わたしたちと同じような誘惑に遭った人々です。そして主は、彼らがその勧告に従えるかどうか御存じでした。主は成し遂げられないことを御自分の子供たちにお命じになったことはなく、これからもないでしょう。曲がったよこしまな時代の人々の真っただ中で、悪と腐敗に満ちた人々に救いの福音

を宣べ伝えるために世に出て行こうとしているイスラエルの長老たちは、特にこの気持ちをはぐくむべきです。そして彼らだけでなく、聖徒と呼ばれるにふさわしいこの教会に所属するすべての人、すべての若い男女は、この勧告に従って生活するという望みをはぐくみ、神の前に澄んだ良心を持てるようにする必要があります。この目標を視野に入れるのは、若者にとっても年長者にとっても非常に良いことです。特に教会の若人が神の光と英知で顔が輝くような道を選び、人生を正しく理解し、世の愚かしさや虚栄、人の間違った考えや悪に惑わされずに生きる力を備えているのを見るとうれしくなります。¹⁰

末日聖徒はこの世のことを煩う必要がありません。この世のものはすべて過ぎ去るのです。わたしたちは心を天に向けるべきです。あらゆることにおいて御父に完全に従われ、大いなる昇栄を受けて兄弟たちの模範となられたキリスト・イエスの完全さを目指して努力する必要があります。わたしたちにはこのように偉大で輝かしい行く末があるというのに、なぜ、この世的な物事に煩い、悩まなければならないのでしょうか。揺るがぬ心で主に対する信仰を持ち続け、主の戒めを守り、主の完全さを手本として、天にある主の王国で永遠に生きることが現実になるよう努めるならば、すべてのことはわたしたちの益となり、わたしたちは打ち勝って、最終的には勝利を得るでしょう。¹¹

あなたのすることなすことすべてについて、永遠へと続く生活を築いているのだという意識を持ちなさい。天では恥ずかしくて従えないような原則に従って行動してはなりません。日の栄えの光に照らされた良心が認めないものを入るために、どのような策も講じてはなりません。気持ちや感情があなたを行動に駆り立てたとしても、純粋で称賛に値する神聖で徳高い原則に常に従いなさい。¹²

一度に完全になることはできないが、日々少しずつ良くなることはできる

子供は赤ん坊から着実に成長して少年になり、少年から大人になりますが、どのようにして成長するのか、いつ成長しているのか自分では分かりません。自分の成長に気づかなくとも、健康の律法に従い、賢明に振る舞うことによって、やがて大人になります。わたしたち末日聖徒についても同じです。わたしたちは成長し、力を増していきます。今はそれが分からなくても、1年くらいたってみると、いわば丘を登り、頂上に近づいていることが分かるのです。わたしたちは主を信じる信仰を持ち、いつも神の摂理にあずかっていると感じています。わたしたちは主に結ばれており、主は確かにわたしたちの御父であって、わたしたちの人生を導いておられるのです。¹³

一度に完全になれると思っはなりません。そんな期待をしたら、失望するでしょう。今日は昨日より良くなり、明日は今日よりも良くなるようにしなさい。

今日、何らかの誘惑に少し負けたのなら、明日はそれ以上負けないようにしようではありませんか。このようにして、日々少しずつ良くなっていくのです。そして、自分のもとより、ほかの人にも善を成し遂げることはないまま人生が終わってしまうことのないようにしましょう。¹⁴

今日がいちばん良い日になるよう、今週がいちばん良い週になるようにすべきです。知識と知恵において、善を成し遂げる能力において、毎日少しずつ成長するのです。年を重ねるにつれ、日々主に近づくようにすべきです。¹⁵ [93ページの提案5参照]

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。そのほかの提案については、v - vii ページを参照する。

1. スノー大管長は、完全な者になるという戒めが守れるのかと不安になる人がいることを承知しています(85 - 87 ページ)。本章を研究して、完全な者になるという戒めが守れるのか悩んでいる人にとって慰めになるような勧告を探してください。
2. 85 ページから始まる項に出てくる「超自然的な助け」という言葉は、主の助けのことを指しています。わたしたちが完全な者になれるよう、主はどのような方法で助けてくださるでしょうか。
3. 87 - 88 ページを読んで、アブラハムと初期の末日聖徒に関するスノー大管長の見解についてよく考えてください。「その行動の影響力が及ぶ範囲で」完全になるとはどういう意味だと思いますか。「気持ちのうえで、誠実さの点で、動機と意志の強さの点で」さらに完全になるために、わたしたちにはどのようなことができるか、深く考えてください。
4. スノー大管長は「自分の弱点が見つかる度に意気消沈してはならない」と言っています(90 ページ)。どうしたら意気消沈しないようにすることができるでしょうか(幾つかの例については、88 - 90 ページを参照)。
5. 「一度に完全になれると思 [う]」べきではないということが分かると、あなたの思いや行動はどのように変わりますか(92 - 93 ページ参照)。「日々少しずつ良くなる」ようにというスノー大管長の勧告に従うことができるよう、具体的な方法を考えましょう。
6. 本章の中で、心に特に響く言葉を一つか二つ探してください。その言葉のどこが気に入っていますか。

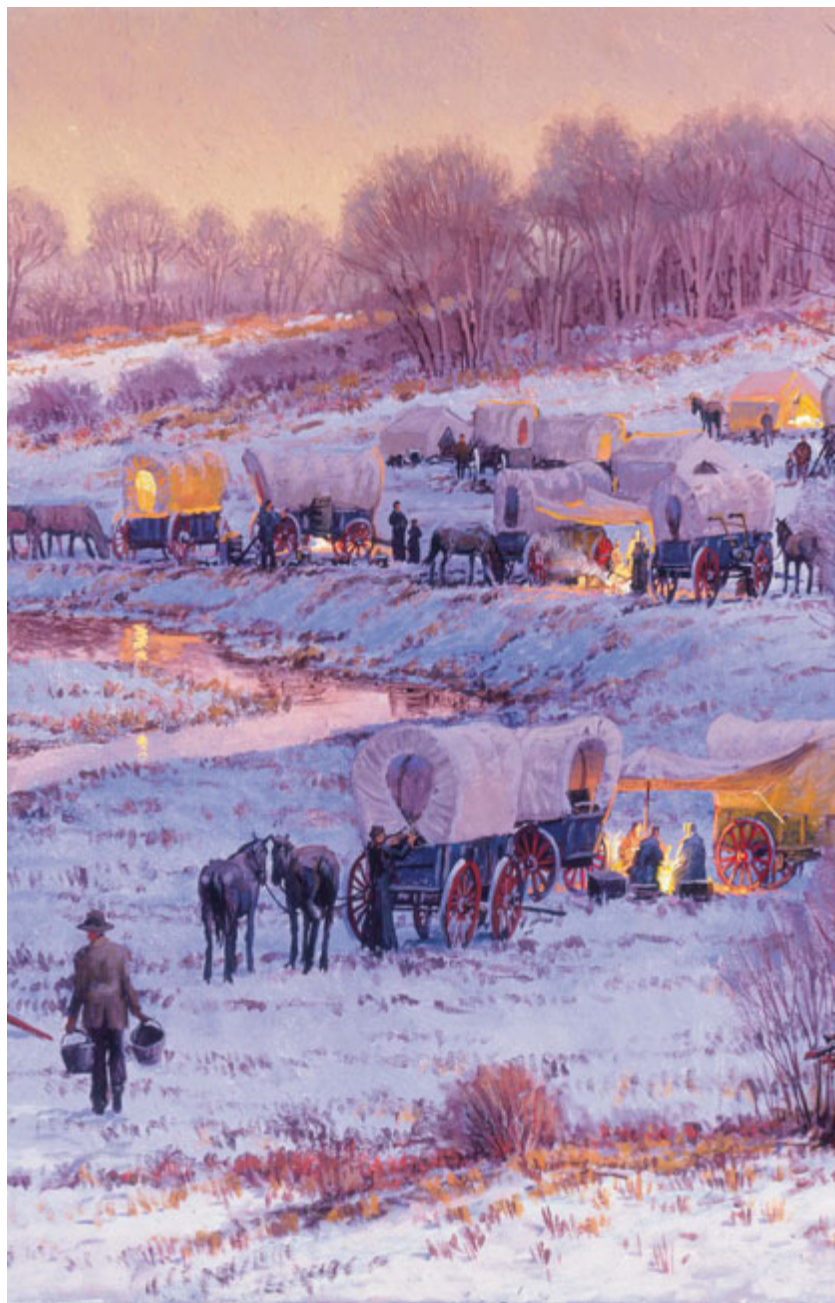
関連聖句 —— 1 ニーファイ 3 : 7 ; 3 ニーファイ 12 : 48 ; エテル 12 : 27 ; モロナ

イ 10 : 32 - 33 ; 教義と聖約 64 : 32 - 34 ; 67 : 13 ; 76 : 69 - 70

教える際のヒント——「人は自分の貢献が認められるとうれしいものである。個人の意見に対しては特別な努力を払って認めるようにし、可能であれば、その意見に基づいて話し合いをする。」(『教師、その大いなる召し』 35)

注

1. "Anniversary Exercises," *Deseret Evening News*, 1899年4月7日付, 9
2. エライザ・R・スノー・スミス, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow* (1884年), 16
3. "Anniversary Exercises," 9
4. "Impressive Funeral Services," *Woman's Exponent*, 1901年10月号, 36
5. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1879年6月3日付, 1
6. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1879年6月3日付, 1
7. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1879年6月3日付, 1
8. *Deseret Semi-Weekly News*, 1898年10月4日付, 1
9. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1879年6月3日付, 1
10. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1879年6月3日付, 1
11. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1898年10月4日付, 1
12. *Millennial Star*, 1851年12月1日付, 363
13. Conference Report, 1899年4月, 2
14. *Improvement Era*, 1901年7月号, 714
15. *Improvement Era*, 1899年7月号, 709



末日聖徒はイリノイ州ノーブーの自宅を強制退去させられたが、
その多くは苦難の中でも喜びを見いだした。



試練のときの忠実さ— くらやみ 「暗闇から輝かしい日の光へ」

「どんなに忠実であっても、主に仕えるあらゆる男女には苦難の時があります。しかし、忠実であれば、いつか光があふれるように注がれ、安らぎが与えられます。」

ロレンゾ・スノーの生涯から

1846年2月、末日聖徒はイリノイ州ノーブーの自宅を強制退去させられた。彼らは新たな約束の地、西部への旅の準備を整えると、ブリガム・ヤングの勧めに従って、行く先々に居留地を建設した。仮小屋に住み、後から来る聖徒たちのために穀物を植えたのである。ロレンゾ・スノーとその家族はガーデングローブというアイオワ州の居留地に短期間滞在した後、聖徒たちからマウントピスガと呼ばれる、同じアイオワ州の土地に移った。この居留地は、預言者モーセが民の約束の地を見下ろした山にちなんで名付けられた。

マウントピスガに着いて数か月後、ロレンゾはその居留地を管理する責任に召された。ロレンゾは後にこう記録している。「このときピスガの聖徒たちは食糧や衣服だけでなく、旅を続けるための牛馬や荷車にも事欠く状態に追い込まれていました。生活必需品が完全になくなり、隣人の慈悲に頼らなければならない家族も何家族かありました。しかし、たいいていの場合、慈悲を施せるほどの用意は隣人にもありませんでした。そのうえ、病が居留地を襲ったのです。看病できる健康な人は少なく、病人たちは次々に死んでいきました。父親、母親、子供、兄弟、姉妹、愛する友が病魔のえじきとなり、葬儀らしきこともせずに土に埋められました。まともな埋葬衣さえ着せられない死者もいました。こうして、窮乏生活に悲しみと嘆きが追い打ちをかけたのです。」

ロレンゾは、これらの試練を直接知っていた。自身も家族も病氣、落胆、心痛を経験したのである。生まれたばかりの娘レオノーラも亡くしている。ロレンゾはこう書いた。「小さなレオノーラは病氣にかかって亡くなりました。深い悲しみの中でわたしたちはなきがらを運び、墓に葬りました。そして、この子を一人残して、父も、この子を産んだ母も、遠くへと旅立ったのです。」

このような状況にあっても、ロレンゾは聖徒たちが信仰をもって試練に立ち

向かえるよう助けた。姉のエライザは次のように書いている。「ロレンゾは現実的な解決策を幾つも考え、決して失意に屈することのない確固とした目的をもって猛然と努力し、普通の人なら恐ろしくて縮み上がるような非常事態に自分が対処できることを証明したのです。」ロレンゾは男性を作業班に分けた。幾つかの班は近くの町に行き、食糧や衣類を買う資金を稼いだ。ほかの班は宿営地に残ってそこに在る家族の世話をし、穀物を植え、近隣の居留地で使えるような物品の製作や修理を行った。

ロレンゾは聖徒たちに対して協力して働くよう指導しただけでなく、自分たちの霊を養い、健全な娯楽を楽しむようにも勧めた。ロレンゾは次のように言っている。「長い冬の間、わたしはピスガの聖徒たちの士気を高め、激励するため、居留地内の各地で礼拝と宗教的な行事を始めただけでなく、種々の適切な娯楽を奨励し、それに必要なものを用意しました。……

例として、その中の一つについて説明しましょう。小さな我が家を集められるだけ集めた人たちを楽しませるために、わたしが即席で行ったものです。我が家は平屋で、約25畳〔4.5メートル×9メートル〕の丸太造り、土葺きで土間でした。片隅にはあまり高くない煙突がありました。母なる大地から取って来た泥岩で作ったものです。特別な折には、土間にきれいなわらを薄く敷き詰め、我が家の羽根の入っていないベッドから白いシートを持って来て壁を覆いました。

次の出し物のためにこのホールの照明をどうするかは大問題で大変な創意工夫が求められたのですが、わたしたちはうまい方法を思いつきました。土の中から、大きくて形の整ったカブを取って来たのです。そして中をくり抜き、短いロウソクを入れました。それを等間隔で壁中に掛けたのです。幾つかのカブは、土と植物の茎で作った天井からつり下げました。この照明は心ませる静かな……雰囲気醸し出し、カブの皮を通して拡散する光は、とても魅力的でした。

夕方活動をしていると、この一風変わったお金のかからない演出を見て、何人かの友人はこれ以上ないほどの優しさでわたしと家族の趣味の良さを褒めてくれました。」

「にぎやかなひとときを楽しく過ごしました」とロレンゾは回想している。ロレンゾも集まった人たちも代わる代わるスピーチや歌、朗読をして楽しんだ。ロレンゾはこう言っている。「結局、集まった人たちは心行くまで楽しみ、住む家もない人とは思えぬほどの幸せを感じながら帰って行きました。」¹〔103ページの提案1参照〕



マウントビスガに居留した聖徒の一人が日記に描いたスケッチ。

ロレンゾ・スノーの教え

試練や苦難は、人が霊的に成長し、
日の栄えの栄光に受ける備えをするための助けとなる

試練がなければ、または犠牲がなければ、わたしたちは救いを勝ち取ることも、神の目的をなし遂げることもできません。²

末日聖徒は常に試練や苦難を味わってきました。これは神が計画されたことでした。この試しの世にやって来て今身に受けているようなことを経験するという計画が、〔生まれる前の〕霊の世界でわたしたちに提示されました。それはあらゆる点で楽しく好ましい計画というわけではなく、わたしたちが望んでいたほど万事においてすばらしい展望が開けたわけではなかったとわたしは考えます。しかし、昇栄して栄光を受けるためにその経験が必要だということをわたしたちはそのときはっきりと知り、理解しましたから、どんなにつらそうに思えても神の御心みこころに従うことにしました。その結果、わたしたちはここにいるのです。³

主はわたしたちとともに何ができるか分かるまでわたしたちを試そうと心に決められました。神は御子イエスをお試しになりました。……御子〔救い主〕が地上に来られる前、御父は御子の行いを見て、全人類の救いが危うくなったときに御子なら御父を頼りにされると確信なさったのです。そして、その確信が裏切られることはありませんでした。わたしたちについても同じです。神はわたしたちを試されます。何度もお試しになるでしょう。それはわたしたちに最高の人生を送らせ、最も神聖な責任をお与えになるためなのです。⁴

非常につらい試練に遭っても、変わらぬ忠実さと誠実さみたまでそれを切り抜けるならば、試練が終わるころには神の御霊と力が力強く注がれるでしょう。それは、交わした聖約に忠実なすべての者に授けられる大いなる賜物たまものです。……

試練や迫害に耐えた昔の預言者や聖徒たち、……カートランド、ミズーリ、イリノイで苦難に遭った聖徒たちと来世で会ったときに、自分には彼らと親しく交わる資格があると感じられるだろうかと何人かの兄弟に聞かれたことがあります。こう尋ねてくる兄弟は、彼らと苦難を共にしなかったことに負い目を感じていました。そのような人がこの場にいるならば安心してください。言っておきますが、間もなくあなたがたは同じような苦難を心行くまで経験するでしょう。皆さんもわたしも、苦難を経ずに完全な者になることはできません。イエスもそうでした〔ヘブル2：10参照〕。ゲツセマネの園での祈りと苦しみは、日の栄えの栄光にあずかろうと望む人が人生でたどらなければならない清めの過程をあらかじめ示すものでした。この過程を免れようとして、ほかの方法で妥協するべきではありません。⁵

聖徒が霊的に成長して日の栄えみの栄光を受け継げるようになるには、苦難を経る以外に方法がありません。苦難を経ることにより、知識が増し、最終的に全地が平和になるのです。平和で豊かな環境にあると人は無関心になると言われてきました。そのような環境を望む人は非常に多いのですが、人はそのような環境に置かれると、永遠にかかわることを追い求めなくなるのです。⁶

わたしたちは個人的にも、全体としても、苦難を受けてきました。これからも苦難を受けることになるでしょう。なぜでしょうか。わたしたちの清めのため

に主がそれを求めておられるからです。⁷ [103 ページの提案 2 参照]

試練や誘惑の中で忠実であることによって、わたしたちは
この世よりも神を愛していることを示す

誘惑という試練もあります。誘惑は、わたしたちがどれほど信仰を大切にしているかを示す機会となります。この点に関してわたしたちがよく知っているのは、ヨブの経験です。ヨブは復活に関する知識と贖い^{あがな}主に関する知識を授かっていましたから、たとえ死んでも、後の日に地の上で贖い^{あがな}主にお会いできることを知っていました [ヨブ 19:25 - 26 参照]。ヨブは誘惑を受けたときに、天にかかわることをほかの何よりも大切にしていることを証明したのです。……

……神はわたしたちの味方ですから恐れる必要はありません。わたしたちはこれからもつらい状況に甘んじなければならないことがあるでしょう。そのような経験によって、わたしたちはこの世のものよりも神にかかわるものを愛していることを天使に示すことができるのです。⁸ [103 ページの提案 3 参照]

忠実であれば、誘惑に打ち勝ち、試練に耐えることができるよう
主は助けてくださる

皆さんの中には厳しい試練に遭った人が多いと思います。それは皆さんの信仰がさらに完全なものとなり、確信が強くなり、天の力に関する知識が増し加えられるためです。その結果、皆さんの贖い^{あがな}が実現します。地平線に暗雲が立ち込めても、…… 苦い杯を差し出されていやおうなく飲まれても、サタンが皆さんの中に解き放たれ、欺きや悪巧みなど、あらゆる誘惑の手口を駆使しても、強い迫害の手が容赦なく振り下ろされても、そのようなときこそ顔を上げて喜んでください。皆さんはイエスや聖徒たち、聖なる預言者たちと同じように苦難を受けるに値する者と認められたのですから。そして、皆さんが贖われる日は近いのです。

兄弟姉妹の皆さん、わたしは皆さんに心の底から勧めたいと思います。元氣を出してください。落胆してはなりません。なぜなら、皆さんの涙が乾き、心が安らぎ、皆さんが自分の労働の産物を味わう日は確かにすぐに来るのですから。……

正直であってください。徳高くあってください。高潔であってください。柔和で心のへりくだった者、勇敢で大胆な者であってください。簡素な生活を心がけてください。主のような者になってください。たとえ火の中、剣の中であつても、拷問を受け、死ぬようなことがあつても、真理に堅くついてください。⁹



試練のとき、わたしたちは天の御父に慰めと力を求めることができる。

わたしたちが福音を受け入れてから現在に至るまで、主は時々試練や苦難というものをわたしたちに与えてくれました。そして時には、不平や愚痴なしに受けることは非常に難しいような試練もありました。しかし、そのようなときに主はわたしたちを祝福してくださいました。主の御霊^{みたま}を十分に注いで、わたしたちが誘惑に打ち勝ち、試練を堪え忍ぶことができるようにしてくださったのです。¹⁰

どんなに忠実であっても、主に仕えるあらゆる男女には苦難の時があります。しかし、忠実であれば、いつかあふれるように光が注がれ、安らぎが与えられます。¹¹

あらゆる問題や迫害の中で完全に安全でいられるためにわたしたちに必要なのは、神の御心^{みこころ}に従うことと正直であること、受けた原則に忠実に従うこと、互いに誠実に付き合うこと、他人の権利を侵害しないこと、神の口から語られるすべての言葉に従って生きることです。このようにすると、聖なる御霊はあらゆる状況でわたしたちを助け、支えてくれます。ですからわたしたちはこうした試練の真ただ中にあっても家や家族、家畜、畑が豊かに祝福され、あらゆる点で神から祝福を受けるのです。そして神はわたしたちに知識に知識、英知に英知、知恵に知恵を加えてくださいます。

神がさらにこの民を祝福してくださいますように。わたしたちが自分に忠実

でありますように。これまで受けたすべての原則に忠実に従って心から互いの利益を求めることができますように。それができたときに神はわたしたちに御霊を注がれ、わたしたちはついに勝利を得るのです。¹² [103 ページの提案3 参照]

苦しかったころを振り返ると、試練が自分を神に近づけてくれたことが分かる

主がこれまでしてくださったこと、現在置かれている状況、将来の見通しについて思い巡らしてみると、自分たちは何と祝福された民なのかと思います。末日聖徒が持つことのできる最大の徳の一つは、天の御父が必要なものを与えてくださり、道を示してくださったことに感謝することなのではないかとわたしは時々思ってきました。その道を歩むのは必ずしも楽しい時ばかりではなかったかもしれないのですが、とてもつらかった経験ほど自分のためになったと後になって分かることがよくありました。¹³

どんな試練でも、忠実であって主に栄光を帰し、自分が選んだ信仰を大切にすれば、その試練や苦難が終わるころ、人はさらに神に近づいています。信仰や知恵、知識、力の点でさらに神に近い者となっているのです。そのため、望むものをさらに強い確信をもって求めることができるようになります。ある試練に遭うことをひどく恐れていた人たちが、知人の中にいました。しかし、彼らはその試練をくぐり抜けてからはさらに強い確信をもって神に近づくことができるようになり、望む祝福を願い求めることができるようになったと言っていました。……

わたしたちは、困難なことに囲まれながらも大いに喜び、満足を感じることができます。1年前や2年前、5年前と比べてどんなに進歩し、どんなに知識を得、どんなに重荷を背負えるようになっていのでしょうか。また、2、3年前よりも今の方が忍耐する力がついているのではないのでしょうか。主がわたしたちを力づけ、成長させてくださったのです。幼児は自分では分からないうちに少しずつ力がついていき、体も大きくなります。去年よりも大きくなるのです。わたしたちの霊的な成長もそれに似ています。1年前よりも自分が強くなっていることを実感するのです。¹⁴

あなたは払ってきた犠牲も、耐えてきた苦難も、物がなくて苦しんできたことも、……忘れ去り、これらを通していろいろなことを経験できてよかったと思うようになるでしょう。……苦しみから学ばなければならないことや、苦勞から得られた知識もあります。そのときはつらいかもしれませんが、こうしたものは来世で大きな価値を持つようになるのです。……

……人生とは、いい時ばかりではないことをわたしは知っています。皆さんは確かに、多くの試練に遭ってきました。これからも多くの苦難に遭うことで

しょう。しかし、続けて誠実であれば、皆さんは間もなく苦しみから抜け出し、日の栄えの輝かしい栄光にあずかるのです。¹⁵ [下記の提案4参照]

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。その他の提案については、v - vii ページを参照する。

1. 96 - 97 ページの記述について深く考えてください。ここに書かれている聖徒たちが苦難の中で幸せを感じられたのはなぜでしょうか。試練に遭っている人たちを元気づけるために、わたしたちにはどんなことができるでしょうか。
2. 人は試練を受けなければならないというスノー大管長の教えを研究してください (98 - 100 ページ)。「永遠にかかわることを追い求め[る]」とはどういう意味だと思いますか。試練がないと「永遠にかかわることを追い求め」なくなる人が多いのはなぜでしょうか。
3. わたしたちは試練や誘惑にどう対処するべきでしょうか (例として、98 - 100 ページを参照してください)。試練のときに、主はどのように助けてくださいますか。
4. 本章の最後の項を読んでください。あなたはこれまでに経験した試練から何を得ましたか。
5. 自分に希望を与えてくれる言葉を本章の中から一つか二つ探してください。その言葉が気に入ったのはなぜですか。励ましを必要としている家族や友人にその真理を伝える方法をよく考えてください。

関連聖句 —— 申命 4 : 29 - 31 ; 詩篇 46 : 1 ; ヨハネ 16 : 33 ; ローマ 8 : 35 - 39 ; 2 コリント 4 : 17 - 18 ; モーサヤ 23 : 21 - 22 ; 24 : 9 - 16 ; 教義と聖約 58 : 2 - 4

教える際のヒント —— 2, 3 人の生徒と連絡を取り、本章に関連した経験を皆に話せるよう前もって準備してもらってもよい。例えば、自分が試練から学んだことについて、本章を教える前に話すよう何人かに準備しておいてもらうとよいだろう。

注

1. エライザ・R・スノー・スミス, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow* (1884 年), 89 - 93
2. *Millennial Star*, 1887 年 4 月 18 日付, 245
3. *Deseret Weekly*, 1893 年 11 月 4 日付, 609
4. *Millennial Star*, 1887 年 8 月 24 日付, 532
5. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1886 年 2 月 9

- 日付, 1
6. *Deseret News*, 1888年4月11日付, 200: 1888年4月の総大会におけるロレンゾ・スノーの説教の詳細な記録から
 7. *Deseret News*, 1857年10月28日付, 270
 8. *Deseret News*, 1888年4月11日付, 200
 9. "Address to the Saints in Great Britain," *Millennial Star*, 1851年12月1日付, 364
 10. *Deseret Weekly*, 1893年11月4日付, 609
 11. *Millennial Star*, 1899年8月24日付, 531
 12. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1879年12月2日付, 1
 13. Conference Report, 1899年4月, 2
 14. *Deseret News*, 1888年4月11日付, 200
 15. "Old Folks Are at Saltair Today," *Deseret Evening News*, 1901年7月2日付, 1で引用: 年配の教会員への言葉。当時88歳のロレンゾ・スノーが書き, 息子ルイが読み上げた。



「神よ、どうか、わたしを探って、 わが心を知り」

義にかなった末日聖徒は「試練のときに頼ることのできる
神の前に人格を確立」しようと努めます。

ロレンゾ・スノーの生涯から

1899年12月15日、当時大管長であったロレンゾ・スノーは、十二使徒定員会の会長を務めていたフランクリン・D・リチャーズ会長の葬儀で説教をした。説教の最後の方で、スノー大管長はこう言った。「近い将来起こることに対してわたしたちが主の前に正しい心をもって備えることができるよう末日聖徒を祝福してくださいと、わたしはイスラエルの主をお願いしています。」

「主の前に正しい心を」保つ必要があることを説明するために、スノー大管長はリチャーズ会長と一緒に経験したある出来事について話した。二人とも使徒に召されたばかりの1850年代のことで、ブリガム・ヤング大管長が指導者として教会の改革を進めており、悔い改めて、義にかなった生活をする決意を新たに固めるよう全地の末日聖徒に呼びかけていた。

スノー大管長はそのころを回想してこう語ったのである。「ヤング大管長は悔い改めて自己を改革するよう人々に熱く説いたのですが、そのとき、神権の召しを尊んで大いなるものとするという本来の義務を果たしていないために神権を取り上げなければならない人に対してどうすべきか、非常に強い口調で話しました。当時を知る兄弟たちは、ヤング大管長の気迫のこもった話し方を覚えていることでしょう。ともかく、その言葉はリチャーズ兄弟の心に重くのしかかりました、わたしも同じでした。そこでわたしたちは、二人でそのことについて話し合ったのです。そして、ヤング大管長のところに行って神権を返上することに決めました。わたしたち二人は神権の召しを尊んで大いなるものとしていないとヤング大管長が主の名によって感じているのであれば、神権を手放そうと思ったのです。ヤング大管長のもとに行くと、周りにだれもいなかったので、この気持ちを話しました。するとヤング大管長はこう言ったのです。たぶん、目に涙を浮かべていたと思います。『ロレンゾ兄弟、フランクリン兄弟、あなたたちは主に対して十分に神権の召しを尊んで大いなるものとしてきています。神



フランクリン・D・リチャーズ会長

の祝福がありますように。』¹

スノー大管長は生涯を通して主の前に正しい心を保とうと努めており、聖徒たちにも、自分のふさわしさを吟味するよう勧めていた。「末日聖徒として父なる神の前にふさわしい人格」を築く必要がある、と「理解力に光を注ぐような話し方」で言ったのである。²〔112 ページの提案 1 参照〕

ロレンゾ・スノーの教え

ふさわしい人格を築いていれば、
自分の心を探ってくださいと自信をもって神に願うことができる

最も重要であり、霊界に帰ったときに最も価値のあることは、試しの世にあって末日聖徒にふさわしい忠実な、しっかりとした人格を築いていることだろうと、わたしは非常に強く感じています。

職場または重要なポストに見知らぬ人が応募する場合、たいていは、その人がいかにその仕事またはポストにふさわしいかを記した信頼できる人による文書や推薦状、紹介状が必要になります。こうした書状にはきわめて効果があります。採用する側にこれほど好印象を与え、その人を有利にするものはほかにはなかなかないでしょう。しかし、このようないわゆる紙に書かれた人物評価、ポケットに入るような書類は比較的手に入れやすいものです。そして、はっきりと言えることは、わたしが見てきたところからすると、本人の真の人格が、紙に書かれた評価に見合わない場合は少なからずあるということです。

この教会の会員と認められている人たちの中には、周囲の人からよく思われるために多大な労力を払う人がいます。しかし、そのような人のほんとうの人格、言わば心の内面は不透明でよく分かりません。……さて、わたしが引用するこの祈りは非常に大切なものです。「神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、わたしを試みて、わがもろもろの思いを知ってください。わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わたしをとこしえの道に導いてください。」「詩篇 139:23 - 24」これは、ダビデが人生の最盛期に、心の底から確信をもって主にささげることのできた祈りです。しかし、ダビデには、自分の弱さにわななき、震えながらこのような祈りをささげた時がありました。

多くの末日聖徒が、人生の長きにわたって主に全幅の信頼を寄せ、これと同じ祈りをささげることができていたとわたしは信じています。「神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、わたしに悪しき道のあるかないかを見てください。」しかし、わたしたちが一つの民として、常に主の前にへりくだり、このような祈りをささげられるような生き方ができたとしたら、どれほどすばらしいことでしょうか。わたしたちは義と良い業を成し遂げたことになるのです。……ダ

ビデのこの祈りを取り入れて、各人ができるかぎり自分の持つ光に従って生きられるようにし、それを、真剣に神への礼拝の一部とするよう〔すべての人に〕勧めます。このきわめて高い水準に達していない人がたくさんいます。それは、人の目に触れないところで、明らかに全能者を遠ざけ、神の御霊を退けるようなことを行っているからです。そのような人は、自分一人で祈るときにこの祈りを行うことができません。罪を悔い改めて、過ちを犯していればそれを償い、これまでよりも善いことを行い、試練のときに頼ることのできる神の前に人格を確立し、霊界に行ったときに清い霊たちや御父御自身にまみえるにふさわしい者になろうと決心するのでないかぎり、この祈りを行うことはできないでしょう。

……わたしたちは誠実な男性、誠実な女性でなければなりません。信仰を大きく育てなければなりません。そして、聖霊を伴侶とするにふさわしくならなければなりません。聖霊を伴侶として、義の業を行うときに常に助けを受け、自分の思いを犠牲にして御父の御心に従い、アダムの墮落がもたらした状態と戦い、正しいことを愛するがゆえに正しいことを行い、神の誉れと栄光にひたすら目を向けることができるようにするのです。これを実行するためには、自分の責任を心の中でよく理解し、神が見ておられるのであるからすべての行動とその動機に対して自分は申し開きをしなければならないのだという事実を認め、常に主の御霊と調和していなければなりません。³〔112 ページの提案 2 参照〕

聖文に出てくる例から、人格を改善する方法を学ぶことができる

預言者たちの人格の中でうらやましく思う点はたくさんあります。特にモーセです。イスラエルの民に関する神の言葉と御心を成し遂げた強固な意志と、全能者の助けを受けて人の力の及ぶかぎりあらゆることを行う姿勢は称賛に値します。そして何よりも、主に対する誠実さと忠実さは見上げたものです。……

正しい道を求め、徒党を組んで襲いかかるサタンを物ともせず「サタンよ、引き下がれ」と言うことができ〔ルカ 4：8 参照〕、義になかった生き方、神のような生き方をする今日の男女を、神は高く評価しておられます。そのような人は神に影響を及ぼし、祈りに大きな効果があります〔ヤコブの手紙 5：16 参照〕。例えばモーセには全能者に対して大きな力があり、あるときには神の目的を変えてしまいました。主がイスラエルに対して怒りを発し、彼らを滅ぼすとモーセに言われたことは皆さんも覚えているでしょう。そのとき主はモーセを取り上げて大いなる国民にすると言われました。そして、イスラエルに約束されたものをモーセとその子孫に与えようとされたのです。しかし、偉大な指導者であり律法者であったモーセは指導者としての義務に忠実であり、神と民の間に立って民のために主に懇願しました。自分に行使できる権限を行使して、モーセは民を滅びから救う仲立ちとなったのです〔出エジプト 32：9 - 11；ジョセ

フ・スミス訳出エジプト 32:12 (英文) 参照]。モーセは主の目に非常に高貴で輝かしく映ったに違いありません。そして、主から選ばれた民がかたくなで無知であったにもかかわらず、その指導者がこのように偉大な人物であることを知って、主は大きな喜びを感じられたに違いありません。

また、ヨナにも、興味深い人格的特質が見られます。海が荒れ狂い、船の安全が確保できないと水夫たちが恐怖の言葉を口にすると、主の命令に逆らってニネベ行きでない船に乗っていたヨナは、良心の呵責を感じて進み出ました。そして、船に降りかかろうとしている災いの原因は自分にあると告白して、船の乗員のために進んで犠牲になることを申し出たのです〔ヨナ 1:4 - 12 参照〕。そのほかの預言者や神の人の場合もそうですが、時にヨナのように弱さを見せることがあるにしても、その人格には実に偉大で称賛に値するものがあります。⁴ [112 ページの提案 3 参照]

義になつた人格的特質は、信仰を使い、悪い行いを改めることによって 徐々にはぐくまれる

昔のふさわしい人たちの中に見られるこのような人格的特質は、偶然の産物でもなければ 1 日や 1 週間、1 か月、1 年で身に付けたものでもありません。それは徐々にはぐくんだものであり、人からの称賛や批判とは無関係に、神と真理にひたすら忠実に歩んだことの結果なのです。

……わたしたちは末日聖徒として、救いというものが、神の恵みにより、先に述べた義になつた人々が守った原則に従うことによってもたらされるということを理解し、心に刻むことが大切です。人の称賛を得るため善いことを行うのではなく、神のような特質をはぐくむために善いことを行うのです。そのようにすればわたしたちは神の特質を備えるようになり、やがてはそれがわたしたちの人格の一部になります。……

わたしたちは時々、申し訳ないことをしたと覚えることがあるのではないのでしょうか。悪いと分かった時点でその行いをやめればまったく問題はありません。悪いと分かって改めるのはわたしたちにできる精いっぱいのものであり、それ以上はどんな人にも求めることができません。しかしはっきり言えるのは、犯してしまった間違いそのものよりも、犯した間違いを人に知られることの方を気にして恐れる人があまりにも多いということです。そのような人は、自分の過ちについて聞いたら人は何と云うだろうかなどと不安になります。そして他方、友人の称賛を得るために物事を行う人がいます。そのような人は、称賛の言葉が得られなかったり、自分が認められなかったりすると、努力が無駄になったと感じます。善いことを行ったとしても、それはすべて失敗だったと考えるのです。



ヨナは「弱さを見せ」たが、その「偉大で称賛に値する」人格から
わたしたちは学ぶことができる。

さて、もしもほんとうに神に近づきたいと願っているのであれば、永遠の世に住む良い霊たちのようになりたいと思うのであれば、また、聖文に書かれている信仰、昔の聖徒たちがあのような驚くべき業を行った信仰を自分もはぐくもうと思うのであれば、わたしたちは聖なる御霊を受けてそのささやきに聞き従い、その勧めに従わなければなりません。聖霊を追い出すような行いは何一つしてはなりません。わたしたちは確かに罪を犯しやすい弱い存在で、いつ主の御霊を悲しませるようなことをするか分かりません。しかし、自分の間違いに気づいたら即座にそれを悔い改め、できるかぎり償うなり、犯した間違いを正すなりするべきです。このようにしてわたしたちは確かな人格を築き、前進し、誘惑に屈しない強さを身に付けていきます。そして、やがては多くのことを克服して自分でも驚くほど成長し、自分を治める力がついて進歩するのです。⁵ [112 ページの提案 4 参照]

わたしたちは義にかなった人格を保つことによって主に近づく

わたしたちは驚くべき影響力のある福音を受け入れました。その教えに従えば、世界のいかなる時代に人類に約束された祝福、与えられた祝福にも勝るえり抜き祝福を受けることができます。しかし、子供がおもちゃや遊び道具に

満足するように、わたしたちは一時的なもので満足してしまい、命と真理の偉大な永遠の原則を自分の中にはぐくむ機会があることを忘れてしまうことがあまりにも多いのです。主はわたしたちとずっと緊密で親しい関係を築きたいと願っておられます。わたしたちを人格的にも知性の面でも成長させたいと願っておられます。そして、そのような関係を築き、成長するのは、そのために特別に用意されている永遠の福音を通してのみ可能なのです。使徒ヨハネはこう言っています。「彼についてこの望みをいただいている者は皆、彼（キリスト）がきよくあられるように、自らをきよくする。」〔1ヨハネ3：3〕末日聖徒は福音の原則を自分の生活に取り入れて、神の計画を成し遂げようとしているのでしょうか。

……神の義の中でさらに自分を高めていこうとするわたしたちには何ができるのでしょうか。わたしたちが従い、教えているこの救いの計画には、どのような利点や祝福、特権があるのでしょうか。そして、救いを実現するにはどのような手段が用いられるのでしょうか。犠牲が要求されたとしても、自分の信じる宗教を研究しようと望む人、その教えを日々実践することによって戒めに従い、逆境のときにも豊かなときにも主の手を認めて自分の思いをエホバの御心に従わせるよう努めるすべての人は、喜んで犠牲をささげるでしょう。

……一人になって自分を吟味し、自分をよく見詰めて、自分が主の前に……どのような状態にあるか確認して、必要であれば、熱心さと忠実さを新たにしていよいよ良い業を増し加えていくようにするとよいでしょう。

教会全体について言えば、神の目から見ても大きく進歩していることは疑いもありません。しかし、そうであるにもかかわらず、磨けば光るような霊的な賜物を受けていて、本人の意志で活用すれば今よりもはるかに大きな能力を発揮できるようになり、清めの過程をはるかに速く進んで主に近づくことのできる人がわたしたちの中にと、わたしは確信しています。しかし、彼らはこの世の物事にあまりに心が向いているために、霊的な力や霊的な祝福を増し加えようとしません。主に近づくという特権があるにもかかわらず、そうしようとはしないのです。⁶

わたしたちは末日聖徒として、どのような代価や犠牲を払おうとも、聖徒らしい人格を汚してはなりません。神の認められた人格は、たとえ生涯自制しなければならぬとしても、守る価値があります。

このような生き方をするならば、神の息子娘たちとともに冠を頂き、日の栄えの王国で富と栄光にあずかることを……完全な確信をもって……待ち望むことのできるのです。⁷〔112ページの提案5参照〕

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考えてください。その他の提案については、v - vii ページを参照してください。

1. 105 - 107 ページの記述を読み返すと、ロレンゾ・スノー長老とフランクリン・D・リチャーズ長老の取った行動からどのようなことが学べますか。そこから学べる原則を家族やその他の人に伝える方法を考えてください。
2. 「わたしたちは誠実な男性、誠実な女性でなければなりません」(108 ページ)とスノー大管長は言っています。誠実な男性、誠実な女性とはどのような意味だと思いますか。
3. スノー大管長によるモーセとヨナの説明について深く考えてください(108 - 109 ページ)。それぞれの記述の中で、自分の人格を改善するのに役立つのはどのような点でしょうか。
4. 110 ページの第1段落全体について深く考えてください。確かな人格を築くために自分の間違いを知る必要があるのはなぜだと思いますか。どうすれば、落胆することなく自分の欠点を見詰めることができるでしょうか。
5. 本章の最後の項にあるスノー大管長の勧告を読み返してください(110 - 111 ページ)。時間を取って自分自身を吟味し、主の前に自分がどのような状態にあるか考えるようにするとよいでしょう。

関連聖句——詩篇 24:3 - 5; 2ペテロ 1:2 - 11; モーサヤ 3:19; アルマ 48:11 - 13, 17; エテル 12:25 - 28; 教義と聖約 11:12 - 14; 88:63 - 68

教える際のヒント——参加者に本章から一つの項を選んで黙読してもらおう。同じ項を選んだ人に2, 3人ずつ集まってもらい、学んだことを話し合うよう言う。

注

- | | |
|--|--|
| 1. <i>Deseret Semi-Weekly News</i> , 1899年12月19日付, 5 | 日付, 1 |
| 2. <i>Deseret News: Semi-Weekly</i> , 1882年8月15日付, 1 | 5. <i>Deseret News: Semi-Weekly</i> , 1882年8月15日付, 1 |
| 3. <i>Deseret News: Semi-Weekly</i> , 1882年8月15日付, 1 | 6. <i>Deseret News: Semi-Weekly</i> , 1882年8月15日付, 1 |
| 4. <i>Deseret News: Semi-Weekly</i> , 1882年8月15日付, 1 | 7. <i>Deseret News: Semi-Weekly</i> , 1886年2月9日付, 1 |



神聖な家族関係

「もし忠実であるならば、わたしたちは栄光に満ちた
不死不滅の状態で互いに交わることになり、この世で築かれる
最も永続性のある関係が永遠にわたって存続〔します〕。」

ロレンゾ・スノーの生涯から

70歳の誕生日を目前に控えて、ロレンゾ・スノーは自分のすべての子供たちとその家族をユタ州プリガム・シティーでの「大家族会および誕生日記念の集い」に招いた。そして家族の宿泊場所や食事を手配し、幼い子供を含む全員が楽しめるプログラムを準備した。スノー大管長は次のように書いている。「この〔家族会の〕件について考えれば考えるほど、生涯で一度でもあなたたち全員と一堂に会して、父親の祝福を授けることができるように、家族で集まりたいという切なる願いと望みが強まっていきます。」スノー大管長は「きわめて重大でやむを得ない理由がある場合のほか」、どんな事情があろうと都合をつけて出席してくれるよう家族に熱心に呼びかけた。¹

スノー家族は1884年5月7日から9日にかけて集まり、音楽や演劇、スピーチ、詩、ゲーム、食事、なごやかな会話を楽しんだ。²スノー大管長の姉エライザによれば、大管長はその期間を通じて「家族の様々な集まり〔に参加し〕、族長として……家族に祝福を授け」、「父親らしいたくさんのお言葉と教訓と助言を」与えた。家族会が終わりに近づいたとき、スノー大管長の言葉を聞くために家族全員が集まった。エライザの記録によれば、大管長は「大勢の家族のこやかな笑顔を見、またこの家族会で期待どおりの良いものが生まれたのを目の当たりにする幸せを享受できたことに、喜びと神への感謝の気持ち」を表した。そして自分の家族を見渡して、次のように高らかに宣言した。「わたしの心は天の御父に対するこの上なく温かい感謝の気持ちであふれんばかりです。……こうしてわたしの70歳の誕生日を祝ってもらい、ここに立って、この栄光に満ちた天国のようなすばらしい光景を目にする神聖な機会を得て心に深く感じている思いは、言葉では言い表せません。」

スノー大管長は次のように続けている。「これが霊界のこちら側でわたしたちが開く最後の家族会になると思ってよいでしょう。わたしたちの先祖の神が助けてくださって、わたしたちが神の律法を守ることができますように。立派な



子供は「主から授かった貴い受け継ぎ」である。

生涯を送り、徳と高潔さを汚さずに保ち、聖なる御^{みたま}霊のささやきに耳を傾け、自分自身を清めようと熱心に努めることができますように。それによって、この家族のだれ一人としてまっすぐに狭い道を離れて失われることなく、自分が第一の復活の朝に出て来て栄光の冠を授かり、不死不滅の状態⁴で家族の結びつきを永続させるにふさわしい者であることを全員が証明し、永遠にわたって増し加えることができますように。」³ [119 ページの提案 1 参照]

ロレンゾ・スノーの教え

家族関係は神聖であり、永遠にわたってさらに強めることができる

結婚を奨励し、……その関係が神聖なものであって、増えて地を満たすようにという、神がわたしたちの最初の両親にお与えになった偉大な戒めを守る義務があることを〔ほかの人々〕に強く訴えてください〔創世 1:28 参照〕。その律法を軽視し、結婚の聖約を尊ばない現在の世の風潮を考えると、なおさらそうする必要があります。悲しいことに、この地では離婚が頻繁に行われており、子供を主から授かった貴い受け継ぎではなく重荷と見なす傾向が強まっています。⁴

もし忠実であるならば、わたしたちは栄光に満ちた不死不滅の状態⁵で互いに交わることになり、この世で築かれる最も永続性のある関係が永遠にわたって存続することを、〔主〕は示してくださっています。⁵

この世で築いた親密な関係を、〔わたしたちは〕永遠の世においても持ち続けます。父親、母親、姉妹、兄弟。そうです、いとしい我が子が傍らで息を引き取るのを見守る母親も、霊界でその子が自分の子となり、なきがらを横たえるときと同じようにその子を抱くことができることを知っています。夫が臨終を迎え、その命が失われていくのを見るときに、妻は彼が再び自分の夫となることを知っています。そして永遠の世で彼が自分の夫となるということに、全能者の啓示が与えてくれる安らぎと慰めと喜びを見いだします。この世と同じ関係が、幕の向こうでも存続します。この世で築かれたきずなは、来世においていっそう強まります。末日聖徒には確信があります。神からその確信を得ているからです。⁶ [119 ページの提案 2 参照]

この世で結婚や子育てができない忠実な末日聖徒は、
来世で昇栄のすべての祝福を受けることができる

先日、ある女性がわたしたちの事務所にやって来て、個人的な問題でわたしに相談したいことがあると言いました。女性は、夫を得る機会に恵まれてこなかったためとてもがっかりしているということでした。……この世で夫を得られなかった場合、別の世で自分がどのような状態になるのか知りたかったので

す。この疑問は、わたしたちの周りにいる若い人々の心にも生じるものだと思います。……この状態にある人々が安らぎと慰めを得られるように、少し説明したいと思います。主に忠実な生涯を送って亡くなった末日聖徒が、機会を与えられなかったために、ある事柄をなし得なかった場合、それだけの理由で来世で失うものは何もありません。言い換えれば、若い男性や女性が結婚する機会がないまま、死に至るまで忠実に生活をするならば、この機会を得て成長した男女が受けるであろう祝福と昇栄と栄光のすべてにあずかるのです。これは疑いもなく確かなことです。……

この世で結婚する機会のない人は、もし主にあって死ぬならば、結婚している人に不可欠なすべての祝福を確実に手に入れる手段を得ることでしょう。主は憐れみ深く優しい御方であって、不公平な御方ではありません。主にあって不公平はないのです。それでも、ある女性または男性が結婚する機会のないまま世を去るとき、もし別の世で救済の道がないとしたら、わたしたちはそれを公平であると見なすことはできません。ほんとうにそうなら不公平ですが、わたしたちは主が不公平な御方ではないことを知っています。わたしの姉エライザ・R・スノーは、かつて生を受けたどんな末日聖徒の女性にも劣らないくらい善良な女性であったと、わたしは思っています。姉は子供を授かることのできる時期を過ぎるまで未婚のままでした。……姉がその理由で一つでも何かを失うことになるとは、わたしには一瞬たりとも想像できません。姉にはそれを補うものが別の世で与えられ、姉はこの世で子供を授かる機会があった場合とまったく同様に、偉大な王国を得ることでしょう。⁷

夫婦の気持ちが一つになっているとき、家庭において さらに愛と優しさを深めることができる

家庭内の事柄についての小さな、取るに足りない意見の相違のために、皆さんの幸福が損なわれることのないようにしてください。⁸

妻の皆さん、夫に忠実であってください。わたしは皆さんが多くの不愉快な事柄に耐えなければならず、皆さんの夫にも同じように耐えなければならぬことがあることを知っています。確かに、皆さんは時々、夫から試しを受けることがあります。それは皆さんの夫が何かに気づいていないからかもしれませんし、時には、もしかすると皆さん自身が何かに気づいていないからかもしれません。……

……わたしは、皆さんの夫には良くない点がある、皆さんと同じように良くない点があり、一部の夫はもっと良くないかもしれない、と言っているだけです。でも気にせずに、時々起こる不愉快な出来事を堪え忍ぶように努めてください。そうすれば次の世で夫と会うとき、皆さんはそうした事柄を耐えてよかったと思

うことでしょう。

夫の皆さんに申し上げます。皆さんの多くは自分の妻をあまり大切にしていないのではないのでしょうか。……妻に優しくしてください。妻が集会に出かけるときには、少なくとも半分の時間は赤ん坊を抱いていてください。赤ん坊をあやす必要があり、皆さんにあまり用事がないときには、あやしてください。時々、そのために小さな犠牲を払わなければならないとしても、優しくしてあげてください。それがどんな犠牲であろうとも、とにかく優しい気持ちでいてください。⁹

男性は家庭でもっと父親らしくする必要があります。妻や子供たち、隣人や友人に関してもっと繊細な感情を持ち、もっと優しく、神のような特質を持った者となる必要があります。ある家族を見て、その家族の家長が神の人として家庭の諸事を執り行い、優しく温厚で、聖霊に満たされ、天の知恵と理解力に満たされている姿が見られるならば、わたしはほんとうにすばらしいと思います。¹⁰

もし皆さんがシオンで家族というつながりを持つことがあれば、そして、もし天で存在するために必要な天のつながりを確固としたものにしたいと思うならば、皆さんはその家族を一つに結び合わせる必要があります。家長は主の御霊を宿していなければならず、ふさわしい光と英知を備えているべきです。もしその光と英知が家族一人一人の日々の生活と振る舞いに生かされるならば、それはその家族が救いにあずかることを証明するものとなるでしょう。家長が家族の救いをその手に握っているからです。

家長は力の及ぶかぎり気持ちや愛情を家族に寄せ、家族の安らぎと幸福のために必要なすべてのものを確保するように努めます。その一方で家族も、振り向いて同じ気持ち、同じ優しさ、同じ意向を示し、受けている祝福に対して精いっぱい感謝の気持ちを示さなければなりません。

思いの一致、言い換えれば、感情の一致があり、互いに愛し合う気持ちがあり、そして、一つとなった家族がこのように結び合わされることが必要なのです。¹¹

〔男性〕は妻子の前でひざまずくとき、自分が善良な妻から尊敬されるような人になるように、また、聖霊たまものの賜物と力が絶えず家族のうえにあるように、聖霊の賜物と力によって靈感を受けなければなりません。聖霊が自分たちのうえに降くだって来られるように、家族が一つとなっていなければなりません。さらに、男性は正しい生活を送ることによって、妻が祈りを通してきよめられるようにしなければならず、家族が一つとなるために、夫の前や子供たちの前で聖くなる必要があることを妻が理解できるようにしなければなりません。男性とその妻が完全に一致し、神の王国の確立と形成において一翼を担うにふさわしくなるためであり、子供たちや、またその子供たちに、清い精神を吹き込み、清い教えを授けることができるようにするためです。¹²〔120 ページの提案3 参照〕

子供たちが福音を最もよく学ぶのは、両親が靈感を求め、
良い模範を示すときである

わたしたちが携わっているこの業は、わたしたちの業ではありません。神の業です。わたしたちは優れた英知に導かれて行動しています。……この王国の将来はわたしたちの子供たちにかかっており、この王国の力と最終的な勝利は、彼らが教育と適切な訓練を受けるかどうかにかかっています。もし自分の家族に適切な影響を及ぼしたいと望むならば、家族に良い訓戒を与えるだけでなく、良い模範を示さなければなりません。「わたしが言うように行いなさい」と言うだけでなく、「わたしが行くように行いなさい」と言えるようにするべきです。¹³

子供たちがためらうことなく皆さんの足跡をたどり、皆さんと同じように真理に雄々しくなるように、模範と訓戒の両方によって子供を教えるように努めてください。¹⁴

聖なる神権にあって神の前に自分の立場を保ちたいと望む男性は、預言の霊を持ち、人々に命と救いをもたらす業に携わる資格がなければなりません。そして〔たとえ〕世の人々に対してその業を行えないとしても、家庭で、家族の中で、また職場や街角で行わなければなりません。子供や隣人に福音を教えるとき、この説教壇から兄弟たちに語っているときと同じように、団らんの中でも命の言葉によって心が靈感で導かれるようにする必要があります。人前では少しばかり御霊を受けても、その後、御霊をわきに置いてしまうというのでは意味がありません。人々に語った後、帰宅し、……自分の中に命の言葉を持たず、完全に乾いて枯れた状態になってしまう人がいますが、そのような状態ではまったく意味がないのです。

イスラエルの父親には、目を覚まして人を救う者となる義務があります。信仰の力と強い望みをもって主の前を歩めるようにするためであり、その信仰の力と強い望みによって、父親は家族に命の言葉を教えるための靈感を全能者から確実に授かることでしょう。……

これを通して決意の強さが分かり、その強さに応じてわたしたちは一つとすることができるようになります。それによって、どのように互いに愛し合うかを学ぶのです。主が御子イエスにお授けになった愛をわたしたち一人一人の心に授けてくださるように、また、善いものについての知識を引き続き授けてくださるように、わたしは主に祈ります。¹⁵

父親には、子供たちに教えと指示を与え、原則を示すにふさわしい者となる務めがあります。子供たちがそれらの教えに従って、子供時代にはその状態を得ることのできる最大の幸福を得て、また同時に、〔大人〕になったときに最大の幸福と喜びを得るための基盤となる原則を学ぶようにするのです。¹⁶



両親は「家族を一つに結び合わせる」ように努めるべきである。

もしわたしたち自身が命と救いの純粋な原則を身に付けようと熱心に努めるならば、子供たちはこれらの原則を学んで成長し、わたしたちよりも容易に、自分の周りで天の秩序を推し広め、幸福と平和を確立することができるでしょう。¹⁷ [120 ページの提案 4 および 5 参照]

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。そのほかの提案については、v - vii ページを参照する。

1. 家族全員を呼び集めることについて、スノー大管長が抱いていた気持ちを改めて考えてみてください (113, 115 ページ)。家族を呼び集めたら、どのような良い結果を得ることができるでしょうか。家族が一致し続けていられるように、どのような助けができるでしょうか。
2. 115 ページの第 1 段落は、どのような点で今日の人々こんにちに関連しているでしょうか。教会の青少年が結婚の聖約の神聖さを理解できるように、どのような助けができるでしょうか。彼らが結婚や親になることを心待ち

にできるように、どのような助けができるでしょうか。

3. スノー大管長は「小さな、取るに足りない意見の相違」のために家庭における「幸福が損なわれる」ことがあると言っています（116 ページ）。こうした事柄によって幸福が「損なわれ」ないようにするのに役立つ具体的なアイデアとして、どのようなものがあるでしょうか（例として、116 – 119 ページ参照）。
4. 118 ページから始まる項を研究してください。両親が「わたしが言うように行いなさい」だけでなく「わたしが行くように行いなさい」と言えるようになる必要があるのはなぜだと思いますか。両親はどのようにして模範によって教えることができるでしょうか。両親の良い模範によって、どのような原則を学んできましたか。
5. スノー大管長は、教会では力強く教えるが家庭ではそのように行わない親について懸念を表しています（118 ページ）。「命の言葉」を家族と分かち合うためにできることについて考えてください。

関連聖句 —— 1 ニーファイ 8 : 10 – 12 ; ヒラマン 5 : 12 ; 教義と聖約 68 : 25 – 28 ; 93 : 40 – 50 ; 132 : 19 – 20

教える際のヒント —— 「必要以上に話したり、あなたの意見を出しすぎたりすることのないように注意すべきである。このような行動は生徒に興味を失わせる原因となる。……あなたの最大の関心は、感動的なレッスンをすることではなく、生徒が福音を学ぶように助けることに向けられていなければならない。これには生徒が教え合う機会を与えることも含まれる。」（『教師、その大いなる召し』 64）

注

1. エライザ・R・スノー・スミス, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow* (1884 年), 453 – 454 参照
2. *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 461 – 483 参照
3. *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 484 – 486 で引用
4. “Prest. Snow to Relief Societies,” *Deseret Evening News*, 1901 年 7 月 9 日付, 1 で引用。この説教は扶助協会では直接女性たちに向かって行われた。
5. *Deseret News*, 1888 年 4 月 11 日付, 200 ; 1888 年 4 月の総大会におけるロレンゾ・スノーの説教の詳細な記録から
6. *Salt Lake Daily Herald*, 1887 年 10 月 11 日付, 2
7. *Millennial Star*, 1899 年 8 月 31 日付, 547 – 548
8. *Deseret News*, 1857 年 10 月 21 日付, 259
9. “The Grand Destiny of Man,” *Deseret Evening News*, 1901 年 7 月 20 日付, 22
10. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1868 年 3 月 31 日付, 2
11. *Deseret News*, 1857 年 3 月 11 日付, 3 ; 原典では 3 ページが誤って 419 ページと表示されている
12. *Deseret News*, 1857 年 1 月 14 日付, 355
13. *Deseret News*, 1865 年 7 月 26 日付, 338
14. “Scandinavians at Saltair,” *Deseret Evening News*, 1901 年 8 月 17 日付, 8 で引用
15. *Deseret News*, 1857 年 1 月 14 日付, 355
16. *Deseret News*, 1857 年 1 月 28 日付, 371
17. *Deseret News*, 1857 年 10 月 21 日付, 259



1892年4月6日、ソルトレーク神殿の最も高い尖塔にかさ石が置かれるのを見ようと、無数の人々が集まった。



「神殿に入ってください」

「神がわたしたちに示してくださっている展望は
 壮大ですばらしいものであり、想像の及ばないものです。
 神殿に入ってください。そうすればお見せしましょう。」

ロレンゾ・スノーの生涯から

ノブテスマと確認を受けて間もなく、ロレンゾ・スノーはカートランド神殿で行われる集会に出席するようになった。集会で、ロレンゾは預言者ジョセフ・スミスやほかの教会指導者とともに、大いなる霊的な祝福を受けた。日記に次のように書いている。「集会でわたしたちは預言の^{たまもの}賜物、異言の賜物、異言の解き明かしを授かった。示現と驚くべき夢を示された。天の聖歌隊が歌うのを聞き、長老たちが神権を用いることによって、すばらしい癒しの力が現されるのを見た。非常に多くの場面で、病人は癒され、耳の聞こえない人は聞こえ、目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩けるようになった。神の下された神聖な影響力、霊的な雰囲気とその聖なる建物に満ちていることがはっきりと示されていた。」¹

ロレンゾ・スノーはカートランド神殿を愛し、「神の御子とその栄光のうちに威厳をもってこの神殿を訪れられた」ことを知っていた。したがって、教えを説くために初めて神殿の教壇に立ったとき、ロレンゾは畏敬の念に打たれた。次のように述べている。「聴衆に話すために初めて教壇の一つに立ったときの気持ちは、どのような言葉をもっても表現できません。そのほんの少し前に、教壇の手すりの上に聖なる御方が立たれたのです。『その髪は清らかな雪のように白く、その目は燃える炎のよう』でした。また、この場所にモーセとエライアスとエリヤもやって来て、彼らの神権時代の^{かぎ}鍵をジョセフ・スミスにゆだねました。」〔教義と聖約 110 章参照〕²

それから何年もたった 1892 年 4 月 6 日、ロレンゾ・スノー会長は別の会衆の前に立った。今回は、ほぼ完成したソルトレーク神殿の前であった。約 4 万人の末日聖徒がテンブルスクウェアの敷地内にあふれ、さらに約 1 万人が「近隣の家の屋根の上など、見通しの利く場所に集まった。」³ 神殿の最も高い尖塔の上にかさ石を置く儀式のために、大勢の人々が集まっていた。またその日には、後でそのかさ石の上に天使モロナイの像が設置されることになっていた。

当時十二使徒定員会会長であったスノー会長は、大管長会からの割り当てにより、ホサナ斉唱で聖徒たちの指揮を執ることになっていた。スノー会長は群衆にホサナ斉唱について説明しながら、神殿の業を自分がどれほど深く愛しているかを語った。

スノー会長は次のように述べている。「今日、かさ石を置くのに合わせて、あるいは置いた後に叫ぶ『ホサナ!』という言葉は、カートランド神殿でジョセフ・スミス大管長によって紹介されたものであり、そのときの聖会で使われた言葉です。その聖会では神の力が現れ、兄弟たちに全能者の示現が開かれました。これは尋常な言葉ではありません。この点をはっきりと理解してほしいのですが、これは神聖な叫びであって、今わたしたちが迎えようとしているような特別な機会にのみ用いられる言葉です。また、もう一点ははっきりと理解してほしいことは、兄弟姉妹の皆さんに、この言葉を口にするだけでなく、天の神への感謝で心を満たしてほしいということです。その神は、わたしたちを通して、この偉大で並外れた働きをついに完成されたのです。39年前の今日、この神殿の礎石、すなわち隅石が据えられました。それからの長い歳月の間に神が御自分の民であるわたしたちに授けてくださったすばらしい祝福を思い巡らしながら、わたしたちは聖徒たちがこの叫びを発するとき、自分の心からの思いとして叫んでほしいと願っています。心を感謝で満たしましょう。」スノー会長はホサナの叫びを実際に行き、次のように述べた。「さて、わたしたちが神殿の前に行き、この叫びを発するとき、この町のすべての家が揺れ動き、この町のあらゆる場所にいる人がその声を聞き、その声が永遠の世に届くように、すべての男性と女性が声を限りにこの言葉を叫んでほしいと思います。」⁴

かさ石を置く儀式についての次の報告では、式の間、聖徒たちが敬虔さを保ち、興奮した様子だったことが伝えられている。

「ちょうど正午になったとき、ウィルフォード・ウッドラフ大管長が演壇の前に進み出て、集まった群衆からよく見える場所に立った。群衆は厳粛な静寂に包まれていた。ウッドラフ大管長が次のように言うと、人々の心は興奮に震えた。

『イスラエルの家のすべての皆さん、そして地のすべての国民の皆さんに申し上げます。わたしたちはこれから、預言者、聖見者、啓示者であるブリガム・ヤングによって据えられ、奉献された土台の上に立つ神の神殿のかさ石を置きます。』

そしてウッドラフ大管長がボタンを押して電気を入れると、神殿のかさ石がその場所にはっきりと収まった。その後の光景は、言葉の力では描写することができない。尊敬すべき十二使徒会の会長である使徒ロレンゾ・スノーが前に進み出て指揮を執り、4万人の聖徒たちが一斉に叫んだ。

『ホサナ、ホサナ、ホサナ、神と小羊に。アーメン、アーメン、アーメン。

ホサナ、ホサナ、ホサナ、神と小羊に。アーメン、アーメン、アーメン。

ホサナ、ホサナ、ホサナ、神と小羊に。アーメン、アーメン、アーメン。』

叫びに合わせて、その都度ハンカチが振られた。……喜びに満ちあふれ、無数の人々の目が涙でぬれていた。叫び声は周りの丘にこだまし、その声の大きさに地は震えているように思われた。この神殿のかさ石を置く儀式以上に壮大もしくは印象的な光景は、歴史に記されていない。ホサナの叫びが終わった途端に、大群衆は靈感に満ちた栄光の賛美歌『主の御霊^{みたま}は火のごと燃え』を一斉に歌い始めた。』⁵

それからちょうど1年後の1893年4月6日、聖徒たちが40年間働き続けて完成させたソルトレーク神殿がウッドラフ大管長によって奉獻された。ロレンゾ・スノー会長はその神殿の初代会長として奉仕するように召され、1898年9月に大管長となるまでこの召しを果たした。主の家で「わたしたちが成し遂げようとしている……力ある業」と自らが呼んだ業に励んだスノー大管長の献身を記念して、今日ソルトレーク神殿にはスノー大管長の肖像が掛けられている。⁶〔128ページの提案1参照〕

ロレンゾ・スノーの教え

神殿で、わたしたちは神が忠実な者のために備えておられる 驚くべき祝福について学ぶ

神がわたしたちに示してくださっている展望は壮大ですばらしいものであり、想像の及ばないものです。神殿に入ってください。そうすればお見せしましょう。皆さんの多くは神殿に来たことがあり、神を愛し最後まで忠実であり続ける者のために神が備えておられる驚くべき事柄について聞いたことがあると思います。……

……神は永遠にわたっていつまでも続く完全な幸福を末日聖徒にもたらすために、わたしたちが望み得る、あるいは想像し得るあらゆるものを備えてくださっています。⁷〔128ページの提案2参照〕

神殿の儀式によって、この世においても永遠にわたっても 家族を結ぶ力を持つ神聖なきずなを築く

神殿で結婚の聖約を交わすときに行われる麗しく、栄光に満ちた儀式の中で受ける約束について考えてください。結婚によって二人の末日聖徒が結ばれるとき、子供たちに関して永遠に及ぶ約束が二人に与えられます。⁸

わたしたちは、世の人々が聞いたならば驚くような事柄について、たくさんの知恵と知識を受けています。神殿で、わたしたちは死を迎えても解かれることなく

永遠に続くきずな、この世においても永遠にわたっても家族を結ぶ神聖なきずなを築くことができることを学んでいます。⁹ [128 ページの提案3 参照]

神殿で、亡くなった親族のために昇栄の儀式を受ける

神のすべての息子と娘は、昇栄と栄光を受けるために必要な機会を得るでしょう。……昇栄と栄光を得られる道は一つしかありません。わたしたちは罪の赦しゆるのためのバプテスマと、聖霊を受けるためのあんしゅの按手を受けなければなりません。これらやそのほかの儀式は昇栄と栄光を受けるために絶対に欠かせないものであり、福音を聞くことのできない時代に生きた場合は、その友によって受けることができます。わたしたちが今この世に来ているのは、これらの事柄を行うためです。少なくとも、それはわたしたちがやって来た主要な目的の一つです。この業の重要性については、どんなに強調しても強調しすぎることはありません。¹⁰

わたしたちは偶然この世に来たものではありません。特別な目的のために来たのであり、間違いなく、わたしたちが住んでいた別の世で事前に用意された計画によって、この世に来たのです。さて、神殿でわたしたちは亡くなった親族のために大いなる業を成し遂げようとしています。時々、わたしたちが神殿で行っている働きを神が認めてくださったという重要な示しを受けることがあります。先祖のために働いている人々が、非常にたぐいまれな示しを経験してきました。わたしたちが成し遂げようとしているのは力ある業です。神殿での働きが進められる中で、無数の人々が死者のためにバプテスマを受けてきました。……

さて、わたしたちの神殿では、人々は自分の先祖を何代までであろうとどってはやって来て、亡くなった父親や祖父、曾祖父そうそふなど、さかのぼれるかぎりの先祖のためにバプテスマを受けることができます。さらに、さかのぼれるかぎり、系図のすべての代について、妻をその夫に結び固めることができます。福音が人の子らに伝えられる前に生きていた一人の徳高い若者の例を考えてみましょう。……その男性は妻をめとり、子供をもうけました。しかし、皆さんやわたしのように福音を受け入れる特権にあずかることはありませんでした。それでも、男性は家族に道徳律を教え、妻と子供たちに愛情をもって優しく接しました。それ以上に何ができたでしょうか。この男性は福音を受け入れなかったという理由で罪に定められるべきではありません。受け入れられる福音がなかったからです。結婚したとき、神殿にも入れず妻をこの世においても永遠にわたっても自分に結び固めることができなかったという理由で、妻を失うのは妥当とは思えません。彼は自分の知る範囲で最善のことは行っただけであって、国の慣習に従い、この世において妻をめとったのです。わたしたちは彼の国の法律に従って挙行されたその結婚を尊重します。……わたしたちは系図をさかのぼれ

るかぎり、子供たちをその両親に、また妻をその夫に結び固めます。¹¹

救い主はあるとき次のようにおっしゃいました。「よくよくあなたがたに言っておく。死んだ人たちが、神の子の声を聞く時が来る。今すでにきている。」そして続けて、次のような驚くべき表現をお使いになりました。「そして聞く人は生きるであろう。」〔ヨハネ5：25〕わたしはほとんどの人が真理を受け入れると信じています。彼らは神の御子の声を聞くでしょう。神の御子の神権を持つ者の声を聞き、真理を受け入れて、生きるでしょう。神殿でとても勤勉に働いている兄弟姉妹は、自分が身代わりとなってこれらの儀式を執行した親族や友人の、言わば救い手となる榮譽に浴するでしょう。¹²〔128 ページの提案4 参照〕

神殿と家族歴史の業は、たとえ犠牲を求められるとしても 行うように努めるべきである

さて、すべての男性と女性が、神殿に入ってこの務めを果たすという目標を心に抱く必要があります。これは大いなる務めであり、重要な務めでもあります。次の世に行って、そこに住む亡くなった友人に出会うとき、もし彼らが昇栄と栄光を受けるために必要な務めをわたしたちが行っていなかったならば、わたしたちはあまり喜びを感じず、楽しい再会というわけにはいなくなることでしょう。

心地よく働ける都合の良い機会ばかりを待たず、たとえ少し犠牲を払う必要があっても、自分からこの務めを果たすように努めるべきです。……わたしたちは兄弟姉妹がこの重要な業をなおざりにすることのないよう切に望んでいます。安息の千年〔福千年〕の間にどんなことが主要な務めになるか御存じでしょうか。それは現在、わたしたちが末日聖徒に果たすように強く促そうとしていることそのものです。この地の至る所に神殿が建てられ、兄弟姉妹がそこに入って、業を速やかに行い、人の子が御自分の王国を御父にささげる前に必要な務めを成し遂げるために、恐らく昼夜を問わず働くことになります。この業は、人の子が御自分の王国を御父にささげるために降臨して王国をお受けになる前に成し遂げなければならないのです。¹³〔129 ページの提案5 参照〕

清い心をもって神殿に入るとき、主はわたしたちにとって 最良だと判断されることに従って祝福してくださる

これらの神殿に入るとき、わたしたちは自分がほかのどんな場所にいるときよりも主の御霊を豊かに受けるのを感じます。神殿は主の建物であり、主の最も重要な業がその中で行われています。……

……人々がこれらの神殿に入り、入る前に比べてより良い気持ちを抱き、もっと良い働きをしようと心に決めて〔出て〕行くことに、わたしは満足を覚えます。



神殿に入るようにという勧めに応じる備えができるように、
両親は子供を助けることができる。

それが、わたしたちが末日聖徒に抱いてほしいと願っている気持ちです。……

……兄弟姉妹の皆さん、忠実であり、根気強くあってください。神殿に行って、皆さんの務めを行ってください。そうすれば皆さんはその務めを楽しみ、この世の不愉快な事柄をはねのける備えをよりしっかりとすることができましょう。¹⁴

清い心と悔いる霊をもって神殿〔に入る〕人は、必ず特別な祝福を受けてそこから出る〔でしよう〕。ただし、それらの祝福は時として、あるいはもしかすると多くの場合、一部の人が期待するものとは異なるものかもしれません。……聖徒たちの中には、天使の働きを目にすることや、……神の顔を見ることを期待している人がいるかもしれません。そのような示しを受けても、皆さんの益とはならないかもしれません。主は一人一人にとって最善のことを御存じであり、受ける者に最も大きな益がもたらされるように、状況に合わせて賜物たまものをお与えになります。主の家に入るすべての忠実な末日聖徒は、大きな満足をもたらす祝福にあずかると期待して差し支えないでしょう。神殿に入る人は、そこを〔出る〕前に、将来の生活で役立つものが心と理解力とに生じる〔でしよう〕。真の末日聖徒として、彼らはこれを受けるに値しているから〔です〕。¹⁵〔129 ページの提案 6 参照〕

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。そのほかの提案については、v – vii ページを参照する。

1. ソルトレーク神殿のかさ石を置く儀式の話を読んでください（122 – 124 ページ）。神殿の奉獻式に出席したことがあれば、そのときどのように感じたか考えてください。わたしたちはホサナ斉唱に参加するとき、主に何を表そうとしているでしょうか。
2. 「神殿に入ってください」というスノー大管長の勧めを読んでください（124 ページ）。この勧めにどのように応じることができるか、また、家族や友人がこの勧めに応じるよう、どのように働きかけることができるか考えてください。
3. 124 ページの第 2 の項を研究しながら、神殿の儀式を受けることや、神殿の聖約を交わすことによって得られる祝福について深く考えてください。これらの祝福は、あなたやあなたの家族にどのような影響を及ぼしてきたでしょうか。
4. 125 ページから始まる項を読んでください。わたしたちはこの業を行うとき、どのような形で「親族や友人の……救い手」として行動しているのでしょうか。教会はわたしたちを助けるためにどのような支援手段を提供

しているでしょうか。

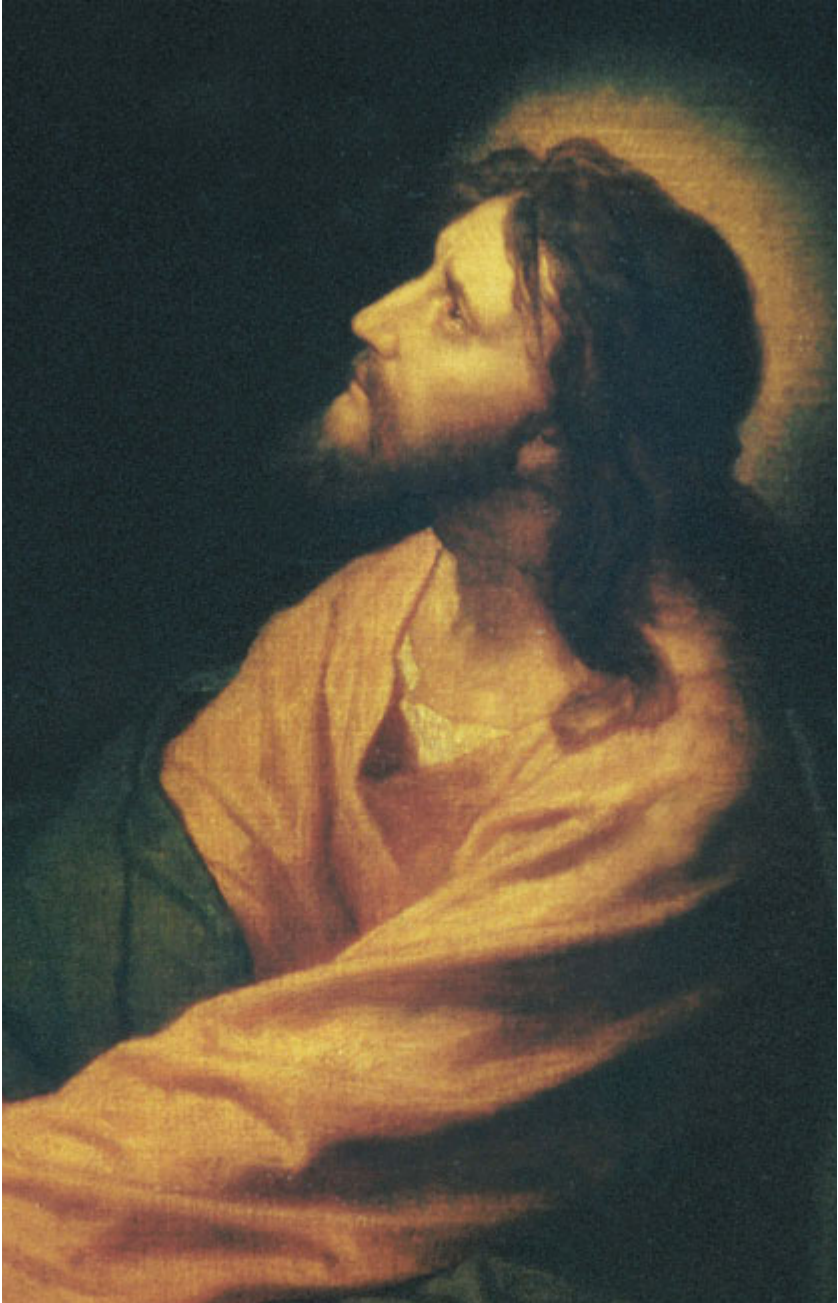
5. 神殿と家族歴史の業に対して、この業の価値に見合うだけの注意を払い、時間を注ぐために、どのようなことができるでしょうか（126 ページの10 行目から始まる項を読んでください）。
6. 神殿活動に参加するときに受けられる個人的、霊的な祝福として、どのようなものがあるでしょうか（例として、126, 128 ページ参照）。

関連聖句 —— 教義と聖約 97 : 15 - 17 ; 109 : 1 - 23 ; 128 : 15 - 18 ; 132 : 19 ; 138 : 57 - 59

教える際のヒント —— 「誠実なあらゆる意見に対してあなたが肯定的に対応するならば、生徒が話し合いに参加する自分の能力について自信を持つように助けることになる。例えば、次のように言うといい。『答えてくださったことを感謝しています。とても深く考えられた意見です。』あるいは……『よい例ですね。』『今日皆さんがお話ししてくださったすべてのことに感謝しています。』（『教師、その大いなる召し』 64）

注

1. エライザ・R・スノー・スマス, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow* (1884 年), 11 で引用
2. *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 11 - 12 で引用
3. J. H. A., *Millennial Star*, 1892 年 5 月 2 日 付, 281 参照
4. *Millennial Star*, 1892 年 7 月 4 日付, 418
5. *Millennial Star*, 1892 年 5 月 2 日付, 281 - 282
6. *Millennial Star*, 1895 年 6 月 27 日付, 403
7. *Deseret Semi-Weekly News*, 1897 年 3 月 30 日付, 1
8. *Deseret Semi-Weekly News*, 1897 年 3 月 30 日付, 1
9. "Funeral Services of Apostle Erastus Snow," *Millennial Star*, 1888 年 7 月 2 日付, 418 で引用
10. *Millennial Star*, 1895 年 6 月 27 日付, 405
11. *Millennial Star*, 1895 年 6 月 27 日付, 403 - 404。『歴代大管長の教え —— ウィルフォード・ウッドラフ』 177 も参照
12. *Deseret Weekly*, 1893 年 11 月 4 日付, 609
13. *Millennial Star*, 1895 年 6 月 27 日付, 404 - 405
14. *Deseret Semi-Weekly News*, 1897 年 3 月 30 日付, 1
15. *Deseret Weekly*, 1893 年 4 月 8 日付, 495 に掲載された、スノー大管長の説教の詳細な記録をもとに編集



ゲツセマネの園で、救い主は「わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください」と言われた（ルカ 22：42）。



「わたし自身の考えですのではなく、 〔御父の〕み旨を求めている」

「自分の思いを御父の御心^{みこころ}に従わせ、『御父の御心は何だろうか。
わたしたちがこの世にいるのは御父に仕えるためなのだから』
と思えるようにする必要があります。
そうすれば、行うことはすべて成功します。」

ロレンゾ・スノーの生涯から

1899年3月31日、ロレンゾ・スノー大管長はブリガム・ヤング・アカデミー（ブリガム・ヤング大学の前身）を訪れた。そこには大管長の85歳の誕生日を祝うために大勢の末日聖徒が集まっていた。午前中、スノー大管長はディボーションナルで兄弟たちに向かって説教を行った。それと並行して、姉妹たちも大管長会と十二使徒定員会の会員の夫人たちの指導の下で同様の集会を開いた。午後には、全員が一堂に会した。

午後の集会の中で、23人の子供が「進み出て演壇に立ち、スノー大管長の方を向いて歌を2曲歌った。……そして歌い終えると、一人ずつ大管長に花束を渡した。」スノー大管長は子供たちに感謝を表し、祝福の言葉を授けた。次にブリガム・ヤング・アカデミーの8人の学生が一人ずつ演壇に上がった。それぞれの学生が、校内の組織を一つずつ代表して、入念に準備した賛辞を預言者に贈った。こうした愛と称賛の言葉にこたえて、スノー大管長は次のように述べた。

「兄弟姉妹の皆さん、これほどのことをしていただき、何と申し上げればよいのか分かりません。家に帰って考えたいと思います。でも、少しあいさつするよう期待されているでしょうし、何か言うべきだと思うのですが、適切な言葉がほんとうに見つかりません。ただ、次のことを申し上げたいと思います。こうして皆さんに敬意を表していただいているのは、ロレンゾ・スノー個人としてではなく、わたしの兄弟たち、顧問たち、そして十二使徒定員会の会員たちとともに代表して働いている大義のゆえであることを、わたしははっきりと理解しています。……わたしの成し遂げてきたことが何であろうと、それはロレンゾ・スノーの働きではないと実感しています。この大管長という地位に至るまでに経験してき

た事柄も、ロレンゾ・スノーがしたことではなく、主が行われたことなのです。イエスは地上におられたとき、次のような驚くべき表現をお使いになりました。わたしはこの言葉についてずっと考えており、どんな務めを果たすときも常にそれが頭にあります。『わたしは、自分からは何事もすることができない。ただ聞くままにさばくのである。そして、わたしのこのさばきは正しい。』さて、なぜ主は御自分の裁きは正しいとおっしゃったのでしょうか。主は次のように述べておられます。『それは、わたし自身の考えですのではなく、わたしをつかわされたかたの、み旨を求めているからである。』〔ヨハネ5：30〕兄弟姉妹の皆さん、これこそわたしが実践しようと努めてきた原則です。わたしの天の御父、そして皆さんの天の御父が実際におられることを示されて以来、わたしはそのように御父の御心を行おうと努めてきました。……

皆さんがわたしやわたしの顧問や十二使徒定員会に敬意を表すとき、実は皆さんは主に敬意を表しているのです。自分からは何事もすることができないことを、わたしたちは全員、ずいぶん前から悟っています。イエスがこの世にいたときに従われた原則に従ったときにのみ、わたしたちの働きは成功につながってきました。皆さんの場合も同じです。』¹

ロレンゾ・スノーの教え

わたしたちは神の御心^{みこころ}を求めるときに、失敗することのない道を進む

人が失敗することなく進むことのできる道があります。期待に反するどのようなことが起ころうとも、一見失敗のように思える結果になろうとも、一般的に言って、ほんとうの意味で失敗することはありません。……時々、わたしたちは後退しているのではないかと思えることがありました。少なくとも、神の思いと望みに関して十分に光を受けていない人々にはそう思えることがありました。教会は理解しがたい事柄を経験し、民は多大な犠牲を払ってきました。……しかし、わたしたちはそうした犠牲を通して前進を遂げてきたのであって、一つの民として、一度も失敗したことはありません。なぜ失敗したことがないのでしょいか。民が全体としてまことの命の原則にしっかり思い^{みたま}を向けて、自分たちの義務を果たしてきたからです。……民は概して主の御霊を受け、それに従ってきました。だから失敗することがなかったのです。個人についても同じことが言えるでしょう。だれもが失敗することなく進むことのできる道があります。それは物質的な事柄にも霊的な事柄にも当てはまります。教義と聖約の書にある次の聖句で、主は鍵となる言葉を与えてくださっています。

「あなたがたがわたしの栄光にひたすら目を向けるならば、あなたがたの全身は光に満たされ、あなたがたの中に暗さがなくてあろう。そして、光に満たされるその体はすべてのことを悟る。それゆえ、あなたがたの思いがひたすら神

に向けたものとなるように、自らを聖めなさい。』〔教義と聖約 88：67 - 68〕

これこそ人が常に成功するための鍵です。パウロは次のように言っています。

「目標をみざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである。』〔ピリピ 3：14〕

すべての末日〔聖徒〕が絶えず目指していなければならない大いなる目標。その賞与とは何でしょうか。……「わたしの父が持つておられるすべてが、彼に与えられるであろう。』〔教義と聖約 84：38〕

救い主はあるとき思いがけないことをおっしゃいました。ヨハネによる福音書第 5 章には次のように記されています。

「わたしは、自分からは何事もすることができない。』〔ヨハネ 5：30〕

これは驚くべきことです。もろもろの世界をお造りになった御方、肉体をまとしてこの世に降^{くだ}って来て、大きな奇跡を行い、人類家族の救いのためにカルバリの丘で御自分の命を犠牲にされた御方が、「わたしは、自分からは何事もすることができない」と言われたのです。主は続けて次のように言っておられます。

「ただ聞くままにさばくのである。そして、わたしのこのさばきは正しい。それは、わたし自身の考えですのではなく、わたしをつかわされたかたの、み旨を求めているからである。』〔ヨハネ 5：30〕

これはすばらしい言葉であり、非常に重要な意味を持っています。さて、わたしたちが望むのは、物質的なことであろうと霊的なことであろうと、人生でのすべての行いや取り組みにおいてこの精神を持ち、自分のことについては考えないようにすることです。わたしたちは神から与えられているお金や知識をどのように用いるべきかを知るよう努力する必要があります。その答えは簡単です。神の栄光のために用いるのです。わたしたちは神の栄光にひたすら目を向けなければなりません。そのために前世を後にしてこの世に〔来た〕のです。いと高き神の業を推し進めるように努め、イエスが感じておられたように「わたしは、自分からは何事もすることができない」と感じるように努める必要があります。そうすれば^{きょう}も明日も、今週も来週も、神の業のために行動し、神の栄光にひたすら目を向けているかぎり、失敗することはあり得ないのです。² [137 ページの提案 1 参照]

神はその御心^{みこころ}に従う人に、御自分の業において
成功を取める力を授けてくださる

わたしたちは自分からは何事もすることができません。イエスは次のようにおっしゃっています。「よくよくあなたがたに言うておく。子は父のなさることを見てする以外に、自分からは何事もすることができない。父のなさることで

あればすべて、子どもとおりにするのである。』〔ヨハネ5：19〕主がこの世に
来られたのは、御自分の思いではなく、御父の御心を行うためでした。わたし
たちも同じ望みと決意を持たなければなりません。努力を求められる事柄が生
じたときには、自分の思いを御父の御心に従わせ、「御父の御心は何だろうか。
わたしたちがこの世にいるのは御父に仕えるためなのだから」と思えるように
する必要があります。そうすれば、行うことはすべて成功します。今日や明日
にはその成功を見ないかもしれませんが、それでも最終的には成功すること
でしょう。³

「モーセは神に言った、『わたしは、いったい何者でしょう。わたしがパロのと
ころへ行って、イスラエルの人々をエジプトから導き出すのでしょうか。』」〔出エ
ジプト3：11〕……

「モーセは主に言った、『ああ主よ、わたしは以前にも、またあなたが、しもべ
に語られてから後も、言葉の人ではありません。わたしは口も重く、舌も重い
です。』」〔出エジプト4：10〕……

わたしが読んだこれらの聖句から、次のことが分かります。神はモーセを召
し出し、特別な業を成し遂げるようお命じになりました。しかしモーセは、自
分は求められたことを行う能力と適性に欠けていると感じました。あまりに大
いなる業だったからです。その業の本質と性質はあまりに深遠であり、モーセ
は自分にはそれを成し遂げるために求められる力も能力もないと感じました。
自分の弱さを感じ、ほかの人に目を向けてくださるよう神に願いました。……
モーセは自分の思いが主とは異なることを告げ、次のように言いました。「わた
しは、いったい何者でしょう。わたしがこの大いなる業を成し遂げるように遣
わされるのでしょうか。わたしが持つ能力で成し遂げられるとはどうい思え
ません。」……

これがモーセの抱いていた思いと認識であり、モーセは神にもそのように考
えていただきたいと望みました。これは世の初めからあったことです。主が人
をお召しになると、その人は自分には力がないと感じるのです。皆さんに説教
を行うように召される長老たちもそうです。福音の教導者として地のもろもろ
の国へ出て行くように召される長老たちもそうです。彼らは自分はふさわしくな
いと感じます。自分は適任ではないと感じるのです。……

さて、エレミヤも、召されたときにモーセと同じ思いを抱きました。エレミヤ
によれば、主はエレミヤをイスラエルの家だけでなく、周りのすべての国々の預
言者としてお召しになったのです。神が初めてエレミヤに御姿を現されたとき、
エレミヤはジョセフ・スミスと同様、ほんの若者にすぎませんでした。ジョセフ
はわずか14歳くらいで、ある意味で子供にすぎず、世の知恵と知識に関して言
えば、無名の人物でした。エレミヤも同じでした。最初に神から召されたとき、

エレミヤは次のように言っています。「わたしはほんの若者にすぎません。あなたがわたしの手にお求めになるこの大いなる業を成し遂げ、わたしの肩に負わずとおっしゃるこれらの大きな責任を果たすことがどうしてできるでしょうか。」エレミヤの心も思いも、この大いなる業を行うことに前向きになれなかったのです。しかし、神はエレミヤが安心するよう、……次のように言われました。「わたしはあなたをまだ母の胎につくらないさきに、あなたを知〔っていた。〕」神は〔前世の〕霊界でエレミヤを知っており、エレミヤは主から求められたことを成し遂げるだろうとおっしゃいました。「わたしは……あなたがまだ生れ^{うま}ないさきに、あなたを聖別し、あなたを立てて万国の預言者とした。」〔エレミヤ 1:5-6 参照〕エレミヤは出て行って、全能者の力によって、主が自分の手にお求めになったことを成し遂げました。……

さて、主が行われることは人が行うこととは非常に異なっています。主は異なる方法で働かれるのです。使徒パウロはそう述べています。「あなたがたは召されている。知恵のある者が召されるのではなく、神は知者をはずかしめるために、愚かな者を召されたのである。」〔1 コリント 1:25-27 参照〕神がお召しになった使徒たち、すなわち神の御子イエスが召し、手を置いて御自分の業を成し遂げるための神権と権能をお授けになった使徒たちは、高い教育を受けた人々ではありませんでした。学問を理解していたわけでもなく、ユダヤで高い地位にあったわけでもありませんでした。貧しく、無学で、世の卑しい職業に就いていた人々でした。……さて、主は人とは異なる御方です。主がお与えになる召しは、人が召す職責とは異なります。そして非常に多くの場合、人々は神が人に召しを与える際になさることに〔困惑〕します。最も優れた者、最も知恵ある者でさえも度々〔困惑〕します。モーセは自分が主から求められたことを成し遂げるのを、主はどのようにして可能にしてくださるおつもりなのかと〔困惑〕しましたが、それは後に知ら^{はら}されました。モーセが大いなるエホバにまみえたとき、主はモーセが自分の同胞であるイスラエルを説得できるように、驚くべき方法でモーセに助けと支援をお与えになりました。モーセはイスラエルと話し合い、自分の使命を告げ、民は最終的に同意しました。民はモーセの勧告と指導を受け入れ、モーセは彼らをエジプトの奴隷の地から導き出しました。モーセは成功を収めました、彼自身の知恵によって成功したわけではありませんでした。モーセはすべての成功を、自分をお召しになった全能の神によるものであるとしました。わたしたちも同じです。……

さて、神がわたしたちをお召しになったと言えは十分でしょう。神がお求めに〔ならないかぎり〕わたしたちは教えを説きません。イスラエルの長老たちの中には、福音を宣^のべ伝えるように、また、託された義務と責任を果たすように召されたとき、心にその重さを感じなかった人はほとんどいません。これまでにこの説教壇から話してきた最も優れた話者の中にも、説教を求められるときに



「モーセはすべての成功を、自分をお召しになった全能の神によるものとしました。」

は恐れを抱き、会衆の信仰と支えを求めたいと感じる人がいることに気づきます。彼らはエホバの力によって立ち、恐れ、震えながら主の御心を宣言してきました。しかし、彼らは自分自身の力と知恵によって末日聖徒にそのように説教を行ったのではありませんでした。大学教育の恩恵にあずかることはなかったかもしれませんが、それでも彼らは、自分自身の力に頼ることなく、福音の力と勢力によって人々の前に立つのです。⁴

わたしたちは必ずしも自分の望むことを行えるわけではありませんが、なすべきことを行う力を受けるでしょう。主がそのための力を授けてくださるからです。⁵ [138 ページの提案 2 参照]

わたしたちは神の御名によって行動するよう召されており、自分
が行うすべての善いことに神の御手があることを認める

わたしたちは、自分たちが行うことはすべて主なるイスラエルの神の御名によって行い、自分たちが行うあらゆることに全能者の御手があることを喜んで認めます。モーセはイスラエルの子らをエジプトでの奴隷の状態から解放する者として立ったとき、普通の解放者のようには現れませんでした。神から授

かった力と権能によって民を救い出すように命じられ、主なるイスラエルの神の御名によって出て行ったのです。そしてこの務めを受けて民の前に現れた瞬間からその働きを成し遂げるまで、主の御名によって、また主の御名を通して行動しました。自分自身の知恵や独創的な考えによって行動したのでも、ほかの人々よりも優れた英知を持っていたから行動したのでもありませんでした。主は燃えるしばの中でモーセに御自身を現し、出て行って特別な業を成し遂げるようお命じになりました。それは一つの大きい民の平安と幸福と救いに関する業であり、民の成功と繁栄は、モーセが天の神から啓示されたことを命じられたとおりに実行するかどうかにかかっています。そしてモーセの成功と繁栄は、彼に割り当てられた業が彼自身の考えついたものではなく、エホバから出たものであったという事実から、完全に保証されていました。……

わたしたちに関しても同じです。現在成し遂げられようとしている大いなる業、すなわち地のもろもろの国から民を集める業は、ある人が、またはある複数の人々が考え出したものではありません。全能の主から出たものなのです。⁶

神がわたしたちのよりどころです。わたしたちのすべての働きや務めについて、またわたしたちの務めがもたらすすべての成功について、それを成し遂げてこられたのはいつも神であったと考えています。⁷

わたしたちの長兄であられるイエスと同じように、わたしたちは御父の御心と業を行うという大いなる目的のためにこの世にきました。このことによって、平安と喜びと幸福を見いだすことができ、神の知恵と知識と力が増し加えられます。これ以外の方法では約束された祝福は得られません。ですから義に献身しましょう。お互いに皆で助け合って、もっと善い人に、もっと幸福になりましょう。すべての人に善を行い、だれにも悪を行わないようにしましょう。神をあがめ、神の神権を持つ者に従いましょう。良心を常に啓発して、それを維持し、聖なる御霊みたまに従いましょう。気を落とすことなく、善いものにしっかりつかまり、最後まで堪え忍びましょう。そうすれば皆さんの喜びの杯はあふれるほどに満ちるでしょう。それは、皆さんが受けた試練や、誘惑のもとで受けた苦しみ、激しい苦難、心の切なる望みや涙に対して、大きな報いを受けるからです。そうです、わたしたちの神は皆さんに、あせることのない栄光の冠を授けてくださるのです⁸ [138 ページの提案3 参照]。

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。そのほかの提案については、v - vii ページを参照する。

1. 132 ページから始まる項を研究してください。自分が神の栄光にひたす

ら目を向けているとき、どのようにそれが分かりますか。この世には注意をそらそうとするものが非常に多くある中で、子供たちが神の栄光にひたすら目を向けていられるように、両親はどのような助けができるでしょうか。

2. モーセとエレミヤについてスノー大管長が述べている事柄を読んでください（134 - 135 ページ）。これらの話は、わたしたちが神権定員会や扶助協会、教会のそのほかの組織で奉仕するときにとどのような助けとなるでしょうか。
3. わたしたちは「主の御名^{みな}によって」奉仕しなければならないと、スノー大管長は教えています（136 - 137 ページ）。主の御名によって行動している人とは、どのような人でしょうか。あなたが主の御名によって奉仕できる機会について考えてください。
4. 本章の中でスノー大管長は成功という言葉を経度を幾度も用いています。神がおおえになる成功は、この世が定義する成功とどのように異なっているでしょうか。神の御心^{みこころ}に従うときに成功が保証されるのはなぜでしょうか。

関連聖句 —— ピリピ 4 : 13 ; 2 ニーフアイ 10 : 24 ; モーサヤ 3 : 19 ; ヒラマン 3 : 35 ; 10 : 4 - 5 ; 3 ニーフアイ 11 : 10 - 11 ; 13 : 19 - 24 ; 教義と聖約 20 : 77, 79 ; モーセ 4 : 2

教える際のヒント —— 「沈黙を恐れてはならない。質問に答えたり、自分の気持ちを表現したりするのに考える時間を必要とすることがある。質問を投げかけた後、霊的な経験を分かち合った後、あるいは生徒が自分の考えをよく表現できないときに、間を置くことが必要である。」（『教師、その大いなる召し』67）

注

1. "Anniversary Exercises," *Deseret Evening News*, 1899 年 4 月 7 日付, 9 - 10 で引用
2. "The Object of This Probation," *Deseret Semi-Weekly News*, 1894 年 5 月 4 日付, 7
3. Conference Report, 1899 年 10 月, 2
4. *Salt Lake Daily Herald*, 1887 年 10 月 11 日付, 2
5. *Deseret News*, 1861 年 5 月 15 日付, 82
6. *Deseret News*, 1869 年 12 月 8 日付, 517
7. *Salt Lake Daily Herald*, 1887 年 10 月 11 日付, 2
8. エライザ・R・スノー・スミス, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow* (1884 年), 487 で引用



セントジョージタバナクル。この建物で、ロレンズ・スノー大管長は
什分じゅうぶんの一の律法についての最初の説教を行い、その後、一連の説教を行った。



じゅうぶん

什分の一，わたしたちが守られ， 進歩するための律法

「什分の一の律法は、かつて人に示された律法の中で最も大切なものの一つです。……この律法に従うことによって、繁栄と成功という祝福が聖徒たちに与えられるのです。」

ロレンゾ・スノーの生涯から

1899年5月初め、ロレンゾ・スノー大管長はセントジョージの町をはじめとするユタ州南部の入植地を訪れるようにとの促しを感じた。そこで直ちに、数人の中央幹部を含め、その長旅に同行する一団を組織し始めた。

スノー大管長は旅の手配をしている間、なぜ行くのかをだれにも告げなかった。大管長自身もその理由が分からなかったからである。「ソルトレークを出発したとき、何のためにこれら南部の入植地に行くのか、わたしたちには分かりませんでした」と、スノー大管長は後に述べている。¹しかし、一行がセントジョージに到着した直後の5月17日、主の御心^{みこころ}がその預言者に「はっきりと示され」た。²1899年5月18日に開かれた集会で、スノー大管長は次のように宣言している。

「兄弟姉妹、皆さんに対する主の言葉は次のとおりです。皆さんは昇栄と栄光を受けるという輝かしい将来を約束されている民として、自分たちに求められていることを実行する必要があります。どのようなことでしょうか。そうです、それは機会あるごとに皆さんが耳にしてきたことです。恐らく皆さんはもう聞き飽きていることでしょう。……皆さんに対する主の言葉は、決して新しいものではありません。ただこれだけです。『将来に備え、正しい基の上にしっかりと足場を築きたいと望むすべての末日聖徒が、主の御心を行い、主の什分の一を完全に納めるべき時が来た。』これが皆さんに対する主の言葉です。また、これはシオンの地に築かれたすべての入植地の人々に対する主の言葉となります。わたしがここを去り、皆さんがこのことについて考えるとき、すべての人が立ち上がって什分の一を完全に納めるべき時^{あわ}が来たことを、皆さん自身も悟るでしょう。主はこれまでわたしたちを祝福し、憐れんでくださいました。しかし今、主はわたしたちに、主から命じられていることをこれ以上ほうっておかず

に、立ち上がって実行するようお求めになっています。わたしはこのシオンのステーキで皆さんに申し上げることを、組織されているすべてのシオンのステーキの皆さんに申し上げます。今、わたしの言葉を聞いている人で、今後什分の一を完全に納めずに満足できる人はいません。」³

スノー大管長はそれまで50年間使徒として働いていたが、説教の中で什分の一の律法に触れたことはほとんどなかった。しかし、ユタ州セントジョージで啓示を受けたことが転機となった。スノー大管長は後に次のように述べている。「この什分の一に関して受けた〔啓示〕ほど完全な啓示を受けたことはありませんでした。」⁴ セントジョージを出発したスノー大管長の一行は、ユタ州南部の町を回り、ソルトレーク・シティーに帰るまでに途中で24の集会を開いた。スノー大管長は26回の説教を行い、すべての説教において、什分の一の律法に従うよう聖徒たちに勧告した。

一行は5月27日にソルトレーク・シティーに戻った。ある新聞記者は次のように述べている。「大管長はソルトレークを出発した日よりも丈夫で元気そうに見える。」「驚くほど見事に旅に耐えた」と評されたことに対して、85歳の預言者はこう述べている。「確かに皆にそう言われます。……あの旅のおかげで元気になりました。あれほど気持ちよく旅したことはありません。主が聖徒たちの祈りにこたえて、わたしを支えてくださっているのを感じます。」⁵

スノー大管長は自分自身の健康のことに加えて、ユタ州南部に住む聖徒たちの信仰と義について感じたことも述べている。旅先で一行は「心からの喜びと感謝をもって温かく」迎えられたと、大管長は言っている。⁶ そして什分の一の律法に従うよう聖徒たちに勧告したときには、「主の御霊が人々のうえに降り、彼らは非常な喜びを味わい、この原則をその精神に従って厳密に守ることを各自が心に誓いました」と報告している。⁷ この地域に住む聖徒たちの全般的な状況について尋ねられ、スノー大管長は次のように答えている。「彼らは快適な家に住み、身なりもとてもきちんとしていて、地から生じる良い食べ物や飲み物を豊かに得ているようです。セントジョージステーキの人々は、ひどい干ばつに苦しんでいます。この地方で前例のない深刻な干ばつですが、聖徒たちは間もなく大地が潤うだろうという信仰を抱いています。」⁸

5月29日から30日にかけて、スノー大管長は什分の一の律法について2度の説教を行った。まず若い女性相互発達協会の役員に向かって話し、次に若い男性相互発達協会の役員に向かって話した。⁹ 2度目の説教の終わりに、七十人のB・H・ロバーツ長老が次の決議案を提示し、出席者が全会一致で支持した。「決議事項。わたしたちは今スノー大管長によって提示された什分の一の教義を、わたしたちに対する主の現在の言葉および御心として受け入れる。心を尽くして受け入れる。わたしたちは自らそれを守り、末日聖徒が同様に言うよう、自分にできることをすべて行う。」¹⁰ 7月2日、ソルトレーク神殿

で聖会が開かれ、すべての中央幹部と教会のすべてのステーキとワードの代表者が、この集會に備えて断食と祈りを行ったうえで出席した。聖会では、出席者が同じ決議案を全会一致で受け入れた。¹¹ スノー大管長自身もこの決議に忠実に従い、多くのステーキで什分の一の律法について教え、ほかの教会指導者たちによる同様の取り組みを監督した。

ユタ州南部を訪れてから数か月間、スノー大管長のもとには末日聖徒が決意も新たに熱心に什分の一の律法を守っているという報告が届いた。この知らせは大管長に「この上なく大きな喜びと満足感」をもたらした。¹² この律法に従い続けることによって「全能者の祝福がこの民のうえに注がれ、教会はかつて経験したことがないほど力強く、急速に発展する〔ことになる〕」と、スノー大管長は知っていたからである。¹³

スノー大管長は聖徒たちに、什分の一の律法に従うとき、個人として物質的にも霊的にも祝福を受けるだろうと繰り返し断言していた。¹⁴ その約束の一部が、1899年8月に成就した。セントジョージの聖徒たちが干ばつから一時的に解放されたのである。彼らの信仰が報われて2.93インチ〔7.44センチ〕の雨が降ったが、これはそれまでの13か月間の総降水量を上回る量であった。¹⁵ スノー大管長はまた、什分の一の律法に従うならば教会全体に祝福がもたらされることも約束していた。忠実な人々が納める什分の一によって、教会は負債から抜け出すことができると確信していたのである。それらの負債は、おもに迫害の結果として抱えたものであった。¹⁶ この約束は、スノー大管長が亡くなって5年後の1906年に成就した。1907年4月の総大会で、ジョセフ・F・スミス大管長は次のように発表している。

「教会歴史の中で、ここ数年ほど末日聖徒が例外なく、正直に什分の一の律法を守った時期はなかったと、わたしは信じています。1906年に聖徒が納めた什分の一は、ほかのどの年の什分の一をも上回っています。このことから、末日聖徒が自分たちの義務を果たしていること、福音を信じる信仰を持っていること、進んで神の戒めを守ること、そして恐らくかつてなかったほど忠実にこの律法に従っていることがよく分かります。もう一つお話ししたいことがあります。それはお祝いすべきことなのですが、主の祝福によって、また聖徒が忠実に什分の一を納めてきたことによって、わたしたちは債務をすべて払い終えることができました。今や末日聖徒イエス・キリスト教会は、直ちに返済できないような負債はまったくなくなりました。ついにわたしたちはいつでも支払いができる状態に到達しました。もう借金をする必要はありません。末日聖徒が自らの宗教を実践し、什分の一の律法を守り続けるならば、わたしたちは今後も借入れを必要としないでしょう。」¹⁷〔147ページの提案1参照〕

ロレンゾ・スノーの教え

什分の一じゅうぶんの律法は分かりやすく、だれでも従うことができる

すべての男性、女性、子供が……収入の10分の1を什分の一として納めるように、わたしは主の御名みなによって皆さんに心からお願いし、また祈ります。¹⁸

〔什分の一〕は難しい律法ではありません。……もし10ドルを受け取れば、什分の一は1ドルです。100ドルを受け取れば、什分の一は10ドルです。……とても分かりやすい律法です。¹⁹

〔次のように自問する人がいるかもしれません。〕ここにある什分の一の中から、幾らさざげればよいのだろうか。一部を自分のために取っておくことはできないのだろうか。主は非常に富んでおられるのだから、少しばかり差し引いてわたしのものとしても、まったく気になさらないだろう。そしてほんの少しだけを取り自分のものとしします。しかし、もし大半の末日聖徒と同じような良心を持っているとすれば、差し引いたごくわずかなもののために悩むこととなります。昼もそのことで多かれ少なかれ悩み、夜もそのことが心に浮かんで悩むでしょう。特権として享受できるはずの幸福を感じるができないからです。幸福が離れて行ってしまうのです。²⁰

体を半分だけ沈めてもバプテスマを受けたことにならないのと同じように、什分の一を部分的に納めても、少しも什分の一を納めたことにはならないのです。²¹

自分が受け取ったものの10分の1を納めることのできない人は一人もいません。²²

兄弟姉妹、わたしたちは皆さんにこの件について祈っていただきたいと思います。……お金に関して一部の人のように卑しい考えを持たずに、什分の一を納めなければなりません。……主がわたしたちに求めておられるのは、今、什分の一を納めることです。そして主は今後すべての人が什分の一を納めるように期待しておられます。わたしたちは10分の1とはどういうものであるか分かっているのですから、それを主に納めましょう。そうすれば、晴れやかな顔でビショップのもとに行き、神殿に行くための推薦状をもらうことができます。²³

主なるイスラエルの神の御名によって申し上げます。もし今後什分の一を納めるならば、主は過去〔に什分の一を納めなかったこと〕をすべて赦ゆるしてくださいさるでしょう。そして全能者の祝福がこの民に注がれるでしょう。²⁴

この原則をしっかりと心に留め、決して忘れないようにしてほしいと思います。繰り返し申し上げてきたように、わたしは次のことを知っています。もし今悔い改めて、これから後誠実に什分の一を納めるならば、主は末日聖徒が過去に什



スノー大管長は、什分の一を納めるように子供たちに教えてほしいと親と教師に勧告した。

分の一を納めるのを怠ったことを赦してくださいませでしょう。²⁵ [147 ページの提案 2 参照]

わたしたちは什分じゅうぶんの一を納めるときに、教会の業に貢献している

この教会は財源がなければ業を続けられませんでした。神はその財源を〔什分の一の律法によって〕与えてくださいました。神殿で、わたしたちは死すべき人にかつて授けられた祝福の中で最高のものを受けますが、それらの神殿は財源から得た資金によって建てられています。……現在、福音きよを宣べ伝えるために長老たちを世界各地に送り出していますが、そのための財源がなかったならば、決してこのように行うことはできません。……ほかにも資金を必要とする様々なことが絶えず生じています。……

もし一部の末日聖徒が什分の一を納めていなかったならば、〔1899 年の時点で〕この地にある 4 つの神殿は決して建つことがなく、昇栄と栄光にかかわる神の掟おきてと裁決を決して守ることができなかつたでしょう。末日聖徒にとっての第一の行動原則は、この什分の一の律法を守り、死者の昇栄と栄光にかかわる儀式を受けられる状況に自分を置くことによって、地を聖めることなのです。²⁶ [147 ページの提案 3 参照]

主は什分の一の律法に従う人を物質的にも靈的にも祝福してくださる

什分の一の律法は、かつて人に示された律法の中で最も大切なものの一つです。……この律法に従うことによって、繁栄と成功という祝福が聖徒たちに与えられるのです。²⁷

もしその律法を守るならば、……地は聖められるでしょう。わたしたちは主の祝福を受けるにふさわしい者とみなされ、財政面において、そしてすべての行いにおいて、物質的にも靈的にも支えと助けを受けるにふさわしい者と見なされるでしょう。²⁸

この教会の物質的な救いは……この律法に従うかどうかにかかっています。²⁹

末日聖徒の中には貧しい生活をしている人がいますが、少なくともわたしたちが什分の一の律法に従うまではいなくなることはないでしょう。³⁰

もし末日聖徒がこの律法に従うならば、わたしたちは遭遇するすべての悪から救い出していただけると、わたしは心から信じています。³¹

わたしたちが守られて安全であるように、また、義と聖さの道を進んでいくことができるように、特別に明らかにされた律法があります。この律法によって、わたしたちの住む地は聖められます。この律法によって、シオンは築き上げられて、邪悪で神を敬わない者たちによって倒されたり、その場所から追い払われたりすることが二度とないように確立されます。³²

わたしたちには神殿があり、神殿にかかわる祝福、すなわちかつて地上で人に執行された儀式の中で最高のものが与えられています、それはわたしたちがこの律法に従っているからなのです。³³

什分の一を納めることやそのほかの義務を誠実に果たすまでは、神の御顔を見る用意は決してできません。³⁴

わたしは分かりやすくお話ししてきました。申し上げておきますが、什分の一について皆さんにお伝えしてきた言葉は主から与えられたものです。今すぐ主の御霊に従って行動してください。そうすれば皆さんの目が開かれるでしょう。³⁵
〔147 ページの提案 4 参照〕

親と教師はまず自分が什分の一を納め、その後、
子供たちに同様にを行うよう教える責任がある

什分の一を納めるよう、幼いうちから〔子供に〕教えてください。母親の皆さん、どんなにわずかな額であっても、お金を得たときにはその10分の1を主に納めなければならないことを子供に教えてください。什分の一を完全に納めるように子供を教育してください。³⁶



什分の一基金は神殿の建設と維持管理の費用の一部に用いられる。

〔教会の〕役員と教師がその心と魂にこの律法の精神を受け止めるのは、適切でふさわしいことです。それによって、その同じ精神を次の世代の人々に伝え、その重要さと神聖さを彼らに強く訴える資格を十分に得ることができるからです。兄弟姉妹、皆さんは自分自身がこの律法に従うだけでなく、それをほかの人々に、すなわち次の世代の人々に教えるように求められています。……そして自分がその律法の精神を受け止める度合いに応じて、それを分かち合い、教えることができるでしょう。……

……わたしは皆さんの手に次のことを求めます。この律法に従うだけでなく、それを末日聖徒の子供たちに教えて、彼らの記憶の石板に刻みつけてください。子供たちが成長して分別のつく年齢に達したとき、「彼らはその律法を教わっており、若いころから従ってきた」と言われるようにしてください。³⁷〔147 ページの提案 5 参照〕

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。そのほかの提案については、v - vii ページを参照する。

1. スノー大管長が什分の一^{じゅうぶん}について啓示を受けた話を読んでください（140 - 142 ページ）。スノー大管長が喜んでセントジョージへ旅したことと、人々が喜んで什分の一の律法に従ったことについて考えてください。わたしたちはこの話から何を^{じゅうぶん}得ることができるのでしょうか。
2. 什分の一はどのような点で「難しい律法ではない」と言えるでしょうか（例として、143 ページ参照）。什分の一の律法に従うのは難しいと思う人もいるのはなぜでしょうか。スノー大管長の教えは什分の一を納めることについての証^{あかし}を得るうえでどのような助けとなるのでしょうか。
3. 144 ページから始まる項を研究してください。什分の一によって建てられた建物や運営されているプログラムから、あなたや愛する人々はどのような祝福を受けてきましたか。什分の一を納めることが特権であるのはなぜでしょうか。
4. わたしたちは什分の一の律法に従うときに祝福を受けるとスノー大管長は証しています（145 ページ）。什分の一の律法を通してあなたの生活にもたらされた祝福に、どのようなものがありますか。あなたの家族や友人の生活にもたらされた祝福に、どのようなものがありますか。
5. スノー大管長が親と教師に与えた勧告について考えてください（145 - 146 ページ）。「どんなにわずかな額であっても」子供たちが什分の一を納めることが大切なのはなぜだと思いますか。什分の一と献金を納めるよう子供たちに教える方法として、どのようなものがあるのでしょうか。

関連聖句 —— マラキ 3 : 8 - 10 ; 教義と聖約 64 : 23 ; 119 : 1 - 7

教える際のヒント —— 「準備したレッスンの内容をすべて提示しようとするあまりに、よい話し合いを急いで終えてしまうことのないように注意する。用意した資料をすべて教えることも大切ではあるが、生徒が御霊^{みたま}の影響を感じ、疑問に思っていたことの答えを受け、福音に対する理解を深め、戒めを守る決意を強めることの方がはるかに大切である。」（『教師、その大いなる召し』 64）

注

1. “In Juab and Millard Stakes,” *Deseret Evening News*, 1899年5月29日付, 5で引用
2. “In Juab and Millard Stakes,” 5で引用
3. *Millennial Star*, 1899年8月24日付, 532 - 533 ; *Deseret Evening News*, 1899年5月17日付, 2; *Deseret Evening News*, 1899年5月18日付, 2も参照; *Millennial Star* では, スノー大管長がこの説教を行った日を5月8日としているが, 同じ時期の別の資料から, 説教が行われたのは5月18日であったことが分かる。スノー大管長はまた, 5月17日にも什分の一について話している。
4. “President Snow in Cache Valley,” *Deseret Evening News*, 1899年8月7日付, 1で引用
5. “Pres. Snow Is Home Again,” *Deseret Evening News*, 1899年5月27日付, 1で引用。当時教会には40のステークがあった。
6. “Pres. Snow Is Home Again,” 1で引用
7. *Deseret Evening News*, 1899年6月24日付, 3
8. “Pres. Snow Is Home Again,” 1で引用
9. “The Annual Conference of the Young Men’s and Young Ladies’ Mutual Improvement Associations,” *Improvement Era*, 1899年8月号, 792 - 795 参照; アン・M・キャノン, “President Lorenzo Snow’s Message on Tithing,” *Young Woman’s Journal*, 1924年4月号, 184 - 186 も参照
10. B・H・ロバーツ, “The Annual Conference of the Young Men’s and Young Ladies’ Mutual Improvement Associations,” 795で引用
11. B・H・ロバーツ, *Comprehensive History of the Church*, 第6巻, 359 - 360 参照
12. Conference Report, 1899年10月, 28
13. “President Snow in Cache Valley,” *Deseret Evening News*, 1899年8月7日付, 2で引用
14. 例として, *Deseret Evening News*, 1899年6月24日付, 3 参照。同じ時期にスノー大管長が行った説教の筆記録と, 大管長の旅を伝えている同じ時期の新聞記事から, スノー大管長は聖徒たちが什分の一の律法に従うときに物質的にも霊的にも祝福を受けることを約束したが, 具体的にユタ州南部での干ばつが終わるとは約束していないことが分かる。
15. 西部地域気候センター, <http://www.wrcc.dri.edu/cgi-bin/cliMONtpre.pl?utstge> 参照
16. 例として, “The Annual Conference of the Young Men’s and Young Ladies’ Mutual Improvement Associations,” 793 参照
17. Conference Report, 1907年4月, 7
18. Conference Report, 1899年10月, 28
19. *Deseret Semi-Weekly News*, 1899年7月28日付, 10
20. Conference Report, 1899年4月, 51
21. *Deseret Evening News*, 1899年6月24日付, 3
22. “President Lorenzo Snow’s Message on Tithing,” 185で引用; 1899年5月29日にソルトレーク・シティーのアッセンブリーホールで開かれた集会の議事録から
23. *Deseret Semi-Weekly News*, 1899年7月28日付, 10
24. “President Snow in Cache Valley,” 2で引用
25. Conference Report, 1899年10月, 28
26. Conference Report, 1899年10月, 27 - 28
27. *Deseret Evening News*, 1899年6月24日付, 3
28. *Deseret Evening News*, June 24, 1899, 3.
29. “The Annual Conference of the Young Men’s and Young Ladies’ Mutual Improvement Associations,” 794で引用
30. *Deseret Semi-Weekly News*, 1899年7月28日付, 10
31. “President Lorenzo Snow’s Message on Tithing,” 185で引用
32. “Tithing” *Juvenile Instructor*, 1901年4月号, 216
33. “Tithing,” 215
34. “Conference of Granite Stake,” *Deseret Evening News*, 1900年5月21日付, 2で引用; 1900年5月20日にグラナイトステーク大会におけるスノー大管長の説教の詳細な記録から
35. *Deseret Semi-Weekly News*, 1899年7月28日付, 10
36. *Millennial Star*, 1899年8月31日付, 546
37. “Tithing,” 215 - 216



扶助協会—真実の慈愛と清い信心

「これ以上に崇高な目的をもって設けられた組織は
これまでにありませんでした。

その基本は真実の慈愛、すなわちキリストの純粹な愛です。」

ロレンゾ・スノーの生涯から

1901年の夏に、中央扶助協会会長会は、ソルトレーク盆地に住んでいる扶助協会の姉妹たちのために終日の活動を計画した。ロレンゾ・スノー大管長は、出席して姉妹たちに話をしてほしいという求めに応じた。大管長はその話の冒頭で次のように述べている。「わたしは、今日の午後、皆さんと一緒に1、2時間過ごす特権をいただき感謝しています。皆さん全員がこの日を楽しんでくださるよう願っています。適切なレクリエーションと娯楽は良いものです。少しの休息とレクリエーションを楽しんでいる姉妹の皆さんを見ることができてうれしいです。なぜなら、家庭でも扶助協会でも毎日毎日一生懸命に働いている皆さんは、可能な範囲のすべての楽しみを得るのに確かにふさわしい方々だからです。」

スノー大管長の姉エライザ・R・スノー姉妹は、かつて第2代中央扶助協会会長を務めた。スノー大管長は扶助協会の働きに謝意を表明し、教会の女性たちについて語り、次のように述べている。「姉妹たちがいなければわたしたちは何をしたらよかったのか、あるいは主の業がどれほど進んだのか、想像することは困難です。」一例として、既婚男性がしばしば専任宣教師として奉仕するように召された当時の教会の伝道プログラムを採り上げている。「わたしたちが外国での伝道で不在のとき、家庭での彼女たちの務めは一般にわたしたちが国外で果たした務めに劣らず大変なものでした。彼女たちは試練と窮乏のただ中で、忍耐と不屈の精神と自立心を示してきました。その自立心は実に人々を鼓舞してきました。この教会の女性たちについて神に感謝しています。わたしは今日この集いに参加して、このように感じています。」¹〔154ページの提案1参照〕



教会の初期の時代から、扶助協会の姉妹たちは一緒に働き、
物理的にも霊的にも互いに強め合ってきた。

ロレンゾ・スノーの教え

扶助協会の会員は真実の慈愛と清い信心の模範である

扶助協会は、主の靈感の下で預言者ジョセフ・スミスによって……組織されました。……今日、それは教会内で善を行う最も力強い組織の一つであると認められています。……

扶助協会の使命は、困っている人を助け、病気の人と体の弱い人を世話し、貧しい人に食物を提供し、着る物のない人に着る物を提供し、神のすべての息子と娘を祝福することです。これ以上に崇高な目的をもって設けられた組織はこれまでにありませんでした。その基本は真実の慈愛、すなわちキリストの純粋な愛です〔モロナイ7:47 参照〕。また、その精神は人々の間で行われている扶助協会のすべての奉仕に表れています。使徒ヤコブはこう言っています。「父なる神のみまえに清く汚れのない信心とは、困っている孤児や、やもめを見舞い、自らは世の汚れに染まらずに、身を清く保つことにほかならない。」〔ヤコブの手紙1:27〕扶助協会の会員は、それを真実であるとして受け入れ、まさしく自分たちの生活の中で清く汚れのない信心の模範を示してきました。なぜなら、苦しんでいる人の世話をし、父親のいない子供と未亡人に愛を示し、また自ら世の汚れに染まらないようにしてきたからです。わたしは証します。扶助協会の会員の中に見られる以上に清く、また神を畏れる女性たちは世の中にいません。²〔154 ページの提案2 参照〕

扶助協会の姉妹は神の王国の益を増すために神権者と協力して働く

扶助協会の姉妹の皆さんがあらゆる状況の下でどれほど信仰篤く主の僕たちを支えてきたかを知ることは、わたしにとって常に喜びの源となっています。皆さんは、神権者の働きを強める備えをし、また神の王国の益を増すのを助けるという役割を果たす備えをして、いつも神権者の傍らにいます。また、皆さんはこれらの働きを共有してきたように、将来必ず、その業を達成した喜びを共有し、また主が忠実な子供たちに与えてくださる昇栄と栄光を共有することでしょう。

……賢明なビショップはきっとワードにおける扶助協会の働きの真価を認めることでしょう。ビショップは扶助協会なしに何ができるのでしょうか。わたしは教会のすべてのビショップに申し上げます。扶助協会の姉妹たちを励まし、慈愛と善行の働きに携わる姉妹たちを支援してください。そうすれば、姉妹たちはあなたと人々にとって祝福となるでしょう。³〔154 ページの提案3 参照〕

すべての家庭に扶助協会の影響が及ぶのはよいことである

わたしは、扶助協会に〔参加する〕ことを自分の妻に勧めるようにと兄弟たちに勧告します。……なぜなら、すべての家庭にこの組織の影響が及ぶのは良いことだからです。姉妹の皆さん、末日聖徒の家庭を訪問するときに、行き先がどこであろうと、この影響を与えてください。皆さんと主の関係がどのようなものであるか、さらに妻また母親として皆さんに何が期待されているか、主は皆さんにはっきりと示しておられます。これらのことを皆さんの訪問先、特に若い婦人たちに教えてください。……

姉妹の皆さんは、扶助協会の会員として、またイスラエルの母親として、……純粋な母性と結婚の聖約に対する忠実さを守るために……皆さんの影響力をすべて行使してほしいのです。⁴〔154 ページの提案 4 参照〕

教会が発展するにつれて、扶助協会の姉妹が奉仕する機会は多くなる

扶助協会が過去に行ってきたことをわたしが詳しく述べる必要はありません。そのすばらしい働きは、シオン全体で、また世界の多くの地域で知られています。扶助協会はその使命に忠実であり、その記録は、ほかの慈善団体と同等であるとしても下回ることはないと言えばそれで十分です。末日聖徒は、扶助協会とその功績を誇りにしており、天の御父がこのような組織を設けるように僕である預言者に靈感を与えてくださったことを御父に感謝しています。扶助協会の前途は大いに有望です。教会が発展するにつれて、この組織が貢献できる分野は広がります。そして、過去にそうであった以上に力強く善を行うことでしょう。すべての姉妹が結集して扶助協会を支援すれば、それは力強い働きをなし、教会に祝福をもたらし続けるでしょう。中年の人々が高齢者と同じようにこの組織に関心を持っているのを見ることは喜ばしいことです。そうなれば、彼女たちは、扶助協会が自分の信仰を強め、人生とその責任に対する思いをさらに深め、進歩と完成の道に沿って自分を著しく成長させるということが分かるでしょう。⁵

彼女たちが働き始めて以来、神の祝福が〔教会の女性たち〕に注がれてきました。わたしは、大きな喜びと楽しみと深い関心をもって彼女たちの進歩を見てきました。……彼女たちは驚くほどの成功を取ってきました。また、神がどれほど彼女たちを祝福し、神の御霊を注いでこられたか、驚嘆せずにはおられません。世の人々の前に立っている天使のようになっていると言ってもよいかもしれませぬ。⁶〔154 ページの提案 5 参照〕



「扶助協会の会員は、まさしく自分たちの生活の中で清く汚れない
信心の模範を示してきました。」

神を信頼し、神に仕える扶助協会の姉妹は、
この世でも永遠の世でも祝福される

自分に与えられた領域で役立つ者となり、途中で困難に出遭っても落胆することなく、神を信頼し、神を仰ぎ見ること、これこそわたしたちが姉妹たちの心の中に植え付けたいと願っていることです。そうするとき、主の驚嘆すべき祝福が、皆さんのうえに注がれるとわたしは約束します。皆さんはこれを経験するでしょう。……もう一度繰り返させてください。落胆することなく、続けて善をなし、信仰を行使し、与えられるすべての機会においてさらに改善するよう努めてください。神が授けてくださったすべての才能を使ってほしいと思います。才能を使えば、成功を収める可能性があります。主が備えてくださった道を歩んで主のために善を行うようになる人は、必ず成功します。その人はまさに、神が望んでおられる場所にいます。皆さんが最もふさわしく神に祝福をお願いすることのできる場所があるのです。⁷

わたしは次のように言うようにと心に感じています。神が扶助協会の役員と会員を祝福してくださいますように。皆さんは崇高な使命を果たしています。わたしは、善を行うことで疲れ果てないように皆さんに勧めます〔教義と聖約 64：33 参照〕。わたしたちは全員、日の栄えの栄光を目指しており、わたしたちの壮大な将来については人の言葉で表現できません。皆さんは、携わってい

る業に引き続き忠実であれば、この栄光に到達し、神と小羊のもとで永遠に喜びを得ることでしょう。これは努力する価値があります。犠牲を払う価値があります。そして、それを得るために忠実に生活する男性や女性は幸いです。神が皆さん全員を祝福してくださいますように。⁸〔154 ページの提案 6 参照〕

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。そのほかの提案については、v - vii ページを参照する。

1. スノー大管長は、教会の女性たちがいなければ主の業の進展を想像することは困難であると断言しています（149 ページ）。今日、女性は主の業にどのように貢献しているのでしょうか。
2. 扶助協会の使命に関するスノー大管長の言葉について深く考えてください（151 ページ）。扶助協会の姉妹があなたやあなたの家族を助けることによって、この使命を果たしたときのことを考えてみてください。このような行いはあなたの人生にどのような影響を与えましたか。
3. 151 ページの下から 12 行目から始まる項を復習してください。扶助協会はどのように「神の王国の益を」増していますか。あなたは扶助協会の姉妹と神権者が協力して働いているのを目にしたことがありますか。それはどのようなときでしたか。
4. 扶助協会の姉妹は「純粋な母性と結婚の聖約に対する忠実さを守るために」影響力を行使してほしいというスノー大管長の訴えについて深く考えてください（152 ページ）。今日この影響力が世の中で必要とされているのはなぜでしょうか。若い女性が神殿結婚をし、母親となる備えをするのを、扶助協会の姉妹はどのような方法で助けることができるのでしょうか。
5. スノー大管長は、「教会が発展するにつれて、〔扶助協会が〕貢献できる分野は広がります。そして、過去にそうであった以上に力強く善を行うことでしょう」と言っています（152 ページ）。今日の世の中で、扶助協会の姉妹たちは善を行い、その影響力を増すために何ができるのでしょうか。
6. 153 ページから始まる項を研究してください。あなたはどのようにして「神が望んでおられる場所」に導かれたか、深く考えてください。神はどのように努力するあなたをどのように助けてくださいましたか。

関連聖句 —— イザヤ 1 : 17 ; マタイ 25 : 34 - 40 ; モーサヤ 4 : 26 - 27 ; アルマ 1 : 29 - 30 ; モロナイ 7 : 44 - 48

教える際のヒント——「レッスンの準備をするに当たって、レッスンごとに様々な教授法を用いる予定を組むようにする。これは、あるレッスンでは色彩豊かなポスターや図表を使い、別のレッスンでは黒板に質問事項を書き出しておくというような、簡単なことを意味している。」(『教師、その大いなる召し』89)

注

1. “Prest. Snow to Relief Societies,” *Deseret Evening News*, 1901年7月9日付, 1で引用
2. “Prest. Snow to Relief Societies,” 1で引用
3. “Prest. Snow to Relief Societies,” 1で引用
4. “Prest. Snow to Relief Societies,” 1で引用
5. “Prest. Snow to Relief Societies,” 1で引用
6. *Young Woman's Journal*, 1895年9月号, 577 - 578
7. *Young Woman's Journal*, 1895年9月号, 578
8. “Prest. Snow to Relief Societies,” 1



「イエスは盲人を癒す前にこう言われた。
『わたしをつかわされたかたのわざを……しなければならぬ。』」(ヨハネ 9:4)



「神にはなんでもできない事はない」

「わたしたちに求められている行いは、全能者からの助けがないかぎりいかなる人も応じられない種類のもです。……主はその助けを約束してくださいました。」

ロレンゾ・スノーの生涯から

ロレンゾ・スノー大管長は、自分自身がしばしば繰り返し語ってきた勧告に自ら従うように努めた人であった。「わたしたちは努力しなければなりません。……行動を起こさずに怠けていたら役に立ちません。」¹しかし、スノー大管長は、神の王国を築き上げたいという望みを達成するのに、神の恵みがなければ自分の努力だけでは不十分であることを認めている。大管長はこの神の恵みをしばしば「超自然の助け」と呼んだ。²したがって、彼は「〔義の〕原則を広める」ため一生懸命に努力するように教会員を励ましながら、同時に、「わたしたちは、末日聖徒として、救いは神の恵みによって与えられるということを理解し、心に留めておかなければなりません」と述べている。³神はわたしたちの努力に力を添えてくださると、次のように証を述べている。「主がわたしたちを置いてくださる場所に、わたしたちは立っていなければなりません。わたしたちは、これらの聖なる原則を支持するように努力することを神から求められるとき、それを行わなければなりません。わたしたちが心がける必要のあることはそれだけです。あとは天の御父が引き受けてくださいます。」⁴

スノー大管長の姉エライザは、彼はこの教えに忠実に生活していると語り、「〔神の〕守りの力と恵みに揺るぎない信頼」を寄せている人物と評している。また、「自分がだれに頼ってきたかを知って」おり、そのために「あらゆる苦難、あらゆる妨害」に耐え、「あらゆる障害を克服する」ことができた人であるとも語っている。⁵

ロレンゾ・スノーは、1840年にイングランドでの伝道の旅に出たとき、神の守りの力に対する信頼を示している。大西洋を渡る42日間の船旅で、彼と同行の旅行者たちは3度大きな嵐に見舞われた。後日、「ひどい嵐、海に慣れていた人々が非常に危険だと述べたほどの嵐」であったと報告している。彼はその嵐に対する自分の反応とほかの旅行者の一部の人々の反応の違いに気づいた。「多くの場合、控えめに言っても、その光景は恐ろしく猛烈でした。神に頼

ることを知らなかった男女や子供が恐怖のあまり手を握り締め、涙を流したとしても、当然でしょう。わたしは、海を創造してその境を定めてくださった御方を信頼していました。わたしは主の用向きを受けており、自分が神により認められた権能によってこの伝道に派遣されたこと、そして自然の力が猛威を振るい、船が大波を受けて傾き、揺れても、主が船のかじを取っておられ、自分の命は主に守られて安全であることを知っていました。』⁶

それから何年もたって、ロレンツ・スノーは大管長となり、再び、主がかじを取っておられることを知って慰めを得た。1898年9月13日に開かれた集会で、十二使徒定員会は、大管長として彼を支持するという決意を全会一致で表明した。その集会の記録には、その後で彼が立ち上がって語ったことが記されている。「その職に伴う途方もなく大きな責任を引き受けるには、無能であるなどと言いつても何の役にも立たない。……自分ができる最善を尽くし、主に頼ることが自分のなすべきことであると彼は感じていた。』⁷ [162 ページの提案1 参照]

ロレンツ・スノーの教え

神の助けを得て、わたしたちは求められることを何でも行うことができる

わたしは、人々の救いに関する様々な事柄について啓発し、相互改善を図るのに助けとなるように話をしたいと思います。そのため、主に頼れば教えと英知を得られると信じているすべての人々の信仰と祈りを願います。

わたしたちは、主なる神との関係とわたしたちに与えられている特異な職をよく理解しておかなければなりません。わたしたちにゆだねられている責務を立派に果たすには、超自然の助けが必要です。……

……イエスは、御自分のところに来て、永遠の命を受け継ぐために何をしなければならぬか知りたいと言った若者に、「いましめを守りなさい」と言われました。その若者は、それらの戒めは小さいときから守っていると答えました。救い主は、若者を見て、彼にはまだ足りないことがあるのが分かりました。若者は道徳の律法、モーセに与えられた律法を守っていました。そのため、イエスは彼を愛しておられました。しかし、足りないことが一つあることを御存じでした。彼は金持ちで、その豊かな富のために世の中で影響力を持っていました。イエスは、その若者に限らずだれであっても人を日の栄えの世界に上げる前に、その人がすべてのことに従順であり、日の栄えの律法に従うことを最も重要なことだと考える必要があるということを御存じでした。イエスは、日の栄えの冠を得るためにすべての人に求められることが何かを御存じでした。すなわち、天の要件に従うこと以上に大切にすべきことはないということを御存じでした。

救い主は、この若者が日の栄えの王国の律法にかなっていないものに執着しているのが分かりました。救い主は、彼がその気持ちの中に自分にとって有害であり、福音のすべての要求に従うことを不愉快または不可能にするようなものに執着する性癖があることを、恐らく御存じでした。そのため、救い主は、帰って、持っているものをすべて売り払って、「貧しい人々に施し……わたしに従ってきなさい」と言われたのです。

若者はこのように命じられ、非常に悲しく思いました。富を、人生の大きな目標、世に対する影響力と望ましいすべてのものを自分にもたらすもの、人生の恵みと楽しみを与えてくれるもの、社会の高い地位に上がれる手段と考えていたのです。人生の恵みと楽しみと特権、また本能的に望むものを得ることを、富と切り離して考えることができなかつたのです。しかし、福音には、人の望みと要件を満たすために、また人を幸福にするために必要なすべてのものを備える力がありました。富はそのようなものではありませんでした。主は、彼がすべてのことにおいて主の僕しもべとなれるように、彼がこれらの考えを捨てて、思いと気持ちからそれを取り除いてほしいと思われました。主は、この人が奉仕に専念し、十分に固い決意をもってこの業に携わり、聖なる御霊みたまの導きに従い、日の栄えの栄光に備えるようにと望まれました。しかし、この若者はその気がありませんでした。犠牲があまりにも大きすぎたのです。そして、救い主はこのときにこう言われました。「富んでいる者が天国にはいるのは、むずかしいものである。……富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい。」

弟子たちは「非常に驚いて」、「では、だれが救われることができるのだろうか」と言いました。富んでいる者はだれも神の王国に救われないと考えたのです。これは、彼らが救い主の言葉から受け取った考えでした。しかし、イエスはこう答えられました。「人にはそれはできない。」神はそうではありません。なぜなら、「神にはなんでもできない事はない」からです。〔マタイ 19 : 16 - 26 参照〕⁸ [162 ページの提案 2 参照]

神はわたしたちが福音に従って生活するよう自分で努力するときに 助けると約束してくださっている

神が与えてくださったすべての戒めに従うことは自分だけではできません。イエス御自身も、御父からの神聖な助けがなければ、その業を果たすことができませんでした。イエスはあるときにこう言われました。「わたしは、自分からは何事もすることができない。ただ聞くままにさばくのである。そして、わたしのこのさばきは正しい。それは、わたし自身の考えではなく、わたしをつかわされたかたの、み旨を求めているからである。」「〔ヨハネ 5 : 30〕 イエス、

すなわちわたしたちの主が神からの助けを必要とされたのであれば、わたしたちが御父の助けを受けることはなおさら必要であることが分かります。末日聖徒を取り巻くあらゆる事情と状況の中で、自分の義務を果たす際に、末日聖徒は、取り巻く様々な状況の中で果たす必要のある義務について、聖なる御霊みたまからの超自然の助けを受ける資格があります。

……わたしは自分自身の昇栄と栄光のために働くこと、またそれを得ることほど非常に重要なことを何も思い浮かべることができません。それは疑いもなく、わたしたちが世に来た一つの大きい目的です。……男女を問わずだれも、自分が果たしたいと思っていることを成し遂げられないと感じるときに、落胆してはなりません。しかし、わたしたちは皆、この世で託されている崇高な業を遂行するために、自分ができるところを行わなければなりません。⁹

わたしたちが信じている宗教の特徴は、ある種の行いを求めます。わたしたちが知っているほかの宗教では会員に求められていない行いです。わたしたちに求められている行いは、全能者からの助けがないかぎりいかなる人も応じられない種類のものです。わたしたちはすばらしい大切な祝福を少なくとも一部でも理解することが必要です。その祝福は、わたしたちにすでに与えられている宗教あるいは福音の要件に従えばやがて受けることになるものです。わたしたちに求められる犠牲は、超自然の力による助けがないかぎり、いかなる男性も、あるいはいかなる女性も払うことができない犠牲です。主はこれらの条件を与える際に、超自然の助けなしにその民にその条件に従うことを求めようとされませんでした。その種の助けについては、ほかのいかなる宗教の人々も教えてはいません。主はその助けを約束してくださいました。……

これらのことが……神が御自分に仕え、神の律法を受け入れるように民に呼びかけられたあらゆる時代と時期に求められました。それはイスラエルの時代に、その民の初期に求められました。アブラハム、イサク、ヤコブに求められました。モーセと、エジプトの捕囚から導き出された民に求められました。アダムの時代から現在までのすべての預言者によって求められました。生ける神の御子イエス・キリストのあんしゅ按手により権限を授けられたすべての使徒によって、また使徒たちが彼らの時代に宣言し、民に教えた宗教の信奉者たちによって求められました。アダムの時代から現在まで、神の民を除いて、いかなる人、いかなる人々、あるいはいかなる階層の人々もこれらの要件に従うことができませんでした。神の民は高い所から力を、すなわち主なる神からのみ発せられる力を授けられたのです。¹⁰ [162 ページの提案 3 参照]



「皆さんとわたしが携わっているこの業は、わたしたちの忠実かつ誠実な働きと、わたしたちの決意に応じた神の祝福によってのみ発展し、進められます。」

わたしたちは神の業に携わるとき、神の助けが必要である

シオンの益を増すためにどのようなことに取り組みようと、それを成功させるために主に頼らなければなりません。¹¹

人は、これから果たそうとするすべてのことにおいて、神の栄光にひたすら心を向けるようにしなければなりません。自分自身では何もできないということを考えておかなければなりません。わたしたちは神の子供です。神がわたしたちの理解に光を注いで〔くださらないかぎり〕、わたしたちは闇の中にいます。神が助けて〔くださらないかぎり〕、わたしたちは無力です。わたしたちがこの世で行わなければならない業は、全能者の助けがないかぎり行えない種類のもです。……この世では、世の人々にひどい苦難があります。同様にイスラエルの長老にもひどい苦難があります。わたしたちは自分が神に代わって働いていることを忘れます。わたしたちは、遂行すると主に約束した特定の目的を果たすためにこの世にいることを忘れます。わたしたちが携わっているのは栄光ある業です。全能者の業です。全能者は過去の経験から、御自分の目的を遂行してくれると御存じの男女を選ばれました。¹²

皆さんとわたしが携わっているこの業は、わたしたちの忠実かつ誠実な働きとわたしたちの決意に応じた神の祝福によってのみ発展し、進められます。わ

わたしたちはその務めを果たすと決意してこの世に来たのです。これまでに経験してきたことを振り返ってみると、わたしたちの繁栄は、神の業を果たし、人々のために働き、できるだけ利己心をなくすために誠実に努力してきた結果であるということが容易に分かります。過去にそうであったので、将来の発展も、あらゆる状況の下で神の御心みこころを行うという決意と、神が与えてくださる助け次第であると、わたしたちは十分に信じることができます。¹³ [162 ページの提案 4 参照]

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。そのほかの提案については、v - vii ページを参照する。

1. 157 - 158 ページに書かれている話を復習してください。試練に対する反応が、神に頼る人々と神に頼らない人々とで大きく異なるのはなぜだと思いますか。
2. 救い主と金持ちの若者の話について深く考えてください (158 - 159 ページ)。人々はどのようなものに執着することによって「悲しみながら立ち去」ようになる可能性があるでしょうか。主の最も大いなる祝福を受ける前に、そのようなものをわたしたちの生活から「取り除く」必要があるのはなぜでしょうか。
3. スノー大管長は、救い主でさえも「その業を果たす」ために「神からの助け」を必要とされたと教えています (159 ページ)。自分には福音の生活の要件を満たす力がないと思っている人を助けるために、スノー大管長の言葉をどのように活用できるでしょうか。
4. 本章の最後の項について研究してください (161 - 162 ページ)。わたしたちが神の助けを求めないことが時々あるのはなぜだと思いますか。あなたの生活でもっと神の助けを受けるにはどうしたらよいかを考えてください。

関連聖句 —— ピリピ 4 : 13 ; 2 ニーファイ 10 : 23 - 24 ; 25 : 23 ; モルモン書 ヤコブ 4 : 6 - 7 ; モーサヤ 24 : 8 - 22 ; 信仰箇条 1 : 3

教える際のヒント —— 「章の最後にある質問をいくつか選び、それを読むように参加者に割り当てる (個人または小さなグループで行わせる)。質問に関連のある教えを章の中から探すように言う。その後、自分の考えや理解したことをグループの人たちに話すように勧める。」 (本書 vi ページ)

注

1. *Deseret News*, 1857年1月28日付, 371
2. *Deseret News*, 1880年1月14日付, 786
3. *Deseret News*, 1882年8月15日付, 1
4. *Deseret News*, 1857年10月28日付, 270
5. エライザ・R・スノー, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow* (1884年), 116 - 117
6. *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 49
7. *Journal History*, 1898年9月13日付, 4で引用
8. *Deseret News*, 1880年1月14日付, 786
9. Conference Report, 1898年4月, 12
10. *Deseret News*, 1880年1月14日付, 786
11. *Improvement Era*, 1899年7月号, 708
12. *Deseret Weekly*, 1894年5月12日付, 638
13. Conference Report, 1901年4月, 1



ロレンツ・スノー長老



神の王国における忠実で 活気に満ちた奉仕

「わたしたちの宗教が真実であると知っているので、
わたしたちは、奉じている大義に対して地の表で
最も献身的な民であるべきです。」

ロレンゾ・スノーの生涯から

1851年の終わりごろ、大管長会は、十二使徒定員会の全会員は「各人の伝道に伴う諸事を整えて」1853年4月までにソルトレーク・シティーに戻るよう要請する手紙を出した。¹そのため、イタリアでのロレンゾ・スノー長老の伝道は間もなく終わることとなった。1852年2月に、彼は改宗して間もないジョン・ダニエル・マラン兄弟にその地での伝道活動の指導を託し、ジャベツ・ウッダード長老と一緒にマルタ島へ向かった。スノー長老は、マルタから船でインドへ行きたいと思った。その地の最初の宣教師たちがスノー長老の管理の下で働いていたので、ぜひとも彼らに会いたいと思ったのである。そこから「世界を周航して」、合衆国西部を目指して太平洋経由で帰郷する計画であった。²

スノー長老とウッダード長老がマルタに着いたとき、スノー長老の計画は変わった。蒸気船が紅海で故障してしまったため、島に数週間とどまることになることが分かったのである。彼はその遅れに不平を言うことはなく、伝道に出かけることにした。1852年3月10日付の手紙に次のように書いている。「興味を示す人々が周りにいるので、今自分の自由になる時間の使い方について主の導きを受けるようにすることで、多くの良い結果が得られると感じています。ここは大いなる業が成し遂げられる非常に重要な伝道の地であり、隣接する国々にその業が広がることでしょう。」彼は、「たくさんのパンフレットと本を持って、すぐに来るように」イタリアの宣教師トーマス・オブレイ長老に指示したと報告している。スノー長老は同僚とともにマルタで何をすることになるのかまったく知らなかったが、そこに教会の支部を設けたいという希望を表明している。このことによって、「貿易の仕事に従事するマルタ人がヨーロッパやアジア、アフリカの海岸に沿って広がるときに、多くの国の霊的な束縛が解かれるでしょう」と述べている。³

1852年5月1日、スノー長老は、マルタでの伝道活動の進展状況を報告する手紙を出した。その手紙にこう書いている。「この数日間、夜になると人々がこの『奇妙な宗教』について尋ねるために絶えず訪れて来ます。数日前のあるとき、わたしたちは宿舎で、町の方々からやって来た8つの異なる国々の紳士たちとともに、わたしたちの教義について語り合いました。その中に、ポーランドとギリシャから来た人々がいました。彼らは今、特別な興味をもってわたしたちの聖典を読んでいます。この島でのわたしたちの働き^{りゆうぎょう}の初穂であった知性豊かで積極的な二人の若者は、わたしたちが携わっている大義の進展を十分に助けることができるでしょう。そのうちの一人を長老に聖任しましたが、彼は幾つかの言語を流暢に話します。」⁴

スノー長老は、インドで奉仕して世界を周航するという夢を実現できなかった。代わりに、マルタでの予期せぬ滞在中に主の御心^{みこころ}に熱心に従い、そこに伝道活動の基盤を築いた。ついに1852年5月に船に乗ることができ、ソルトレーク・シティに戻るようという指導者の指示に従って、東ではなく西に向かった。それからおよそ2か月後、ウッダード長老とオブレイ長老はマルタに教会の支部を組織した。⁵〔173ページの提案1参照〕

ロレンゾ・スノーの教え

わたしたちは完全な福音を受け入れたので、キリストの使者として仕える

わたしたちは全世界に向かって証^{あかし}します。神からの啓示によって、実に聖靈の示しを通して、イエスが生ける神の御子キリストであられること、また墓からよみがえった後で古代の使徒たちに御姿^{みすがた}を現したようにジョセフ・スミスに個人的に御姿を現されたこと、さらに人類に唯一救いをもたらすことのできる天の真理を彼に告げられたことを、わたしたちは知っています。これは……非常に重要な責任ある職務を引き受けるということです。わたしたちはそうするとき、神からゆだねられたこの神聖な任務の遂行に関して、わたしたちは将来神から責任を問われるということを知っているのです。

使徒たちがよみがえられた^{あがな}主から委任を受けた後、王国の福音をすべての国民に宣べ伝えるために世の人々の前^のに出て行き、彼らの言葉^のを信じるすべての人は^{あんなしめ}按手によって聖靈の賜物^{たまもの}を受けると約束したように、わたしたちも出て行きます。信じて従ったすべての人に救いをもたらす神の力である福音を、使徒の権限によって、迫害と妨害のただ中で、確信をもって告げ知らせたように、わたしたちも告げ知らせます。彼らが主イエス・キリストを信じる信仰、罪の赦^{ゆる}しのためのパテスマ、正当な権能を持つ者によって行われる聖霊を受けるための按手を、救いにとって必須のものであるとして宣べ伝えたように、わたしたちも宣べ伝えます。彼らが、聖霊の力によって、主イエス・キリストの証人、

またすべての異教の世界に福音のメッセージを忠実に伝える者となったように、同じ聖なる御霊みたまによってわたしたちはイエス・キリストの証人となってきました。また、わたしたちは同じ神聖かつ聖なる召しによって召されているので、同じ職を引き受けます。

その後、わたしたちは皆この職を引き受けているので、キリストの使者が負っているすべての責任を引き受けます。わたしたちは、個人の行為について、また主から与えられた才能と能力をどのように使うかについて責任を負うようになります。⁶ [173 ページの提案 2 参照]

教会員であることは、ほかの人々が救いを受けるのを助けるという召しである

主が個人を、あるいは人々を世から召されるとき、必ずしもその個人あるいは人々に利益を与えることを目的とはおられません。主は末日聖徒と呼ばれている少数の人々の救いだけでなく……、生者と死者、すべての人の救いを考えておられるのです。主はアブラハムを召されたとき、彼とその子孫に与えられるはずの栄光に関して確かな約束を幾つか与えられました。これらの約束の中に、彼とその子孫によって地のすべての国民は祝福を得るという言葉があります [創世 22 : 15 - 18 ; アブラハム 2 : 9 - 11 参照]。……主の計画は、彼とその子孫だけでなく、地のすべての家族に祝福を与えることでした。……

……イエスはこの世に来られたとき、イスラエル、すなわちアブラハム、イサク、ヤコブの子孫のためだけでなく、全人類家族のためにも犠牲となされました。イエスによってすべての人が祝福を受けられるようにするため、イエスによってすべての人が救われるようにするためでした。イエスの使命は、全人類家族が永遠の福音のもたらす恩恵を得られるように備えをすることでした。言うなれば、それはイスラエルのためだけでなく、全人類のためでもありました。また、地上に住んでいる人々だけでなく、霊界にいる人々のためでもありました。……

……わたしたちはイエスが持つておられた同じ神権を持つています。そして、イエスが行われたように行い、イエスが行われたように自分の望みと意思を犠牲にしなければなりません。恐らく、イエスがされたように殉教することはないでしょう。しかし、神の目的を成し遂げるために犠牲を払わなければなりません。そうでなければ、この聖なる神権にふさわしくなく、世の救い手になれないでしょう。神はわたしたちを、現在地上に住んでいる多くの人だけでなく、霊界の多くの人の救い手にもしようとしておられるのです。神はわたしたちを、自分自身を救う立場に置かれるだけではありません。全能者の子孫の多くが贖いあがなを得られるように助けるのに適格な者とされるのです。⁷ [173 ページの提案 3 参照]

すべての召しと責任が主の業において重要である

さて、尋ねたいことがあります。わたしたちは自分の立場を理解しているでしょうか。果たす責任を負っている業の本質を十分に理解しているでしょうか。わたしは時々、兄弟たち、すなわちイスラエルの長老たちの中に、聖約に伴って負っている義務を怠けようとしている人々や、怠けている人々がいると思うようになりました。彼らはかつて持っていた信仰をほとんど使い果たしているようで、また単なる名目上の教会員であることに静かに満足して安住しているようです。

そのほかに、自分の名前はあまり広く知られておらず、自分がいるのは恐らく……狭い地域なので、自分がどのような習慣を身に付けていようと、あるいは兄弟たちの前にどのような模範を示していようと、問題ではないと考えている人々もいます。しかし、大管長の職や顧問の職など、責任ある職に就いていたら、あるいは十二使徒定員会に所属していたら、あるいは高等評議会や大祭司や七十人の会長であったら、自分がどのように振る舞うかが重要であると考えられるのです。この点で、彼らは非常な弱さを、あるいはまったく無知であることを示しています。彼らのランプはほの暗くなっているか、あるいは彼らは福音の責任を負って引き受けた職をまったく理解していないかのどちらかです。

わたしたちは、天の王国は遠い国に旅に出かけるときに、僕たちに財産を預けた主人のようなものであるという救い主のたとえを教えられています。主人はある者に5タラント、別の者に2タラント、また別の者に1タラントを与えました。5タラントを受け取った者は行って商売し、ほかに5タラントをもうけ、自分に託された分を倍にしました。また、2タラントを受け取った者も、行ってほかに2タラントを得ました。しかし、1タラントを受け取った者は、行って地を掘り、主人のお金を隠しました。彼が自分の責任は非常に小さいので多くを行えないと考えたことは確かです。その結果、彼はそのように少ないタラントを使おうとしなかったのです。〔マタイ 25:14 - 30 を参照〕一部の長老たちはまさにこの状態になってはいないでしょうか。ある人はこう言います。「わたしは大工、あるいは仕立屋、あるいは恐らくれんが職人の助手にすぎません。ですから、自分の狭い領域で自分の義務を誠実に果たそうと果たすまいと、自分がどのように振る舞うかはあまり重要ではありません。でも、何かもっと責任の重い目立つ職で働いていたら、非常に違っていただいことでしょう。」

そのようなことは言わないでください、兄弟。そのような魅惑的な言葉に欺かれることがあってはなりません。れんが職人の助手にすぎないかもしれないというのは真実です。しかし、あなたはイスラエルの長老であり、主イエス・キリストの使者であることを忘れないでください。あなたは自分の務めをしっかり果たしているなら、世が与えることも取り去ることもできないものを所有して



「あなたは自分の務めをしっかりと果たしているなら、
世が与えることも取り去ることもできないものを所有しています。」

います。あなたは、神から管理するように託されたタラントを誠実に使用することについて、その職の大小を問わず、神に報告する責任を負っているのです。

もう一度申し上げます。あなたはある程度の影響を及ぼしています。非常に小さいかもしれませんが、だれかに、あるいは人々に影響を及ぼしています。そして、あなたが及ぼす影響の結果について、多かれ少なかれ責任を問われます。したがって、あなたは認めようと認めまいと、神と人の前に重要な責任を負っています。それを見落とされることはあり得ませんし、あなたが受けている名を保持したければそれから解かれることもありません。

その人の将来はどうでしょうか。その人が召しを尊び、託された義務に忠実であるのが分かれば、神の王国で救いと昇栄にあずかる見込みはほかのだれにも劣らず十分にあると、わたしは申し上げます。その人が自分の立場を理解し、それに従って生活するなら、その人の将来は、父祖アダムの時代から現在まで、かつて生きていたいかなる人も同等に好ましいものです。自分が歩んでいる領域に応じた適切な振る舞いをするには、もっと高い職で務めるように

召されるかもしれない人々が行うことと同様に重要です。言い換えれば、もっと多くのタラントの管理人とされるかもしれない人々が行うことと同様に重要です。

……主は、1タラントだけ持っている人に1タラント以上を持っている人ほど多くのものは求められません。しかし、持っているものに応じて求められます。ですから、すべての人を励まし、それぞれが持っているタラントを増すように努めさせましょう。また、持っているのが1タラントかもしれない人にそれを地の中に隠させず、使用させましょう。つまり、授けられている能力がわずかかもしれない人に、その人自身を向上させましょう。自分はずっと幸運な兄弟のように能力をたくさん与えられていないようだと言わせないようにしましょう。すべての人が自分の境遇に満足するようにしましょう。そして、それが自分の願っているほど望ましくなくても、この地上にいることを感謝しながら、また特に福音に従うことによって与えられている神の御霊にもっと感謝しながら、それを改善するように熱心に努めなければなりません。……

わたしはある逸話を思い出します。……知恵と愛国心で大きな名声を得ながら、ねたまれて、非常に低いと見なされている職を与えられた人の話です。彼はその職に就いたとき、次のような意味深長な言葉を述べたと言われています。「その職がわたしを尊ばなくても、わたしはその職を尊ぼう」と。わたしたち全員が、務めるように召されている職を尊ぶなら、多くの困難はなくなり、わたしたちの状態と状況はもっと有望なものとなるでしょう。わたしたちに告げられているように、主御自身がわたしたちの始祖のために衣服を作られました。すなわち、言い換えれば、そのときに仕立屋として働かれたのです。また、イエス・キリストは大工でした。ところで、救い主は尊敬すべき誠実な大工であったに違いありません。そうでなければ、決してその後になされた務めにふさわしくなれなかったことでしょう。兄弟姉妹たちにそれぞれの召しを誠実かつ忠実に果たすことの重要性を理解させることができれば、わたしたちが今経験している困難と苦労は回避され、神の業は倍の速さで進み、神の目的はすべてもっと迅速に達成されるでしょう。さらに、わたしたちは一つの民として、神の御心みこころを広めるために現在よりもっとよく準備できることでしょう。

兄弟姉妹の皆さんに神の祝福があり、皆さんに託されているものを管理する賢い管理人として皆さんが常に行動することができますように。⁸ [173 ページの提案4参照]

わたしたちが忠実に、精力的に、快活さをもって神に仕えるとき、神は
わたしたちを強め、わたしたちが成功するように助けてくださる

わたしは申し上げます。人々を忠実に、また精力的に神に仕えさせ、また快活であるようにさせてください。……時折、人々が明るいものの見方をしますが、不可能ではないとしても、非常に難しい状況になることがあります。しかし、そのようなことはごくまれです。⁹

わたしたちの宗教が真実であるを知っているのです、わたしたちは、奉じている大義に対して地の表で最も献身的な民であるべきです。わたしたちが知っているように、あるいは知っているはずですが、忠実であれば、心の中で望む、あるいは願うことのできるすべてのものが与えられるという約束を、わたしたちに与えられている福音によって受けています。そのことを知っているのです、わたしたちは、主が時々主の僕たちを通して啓示してくださるままに、非常に忠実に、献身的に、精力的に、活発に主の計画と望みを成し遂げるようにするべきです。自分の義務を果たすのに不熱心あるいは無頓着であってはなりません。勢力と力と心を尽くして、自分の召しの精神と自分が携わっている業の本質を理解するように努めなければなりません。

イエスは地上におられたとき、弟子たちに、財布も袋も持たないで出て行って福音を宣べ伝え、何を食べようか、何を飲もうか、どのようなものを着ようと前もって決して思い煩うことなく、ただ出て行って自分たちに明らかにされたことを証する^{あかし}ようにと命じられました。彼らはこれを行うことによって、全能者の祝福にあずかり、あらゆる努力が報われたのです。必ず成功することになっていました。いかなる力も彼らの道を遮ることはできず、最も確かな成功を得るのを妨げることはあり得ませんでした。なぜなら、御心^{みこころ}を行うために全能者の力をもって出て行ったからです。また、彼らを支え、支持し、また成功を収めるすべての手段を与えるのが全能者の業だったからです。主の命令に従うことによって、彼らは、第一の復活の朝に出て来る特権とともに、人生の数々の祝福も手に入れました。彼らには、自分が働くときにこの世のいかなる力も自分を妨げることに成功しないという確信がありました。もしもわたしが彼らの職にあったとしたら、あるいは他の何らかの職にあったとしたら、そのような展望を持ちたいと思うはずですが、なぜなら、思慮深い心の持ち主にとって、何かを追求するとき最終的には成功するという思いがあれば非常に楽しいからです。

さて、もしも使徒たちが、命じられたままを行うのではなく、何かほかのことを行うことによって同じ目的を達することができると思ったとしたら、その働きをよく果たせなかったでしょう。さらには、自分たちがさらされたあらゆる試練と迫害の下で、彼らにとって確かに絶えざる喜びと満足の源であった成功を収めるといふ確信を持ってなかったことでしょう。

……もしもイエスの時代の使徒や七十人が、ノアが行ったように箱舟を造ることによって、あるいはヨセフが行ったように穀物倉を造って穀物を貯蔵することによって、与えられた使命を果たせると考えていたとすれば、大きな間違いを犯していたでしょう。

エジプトの地にいたヨセフは、ある種の務めを果たすように召され、それが彼の職務となりました。彼は財布も袋もなく福音を宣べ伝えるようにと召されたのではなく、穀物倉を築くように、そして飢饉の日に備えて穀物を貯蔵するようエジプトの王や貴族、民に彼のすべての影響力を行使するように召されました。……さて、もしヨセフが出て行って働き、箱舟を造っていたら、彼は主から受け入れられず、エジプトの民も父親の家族も救えなかったでしょう。ノアが箱舟を造るように命じられたときに、もしも穀物倉を設けていたら、彼と家族は救われなかったでしょう。そのように、わたしたち自身に関して言えば、わたしたちの手に義務が求められるとき、……全能者の王国の領域内で何を行うように求められようと、もし神から力と導きを受けたいと思うならば、これら求められていることを心に留めて行動し、これらを果たさなければなりません。¹⁰ [173ページの提案5 参照]

主の業は時折困難ではあるが、大きな喜びをもたらす

わたしたちはこの業に関連して、楽しいと思えない多くの事柄に出会います。しかし、この業には大きな喜びもあります。真理の大義に献身して聖約を守ろうと決意していることを思い起こすとき、大きな喜びがあります。なぜなら、召しを果たすときに、力強く御霊がとどまるからです。その御霊がなければ、神の王国と歩調を合わせることができません。¹¹

わたしたちは神と聖なる天使たちの前で聖約を新たにしなければなりません。すなわち、神の助けを受けながら、前年よりも翌年はもっと忠実に神に仕えることを、また公私両方の生活、自分の行動、自分が及ぼす感化と影響が「神の王国か、それとも無か」というモットーに添ったものであるようにすることを聖約するのです。わたしは次のことを確信しています。……すなわち、わたしたちは地上で真理と義のために熱心に働いて、地上にシオンを確立する神の務めにひたすら献身することができ、やがてそれに携わることが喜びになります。また、神に仕え、神の戒めを守ることと、日の栄えの律法を守ることが第二の天性になります。さらに、心の中に聖なる御霊を宿すことができるので、世に打ち勝ち、自分の思いの中に日の栄えの律法を確立し、自分の行いをそれに添ったものにすることができます。自分自身と自分の特権をよく理解できるので、日の栄えの律法にかかわる祝福、日の栄えの栄光の中で享受するに違いない祝福のかなりの部分を現世で得ることができます。¹² [173ページの提案6 参照]

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。そのほかの提案については、v - vii ページを参照する。

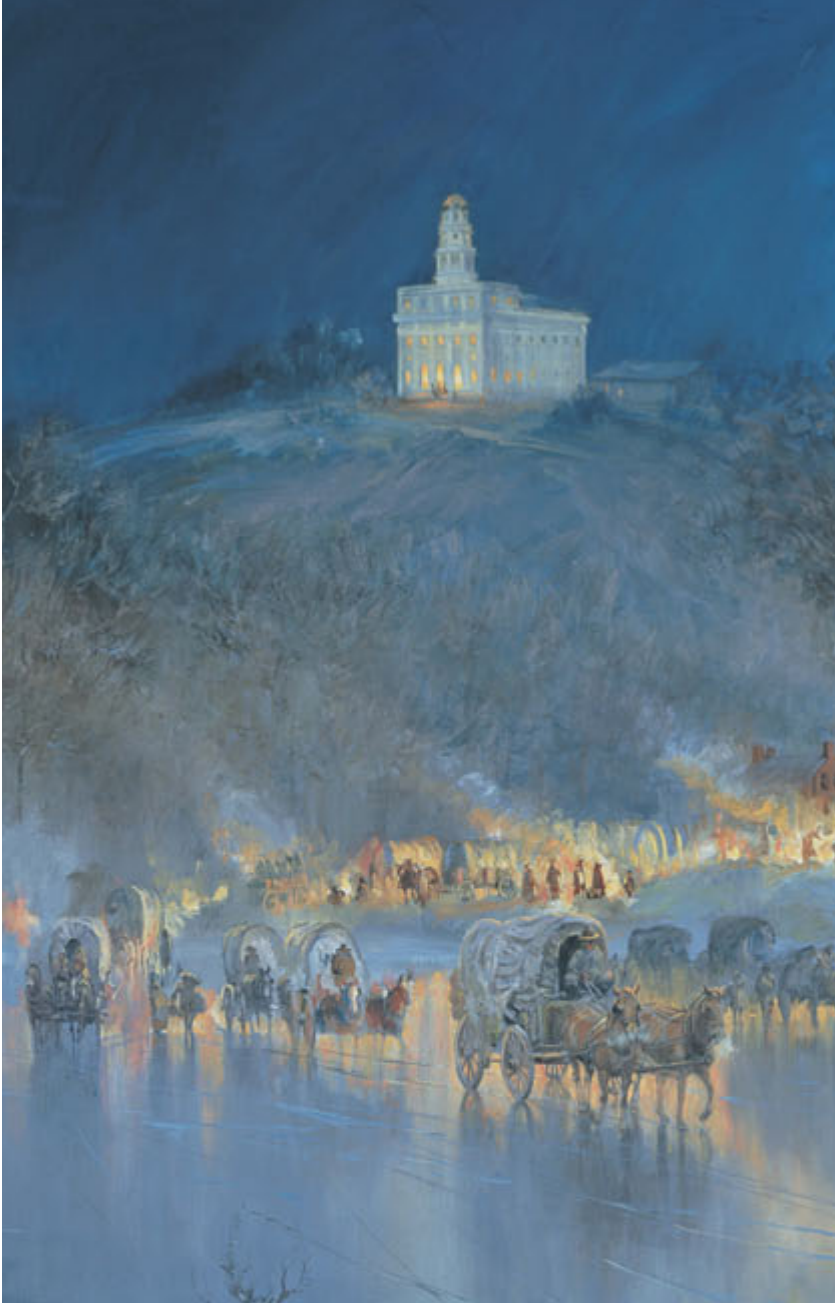
1. 165 - 166 ページに書かれている話を復習してください。主に仕えるロレンゾ・スノーの姿勢を述べるのに、どの言葉を使いたいですか。彼の模範に従うために何を行えるか考えてみてください。
2. 166 ページから始まる項について考えてください。教会員であることに、このような大きな責任が伴うのはなぜだと思いますか。キリストの使者になるということは、あなたにとってどのような意味がありますか。
3. スノー大管長は、教会での召しは神の子供たちが「贖い^{あがな}を得られるように助ける」機会であると教えています（167 ページ）。これを理解することは教会での奉仕の仕方にどのような影響を及ぼす可能性があるでしょうか。
4. スノー大管長は、自分の責任がどれほど小さく見えようと、わたしたちは熱心に奉仕しなければならないと述べています（168 - 170 ページ）。小さく見える召しや割り当てを尊んでいる人をあなたが見たのはいつですか。
5. 171 ページから始まる項を読んでください。信仰と活力と快活さはわたしたちの奉仕にどのように影響を及ぼしますか。
6. 本章の最後の項を読んでください（172 ページ）。あなたは主の王国で奉仕する喜びをいつ経験しましたか。わたしたちは、務めが楽しいと思えないときでも、どうすれば奉仕に喜びを見いだせるでしょうか。子供と青少年が忠実に主に仕えることができるようにするために、わたしたちは何ができますか。

関連聖句 —— 詩篇 100 : 2 ; 1 コリント 12 : 12 - 31 ; モルモン書ヤコブ 1 : 6 - 7 ; 2 : 3 ; モーサヤ 4 : 26 - 27 ; 教義と聖約 64 : 33 - 34 ; 72 : 3 ; 76 : 5 - 6 ; 107 : 99 - 100 ; 121 : 34 - 36

教える際のヒント —— 「生徒の意見に心から耳を傾けるためにあらゆる努力をする。あなたが模範を示すことによって、生徒も互いの意見に注意して耳を傾けるようになるであろう。生徒の意見を理解できなければ、質問する。次のように言うといい。『わたしはあなたの意見をよく理解していないと思います。もう一度説明してください。』あるいは『例を挙げて説明してくれませんか。』」（『教師、その大いなる召し』 64）

注

1. プリガム・ヤング、ヒーバー・C・キンボール、ウィラード・リチャーズ, "Sixth General Epistle of the Presidency of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints," *Millennial Star*, 1852年1月15日付, 25 参照
2. "Address to the Saints in Great Britain," *Millennial Star*, 1851年12月1日付, 365 参照
3. "The Gospel in Malta," *Millennial Star*, 1852年4月24日付, 141 - 142
4. "The Malta Mission," *Millennial Star*, 1852年6月5日付, 236
5. ジャベツ・ウッダード, *Millennial Star*, 1852年9月18日付, 476 参照
6. *Deseret Semi-Weekly News*, 1877年1月23日付, 1
7. *Deseret Semi-Weekly News*, 1883年1月23日付, 1
8. *Deseret Semi-Weekly News*, 1877年1月23日付, 1
9. *Deseret Semi-Weekly News*, 1897年3月30日付, 1
10. *Deseret Semi-Weekly News*, 1868年3月31日付, 2
11. *Millennial Star*, 1888年10月29日付, 690
12. Conference Report, 1880年4月, 81



聖徒たちがノーブーを去る前に、神権指導者たちは、
移住に参加することを望んだ聖徒全員を助けると聖約した。



「一つとなれるように」

「全能者の声が、一致と美しい兄弟愛を築くために、
 混乱……のただ中からわたしたちを呼び出しました。
 その一致と兄弟愛によって、わたしたちは自分自身を
 愛するように互いに愛し合わなければなりません。」

ロレンゾ・スノーの生涯から

聖徒たちがノーブーから追い出される前に、教会の指導者である兄弟たちは神殿で会合を開いた。そして、「ノーブーを去らざるを得ない聖徒の全員が、どこかの聖徒の集合地に居を定めるまで、可能なかぎりすべての手段と影響力を使って〔自分たちの〕働きを続けるのを決して止めない」と聖約した。¹この聖約を守ると決意していたブリガム・ヤング大管長は、1849年に永代移住基金を設けた。このプログラムにより、教会は、ユタに到着して仕事を見つけたら返済することを条件として移住する聖徒たちに費用の貸し付けを行った。

ヤング大管長は、このプログラムの資金を調達するためにロレンゾ・スノー長老とその他の人々を召した。聖徒たちに寄付を求めることはスノー長老にとって難しいことであった。彼ら自身もソルトレーク盆地に定住するまで、方々の地で追い出されて貧しかったのである。スノー長老は日記にこう記している。「盗まれ略奪された後、1,000マイル（約1,600キロ）以上の旅をして、大『アメリカ砂漠』の乾燥した荒涼たる地域に定住したばかりの聖徒たちに寄付を要請するという任務を果たすのは、自分にとってとても難しいことだと分かった。ごくわずかな例外を除いて、人々はほかの人に分け与えられるものをほとんど、あるいはまったく持っていない。」しかし、スノー長老が訪れたあらゆる地で、人々は可能なかぎりすべてのものを差し出した。彼はこのように報告している。「乏しい中から少しでも差し出そうとする努力と意欲が、あらゆる地で見られた。わたしは貧困のただ中であって、あらゆる地で、彼らの惜しめない心の広さを見た。貧困が普通であった地でさえ、心温まるあいさつを受けた。わたしの心は非常に大きな喜びで満たされた。ある人は、彼が唯一飼っていた牛を受け取るようわたしにしきりに求めた。彼が言うには、主は彼を救い出し、彼が故国を去って平和の地に来るときに祝福を授けてくださったので、唯一の牛を差し出すことによって義務として求められていることを行い、また立場が逆であれ

ばほかの人々からしてもらいたいことをしているにすぎないとのことであった。」

ユタの北部で寄付金を集めた後、スノー長老は次のように述べている。「聖徒たちは心が広がった。彼らの状況を考えると、彼らは惜しみなく、十分に寄付してくれた。言うまでもなく、喜んで寄付してくれた。」²

人々が個人として寄付した額はわずかであったが、努力を結集したことで多くの人の人生が祝福されたのである。永代移住基金は初期の目標を上回って増大し、ノーブーにいた教会員だけでなくそれ以上の教会員をも助けることとなった。それは38年間続き、多くの国から何万もの改宗者が仲間の聖徒とともに集合するのに役立った。〔182ページの提案1参照〕

ロレンゾ・スノーの教え

わたしたちが福音によって一つになると、主はわたしたちを通して
世の人々に主の特性を示される

イエスは御父に、御自分と御父が一つであるように、御父が世から与えてくださった人々が一つとなれるようにと祈られました。そして、あなたがわたしを愛してくださるその同じ愛を彼らにも与えてくださるように、またわたしが彼らのうちにおり、あなたがわたしのうちにおられ、みんなの者が一つとなれるように祈りますと、イエスは言うておられます。この言葉に非常に重要なことがあります。わたしたちは、御父や御子のようにすべてのことについて一つとなるまで自ら訓練しなければなりません。³

わたしが今読んだ聖句〔ヨハネ17:19-21〕には、主の目的が世の中で果たされるために、使徒たちが一つとなることの重要性と必要性が示されています。なぜなら、使徒たちと彼らを信じる人々が一つとならないかぎり、世の人々は救い主の使命と目的を信じることができないからです。したがって、イエスは御父に、御自分と御父が一つであるように、御父がイエスに与えられたすべての人が一つとなれるように、そして御父がイエスを遣わされたことを世の人々が信じるができるようにと祈られました。事実、これは、主がエジプトの捕囚からイスラエルを連れ出す際にイスラエルを通して行おうとされたことなのです。主は彼らを結束した民、特異な国民、神が尊び尊重される国民にして、それによって世の人々が信じ、神が授けたいと思っておられる祝福を受けることができるようにしたいと思っておられました。なぜなら、人類はすべて神の子孫だからです。イスラエルが神から求められることを行ったならば、疑いもなく、世の人々はそれによって大いに益を受け、神の目的はもっと十分に達成されたことでしょう。主は御自分の特質と諸天の特質を示し、またイスラエルを通して全人類家族に主の愛と祝福を伝えたいと望んでおられました。しかし、イス

ラエルは不従順であり、主の声に聞き従おうとはしませんでした。……

わたしたちの間に分裂があれば、すなわち霊的であろうと物理的であろうと分裂があれば、わたしたちは神が意図しておられる民には決してなれません。あるいは、聖なる神権が回復されたことと、わたしたちに永遠の福音があることを世の人々に信じさせる主の手の器になることもできません。神の目的を達成するために、わたしたちは、イエスが行われたように行わなければなりません。すなわち、一つのことだけでなくすべてのことについて、自分の個人的な意志を神の御心みこころに従わせなければなりません。また、神の御心がわたしたちのうちにあるように生活しなければなりません。⁴ [182 ページの提案2 参照]

和合一致が教会と家族に不可欠である

今日見られるよりもはるかに、わたしたちの間に一致があるべきです。十二使徒定員会には完全な一致があります。その定員会に完全な一致がなくてもよいでしょうか。すべての人が、この上ない確信をもって、「いいえ、十二使徒定員会に完全な一致があるべきだ」と言うでしょう。……また、大管長会の間にも完全な一致があります。そのような一致がなくてもよいでしょうか。すべての人が確信をもって、一致があるべきだと言うでしょう。七十人の七会長の間には完全な一致はなくてもよいでしょうか。確かに一致があるべきです。わたしたちは皆、「一致があるべきだ」と言います。シオンの様々なステーキの高等評議会の間には完全な一致がなくてもよいでしょうか。もちろん、あるべきです。その一致を得る方法があります。様々な他の組織や定員会と同じ方法です。ステーキの会長会の中に完全な一致がなくてもよいでしょうか。もちろん、あるべきです。もしもわたしがステーキの会長であれば、自分の顧問と一致するまで日夜休まないでしょう。ビショップと顧問の間には一致がなくてもよいでしょうか。もちろん、あるべきです。

では、もっと重要なことは何でしょうか。家庭内に一致がなくてもよいでしょうか。……もちろん、あるべきです。完全な一致を得るまで、すなわち完全な一致に到達できるまで、人はどうして満足できるでしょうか。一家の夫や父親はどうして満足していただけるでしょうか。この点で、父親は、家族の中であって最善を尽くして完全にならなければなりません。また妻は、最善を尽くして完全にならなければなりません。そうすれば二人は、子供たちが自分の意志と能力の限りを尽くして完全になるのを助ける準備ができます。父親と母親はよく気をつけなければなりません。妻は子供たちの前で決して夫をけなしてはなりません。夫が間違ったことをしたと思っても（間違ったことをしたかもしれませんが）、子供たちの前で決してそのことを語ってはなりません。夫を子供たちのいない所へ連れて行き、そこで明るい雰囲気、彼の過ちについて話すようにし

ます。しかし、決して子供たちの前で父親をけなしてはなりません。また、父親も同じです。子供たちの前で妻をけなす権利はありません。わたしは、夫と妻がこのような方法で彼ら自身を正したいという気持ちと理解力を神が彼らに与えてくださるよう祈ります。若い人々の間で今見られる非常に多くの不和、神権に関して目にする不遜な態度がどのようにして生まれたのかわたしは知っています。家庭内に様々な不和があり、子供の前で母親が父親に、あるいは父親が母親に無礼な態度を表してきたからです。わたしはこれらのことが事実であることを知っています。⁵〔183 ページの提案 3 参照〕

わたしたちは互いに平安で幸せであるように助け合うときに一つとなる

自分自身を愛するのと同様に隣人を愛するという原則に関して、わたしたちは随分話をします。わたしたちはそれについて話し、またそれについて時々考えます。しかし、実際にこれらの事柄の精神をどれほど実践し、また不和が自分たちの中にあることをどれほど理解しているのでしょうか。わたしたちを一つの民として結びつけることのできる特定の原則を実行し、一つとなるために気持ちを一つに合わせなければならないこと、ある事柄を行わないかぎりこれは決して達成できないこと、それにはわたしたちの側で特別な努力が必要なことを、わたしたちは理解しなければなりません。

皆さんはともに結ばれるためにどのように努力しているのでしょうか。隣人と一つとなるためにどのように努力しているのでしょうか。かつて知り合いでなかった二人の人がかかわりを持つようになった場合、互いの友情、愛情、好意を確保するためにどのように努力しているのでしょうか。なぜ何かを行わなければならないのでしょうか。それは一方だけが行うものではありません。一方だけでなく他方も行わなければなりません。一方が自分のことだけを行うのでは役立ちません。一方がその気持ちに応じ、自分の務めを果たすだけではだめです。心情も愛情も一つになるために、両者の行動が必要とされるのです。……

……互いの友情を確保し、一つの共同体として結ばれるために、〔それぞれの〕関係者が何かを行わなければなりません。……

……あなたの心を広げて、あなたの周囲にいる友人たちの関心事を理解し、それに心を配りましょう。あなたができる範囲で、あなたの友人たちに益をもたらすためにそうしてください。そうするときに、友人たちの益を考えないで自分のためだけに得ようと努力する場合よりももっと早く、あなたに必要なものが手に入るということが分かるでしょう。これが公正で重要な原則であることをわたしは知っています。……

……わたしたちの周囲にいる人々が平安と幸福を得られるようにすること、また隣人の気持ちと権利を決して踏みにじらないようにすることが、わたしたち



「家庭内に一致がなくてもよいでしょうか。……もちろん、あるべきです。」

の務めであるということを知る必要があります。ある人が出かけて行って兄弟の権利を踏みじるとしましょう。すると、両者の間にそれまであった信頼感がどれだけの時間で損なわれるのでしょうか。また、いったん損なわれたら、両者の間にかつてあった気持ちを取り戻すのにどれだけの時間がかかるのでしょうか。長い時間がかかります。次のことに注意を払わなければなりません。わたしはそう感じます。つまり、何を考えるときも、何を行うときも、静かに瞑想するときも、わたしたちは周囲のすべての人の益を心に留めるように、また自分だけでなく彼らにも権利と特権があることを考えるようにしたいと思います。わたしたちはこのことをしっかりと心に留めておく必要があります。

さて、周囲の人々の益にいつも心を配っている人がおり、その人が兄弟たちに属するものに、またすべてのものに祝福をもたらしたいと思っています。すると、その人自身も周囲の人々も幸せになることでしょう。ある人が反対の行動を取るとしましょう。ほかの人々を祝福し、益する働きかけをする代わりに、あら探しをし、やる気をなくさせるとしましょう。その人の状況は同じように良くなるのでしょうか。決して良くはなりません。

……わたしたちは、信頼を確保するために以前に行ったよりももっと意欲的に行うことが自分の義務であると感じるなら、自分の力の及ぶ範囲で、この世

的な祝福と恩恵をもたらして周囲の人々の友情を確保するようになることでしょう。ほかの方法ではなく、この方法でこそ、わたしたちはともに結ばれ、優しい兄弟愛の気持ちが自分にあることを示すことができます。わたしたちは、自分の行いによってこの気持ちを示さなければなりません。……握手をし、神の祝福が良い友であるあなたにあるようにと言いながら、翌日には前に言ったことにまったく注意を払わず、相手の好感情を踏みにじるなどということをしてはなりません。⁶

兄弟たちのために進んで犠牲を払おうとしないとき、また兄弟たちの気持ちを害していると分かっているとき、……その人は主の前に正しくありません。兄弟に対するその人の愛はどこにあるでしょうか。

兄弟が自分の兄弟のために進んで苦しみを受けようとしないうち、兄弟に対する愛があるということを、どうして示せるでしょうか。わたしは皆さんに申し上げます。わたしたちが兄弟に忍耐しないのは、わたしたちが愚かであり、弱いということなのです。彼らがわたしたちの権利を踏みにじると、わたしたちはすぐに仕返しをします。足を踏まれたら、すぐに相手の足を踏みつけます。……害を受けた兄弟が向き直って加害者を踏みつけるのを見ると、わたしは、その兄弟は義務の道から何と遠いことかと申し上げます。あなたは自制することを学ばなければならない、そうでなければ決して神の王国に救われないと、その人に申し上げます。⁷

教義と聖約の書から幾つかの聖句を読みます。

「昔のわたしの弟子たちは、互いに機をうかがい合い、またその心の中で互いを救ゆるさなかった。そして、この悪のゆえに彼らは苦しめられ、ひどく懲らしめられた。

それゆえ、わたしはあなたがたに言う。あなたがたは互いに救し合うべきである。自分の兄弟の過ちを救さない者は、主の前に罪があるとされ、彼の中にもっと大きな罪が残るからである。」「教義と聖約 64 : 8 - 9」……

ここで読んだように、救い主の弟子たちが成し遂げなかったことが一つありました。彼らは、自分たちが持つべきであった精神と気持ちの一致を確立することができませんでした。そこで、主はそのために彼らを懲らしめられたのです。主は、7度を70倍するまで互いに救し合うことを求めておられます。たとえ相手が救しを求めなくても、わたしたちは救さなければなりません。……自分の兄弟を救さない者にはもっと大きな罪が残る、すなわち、その人を怒らせた人よりもひどい罪人であると、告げられています。主はわたしたちに、自分自身を愛するように隣人を愛することを求めておられます。それは多くの場合かなり難しい問題です。しかし、その完全の域まで到達しなければならず、わたしたちはそれに到達することでしょう。⁸〔183ページの提案4参照〕

わたしたちは福音によって一つとなる時、光と英知を増し、
神のもとに住む備えができる

わたしたちは互いに結ばれ、心を一つにしてダビデとヨナタンのように行動しなければなりません〔サムエル上 18:1 参照〕。互いを傷つけるよりはむしろ自分の体から腕を切り離してください。わたしたちはこの状態になれば、何と力強い民となることでしょう。現時点で友情の度合いがどんなに薄くても、わたしたちはそうならなければなりません。わたしは皆さんに次のように申し上げます。わたしたちはそもそも神の存在を知っているならば、このように一つとならなければならぬ時が来ます。自分自身を愛するように隣人を愛するようにならなければなりません。現時点でどれほど遠い状態であっても、そうならなければなりません。しかし、ともあれ、わたしたちはこれらの原則を学び、心の中にその原則を確立しなければなりません。今、わたしはこのことをはっきりと心に描くことができます。だからこそ、わたしはこれらのことをこのような形で話しているのです。なぜなら、聖徒たちの心にそれを植え付け、毎日そのことを感じてもらいたいからです。⁹

全能者の声が、一致と麗しい兄弟愛を築くために、混乱、すなわちバビロンのただ中からわたしたちを呼び出しました。その一致と兄弟愛によって、わたしたちは自分自身を愛するよう互いに愛し合わなければなりません。この目的から外れるとき、その逸脱の度合いに応じて神の御霊はわたしたちから退きます。しかし、福音を受け入れたときに交わしたそれらの聖約を守り続けるなら、それに応じて光と英知が増し、来るべきことに対して十分な備えができます。そして、忠実であり、交わした聖約を守ることで、わたしたちが立っている土台は天の柱のように揺るぎないものとなります。¹⁰〔183 ページの提案5 参照〕

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。そのほかの提案については、v - vii ページを参照する。

1. 永代移住基金に関するロレンゾ・スノーの経験を復習してください (176 - 177 ページ)。今日の教会では、ほかの人々を助けるためにお金や物品を提供するどのような機会があるでしょうか。わたしたちが一つとなるのに、これらのことはどのように役立つでしょうか。
2. わたしたちが一つとなることを主が望んでおられる理由に関するスノー大管長の教えについて深く考えてください (177 - 178 ページ)。ほかの人々はわたしたちが一つとなっている姿を見るとき、主と主の回復された

教会についてもっと^{あかし}証を得るようになると思われませんが、それはなぜだと思えますか。わたしたちの中に分裂があるのを見たら、彼らの気持ちはどのように変わるでしょうか。

3. 178 ページから始まる項を調べてください。この勧告はわたしたちの家庭にどのように当てはまりますか。あなたの家族関係の中でもっと一致を促すために何ができるかを考えてください。
4. 扶助協会や神権定員会で、関心事や考え方が異なっているときでも、どうすれば一致を経験することができるでしょうか。(幾つかの例について、179 - 181 ページを参照してください。) あなたは家族が一致することでどのような恩恵を受けてきましたか。教会ではどうですか。地域社会ではどうですか。
5. 互いに愛し合うことで「力強い民」になれるのはなぜだと思えますか。互いに愛し合うことはわたしたちの生き方にどのように影響しますか。これらの質問について深く考え、あるいは話し合うときに、本章の最後の2段落を復習してください(182 ページ)。

関連聖句——詩篇 133 篇；ヨハネ 13：34 - 35；ローマ 12：5；モーサヤ 18：21；4 ニーフアイ 1：15 - 17；教義と聖約 51：9；モーセ 7：18

教える際のヒント——「福音を教えることによって、確信と改心をもたらす最も偉大な力が発揮されるのは、靈感にあふれる教師が『わたしは聖霊の力と聖なる御霊の啓示がわたしの心に与えられたので、わたしが教えている教義が真実であることを知っています』と語るときである。」(ブルース・R・マッコスキー。『教師、その大いなる召し』43 で引用)

注

1. ブリガム・ヤング、ヒーバー・C・キンボール、ウィラード・リチャーズ, "Important from Salt Lake City," *Millennial Star*, 1850 年 4 月 15 日付, 120 で引用; エライザ・R・スノー・スミス, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow* (1884 年), 107 も参照
2. *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 108
3. *Deseret News*, 1857 年 1 月 14 日付, 355
4. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1883 年 1 月 23 日付, 1
5. Conference Report, 1897 年 10 月, 32 - 33
6. *Deseret News*, 1857 年 3 月 11 日付, 3 - 4; 原典では 3 ページが誤って 419 ページと表示されている
7. *Deseret News*, 1857 年 1 月 14 日付, 355
8. Conference Report, 1898 年 4 月, 61, 63
9. *Deseret News*, 1857 年 3 月 11 日付, 4
10. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1889 年 6 月 4 日付, 4



1850年代初期にロレンゾ・スノー長老が宣教師として伝道した
イタリアのピエモンテ地方の現代の写真



「人類家族の救いのための」神権

「わたしたちが持つ神権は、人類家族の救いのために啓示されました。わたしたちは人々を救うためにどのように神権を用いることができるかについて、熱心に考え、思い巡らさなければなりません。」

ロレンゾ・スノーの生涯から

ロレンゾ・スノー長老は1849年2月12日に使徒に聖任された。その8か月後、イタリアに伝道部を開設する召しを受けた。1849年10月19日、スノー長老は、同じ召しを受けた数人の兄弟とともにこの使命を果たすために出発した。彼と同僚たちは徒歩で、あるいは馬や船に乗って長い旅をした。

1850年6月にイタリアに到着したスノー長老と同僚たちは、イタリアの主要な都市に住む人々が福音を受け入れる用意ができていないことを知った。しかし、ワルドー派として知られる人々に関心を持ち、彼らの中で働くよう靈感を受けた。ワルドー派の人々は、イタリアとスイスの国境のすぐ南、イタリアとフランスの国境の東にあるピエモンテ地方という人里離れた山間の溪谷に何世紀もの間生活してきた。宗教改革を目指して独自の社会を形成した彼らは、聖書を研究すること、救い主の使徒たちの模範に倣うことに献身していた。

スノー長老は、ワルドー派の人々に福音を^の宣べ伝えることについて考えたとき、「心に光が押し寄せてきたようだった」と語っている。¹しかし、そのような確信を受けたにもかかわらず、直ちに伝道の業を積極的に始めるのは賢明ではないと感じた。教会に敵対する人々が印刷物を発行し、教会に関して^をを広めていたからだった。²「最初はゆっくり、注意深く前進することは御霊^{みたま}の御心^{みこころ}にかなうと感じたので、天の御心に従った」とスノー長老は書いている。³

宣教師たちはすぐには伝道を始めなかったが、スノー長老はイタリア語とフランス語のパンフレットの発行を監督した。加えて、同僚とともに周囲の人々と親しくなった。「わたしたちは将来伝道する際に役立つ基盤を築くことに尽力した」と長老は語った。「周囲の人々の心に親愛の情を抱いてもらうことにより、福音を受け入れてくれるよう人々の思いを静かに備えた。しかし、偉大な原則を広めるために来たにもかかわらず、積極的に公に行うことはできないまま

興味深い人々の中で何週間も何か月も過ごすことはいささか奇妙なことに感じ、非常な忍耐を試される経験となった。」⁴

病状が非常に悪化した少年にスノー長老が神権の祝福を施してから、ワルド一派の人々の教会に対する感情は大きく変わり始めた。スノー長老は日記に次のように記している。

「9月6日。今朝、わたしたちが滞在している家の末息子、3歳のジョゼフ・ギーに注意を向けた。多くの友人が彼の見舞いに訪れていた。彼の命がもう長くないことはだれの目にも明らかだった。午後になってわたしが彼を見舞うと、死が彼の体を襲っていた。元の丸々とした体は今や骸骨がいこつのようにやせ細り、よほど近づかないと生きているかどうか判別できないほどだった。」

伝道に対する反対に遭って悩み、幼いジョゼフ・ギーを心配していたスノー長老は、その晩主に助けを求めた。後に次のように回想している。「床に就く前の数時間、わたしはこの時期に助けを与えてくださるよう主に願い求めた。このとき感じた思いは容易には忘れられないだろう。」

「9月7日。わたしは今朝、断食して山に行って祈るべきだと……提案した。出かける際に子供を見舞うと、彼は目玉を上に向けた後、まぶたを閉じた。顔も耳もやせ細って青白く、死期が近づいていることを物語っていた。彼の体は冷たい死の汗に覆われ、生命の源は今にも尽きそうだった。ギー夫人と数人の女性たちはすすり泣いており、ギー氏はうなだれていた。」ギー氏はスノー長老とほかの宣教師たちに、「息子が死んでしまう。息子が死んでしまう」とささやくように語った。

スノー長老は続けてこう書いている。「山の上で少し休んだ後、何の邪魔じまも入らない所に行き、わたしたちは厳粛な祈りを主にささげ、子供の命を救ってくださるよう呼び求めた。今後何をなすべきかについて、また間もなく人々に証あかしする事柄について思い巡らしていると、この状況がきわめて重要な意味を持っていると思えるようになった。主がわたしたちの願いにこたえてくださるよう、いかなる犠牲も惜しみなく、喜んで払おうと思った。」

その日の午後、ギー家族のもとに戻ったスノー長老は、ジョゼフに神権の祝福を与えた。数時間後に再び家族を訪れると、ジョゼフの父親は「感謝の笑みをたたえながら」息子の具合が大分良くなったことを告げた。

「9月8日。少年はすこぶる調子が良くなり、それまで長い間休息が取れなかった両親は、ようやく眠ることができるようになった。今日彼らは、少年を家に残して仕事に出かけることができた。」ジョゼフの母親から、息子が快復ききょうしたことへの喜びを告げられたとき、スノー長老は「天の神があなたがたのために行ってくださいましたのです」と答えた。

「その瞬間から少年は快復し始めた」とスノー長老は書いている。「わたしの心は天の御父への感謝でいっぱいだ。うれしいことに数日後、彼は床を離れて若い友達と遊べるようになった。」⁵

この経験の後、スノー長老は主の業が人々の間で進展するために、「非常に好ましい」状況になったと感じた。1850年9月19日、故郷を離れてイタリアでの伝道に向かってからちょうど11か月後、長老は同僚たちに「公に伝道の業を始める」べきだと語った。そして彼らは再び山に登り、そこでスノー長老は回復された福音を宣べ伝えるためにその地を奉獻した。⁶

ギー夫人に対してスノー長老が語った「天の神があなたがたのために行ってくださいました」という言葉は、神権について彼が生涯教えてきたことを示している。彼は聖徒たちに、神権者の働きを通して人々の益のために「神の栄光と力が現れる」ことを聖徒たちに思い起こさせた。⁷ [192ページの提案1参照]

ロレンゾ・スノーの教え

神権者は全知全能の神の使者であり、聖なる儀式を執り行うために
天から権能を授けられている

わたしたち末日聖徒は、神から満ち満ちる永遠の福音を受けたことを宣言します。わたしたちは神が人に授けられた権能である神権を有しており、それによって神に受け入れていただける神権の儀式を執り行うことができると宣言します。⁸

神の前に進んでへりくだり、悔い改めた後、罪の赦しゆるのために水に沈められる者はだれでも、あんしゅ 按手によりたまもの 聖霊の賜物を受けます。わたしがこれを人に与えることができるでしょうか。いいえ、できません。わたしはただ全知全能の神の使者として権能を与えられ、罪の赦しのために水に沈めるバプテスマを施すにすぎません。ただそれを行う権能を持つ者として、水に沈めるのです。そして、わたしが単に人々に聖霊を受けるようにその頭に手を置くだけで、神は御自身がおられる場所からわたしの持つ権能を認めてくださり、わたしを主の使者として認めてくださり、バプテスマを受ける人に聖霊を授けてくださるのです。⁹

わたしが人々にバプテスマを施し、この聖なる神権の儀式を施したとき、神はその人々に聖霊を授け、知識を与え、その権能が天与のものであるという確信を与えることによって、儀式を承認してくださいました。そしてこの永遠の福音を宣べ伝えるためにの 出行き、自分の召しあかしの御霊によって行動したすべての長老は、わたしと同じ証を述べるべきです。それは、聖なる儀式を執行することにより、その儀式を受けた人々の頭に圧倒的な神の栄光と力が現

われたという証です。これがわたしたちの証であり、ある人物の証でした。彼は〔1830年に〕出で立ち、罪の赦しのためのバプテスマを人々に施す権能を神から受けたと主張し、聖霊を授けるための按手を行いました。それによって人々が、彼がこの権能を持っているという永遠の世界からの知識を受けることができるようにするためです。この人物とはジョセフ・スミスです。彼は聖なる天使たちから与えられたこの権能を、世に証するために送られた人々に授けました。聖なる儀式を受ける人々が、儀式を授ける人々はその権能を受けているという証を全能の神から受けるようにするためでした。そして、これがこの人々と世に対するわたしの証です。¹⁰

一体どこに、この教会の長老と同じ主張をすることができる聖職者たちがいるのでしょうか。人々の前に立ち、自分は神から特定の儀式を執行する権能を受けており、この儀式によって人々は神から啓示を受けることができると述べる人可以、あるいは人々がどこにいるのでしょうか。このような教義を宣言する人は、すぐに偽り者と見破られ、非常に危険な状況に陥り、実際はそのような権能は持っていないことが判明することでしょう。しかしこの教会の長老はあえてこの立場を取っています。……神は聖なる天使を天より遣わされ、福音の儀式を執り行うための権能を人に回復されたのです。¹¹〔192 ページの提案2 参照〕

**わたしたちは神権により、この世において、
また永遠にわたって幸福を見いだす助けが得られる**

神権が回復され、人に授けられています。それは幸福で善い人になりたいと願うすべての人が、神権を通してその特権にあずかるためです。福音は、偉大で幸福で善い人になる方法を教えています。キリストの福音の精神は、現在と将来にわたってわたしたちの福利に必要なすべての事柄を教えているのです。

今日、わたしたちはこれらの目標を念頭に置いています。またこれからも続けて見据えていかなければなりません。25年、あるいはたった10年を振り返っただけでも、その期間に実に多くの人々が教会に加わりました。わたしたちが成し遂げてきたことを見てください。わたしたちはさらに多くのことを、より良く理解できるようになりました。そのため、10年前、15年前、20年前、あるいは25年前に比べ、わたしたちは役立つ者となる方法や、物事をふさわしく行う方法を知ることができ、この地上で起こることに対してより備えができています。……

……神権の目的は、すべて〔の人〕を幸せにし、情報を広め、それぞれの時期に、だれもが同じ祝福を受けられるようにすることです。¹²

まさにこの目的のために、聖なる神権がわたしたちのこの時代に与えられま



すべての忠実な教会員は、神権の儀式と聖約を通して祝福を受ける。

した。この地上の神の聖徒を導き、完全な者とするためです。わたしたちはこの世で到達する英知と、高潔さと忠実さに応じて……昇栄し、その状態で幕のかなたに現れるのです。¹³

主は、御自分が持つておられるすべてをわたしたちにお与えになると言われました。それは神権に伴う誓詞と聖約によって与えられます。〔教義と聖約 84：33 - 44 参照〕だれもイエスが語られたことを疑うには及びません。そして、聖ヨハネの黙示録の中に記されているように、主は次のように宣言しておられます。「勝利を得る者には、わたしと共にわたしの座につかせよう。それはちょうど、わたしが勝利を得てわたしの父と共にその御座みざについたのと同様である。」〔黙示 3：21〕これよりも大いなることがあるでしょうか。これはすべてのことを包含してはいないでしょうか。¹⁴

わたしたちが受けたこの福音は天から明らかにされたものであり、わたしたちが有している神権は人類家族の救いのために啓示されたものです。わたしたちは人々を救うためにどのように神権を用いることができるかについて、熱心に考え、思い巡らさなければなりません。¹⁵ [192 ページの提案 3 を参照]

義にかなった神権者は、人々に奉仕するうえで役立つように、
勤勉に、熱意を込めて霊的な賜物を求める

同じ神権を持つわたしの兄弟たちに、忠告、助言、心からの勧めの言葉を伝えたいと思います。皆さんには崇高で神聖な責任が課せられています。それはこの時代の人々の救いだけでなく、過ぎ去った多くの世代、そしてこれから訪れる多くの世代の人々の救いにかかわる責任です。インマヌエルの王国は再び世に建てられました。その栄光に満ちた旗をすべての国、王国、帝国において掲げなければなりません。警告の声を……すべての人々に届ける必要があります。皆さんは、この目的のために主から選ばれた人々であり、ヨセフの角として、民をことごとく突き倒すのです〔申命 33:13 - 17 参照〕。皆さんの聖なる、神聖な職を大いなるものとするために、最高の自分となり、自分たち自身と人類に最も役立つ者となる方法を求めながら、さらに熱意を込めて、これまでになく熱心に携わる必要があります。¹⁶

教会員の中には、かつて存在した人々と同じように善良な心と思いを持ちながら、信仰と勤勉に働こうとする熱意に欠けるために、本来自分が受けるはずの特権を手に入れない人がいます。もしもその思いや願い、正直さや善良さに匹敵するほどの信仰や熱意や決意があれば、彼らは確かにイスラエルの勇士となるでしょう。そして、病や邪悪な者の力は、風に吹かれるもみ殻のように彼らの前から逃げ去るでしょう。しかし、わたしたちは善良な民であり、他の人々に引けを取らないばかりか、神の前に義において大いに進歩していると言えます。そしてそれは間違いなく真実です。しかし、兄弟姉妹の皆さんに覚えておいていただきたいのは、わたしたちの中に霊的な賜物たまものを授けられている長老たちがあり、それらの賜物は聖霊の助けを通して実際に活用することができるということです。福音の賜物は勤勉と堅忍によって養わなければなりません。古代の預言者たちは特定の祝福や重要な知識、啓示、示現を願い求めるとき、その目的のために何日も、あるいは何週間にもわたって断食して祈ったものです。¹⁷

若い兄弟の皆さん、物事がうまくいかないとき、すべてが真つ暗に思えるときは、自分の責務を果たしてください。そうするならば、皆さんは確固とした力強い人になり、病人はあなたの祝福を受けて癒され、悪魔たちは皆さんの前から逃げ出し、死者はよみがえるでしょう。皆さんは神の力により、またふさわしい大望を抱くことによって、アダムの時代から行われてきたあらゆることを行うことができるでしょう。¹⁸

清さ、徳、忠節、信心を意欲的に求めなければなりません。さもなければ、冠は得られません。これらの原則をわたしたち自身の中に組み込み、身体に織り込み、わたしたちの一部としなければなりません。それによってわたしたちが真理や公平さ、正義や憐れみあわれみなどあらゆる偉大で善なるものの中心、源とな



古代の使徒ペテロ・ヤコブ・ヨハネがジョセフ・スミスとオリバー・カウドリにメルキゼデク神権を授けた。

り、わたしたちから光、命、力、律法が進み出て、さまようこの世を導き、治め、救う助けをなすようにするためです。わたしたちは神の息子として、天の御父のために、そして御父に代わってそれを行うのです。わたしたちは復活に当たり神権の力を行使します。その際、自分が手に入れた義と完成の度合いに応じてのみ行使することができ、先に挙げたこれらの特質は、求め、与えられる場合にのみ身に付けることができるのです。ですから、復活の朝にわたしたちが有することができるのは、この世において手に入れたものだけなのです。信心は授けられるものではなく、獲得しなければならないものです。奇妙なことに、また嘆かわしいことに、宗教界はこの事実気づいていません。人々を益することを求めてください。そうすれば、人々もあなたを益することを求めましょう。偉くなりたいと思う者は、善い人になり、全体の願いや必要を思い計り、すべての人の^{しもべ}の僕になりましょう。¹⁹

わたしたちは神の聖徒、イスラエルの長老として、喜んで時間と労働をささげ、必要なあらゆる犠牲を払わなければなりません。自分が受けている数々の召しにおいてきわめて有用な者となれるよう、ふさわしい霊的な資格を得るためです。そして主がすべての人の心にこれらの事柄の大切さを刻んでくださり、

わたしたちが福音に従うときに与えられると約束されている賜物や力を勤勉に、熱意をもって願い求めることができますように。²⁰ [下記の提案4参照]

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。そのほかの提案については、v - vii ページを参照する。

1. 185 - 187 ページの話を読み返してください。メルキゼデク神権者は、神権の祝福を受けるためにどのような方法で自分を備えることができるでしょうか。すべての人は、神権の祝福を受ける備えをするためにどのようなことができるでしょうか。
2. 187 ページの下から 6 行目から始まる段落を読んでください。神権の儀式はどのような形でわたしたちの生活に神の力を表すでしょうか。
3. すべての人にとって、神権の儀式と神権の祝福はこの人生で幸福を見いだすうえでどのような形で助けとなるでしょうか。また、わたしたちが永遠の幸福を得るうえでどのように役立つでしょうか。この二つの質問と関連して、188 - 189 ページに書かれているスノー大管長の教えについて深く考えてください。
4. 190 - 192 ページには、スノー大管長が神権者に霊的な賜物を養うように励ます言葉が書かれています。どのような賜物が挙げられているか調べてください。霊的な賜物を養うとはどのようなことだと思いますか。この勧告は、すべての教会員の努力とどのような関係があるでしょうか。

関連聖句 —— ヤコブの手紙 5:14 - 15; アルマ 13:2 - 16; 教義と聖約 84:19 - 22; 128:8 - 14; 信仰箇条 1:3, 5

教える際のヒント —— 「生徒に質問に答える準備をさせるために、何かを読んだり、提示したりする前にあらかじめ生徒から意見を求めるつもりであることを告げておくとよい。……例えば、『これから読む聖句を聞いて、いちばん関心を持ったことを話してください』あるいは『この聖句を読んでいる間、主が信仰について何を語りかけようとしておられるかを理解できるよう注意しててください。』」(『教師、その大いなる召し』 69)

注

1. プリガム・ヤングへの手紙参照, *The Italian Mission* (1851年), 11で引用
2. "Organization of the Church in Italy," *Millennial Star*, 1850年12月15日付, 371参照
3. プリガム・ヤングへの手紙, *The Italian Mission*, 14で引用
4. プリガム・ヤングへの手紙, *The Italian Mission*, 14で引用
5. "Organization of the Church in Italy," 371で引用
6. プリガム・ヤングへの手紙参照, *The Italian Mission*, 15で引用
7. Conference Report, 1880年4月, 81
8. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1877年1月23日付, 1.
9. *Deseret News*, 1872年1月24日付, 598
10. Conference Report, 1880年4月, 81 - 82
11. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1879年12月2日付, 1
12. *Deseret News*, 1861年5月15日付, 81 - 82
13. *Deseret Evening News*, 1880年10月6日付, 2; 1880年10月の総大会におけるロレンゾ・スノーの説教の詳細な記録から
14. "The Object of This Probation," *Deseret Semi-Weekly News*, 894年5月4日付, 7
15. *Journal History*, 1865年7月11日付, 2で引用
16. "Address to the Saints in Great Britain," *Millennial Star*, 1851年12月1日付, 362.
17. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1882年8月15日付, 1
18. "Anniversary Exercises," *Deseret Evening News*, 1899年4月7日付, 9で引用
19. "Address to the Saints in Great Britain," 362 - 363
20. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1882年8月15日付, 1



教会の指導者と無私の奉仕

「主の王国においてわたしたちは皆さんの^{しもべ}であり、
皆さんと全人類の福利を願っています。」

ロレンゾ・スノーの生涯より

1840年10月から1843年1月まで、ロレンゾ・スノーはイングランドのロンドンとその周辺地域の教会を管理した。彼はその地の神権指導者を管理し、時には一人ずつ教えたり、勧告を与えるために手紙を書いたりした。イングランドでの務めを終える少し前、彼はロンドンの二つの支部の管理長老（現在の支部会長のような働きをしていた）二人に手紙を書いた。その手紙の中で、同じ地域で働く別の支部指導者との経験について伝えている。

スノー長老はこの指導者について「特に目立った欠点はなかった」と表現している。彼は「大義を推し進めるのに意欲的」で、確実に「すべての人がそれぞれの場所でその責任を果たす」ようにさせる能力があった。熱心で「だれよりも勤勉に働いて」いた。しかしその外見的な忠実さにもかかわらず、支部には問題が絶えず、それらは彼に起因して起こっているようだった。スノー長老はしばらくの間、問題の原因を突き止めようとした。また、それとはなしに、その指導者を支持しないことについて支部の会員たちをたしなめた。しかし徐々に、その指導者には「彼自身も気づいておらず、人にも分からないが、彼には隠された内面的な性格があり」それが何らかの形で支部の問題を引き起こしているのではないかと考えるようになった。スノー長老は次のように記している。

「そこでわたしはこの事例に関して主が識別の御^{みたま}霊を与えてくださるよう祈りました。そしてわたしの祈りはこたえられました。この兄弟にはある種の隠れた虚栄心があり、多くの場合その行動の原動力となっていたのです。ある兄弟に責任を与えても、その誉れは自分が受けたいという隠れた願望がありました。その兄弟が責任を果たさなかった場合にはその怠慢^{しっせき}を叱責するのですが、それは主の業が進まなかったとか、その兄弟が祝福を失ってしまったという理由からではなく、自分の言うことに聞き従わないことで、侮辱されたと感じたためでした。ある兄弟の働きにより多くの人がバプテスマを受けたときには心に喜びを感じますが、それはその人々が聖約に入ったからではなく、自分の監督下で成し遂げられたためでした。そして自分もともに誉れを受けないかぎ



忠実な教会指導者は主がペテロに与えられた「わたしの羊を養いなさい」という勧告に従います(ヨハネ 21:16-17)。

り、自分の責任下にある人が大きな誉れを受けることがないようにそかに望んでいました。』

支部のある会員が何らかの責任を果たして成功しても、あらゆる細かい点においてその指導者の勧告に従わないと、彼は「口では称賛しながらも、心の底には嫉妬心しつとを抱いている」ことにスノー長老は気づいた。スノー長老は続けて書いている。「この嫉妬心は隠されており、一見態度には表れていませんでした。しかし正さなければやがては姿を表すでしょう。この生来の悪のために、ついには彼自身が主に使っただけなくなってしまうでしょう。彼の嫉妬心は、責任下の事柄を管理するうえで不必要な問題を引き起こしていましたし、彼自身が不快な思いを抱き続ける原因にもなっていました。神の大義を押し進めることに熱心でありながらも、何をするにも、自分が関与していることがだれからも分かるように行っていました。良い指導を与えることに意欲的でありながらも、その文末には自分の名前を一字も欠けることなく抜かりなく明記していたのです。」

スノー長老がこの手紙を書いたのは、その支部指導者を非難するためではない。その目的は、ほかの指導者たちが高慢な思いに「気づき、理解し、避けられるように」助けることだった。「自分はこの虚栄心とはまったく無関係だと心から信じる多くの人々が、自分を行動に駆り立てる動機をじっくりと吟味するなら、自分の行動を促しているのが多くの場合この虚栄心であることに気づき驚く」だろうと警告したのだった。

この警告を伝えた後で、長老はこのように勧告している。「神が望んでおられるような人物になるには、ほかの人が祝福を受けることを自分のことのように喜べるようにならなければなりません。どのような方法であれ、御父が命じられた方法でシオンの大義が推し進められるのを喜び、自分よりも弱い人がより高い誉れを受けても、みじんのねたみも持たないようにしなければなりません。より高い召しを受けるまでは、小さな召しを尊んで大いなるものとするので満足し、小さな事柄を成すことで心を満たし、大きな成果については自分の誉れを求めないことです。」スノー長老は教会を大きな建物に、一人一人の聖徒をその建物の部分にたとえて、「霊の建物内の自分の定位置にきちんと収まるように、時には切られ、角を整えられ、印を刻まれ、やすりで削られる必要があります。高慢のためにそれを嫌がるようであってはなりません」と書いている。

スノー長老は次のような言葉で手紙を結んでいる。「管理長老が、本来あるべき姿として、自己中心的な生き方を遠ざけ、常に支部の人々の益となるように行動し、謙遜けんそんで、短い時間あまりに多くのことを行おうとせず、成長するまではあまり背伸びしようとしなければ、自分の職を大いなるものとするための適切な方法はおのずと分かり、神の賢明な目的を果たすために必要な神の力を失うこともないでしょう。」¹ [200 ページの提案1 参照]

ロレンゾ・スノーの教え

主は御自分の教会の指導者たちに、「わたしの羊を養いなさい」
という神命をお与えになった

管理の職を受けており、神から聖なる神権を与えられているすべての男性は、救い主が御父のみもとに戻られる直前に十二使徒に語られた「わたしの羊を養いなさい」という言葉について考えていただきたいと思います（ヨハネ 21：16－17）。主があまりに何度もその言葉を繰り返されたため、使徒たちは悲しく思ったほどでした。それでも主は再び「わたしの羊を養いなさい」と言われました。その言葉はこのような意味でした。「誠心誠意出て行き、わたしの大義に全力で献身しなさい。世の人々はわたしの兄弟姉妹なのだ。わたしは彼らに対して強い思いを抱いている。わたしの民の世話をしなさい。わたしの群れを養いなさい。出て行って福音を宣べ伝えなさい。あなたが払うすべての犠牲に対して、わたしは報いを与えよう。この業を果たすうえで、この犠牲は大きすぎるなどと考えるてはならない。大きすぎる犠牲などないのだ。」主は、この業を行うよう心を込めて使徒たちをお招きになりました。そして今わたしは、この神権を持つすべての人々、ステークの管理の職にある人々、ビショップや高等評議員たちに、出て行って羊の群れを養うように呼びかけます。彼らに関心を抱いてください。……彼らのために働いてください。皆さんの思いや心を、自分の勢力の拡大に向けなくてください。以上のことに従うなら、神は啓示に啓示を加え、靈感に靈感を加え、聖徒たちの物質的、霊的な幸福について、彼らが祝福を得る方法を教えてください。²〔200 ページの提案 2 参照〕

指導者と教師は自分を偉大に見せるためではなく、救い主の模範に従い、
愛をもって奉仕するために召されている

なぜある人は、長として人々を管理するように召されるのでしょうか。影響力を得て、それを利用して自分の勢力を拡大させるためでしょうか。そうではありません。反対に、神の御子が神権を授けられたときに従われたのと同じ原則、すなわち犠牲を払うという原則により管理の職を果たすよう召されているのです。その犠牲は自分のために払うのでしょうか。いいえ、違います。彼が管理する人々を益するためです。指導者は救い主がされたように、自らを十字架に掛けることを求められているのでしょうか。そうではありません。兄弟たちの主人ではなく僕となり、彼らの利益と幸福のために働くためです。得られた影響力を自分自身や家族、親戚や個人的な友人を益するために用いることなく、すべての人を兄弟のように思い、自分と同じような権利を持つ存在としてとらえ、それによってすべての人をそれぞれの才能やふさわしさに応じて公平に祝福し益を得

られるように助けたいと望むのです。そうすることで、天の御父が常に心に抱いておられる父親としての思いを自分自身の心の中にはぐくむことができるのです。

……聖徒に教えを説く人々に、神権が与えられた目的を理解させてください。それぞれの職に就くよう召された理由を悟らせ、完全に理解させてください。そうすることによって、すべての人の僕であられる主の御心みこころに添って行動し、自分自身の必要を満たそうとするのと同じように心を込めて、すべての人の利益や幸福を満たそうと考えられるようになるためです。……そうするなら、救い主が「律法と預言者とがかかっている」と語られた、思いと力を尽くして主を愛する、また自分を愛するようにその隣人を愛するという二つの偉大な戒めを理解するようになるでしょう〔マタイ 22:37-40 参照〕。³

〔教える〕前に、次のような祈りをささげてください。皆さんが教える人々の益になることを語れるよう、主に願い求めるのです。それが自分に栄光を増し加えるかどうかは気にせず、ただ、自分は聴衆に語るために召されていること、彼らは自分たちの益になることを聞きたいと望んでいることを覚えてください。それは主によってしかできません。あなたの言葉を聞く人々が、すばらしい話だったと語るかどうかは気に留めないでください。それにはまったく心を開けることなくあなたの思いからあらゆる利己心を取り除き、主が人々にとって益となることをあなたの心に示してくださるようになるのです。⁴〔200 ページの提案 3 参照〕

賢明な指導者は、人々の才能を認め、人々に奉仕する機会を与える

〔指導者が〕人々の敬愛を受け、誠実さと正直さ、また求められるいかなる犠牲も惜しまずに神と人々のために働くとする意欲を持つ人だという評判を得るとき、その指導者は人々から信頼されます。そしてそのような神聖な信頼を受けたときに、多かれ少なかれさらに進歩したいと願う人々の思いを満足させるために指導者は何をするでしょうか。そのようなときは、最も能力のある兄弟たちに助けを求め、自分の責任の一部を担ってもらうのです。なぜなら、一般的に、才能は多くの人に与えられており、一人の人にまとめて与えられることはまれだからです。才能を伸ばすにはただそれを活用する機会が必要なだけだということが分かるでしょう。指導者はこのように言うといいでしょう。ある人には「さあ、兄弟、この責任を果たすのに、わたしよりあなたの方が適任です」と伝え、別の人には「あなたはこの分野にまさにぴったりの人です」と言い、すべての人の才能を引き出すまで続けるのです。そうするなら、指導者に対する人々の信頼を弱めるどころか、さらに増し加えることができるでしょう。⁵〔200 ページの提案 4 を参照〕



「一般的に、才能は多くの人に与えられており、一人の人にまとめて与えられていることはまれであることが分かるでしょう。」

ふさわしい指導方法とは、謙遜けんそんさと良い模範、人々の福利のために
献身することによって導くことである

権威主義的な管理は、聖徒を治めるのにふさわしい方法ではありません。そうではなく、謙遜さと知恵と善良さによって管理し、言葉でなく模範によって教えるようにするのです。天使のように雄弁に教えるよりも、善い行いや模範、実践によって、人々の福利を真心から願っていることを絶えず示す方が、はるかに雄弁に、効果的に教えることができるでしょう。⁶

もし皆さんが、大管長会や十二使徒たちのように忠実で、一致し、そしてわたしたちがキリストに従うようにわたしたちに従うなら、皆さんにとってすべてはよしとなるでしょう。わたしたちは自分の責務を果たし、主に仕え、主を信じる人々が祝福を受け、主の業が成し遂げられるように働こうと決心しています。主の王国においてわたしたちは皆さんの僕しもべであり、皆さんと全人類の福利を願っています。

主はこの世で主の業を進めるために、世の中の偉大で学識ある人々をお選びにはなりません。主の教会の業務を果たすために主がお選びになったのは大学や宗教教育機関で訓練と教育を受けてきた人々ではなく、主の大義に献身する謙遜な人々でした。喜んで聖霊の導きを受けようとする人々であり、自分の力では何もできないことを知っており、主に栄光を帰する人々でした。兄

弟姉妹の皆さんにははっきりと申し上げますが、わたしは今自分に与えられている責任を得ようという野望を持ったことはありません。体裁よく責任を逃れることができれば、現在の地位にいることは決してなかったはずで、その地位を願い求めたこともなければ、この地位を得られるように兄弟のだれかに頼んだこともありません。しかし、主はわたしと兄弟たちに、これが主の御心であることを示されたのです。わたしは、主がわたしに果たすように望んでおられるどのような責任や地位も、それから逃れようとしたり、引き下がったりするつもりはありません。⁷

わたしは皆さんが、そして神の王国が益を受けるように献身し、力を尽くします。知識と理解の限りを尽くして皆さんに仕え、全能の神の御心に関して皆さんがさらに祝福を受けるようにします。主の助けを受けて、わたしはこれを行います。⁸〔201 ページの提案 5 参照〕

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。そのほかの提案については、v - vii ページを参照する。

1. ロレンゾ・スノー大管長がイングランドの指導者にあてた手紙（194、196 ページ）は、わたしたちにどのように当てはまりますか。例として、わたしたちが教会の召しを果たすうえで「虚栄心」を抱くと、どのような結果になるでしょうか。自分を大いなるものとせず召しを大いなるものにするにはどうしたらよいでしょうか。
2. 197 ページの上から始まる項を研究してください。指導者はどのようにキリストの「羊の群れを養〔う〕」ことができるでしょうか。あなたを「養〔う〕」ために、教会指導者は何をしてくれましたか。あなたはその指導者たちのどのような特質を尊敬していますか。
3. 自分の勢力の拡大についてスノー大管長が警告を与えている箇所を読んでください（197 - 198 ページ）。その後で、196 ページの上から 15 行目から始まる段落を読み返してください。奉仕するとき、自分の動機を吟味しなければならぬのはなぜでしょうか。教会で奉仕する動機について、祈りの気持ちで考えてください。
4. 198 ページから始まる項について、深く考えてください。指導者がその責任をほかの会員に委任して果たしてもらおうとするとき、ワードや支部はどのような影響を受けますか。様々な才能や経験を持つ教会員たちが共通の目的に向かってともに働くとき、どのような結果が起りますか。あなたがこれまで目にしたことについて分かち合ってください。

5. スノー大管長は次のように勧告を与えました。「権威主義的な管理は、聖徒を治めるのにふさわしい方法ではありません。」(199 ページ) 教会指導者が権威によって管理するとき、どのような結果が考えられますか。両親の場合はどうでしょうか。謙遜に指導するとき、どのような結果が考えられますか。

関連聖句 —— マタイ 6:24; 20:25 - 28; 23:5; マルコ 10:42 - 45; ヨハネ 13:13 - 17; 2 ニーファイ 26:29; 28:30 - 31; モーサヤ 2:11 - 19; 3 ニーファイ 27:27; 教義と聖約 46:7 - 11; 50:26; 121:34 - 46

教える際のヒント —— 「レッスンが始まる前に質問を黒板に書き出しておくことによって、生徒にレッスンの始まる前からテーマについて考えさせることができる。」(『教師、その大いなる召し』 93)

注

1. ロレンゾ・スノーからウィリアム・ルージーとウィリアム・メジャーへの手紙, 1842 年 11 月, Lorenzo Snow, Letterbook, 1839 - 1846 で引用, 教会歴史図書館
2. *Deseret News*, 1880 年 1 月 14 日, 787
3. *Deseret News*, 1877 年 6 月 13 日付, 290 - 291
4. *Improvement Era*, 1899 年 7 月号, 709
5. *Deseret News*, 1877 年 6 月 13 日付, 290
6. "Address to the Saints in Great Britain," *Millennial Star*, 1851 年 12 月 1 日付, 362
7. *Deseret Semi-Weekly News*, 1898 年 10 月 4 日付, 1
8. Conference Report, 1898 年 10 月, 54



「人が知識を受けるとき、それをほかの人にも分かち合うように促されます。
人が幸福になるとき、その人を取り巻く御霊は、
ほかの人々を幸せにするために努力するように教えるのです。」



伝道活動一 「あらゆる人の心に触れるために」

「あらゆる人の心に触れるためには一つの方法があります。そして、皆さんが仕えるよう召されている人々の心に近づき、触れる方法を見つけるのは、皆さんの仕事なのです。」

ロレンゾ・スノーの生涯から

ロレンゾ・スノーはオハイオ州カートランドでバプテスマを受けた。そして、そこで預言者ジョセフ・スミスやほかの教会指導者と席を並べてヘブライ語を学んだ。いつの日か合衆国東部の大学で「古典語の教育」を受けたいと考えていた。¹しかし、この目標に向かって努力するにつれ、別の目的に心引かれるのを感じ始めた。後に彼は次のように述懐している。

「わたしは心を開いて〔福音の真理〕を受け入れた。そして、そこにとどまらないと決心していた……。このすばらしい知識を受け入れたにもかかわらずその証^{あかし}を述べずにいることは自分にとってふさわしいことなのかどうか、少し心配になり始めた。伝道に出た若い男性たちが次々に帰還し、受けた祝福を証していた。……わたしは、東部の大学に入る準備をやめ、出て行って、主が豊かに与えてくださった知識について証するべきだと考え始めた。同時に、教育を受けるといふ目標もあきらめたくはなかった。長い間心に温めてきたからだ。また、当時わたしにはその目標を果たすための機会も費用もあった。」

様々な思いに葛藤^{かつどう}しながら、スノー長老は信頼する友人に助言を求めた。「わたしが自分の望みを伝えると彼は言った。『スノー兄弟、この状況でこのような助言をほかの人にはしないでしょが、もしわたしがあなたの立場にいたしたら、自分の思いを貫き、教育を受けるでしょう。』それこそ彼の口から聞きたいと思っていた言葉だったので、わたしは喜んだ。しばらくの間は満足していたが、その年の冬、若い長老たちが福音を宣べ伝える業にあって得た成功を証するのを聞きながら、そのことについてさらに考え始めた。主はわたしに、主が地上に再臨されることと、そのために必要な備えをしなければならないことを知らせてくださった。主はわたしが願い求めたあらゆること、またそれ以上を与えてくださった。バプテスマを受け、聖霊を授かり、それによって与えられた

完全な知識は、冷たい水に沈められたこと以上に現実味を帯び、確信を与えるものだった。自分には責任が課せられていると感じた。そこでわたしは本を閉じ、ラテン語とギリシャ語の研究をわきに置いたのだった。」²

この決心をした後、ロレンゾ・スノーは1837年にオハイオ州で伝道した。後に、ミズーリ州、イリノイ州、ケンタッキー州、オハイオ州、またイングランド、イタリア、ハワイ諸島、合衆国北西部、ワイオミング州で伝道している。イングランドにいたときにおばにあてて書いた手紙の中で、進んで家を離れて宣教師として奉仕した理由について次のように説明している。「故郷や、幼少のころから慣れ親しんだ人々から7、8千キロ離れた場所にいることを考えると、ごく自然になぜ自分はここにいるのか……という疑問がわいてきます。わたしがここにいるのは、神が語られ、預言者をお召しになり、預言者を通して満ちみちる永遠の福音を回復されたからです。回復には、あらゆる賜物たまもの、力、儀式、祝福、そして、すべての人に対する『悔い改めよ、天の王国は近づいた』という宣言が伴いました。わたしは地の国々にこのメッセージを携えていくよう、神の導きによって使者として召されています。これはわたしに与えられた大きな責任であり、全能の神の助けなしには果たせないことをはっきりと自覚しています。」³

スノー大管長は、宣教師として主に仕える決心をしたことを、常に感謝していた。1901年9月、87歳のとき彼はこう語った。「宣教師として働いた日々を思い出すと、今でも心に喜びがわき起こります。この特別な経験を通して得られた思いは、わたしという人間の大切にかけがえのない一部となりました。」⁴
〔210ページの提案1参照〕

ロレンゾ・スノーの教え

わたしたちは完全な福音を受け入れるとき、
人々も同じ祝福を受けて喜べるように助けたいと望む

人が知識を受けるとき、それをほかの人にも分かち合うように促されます。人が幸福になるとき、その人を取り巻く御霊みたまは、ほかの人々を幸せにするために努力するように教えるのです。……はたして人は、キリストの福音の知識なくして幸福になれるでしょうか。……世の人々は幸福になろうとしますが、その努力が実を結ぶことはありません。ある原則に従わないかぎり、人は幸福になることはできません。その原則とは、完全な福音を完全に信じることです。この原則は、自分たちが幸福になるのを永遠の時が来るまで待つのではなく、この世において、自分たちや周囲の人々が全能の神の祝福を享受できるように励むよう教えてくれるのです。

ですから、わたしたちは次のことを動機とし、目標としなければなりません。

すなわち、役立つ者となれるよう努力すること、^{はらから}同胞を救う方法を学び、彼らの救い手となること、人々を自分と同じ段階の英知まで引き上げるために、彼らに原則に関する知識を伝えることを目標とするのです。⁵

出て行って、周囲の人々と友達になってください。あるいは、一人の人を選んでその思いや信仰や考えを高め、状況を改善し、啓発しようとしてください。彼らが罪人であるなら、罪から救い出すよう努力し、彼らが束縛の状態から逃れ、あなたが享受している光と自由を味わえるようにしてください。そうすることにより、主があなたに分け与えてくださった知識を使って善を行うことができるのです。⁶〔210 ページの提案 2 参照〕

宣教師は、人々が真理を知ることができるよう助けるために進んで犠牲を払う

聖徒たちが〔ユタの〕この盆地に落ち着くやいなや、主の僕たちは教会に託されている偉大な伝道の業に再び注意を向けました。

わたしたちは貧困のただ中にありながら、この土地を人の住める場所にしようと必死に働いていました。しかし、福音を外国に広めるという義務をないがしろにすることはできませんでした。主が福音を世界の果てまで宣べ伝えよとお命じになったからです。あらゆる迫害を受け、追い立てられても、末日聖徒が主から受けたこの命令を果たそうとしてきたことは、これが神の業であることを示す一つの証拠です。

開拓者が〔ソルトレーク〕盆地に入植してからわずか2年後、1849年10月に開かれた教会の総大会において、多くの長老たちが世界各地で伝道部を開設するよう召されました。十二使徒の4人がその先頭を切るよう任命を受けました。使徒エラスタス・スノーはスカンジナビアに、使徒ジョン・テラーはフランスに、わたしはイタリアに、そして使徒フランクリン・D・リチャーズはすでに伝道部が設立されていたイングランドに召されました。厳しい状況下であり、家族も困窮を極める中、わたしたちは大変な業に着手したのです。しかし、主に召されたからには、わたしたちはどんな犠牲が伴おうともそれにこたえるべきだと感じていました。⁷

わたしたちは、自らの命を顧みず献身します。世の人々が、永遠の世界に神が存在されることを知るように、また神が人の子らの生活に現在も関与しておられることを人々が理解するように助けるためです。世の中では、不貞が過ちではないという意見に傾いています。キリスト教徒の中にさえも、自ら公言して不評を被るまではしないまでも、神は人の子らと関係があるとは信じていない人が何千、何万といます。人の子らが信仰と知識に到達できるよう、わたしたちは立ち上がり、犠牲を払わなければなりません。⁸

若い宣教師たちを地の国々に赴くように召すとき、彼らはこのことについて考え、思い巡らします。世界各地で宣教師として働いた人々の経験を聞き、自分たちが経験するであろう試練や困難を予想すると、あまり心躍るような事柄でないのは確かです。しかし、進んで出で立ち、求められていることに従おうとする彼らの決心は徳高いものです。⁹

伝道については、若い長老たちにとって喜ばしいとは思えないことも数々あります。彼らは家で楽しみとしていたことを犠牲にしなければならないことに気づき、彼らが語ることを常に喜んで受け入れるわけではない人々のもとに赴くことを理解します。しかし、一方では、自分たちは永遠の命の種を手にしており、もし正直な男性や女性を見つめることができれば、主の御霊はその心に働きかけてくださり、長老たちが届けるこの栄えあるメッセージを恐らく受け入れてくれるだろうことも感じています。これは彼らに喜びと満足をもたらします。さらに、彼らは伝道の経験を通して、将来務めを果たすうえで大切なことを習得する機会が得られることも分かっています。伝道に召された人々——そのほとんどは若い長老たちですが——から受け取った何千と言う手紙の中に、召しを拒む返事は1通しかありませんでした。なぜでしょう。それは愛と不死不滅の御霊、全能の神の御霊がこの若い長老たちに注がれており、彼らは啓示を受けたことによって、行動を促されているからです。それ以外、彼らに靈感を与えてそのような思いや行いに導くものはないでしょう。¹⁰ [211 ページの提案3 参照]

宣教師は、自分たちが善と喜びのおとずれを携えた天の使者であることを決して忘れてはならない

わたしたちは福音を宣べ伝えるために長老たちを遣わします。だれが彼らを遣わすのでしょうか。……イスラエルの神が彼らを遣わされるのです。これは主の業です。一人の長老が福音を宣べ伝えるとき、その成功に主ほど大きな関心を寄せている者は死すべき人間の中にはいません。御自分の子供である人々に対して教を宣べ伝えさせるためにその長老を送られたのは、ほかならぬ主御自身だからです。前世において彼らは主の子供であり、主が望まれたためこの地上にきました。¹¹

わたしたちは、〔宣教師〕の皆さんが大いなる成功を収めるだろうと感じています。なぜなら、皆さんは神から召されたことを感じ、知っているからです。人の知恵では、このような業は決して考えつかなかったでしょう。この業の偉大さを考えるとき、わたしは驚嘆します。今このときにまさに必要な業であると言うことができますし、皆さんは魂のすべてをかけて、その業に従事するであろうことを確信しています。御父から与えられたことでなければ、自分からは何



「自分の関心事を捨て去りなさい。そうすれば、皆さんは偉大で栄えある成功を得るでしょう。そして教会全体が皆さんの働きの成果を感じるでしょう。」

事もすることができないと語られたイエスの精神を皆さんも養い育ててください〔ヨハネ5:30参照〕。

困難や一見失敗と思えることを決して気にしてはなりません。自分の関心事を捨て去りなさい。そうすれば、皆さんは偉大で栄えある成功を手にするでしょう。そして教会全体が皆さんの働きの成果を感じるでしょう。

皆さんが働きかける人々の中に無関心な人がいても、多少の落胆を感じても、決して気に留めてはなりません。主の御霊が皆さんとともにいてくださり、皆さんは教えを伝える人々の霊を揺り動かし、彼らの無関心を一掃することができるでしょう。……皆さんが果たすようにと送られた業を成し遂げて満足を得るでしょう。

皆さんは完全な権能を与えられています。しかし、これについて話す必要はまったくありません。その必要がないことが分かるでしょう。なぜなら、主の御霊がその確認を与えてくださり、人々は皆さんがそれを持っていると感じるからです。人々がそれを感じ、確認を受けることが、皆さんの権能になるのです。

自分は皆さんよりも多くを知っていると考える人々にも会うでしょう。しかし、皆さんが言われたとおりに務めを果たすなら、彼らは皆さんが彼らのもとを去る前に、皆さんが自分よりも少し多くを知っていると感じ、皆さんから祝福され、助けられたと、感じるでしょう。

自分が遣わされた地の人々に好かれ、受け入れられるように努力してください。皆さんが見せる謙遜^{けんそん}さと、皆さんの内に宿る主の御霊によって、人々は皆さんが果たすように召された職にふさわしい者であることを知るでしょう。一般の人々の考え方や感じ方、行動の仕方を理解し、それにふさわしく行動しようと努めてください。それによって、すべての人を幸福にし、すべてのことを受け入れてもらえるようにするためです。……

あらゆる人の心に触れるためには一つの方法があります。そして、皆さんが仕えるよう召されている人々の心に近づき、触れる方法を見つけるのは、皆さんの仕事なのです。……

わたしは心の中で、神が皆さんを祝福してくださるようにと祈ります。皆さんは出発する前に聖任されます。そしてわたしたちは皆さんのために祈り、深い関心を寄せ続けます。柔和な心を持ち、謙遜であってください。人々を見ると、二つの思いが皆さんの中にわき起り、行動を促すでしょう。一つは、上手に語り、語り手として聞く人々に良い印象を残したいという思い、そして二つめは、「なぜ自分はここにいるのか」という疑問です。聞く人々の心の中に永遠の命の種を植えるには、心の中で次のような祈りをささげなければなりません。「おお、主よ。御心になりますように。主の御霊によって力を授かり、これらの主の民の心に触れることができますように。」長老たちに必要なのは、この短い祈りをささげることだけです。それは皆さんにとっても同様です。「この人々を救うために、わたしに何か言わせていただけますか。」このような祈りをささげることこそ、大管長会……そして幹部の兄弟たちすべてが皆さんに望んでいることなのです。¹²

皆さんの霊の武具を磨くことに心を向けてください。わたしは、この世のことをすべてわきに置くとき、霊の事柄にひたすら目を向けることができることに気づきました。兄弟の皆さん、祈ってください。そして断食することをいとわないでください。……冗談が過ぎることのないようにし、御霊を悲しませないように注意してください。わたしは伝道に出て1、2週間で家を忘れることができました。すると神の御霊が支えてくださいました。御霊は自由で愉快的気持ちにさせてくれるものですが、浮かれすぎないようにしてください。……頭のとっぺんから足の先まで神の御霊を受けられるように、常に祈り続けてください。¹³

ぶどう園で働く長老たちは、自分たちが天から遣わされた使者であり、主を知らない人々に善と喜びのおとずれを携えて行く者であるということを決して忘れてはなりません。……

預言者ジョセフ・スミスが初めて宣教師を外国に送り出したとき、彼らがどのように人々に受け入れられるかを予見していました。彼らを神の僕として受け入れる人々はほとんどなく、大多数は彼らを拒み、彼らのメッセージに耳を傾け

ないだろうと語りました。これは、世の初めから多くの神の僕たちが経験をしてきたことであり、わたしたちを通して真理の知識に導かれる人がほんのわずかであったとしても、わたしたちは忠実な働き手が受ける結果に満足しなければなりません。……

わたしは、業に働く長老の中から、……己を忘れ、世の誘惑の餌食^{えじき}になる者が出ないよう、心から願い、祈ります。世の誘惑を避けるために確実な方法が一つだけあります。それは、悪を避け、その兆しさ^{えじき}も避けることです。様々な誘惑が彼らの前に現れるでしょう。それが、わたしたちの救いに敵対するもののやり方だからです。しかし、イスラエルの長老たちがなすべきことは、誘惑に打ち勝つことです。それを首尾よく行うには、世の汚れに染まらずに自らを清く保たなければなりません。彼らが伝道の精神を養い、愛し、イエス・キリストにあって受けた高い召しの重要性を認識し、その御霊に従って生活するなら、人々の導き手、救い手として立ち、天の光を輝かせ、ほかの人とは違った者となるでしょう。しかし、彼らが敵の陣地に足を踏み入れ、この世の態度を踏襲するなら、力は取り去られ、ほかの人と似た者となってしまうでしょう。そして、墮落した人々と同じように失意に満ちて帰郷し、愛する人々を悲しませることになるでしょう。……しかし、謙遜に、主の誉れと栄光にひたすら目を向けながら主を求め続け、心に人の魂の救いを願い、その達成のために自分にできるすべてを行うなら、自分の働きによって言葉にならないほどの喜びを味わい、ついには御父と御子とともに、肉においてはとうてい理解や考えが及ばないほど偉大で栄光に満ちた祝福にあずかるでしょう。¹⁴ [211ページの提案4, 5参照]

人々が完全な福音を受け入れられるように助けるとき、わたしたちの心は喜ぶ

この業を成し遂げるために、わたしたちの側に必要なのは、忍耐と信仰、勤勉、粘り強さ、長く堪え忍ぶことを大いに実践し経験することが必要だと考えます。しかし、やがては何千という人々が福音を受け入れる町であっても、成果の伴わない働きが何か月も続いた後で初めて、人々が関心を示し、福音の原則に従い始めることがあります。……中には、数か月どころか、おそらく数年かかる地域もあるでしょう。しかし、わたしたちは確かに、信仰、祈り、働き、そして主の祝福によって、最終的にはこれらすべての困難を乗り越えて勝利を得、神の栄光をほめたたえることができますと感じています。それに加え、わたしたち自身も、自分の務めを果たし、自分の衣がすべての人の血から清められたことを喜ぶことができます。¹⁵

イタリアに向かう前、わたしは〔イングランドの〕マンチェスター、マクレスフィールド、パーミンガム、チェルトナム、ロンドン、サウサンプトン、サウスカンファレンスを訪れたことがありました。……〔その8年前〕わたしが教会に導

く助けをした多くの人々と再会する喜びにあずかりました。彼らとの再会がどれほど大きな喜びであり、それを思う度にどれほど心が喜びで満たされたかは言うまでもないでしょう。使徒ヨハネはかつてこのように語っています。「わたしたちは、兄弟を愛しているので、死からいのちへ移ってきたことを、知っている。」〔1ヨハネ3：14〕この教会の長老宣教師たちが、ほとんど見も知らぬ世の人々に対して抱いている愛と、人々が、自分たちのもとに福音のメッセージを携えて来た長老たちに対して抱いている愛は、それ自体が正直な人々を説得するに足る証あかしであり、それは神から出ており、神がわたしたちとともにおられるという証拠です。聖霊によって呼び起こされるこの神聖な思いを抱いているがゆえに、わたしたちはほかの人々とはすでに区別されています。そして、この思いこそが世界全体を変革し、今は信じていない人々に、神はわたしたちすべての人の御父であられるということだけでなく、わたしたちは神の友であり僕しもべであることを信じさせることができるでしょう。¹⁶

わたしは人生をかけて主に仕えてきました。わたしのすべてを祭壇にささげ、主を敬い、喜んで主の御心みこころを行い、人の子らの中に人生の原則を広めようとしてきました。過去を振り返ると、奇跡的にわたしの進むべき道を開いてくださり、各地での伝道の業のあらゆる点で、わたしの期待をはるかに超えた祝福を与えてくださった主の御手みてをたどるとき、特に勇気づけられ、将来に向かって前進したいという思いになります。どんな言葉を用いても、わたしが心こころに感じている、主の祝福に対する深い感謝を言い表すことはできないでしょう。これらの兄弟たち、そして聖徒たちが持つ寛大な心と神の業への関心は、特にこれらの伝道地において表されてきました。いと高き神の祝福が公平に惜しみなく注がれ、何年か後に彼らは、これらの国の何千、何万という人々が啓示の光を送ってくださった主を高らかに賛美する喜びの声を耳にするでしょう。そのとき、彼らも同じように、この栄えある贖いあがなをもたらすために役割を果たしたと知り、心に喜びを感じるでしょう。¹⁷〔211ページの提案6参照〕

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。そのほかの提案については、v - vii ページを参照する。

1. 203 - 204 ページを読み、「なぜわたしはここにいるのか」という問いかけに対するロレンゾ・スノーの答えについて考えてください。福音を分かち合う場面で、すべての教会員がこの質問を自分自身に問いかけるなら、どのような影響があるでしょうか。
2. 204 ページから始まる項に書かれた、スノー大管長の勧告について深く思いめぐらしてください。だれかがほんとうに幸福になれるように助けな

さいと言うこの勧告に、どのように従うことができるか考えてください。

3. スノー大管長は福音を分かち合うために自分やほかの人々が払った犠牲について伝えています (205 - 206 ページ)。あなたは、福音を分かち合うために犠牲を払った人々の、どのような模範を見たことがありますか。人々はなぜこのような犠牲を喜んで払おうとするのでしょうか。
4. 206 - 207 ページに書かれている約束の言葉は、専任宣教師にとってどのような助けになるでしょうか。わたしたち一人一人が福音を分かち合ううえでどのように役立つでしょうか。伝道に出ることをためらっている人を助けるために、ここに書かれている教えをどのように用いることができますか。
5. 206 - 209 ページに書かれているスノー大管長の勧告を読み、全教会員の生活にどのように当てはまるかを考えてください。例えば、「自分の関心事を捨て去る」とはどのような意味でしょうか。「あらゆる人の心に触れる」ために、どのような方法が思いつきますか。
6. 本章の最後の段落を読んでください。この中でスノー大管長は伝道活動によって得られる、永続する喜びについて語っています。これまでどのようなときに伝道の喜びを経験してきましたか。この喜びを十分に味わうまで、ときには忍耐が必要なのはなぜですか。

関連聖句 —— アルマ 26 : 1 - 8, 35 - 37 ; 教義と聖約 12 : 7 - 8 ; 18 : 10 - 16 ; 84 : 88

教える際のヒント —— 「参加者に、興味がある項を選んで黙読するように言う。同じ項を選んだ者同士で 2, 3 人のグループを作り、学んだことを話し合うように勧める。」(本書 vii ページより)

注

1. Journal and Letterbook, 1836 - 1845. 教会歴史図書館, 33 : "The Grand Destiny of Man," *Deseret Evening News*, 1901 年 7 月 20 日付, 22 も参照
2. "The Grand Destiny of Man," 22
3. エライザ・R・スノー・スマイス, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow* (1884 年), 48 で引用
4. "Letter from President Snow," *Millennial Star*, 1901 年 9 月 12 日付, 595
5. *Deseret News*, 1861 年 5 月 15 日付, 82
6. *Deseret News*, 1857 年 3 月 11 日付, 3 ; 原典では 3 ページが誤って 419 ページと表示されている
7. "Scandinavians at Saltair," *Deseret Evening News*, 1901 年 8 月 17 日付, 8 で引用
8. "Laid to Rest: The Remains of President John Taylor Consigned to the Grave," *Millennial Star*, 1887 年 8 月 29 日付, 549 で引用
9. "Report of the Funeral Services Held over the Remains of Daniel Wells Grant," *Millennial Star*, 1895 年 6 月 20 日付, 386 で引用
10. Conference Report, 1901 年 4 月, 2 - 3
11. *Deseret Weekly*, 1894 年 5 月 12 日付, 637
12. "Instructions to Missionaries," *Improvement Era*, 1899 年 12 月号, 126 - 29 ; ロレンゾ・スノーはミューチャル・インブループメント・アソシエーションで宣教師として奉仕するように召さ

れたばかりの兄弟たちに対して、この勧告を与えた。彼の説教は「主の業に働くすべての働き手にとって役立つ勧告や助言が数多く与えられている」という説明とともに、*Improvement Era*に掲載された。

13. *Journal History*, 1862年4月9日付, 4で引用
14. "Letter from President Snow," 595 - 596
15. "The Malta Mission," *Millennial Star*, 1852年6月5日付, 237
16. "Letter from President Snow," 595
17. "Address to the Saints in Great Britain," *Millennial Star*, 1851年12月1日付, 365



ロレンゾ・スノー大管長は預言者ジョセフ・スミスを通して福音が回復されたことを証した。^{あかし}



神の王国は前進する

「前進することは〔神の〕業に携わっていると公言する人々の仕事です。……進むべき一歩が残っている限り、その一歩を踏み出さなければなりません。」

ロレンゾ・スノーの生涯より

1844年、合衆国東部で責任を果たしていたロレンゾ・スノーは、預言者ジョセフ・スミスと兄のハイラムが殉教したことを知った。そのとき彼はこう語っている。「この悲しい出来事の知らせは、もちろんまったく予期しないことだった。わたしはそれを聞いて、どんな言葉でも言い尽くせないほどの深い驚きと悲しみに襲われた。」スノー長老は十二使徒定員会からの指示に従い、イリノイ州ノーブーの家に戻る準備を整えた。¹

彼は後にこのように述懐している。「ジョセフの時代の人々の中には、ジョセフの導きがなければこの教会は存続しないだろうと考える人もいた。彼が殉教者としてこの世を去り霊界に行くべき時が訪れたとき、神の王国中の聖徒たちは非常に動揺した。予期しないことだったからだ。彼らはその後物事がどのように進むのかほとんど何も知らなかった。そのとき〔教会を導く〕責任は十二使徒定員会に委譲され、神が彼らに祝福を注がれて靈感の御霊が彼らの胸に宿り、全能の神の導きの下で王国は前進したのだった。」²

第2代大管長のブリガム・ヤングは33年間教会を導いた後、1877年に亡くなった。そのとき十二使徒定員会の一員であったロレンゾ・スノーは、再び教会の地上における指導者の交代を目にした。後にスノー長老は、ブリガム・ヤングは「まったく予期しないときに亡くなった。聖徒たちはほとんど準備できていなかった。しかし、神の王国は前進した」と語った。³

教会の第3代大管長であったジョン・テラーが1887年に亡くなったとき、スノー長老は聖徒らに次のように語り、彼らを元気づけた。「主は今、わたしたちの愛する兄弟であるテラー大管長を御前に呼び寄せ、彼が苦難に満ちたこの世と数々の殉教の場面を離れることをよとされました。そして教会はこれから前進するのです。」⁴

テラー大管長の葬儀で聖徒たちを元気づけた11年後の1898年、ロレン

ゾ・スノーは自分自身が同じ励ましを必要とする状況に置かれていた。当時彼は十二使徒定員会会長として奉仕していた。ウィルフォード・ウッドラフが大管長として奉仕していたが、健康状態が悪化していた。スノー会長は、定められた継承の方法に従えばウッドラフ大管長が亡き後自分が教会を管理することになると分かっていた。ある晩彼はこのことが起こる可能性を考えて、特に心に負担を感じていた。教会を導く責任を受けるには自分はふさわしくないと考えた彼は、ソルトレーク神殿のある部屋に行って祈った。神にウッドラフ大管長の命を長らえてくださるようお願いしながらも、神から求められるどんな務めも果たすことを約束したのだった。

スノー会長の熱烈な祈りの後、ほどなくして、ウッドラフ大管長は1898年9月2日に亡くなった。その知らせを受けたとき、スノー会長はソルトレーク・シティーから北へ100キロ離れたブリガムシティーにいた。彼はその晩汽車でソルトレーク・シティーに戻った。到着後、彼は再び神殿の中にある個室みこころに行き行って祈った。自分はふさわしくないといい気持ちる認めながらも、主の御心を喜んで行く気持ちがあることを主に表した。彼は導きを求め、答えを待ったが、何の答えも受けないまま部屋を後にした。

広い廊下に出たとき、彼は願ひ求めていた答えと励ましを受けた。目の前に復活された主が立たれ、彼になすべきことを告げられたのだった。後に、スノー大管長は孫娘のアリス・ポンドにこのときの経験について語った。アリスはソルトレーク神殿で祖父と交わした会話を次のように記している。

「わたしたちは日の栄えの部屋に続く広い廊下を歩いていました。数歩後ろを歩いていた祖父が、わたしを呼び止めてこう言いました。『ちょっと待ってごらん、アリー。お前に話したいことがある。ウッドラフ大管長が亡くなったとき、主イエス・キリストはちょうどここでわたしに姿を現してくださったのだよ。主はわたしに、すぐに行って大管長会を組織するように、前の大管長たちが亡くなった後のように待つことがないようにと仰せられたのだ。わたしがウッドラフ大管長の後を継ぐことになるとも言われた。』

それから祖父はわたしに1歩近寄ると、左手を差し出して言いました。『主はちょうどここに、床から1メートル離れた所に立っておられた。まるで硬い金の板の上に立っておられるように見えた。』

救い主がどれほど栄光に満ちた存在であられるか、主の手足や顔、そして美しい白い衣の様子を説明してくれました。すべてが白く栄光に輝いており、まぶしくて見られないほどだったと語りました。

そして〔祖父は〕もう一歩わたしに近寄ると、右手をわたしの頭に置いて言いました。『アリス、わたしはこの神殿で実際に救い主にまみえ、顔と顔を合わせあかしせて主と言葉を交わした。これがおじいさんがお前に直接語って聞かせた証

だということを覚えておいておくれ。』⁵

スノー大管長が救い主とまみえたことは、イエス・キリストが教会の頭であられるという、長年にわたって知っていた真理を確かなものとする神聖な機会となった。この真理によって霊的に強められたスノー大管長は、教会は反対にあっても前進し続けることについて頻繁に証した。彼は主の末日の業を押し進めるうえで一翼を担える特権に対して、感謝を表した。1898年10月の総大会において教会の大管長として支持を受けた彼は次のように語っている。「心の中で決意し、内なる霊で主に証しましょう。次の大会に集うときには、今日よりもより良い民になり、さらに一致した民になっていることを。この神聖な集まりに出席しているすべての男性と女性がこのように感じ、決意するべきです。わたしは、神の王国の福利と主の目的を実行することに対して、これまでよりもさらに献身しようという思いを心に感じています。」⁶〔221 ページ提案 1 参照〕

ロレンゾ・スノーの教え

預言を成就するため、主は地上に御自身の教会を回復された

わたしは神の僕として 19 世紀に主の御心が啓示されたことを証します。その啓示は、神御自身の声とその御子の現れ、また聖なる天使の教導の業によって与えられました。主はあらゆる地のすべての人々に、悔い改め、悪の道と不義の欲を離れ、罪の赦しのためにバプテスマを受けるように命じておられます。それによって聖霊を受け、主と一つになるためです。主は、すべての聖なる預言者たち、あらゆる時代の聖人や聖見者、また人類のあらゆる人種の民によって語られてきた贖いの業を始められました。⁷

末日聖徒本来の宗教のニックネームであるモルモン教は、この時代に初めて登場した新しい存在であるとは宣言していません。この世が創造される前に天で教えられた救いの計画の元の形であり、様々な時代に神から人に啓示されたものであると宣言しています。あのアダムやエノク、ノアやアブラハム、モーセ、そのほかの古代のふさわしい人々がそれぞれの神権時代においてこの宗教を継承しました。……簡潔に言えば、モルモン教とは回復された原始キリスト教の信仰であり、再びもたらされた古代の福音であるということです。そしてこの回復により最後の神権時代が幕を開け、福千年の始まりが告げられ、この惑星における贖いの業が加速されることになったのです。わたしたちは一つの民として、確かにこのことを信じています。⁸

はるか昔、預言者ダニエルは、一つの国が栄え、全地を覆うまで広がると語りました。〔ダニエル 2 : 44 参照〕。わたしたちは全能の神の御手によってその王国が建設されつつあるのを見ることができます。光と英知が非常に広く行

き渡り、だれも仲間に向かって「あなたは主を知りなさい」と語る必要がなくなるでしょう。「それは、彼らは小より大に至るまで皆〔主〕を知るようになるから」です〔エレミヤ 31:34 参照〕。そして主の霊がすべての肉なる者に注がれ、その息子や娘は預言し、その老人たちは夢を見、その若者たちは幻を見るでしょう〔ヨエル 2:28 参照〕。そして主の聖なる山はどこにおいても、そこなうことなく、やぶることがないので〔イザヤ 11:9 参照〕。⁹〔221 ページの提案 2 参照〕

**末日聖徒イエス・キリスト教会は堅固な土台の上に建てられ、
反対に遭っても前進し続ける**

兄弟姉妹の皆さん、神は御自分の教会と王国をこの地上にお建てになりました。それは人類に益と祝福をもたらすためであり、真理の道によって彼らを導くためであり、主の御前に昇栄するよう、また主の栄えある再臨と地上に設立される主の王国に彼らを備えさせるためです。邪悪な人々や悪の力によって引き起こされるあらゆる反対に遭っても、主の目的は達せられるでしょう。この業に立ちだかるあらゆるものは取り除かれるでしょう。主の力に対抗できるものは何もなく、主が始められたすべてのことは、十分に、完全に成就されるでしょう。主はその民に愛を続けて注がれ、彼らは主の力を受けて勝利を収めるのです。¹⁰

王国が滅亡について語るなら、……それはまるで星を天空から引き抜いたり、月や太陽をその軌道からはずそうとするようなものです。成就できるはずがありません。これは全能の神の業だからです。¹¹

神の王国は威勢と力をもって前進し、大いなる、栄えある成功を見るのです。¹²

この業は確かな基の上に建てられ、長い年月を耐えてきた岩の上に築かれています。……途中でだれかが道をそれ、信仰を失おうと、教会は進み行くのです。¹³

この教会は立ち続けます。堅固な土台の上にあるからです。人によるものではなく、新約聖書や旧約聖書の研究によるものではなく、大学や宗教教育で受けた学びによるものでもありません。直接主から来ています。主は真理の聖なる御霊の原則を啓示されることによって、それをわたしたちに示してくださいました。そして、すべての人がこの同じ御霊を受けることができます。

……わたしたちが、主から与えられた知識に反することをせず、自分の生活を喜んで犠牲にするなら、主はわたしたちに何をなすべきかを知らせてくださいます。日の栄えの王国の奥義を開いてくださいます。そして絶えず、今まで知ら



「兄弟姉妹の皆さん、神は御自分の教会と王国をこの地上にお建てになりました。
それは、人類に益と祝福をもたらすため〔です〕。」

なかったことを伝えてくださいます。この知識と英知は続けて増し加えられるのです。

……わたしたちは非常に多くの知識を受けてきたので、だれかがその目的を妨げようとしてもそれにひるむことはありません。モルモン教を迫害し、追いやりたい人々には、勝手にさせておきましょう。……わたしたちのなすべき業は、神の知識を増し加え、神の戒めを守り、忠実であり、増し続け、年月を経るにつれてさらに完全になることです。¹⁴ [221 ページの提案 3 参照]

わたしたちは神の民であり、前進し、神から求められるすべてを行うとき、
主はわたしたちを守ってください

神の民が明らかに滅びそうになり、逃れる道がまったく断たれたと思える……多くの場面で、彼らを救うためにあらかじめ用意されていた何かが現れたり、何かが起こったりして、滅びずに済みました。モーセに導かれたイスラエルの民の場合もそうでした。彼らが紅海にたどり着いたとき、エジプトの軍隊が後方に追り、民は滅亡の危機にあってどこにも逃れる道はないように思えました。しかし、逃れる道が必要になったちょうどそのとき、道が現れ、彼らは救われたのでした [出エジプト 14 : 10 - 25 参照]。

わたしたちはこれまでもそうでしたし、これからも同じでしょう。困難がいかに大きく思えようとも、神の子であるわたしたちが与えられた務めを果たすなら、逃れる道が備えられているのです。しかし、わたしが強調したいことは、将来、末日聖徒の中から、女王エステルのような働きをなす人が必要となるかもしれないということです。彼らは、末日聖徒を解放するという目的のためであれば、何であろうと自分に求められることはすべて喜んでささげるのです。

まず、わたしたちは自分たちが神の民であることを知らなければなりません。……エステルのように前進し、人々の救いのために喜んですべてをかけることがわたしたちの務めなのです。自分に課せられた務めを果たすとき、エステルはこう言いました。「わたしがもし死なねばならないのなら、死にます。」 [エステル 4 : 3 - 16 参照] ……しかし、神の民は滅びません。彼らが逃れられるように、やぶには常に雄羊が用意されているのです [創世記 22 : 13 参照]。

……主は言われました。「あなたがふさわしいと認められるように、死に至るまでもわたしの聖約の中にとどまるかどうか、あらゆる点であなたがたを試すことを、わたしは心の内に定めた。」 [教義と聖約 98 : 14 - 15 参照] わたしたちには生きる望みを抱く理由があり、それよりもなお、命を懸けてもよいと思える理由があります。しかし実際、これらに関して死はありません。主イエス・キリストの御名で自分たちを呼ぶ神の民が、主の戒めを守り、主の目になうことを行うならば、救いがあり、命があるのです。御自分の民が滅びるままに

されることは、全能の神の計画にはありません。わたしたちが正しいことを行い、主の戒めを守るなら、主は必ずあらゆる困難からわたしたちを救い出してくださるでしょう。¹⁵ [222 ページの提案 4 参照]

今やわたしたちが神の御前に自らをへりくだらせ、
主から託された業を成し遂げるときである

前進することは〔神の〕業に携わっていると公言する人々の仕事です。……つぶやかず、せかさねなければ何もしないということもなく、進むべき一歩が残っている限り、その一歩を踏み出さなければなりません。¹⁶

今は、末日聖徒が全能の神の前にへりくだる時です。……今は、末日聖徒が自分自身を何にささげているかを吟味するべき時です。今は、末日聖徒が罪や過ちを悔い改め、主の助けを頂けるように、……わたしたちの全能の神を呼び求め、前進し、わたしたちの手にゆだねられている偉大な業を成し遂げられるようにする時です。¹⁷

わたしたちは神の業に従事しています。わたしたちの前に広がる可能性は栄光に輝いています。しかし、わたしたちの手によって行うあらゆることにおいて、わたしたちは神の僕であり、神の御心を行っていることを心に留めておきましょう。人生を歩むに当たり、誠実さを損なわず、信仰を常に増し加えていこうではありませんか。わたしは、神の御心によって自分が置かれる場所で行動することに満足を覚えるでしょう。そして、その場所で神の王国の建設を助けるために自分に何ができるかを主に尋ね、家族に必要なものを得られるよう主に助けを求めるでしょう。¹⁸

わたしたちは地上に神の王国を建設するために知識と力と能力を増し加えるでしょう。それはまた、勤勉さと謙遜さ、自分たちが交わした聖約に対する忠実さによって与えられるのです。¹⁹

わたしたちが無知で、主の方法と目的を完全に理解しないために、主の計画を実行しようと努力する中で一時休憩所に着いたように思えるときがあります。しかし実際は、人々が神の約束を信頼して働き続ける限り、主の計画の中でそのような一時休憩所はありませんし、ありえません。

……すべての人が忠実で勤勉に神の戒めを守ることができるよう。そして、周囲の人に対して善をなしたいという願いをはぐくむことができますように。そして過去を振り返り、自分の良心の命じるところや与えられた務めに厳密に添わない行いをしてきたと感じるなら、神と人の前に自分を正し、これから起こるかも知れないあらゆることに備えられますように。神殿と礼拝の家を建設する業が進みますように。子供たちを教育し、主を畏れるように育てることを続

け、同時に福音をはるか遠くの国々に届けることもできますように。

これは神の業です。そして、神はこの地上においてその道筋と進歩を導いておられます。これからも続けて、この業を最も大切な事柄として認識していかなければなりません。務めを果たす道にとどまるなら、確かに道を正され、動かされず、目的に心を定めることができます。そうすることによって、神が啓示された真理の原則に対するわたしたちの信仰と決意を世に表すことができるでしょう。

大いに考えられることですが、主はわたしたちに重荷を負わせられ、主の民の手から大きな犠牲を求められるかもしれません。わたしたちが答えるべき質問は、自分はその犠牲を払うだろうかということです。この業は全能の神の業であり、わたしたちが待ち望む、主が約束された祝福は、わたしたちが自らを証明し、試練を切り抜けて初めて得られるのです。わたしはこの民に対して、彼らが非常に大きな困難を経験しなければならないかどうかについて話そうとは思いません。ただわたしが答えるべき質問は、主がわたしや、同様に主の民に用意しておられるいかなる祝福を受けたときにも、それを正しく、ふさわしく使う準備はできているだろうか、ということです。また一方では、主がわたしの手から求められるいかなる犠牲もささげる準備はできているだろうか、ということなのです。わたしは、生きる価値も死ぬ価値もないような宗教のためには、たとえわらの灰であってもささげようとは思いません。また、自分の宗教のためにすべてをささげようとしない人のために、多くを与えようとは思いません。

さて、わたしは一人に向けて、また全員に向けて申し上げます。前進してください。前進し、主の救いを受けて、立ち止まらないでください。²⁰ [222 ページの提案5 参照]

研究とレッスンのための提案

この章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。

1. 214 - 216 ページの内容を読み返してください。神の王国は前進するとはどういう意味でしょうか。これまでどのような経験を通して神の王国が前進していると感じてきたでしょうか。
2. 216 ページの最後の段落で、スノー大管長は旧約聖書に書かれている4つの預言について書いています。今日、これらの預言はどのような形で成就しつつあるでしょうか。
3. 反対に遭っても教会は前進することに関するスノー大管長の教えを研究してください(217 - 219 ページ)。わたしたちの信仰について人々から

迫害を受けるとき、これらの教えはどのように助けになるでしょうか。あなたの証に対する反対に遭ったとき、どのように対処してきましたか。

4. 219 ページの第3段落と第4段落を研究してください。犠牲を求められるとき、わたしたちはエステル模範から何を学べるでしょうか。そのような状況において「自分たちが神の民であることを知〔ること〕」は、どのように役立つでしょうか。
5. 本章の最後の項で、スノー大管長は会員たちに、どこであれ主が彼らを置かれた場所で神の王国を築くように勧告しました。家庭における両親の努力は、全地に神の王国を建設するうえでどのように役立つでしょうか。ホームティーチャーと家庭訪問教師は、どのように神の王国を建設することができるでしょうか。

関連聖句 —— マタイ 24 : 14 ; エテル 12 : 27 ; モロナイ 7 : 33 ; 教義と聖約 12 : 7 - 9 ; 65 : 1 - 6 ; 128 : 19 - 23

教える際のヒント —— 「前回のレッスンを終えたら直ちに次回のレッスンのことを考え始めるとよい。レッスンを通して生徒とともに過ごす時間を持った直後のあなたは、彼らの状態、必要、興味に気づいているであろう。記憶が新しい間に自分の対応方法、教授法を評価する。」（『教師、その大いなる召し』 97）

注

1. エライザ・R・スノー・スミス, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow* (1884年), 79 - 82
2. "Laid to Rest: The Remains of President John Taylor Consigned to the Grave," *Millennial Star*, 1887年8月29日付, 549
3. "Laid to Rest: The Remains of President John Taylor Consigned to the Grave," 549
4. "Laid to Rest: The Remains of President John Taylor Consigned to the Grave," 549
5. アリス・ポンドの言葉。ルロイ・C・スノー, "An Experience of My Father's," *Improvement Era*, 1931年9月号, 677で引用; ジョン・A・ウィットナーとノア・S・ポンド(アリス・アルメダ・スノー・ヤング・ポンドの夫)との間の手紙, 1945年10月30日付, 1946年11月12日付, 教会歴史図書館所蔵も参照。スノー大管長が神殿でこの経験を伝えたとき、アリスは20歳代前半で、エンゲウメントと、夫との結び固めを受けていた。
6. Conference Report, 1898年10月号, 55
7. "Greeting to the World by President Lorenzo Snow," *Deseret Evening News*, 1901年1月1日付, 5
8. "'Mormonism' by Its Head," *Land of Sunshine*, 1901年10月, 252
9. *Deseret News*, 1872年1月24日付, 597
10. *Deseret Semi-Weekly News*, 1898年10月4日付, 1
11. *Deseret News*, 1872年1月24日付, 598
12. *Deseret Weekly*, 1893年11月4日付, 609
13. *Millennial Star*, 1890年5月12日付, 293; 1890年4月の総大会におけるロレンゾ・スノー大管長の説教からの抜粋
14. Conference Report, 1900年4月, 3 - 4
15. *Deseret News*, 1882年11月22日付, 690
16. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1882年6月27日付, 1
17. *Deseret News*, 1882年11月22日付, 690
18. *Journal History*, 1865年7月11日, 2
19. *Deseret News*, 1861年5月15日付, 82
20. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1882年6月27日付, 1



カートランド神殿で大いなる現れを受けたにもかかわらず、
カートランドの多くの聖徒は背教した。



この世を愛する以上に神を愛する

「わたしたちは……より高い段階に達しなければなりません。
この世を愛する以上に……神を愛……さなければなりません。」

ロレンゾ・スノーの生涯から

ロレンゾ・スノーがオハイオ州カートランドでバプテスマと確認を受けて間もなく、教会の指導者を含む大勢の末日聖徒が預言者ジョセフ・スミスから離反した。ロレンゾ・スノーによると、この背教の原因となったのは投機、言い換えれば、すぐに大きな利益が得られることを願って尋常でない危険を伴う取引を行ったことであった。人々はこの世のはかないものへの欲望に目がくらみ、福音がもたらす永遠の祝福に背を向けた。

それから約 50 年の後、十二使徒定員会会長を務めていたスノー会長は、ユタ州ローガンで末日聖徒に向かって話をした。スノー会長はカートランドで遭遇した悲しい出来事について語り、やがてこの地の聖徒たちも同様の試練を経験するだろうと警告した。「皆さんにとって試しとなることが急速に近づいています。皆さんが恐らく一度も受けたことのないような試しです」と、スノー会長は述べている。「しかし、わたしたちが今なすべきことはただ、もし自分に何らかの過ちや弱点があるとすれば、それがどこにあるかを知ることです。もし過去に忠実でなかったとすれば、神との聖約を新たにし、断食と祈りによって、罪の赦しを得ることを決意しましょう。そうすれば、全能者の御霊がわたしたちのうえにとどまるでしょうし、迫って来ているそれらの強い誘惑から、あるいは逃れることができるかもしれません。暗雲が垂れ込めてきています。カートランドでこの投機熱がどんな結果を招いたかは、皆さんも御存じです。ですから、警告を受け入れてください。」¹

スノー会長の警告は今日^{こんにち}の末日聖徒にも引き続き当てはまることから、本章にはローガンの聖徒に向けた説教の多くの部分が収められている。スノー会長は次のように述べている。「当時の〔カートランドにおける〕わたしたちの状況について少し紹介しておくことは、将来のわたしたちに役立ち、有益な教訓となるかもしれません。」²〔229 ページの提案 1 参照〕

ロレンゾ・スノーの教え

俗世への執着に思いと心を支配させるとき、人々は永遠の原則に背を向ける

カートランドで経験した不穏な時期のことを鮮明に覚えています。……カートランドは、神の預言者が住み、神御自身が、すなわち神の御子イエスが栄光のうちに御自身を現された地でした。主は戒めにより建てられた神殿の教壇の手すりの上にお立ちになりました。主の足の下には、こはくのような色の純金の床がありました。その髪は清らかな雪のように白く、その顔は太陽のように力強く輝き、その声は水の奔流ほんりゅうのとどろきのようにでした〔教義と聖約 110 章参照〕。このすばらしい現れが、主をあがめるために建てられた神殿の中であったのです。わたしは当時カートランドにいましたが、あの地で経験した出来事が、今、繰り返されようとしていると思うことが時々あります。当時の末日聖徒が置かれていた状況は特異なものでした。少なくとも、人々が受けた影響は特異なものでした。……当時、この国の人々の心に投機熱が広がっていました。通貨への投機、銀行への投機、土地への投機、街の区画への投機、そのほか様々なものが投機の対象となりました。そのような投機熱がこの世で高まり、激流の大ききうねる波のように聖徒の心に押し寄せて、多くの者が墮落し、背教しました。³

彼ら〔カートランドの聖徒〕の一部は投機を始めました。そして自分たちの宗教を忘れ、自分たちに明らかにされていた原則を忘れて、彼らの多くが時代の潮流に身を任せ、投機に心を奪われました。困難が生じ、ねたみと争いが生じました。主は彼らのことを快く思わず、彼らの中に破滅をもたらされ、彼らの共同社会は分裂しました。⁴

このひどい背教が起こる直前に、主は民のうえにすばらしい祝福を注いでおられました。永遠の富である福音の賜物たまものが驚くほど豊かに注がれていました。天使たちが彼らを訪れました。先ほど述べたように、神の御子はその僕たちしもべに語られました。神殿の奉獻のときに民が受けた祝福は驚くべきものでした。神の恵みが豊かに注がれたその時期に、わたし自身、神殿で開かれた様々な集會に出席しました。祈り会あかしや証會が開かれ、兄弟姉妹はとてすばらしい証を述べることができました。彼らは驚くほどに預言し、異言を語り、異言を解釈しました。これらの祝福が、カートランドのほとんどの人のうえにありました。そのとき、彼らの心は主に向けられていました。彼らは所有物を何でも犠牲にできるのではないかと感じていました。自分たちは神の前に住んでいるのではないかと感じるほどでした。あのような驚くべき力の下ではそう感じるのも自然なことでした。

これらすべての祝福と、時間がないので挙げませんがそのほかにも多くの祝

福を、末日聖徒はこの投機熱が人々の心に広がり始める直前に享受していました。これらのすばらしい現れを受けた後、いかなる誘惑も聖徒を打ち負かすことなどできないのではないかと思われました。しかし、彼らは誘惑に負け、いわば四方に散らされました。

奇妙に思えるかもしれませんが、この投機熱は十二使徒定員会や七十人の七会長の定員会にも広がりました。実際のところ、教会のすべての定員会が多かれ少なかれこの投機熱の影響を受けました。そうした熱の高まりに続いて、不和が生じました。それぞれの利害の不一致から、兄弟姉妹は互いに中傷し合い、争い合うようになりました。

わたしが今語りかけている末日聖徒の皆さんもそのようになるのでしょうか。当時と同じ潮流が訪れつつあるのではないかと心配していますが、その影響がどの程度まで広がるかは、わたしの言うことではありません。それでも、皆さんはそれを経験するでしょう。その経験はどうしても必要なかもしれません。

……カートランドの時代には、使徒の定員会の半数がこうした悪の影響下に屈しました。この非常に悲しい結果をもたらされたのは、投機を行ったためであり、この世の神である金に執着したためでした。もしそのことが地上で最も高い神権を持つ人々にこのような結果をもたらしたのであれば、彼らが持っていたような英知も、知識も経験も恐らく持っていないわたしたちは、どのような影響を受けることになるのでしょうか。……

さて、皆さんは善良な民です。……神は皆さんを愛し、皆さんの義を喜び、カートランドでの出来事が再び起こるのを見たくないと考えておられます。繰り返す必要はありません。わたしたちは、カートランドの聖徒を分裂させ十二使徒の半数を陥れた事柄から自分自身を守る力を手にしています。主はこうした出来事をこの末の日に再び目にするのを望んでおられません。⁵

末日聖徒は優れた知恵と知性を持ち、この種のわなに陥ることがないようにするべきです。それが報いをもたらすことはありません。これらの榮えある原則と永遠の世から受けた事柄に背を向けて報いを得る人はいません。それらの事柄から遠ざかり、この世のほとんど価値のないものにかかわり合い、没頭しても、得るものは何もありません。どのような誘惑に遭おうとも、あるいは現在さらされていようとも、過去の歴史に耳を傾け、打ち負かされることのないようにするべきです。そうしなければ、大いに後悔することになるでしょう⁶ [229 ページの提案 2 参照]。

**わたしたちは俗世への執着から離れ、神の王国に
自分自身をささげると聖約している**

この世の神はお金です。世の人々はこの神を礼拝しています。人々は認めようとしなないかもしれませんが、お金は彼らを完全に支配しています。さて、神の摂理により、末日聖徒はこの世の神に支配されない程度までの卓越した神の知識と知恵と力を得ているかどうかを示すように定められています。わたしたちはその状態に達しなければなりません。また別の標準に、より高い段階に達しなければなりません。この世を愛する以上に、お金を愛する以上に神を愛し、自分自身のように隣人を愛さなければなりません。⁷

もしわたしたちが……自分が交わした聖約、すなわち自分の時間や才能、能力を地上に神の王国を築き上げるために用いるという聖約を守らないならば、大いなる贖いの業に従った者であると見なされ第一の復活の朝に出て来ることをどうして期待できるでしょうか。もしわたしたちが態度や習慣や振る舞いにおいて……世の人々を模倣し、それによってこの世に従った者と見なされるならば、兄弟の皆さん、わたしたちが受け継ぎたいと望む祝福を神が授けてくださると思いますか。いいえ、授けてはくださらないでしょう。……わたしたちは天の義にかなった自分を確立し、神の義を心に植え付けなければなりません。主は預言者エレミヤを通して次のように言うておられます。「わたしは、わたしの律法を彼らのうちに置き、その心にしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる……。」〔エレミヤ 31:33〕これが主のなさろうとしておられることであり、もしわたしたちが主の御心みこころに従うならば、主はわたしたちの中でこのことを成し遂げられるでしょう。⁸

世が腐敗し邪悪な状態にある今の時代に、神から授かっている優れた才能を神の誉れと栄光のためにささげることのできる義にかなった聖なる男女がわたしたちの間にいることを神に感謝します。さらに、主がもろもろの国からお集めになった徳高く高潔な男女が大勢います。彼らもまた、神の子供たちのために神の業を成し遂げるのを手助けするため、自分の時間と才能を喜んで差し出す人々です⁹〔229 ページの提案 3 参照〕。

**わたしたちは主の模範に倣い、永遠の栄光と引き換えに
この世の富を得るのを拒む**

人生を歩む中で障害に遭遇し、決意が極限まで試されることがあるでしょう。皆さんの中には真理と誉れの道から離れるよう誘惑され、エサウのように、つかの間の満足と喜びを得るために永遠の栄光を放棄してもよいという気になってしまう人もいるかもしれません〔創世 25:29 - 34 参照〕。そのようなと

きは……その機会をとらえて救い主の模範に倣ってください。救い主は、もし身を落として愚行を冒すなら世の誉れを与えようと言われたとき、試みる者に向かって次のようにお答えになりました。「サタンよ、引き下がれ。」〔ルカ 4:5 - 8 参照〕¹⁰

人生について考えるとき、永遠に比べればこの世は短く、わたしたちの英知、わたしたちの内にある神性は常に存在してきたものであって、創造されることなく、今後も永遠にわたって存在するものであることが分かります〔教義と聖約 93:29 参照〕。これらの事実を考えると、わたしたちは英知を持つ者として、次のことを理解しておくのが賢明です。すなわち、この世の生涯は数日のうちに終わり、その後、永遠に続く生活が訪れます。そして戒めをどれほどよく守ったかに応じて、そうした進歩を遂げなかった人々よりも有利な立場を得ることになります。¹¹

福音はそれに従うすべての人の心を結び、富んでいる者と貧しい者の間に何のの違いも区別も設けていません。皆が一つに結ばれて、ゆだねられた義務を遂行します。……さて、質問させてください。実際に何かを所有している人がいるでしょうか。この世の物について、それが自分のものだとほんとうに心から言える人がいるでしょうか。わたしにはとても言えません。わたしは非常にわずかなものの管理人にすぎず、それをどのように使用し、処分するかについて神に責任を負っています。末日聖徒は神の啓示を通して福音の律法を授かっており、その律法はだれもが理解できるようにはっきりと書き記されています。もし罪の赦しゆるのためのバプテスマによって聖約を交わしたときに自分が引き受けた立場を理解していたなら、その律法がまず神の王国を求めようように要求していること、そして自分の時間と才能と能力を神の王国に役立てるために用いなければならないことを、今も自覚していなければなりません〔マタイ 6:33; 3 ニューフェイス 13:33 参照〕。そうでなければ、将来、この地上が神とその御子の住まいとなると、自分が永遠の命を受け継いで神とともに住み、統治することをどうして期待できるでしょうか。

富んでいる者、または多くの才能を持つ者の方が、貧しい者、または一つしか才能を持たない者よりもこれらの祝福を受け継ぐ望みや可能性が高いと言う人はだれでしょうか。わたしが理解しているところでは、仕事場で働いている人、すなわち仕立屋であろうと、大工や靴屋、あるいはほかのどんな分野で働いている人であろうと、福音の律法に従って生活し、自分の召しに正直かつ忠実である人は、ほかの人と同じように、これらの祝福や新しくかつ永遠の聖約の祝福のすべてを受ける資格があります。自分の忠実さによって、王位と公国と力を得て、大空の星のように、あるいは海辺の砂のように数限りない子孫を得るでしょう。これ以上に大きな期待を抱いている人がいるでしょうか。¹²〔229 ページの提案 3 および 4 参照〕



救い主と話した金持ちの青年のように、困っている人を避けて通ろうとする
誘惑に駆られる人々が今日もある（マタイ 19:16 - 22 参照）。

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。そのほかの提案については、v - vii ページを参照する。

1. 224 ページの話について深く考えてください。人々はなぜ、俗世に執着すると自分の宗教を忘れてしまうのでしょうか。物質的な必要を満たしつつ、俗世への執着心を捨てるにはどうすればよいのでしょうか。
2. 225 ページから始まる項について深く考えてください。神を愛することは、どのように俗世への執着心を断ち切る助けになるのでしょうか。
3. わたしたちは「自分の時間や才能、能力を地上に神の王国を築き上げるために用いる」と聖約していると、スノー大管長は教えています（227 ページ）。この聖約を守るために何ができるかを考えてください。
4. 本章の最後の項を読んでください。次の真理は、聖約を守るうえでどのような助けとなるのでしょうか。「永遠に比べればこの世は短 [い]。」「この世の物について、それが自分のものだとほんとうに心から言える人 [はいない]。」

関連聖句——マタイ6:19-24;ヨハネ17:15;1ヨハネ2:15-17;モルモン書ヤコブ2:13-19;モルモン8:35-39;教義と聖約38:39;63:47-48;104:13-18

教える際のヒント——小さなグループでの話し合いは「レッスンに参加する機会を多くの人に与える……。通常参加をためらう生徒も、すべてのグループを前にして発表するのとは異なり小さなグループでは意見を述べることもあるかもしれない。」(『教師、その大いなる召し』161)

注

1. *Deseret Semi-Weekly News*, 1889年6月4日付, 4
2. *Deseret Semi-Weekly News*, 1889年6月4日付, 4
3. *Deseret Semi-Weekly News*, 1889年6月4日付, 4
4. *Deseret News*, 1888年4月11日付, 200; 1888年4月の総大会におけるロレンゾ・スノーの説教の詳細な記録から
5. *Deseret Semi-Weekly News*, 1889年6月4日付, 4
6. *Deseret News*, 1888年4月11日付, 200
7. *Deseret Semi-Weekly News*, 1889年6月4日付, 4
8. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1877年1月23日付, 1
9. *Deseret Semi-Weekly News*, 1889年6月4日付, 4
10. エライザ・R・スノー・スミス, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow* (1884年), 486で引用
11. *Brigham City Bugler, Supplement*, 1891年8月1日付, 2
12. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1877年1月23日付, 1



人々に善を行う

「慈愛の精神をはぐくみ、もし逆の立場であったなら相手に期待するだろうと思う以上のことをいつでも行う準備をしてください。」

ロレンズ・スノーの生涯から

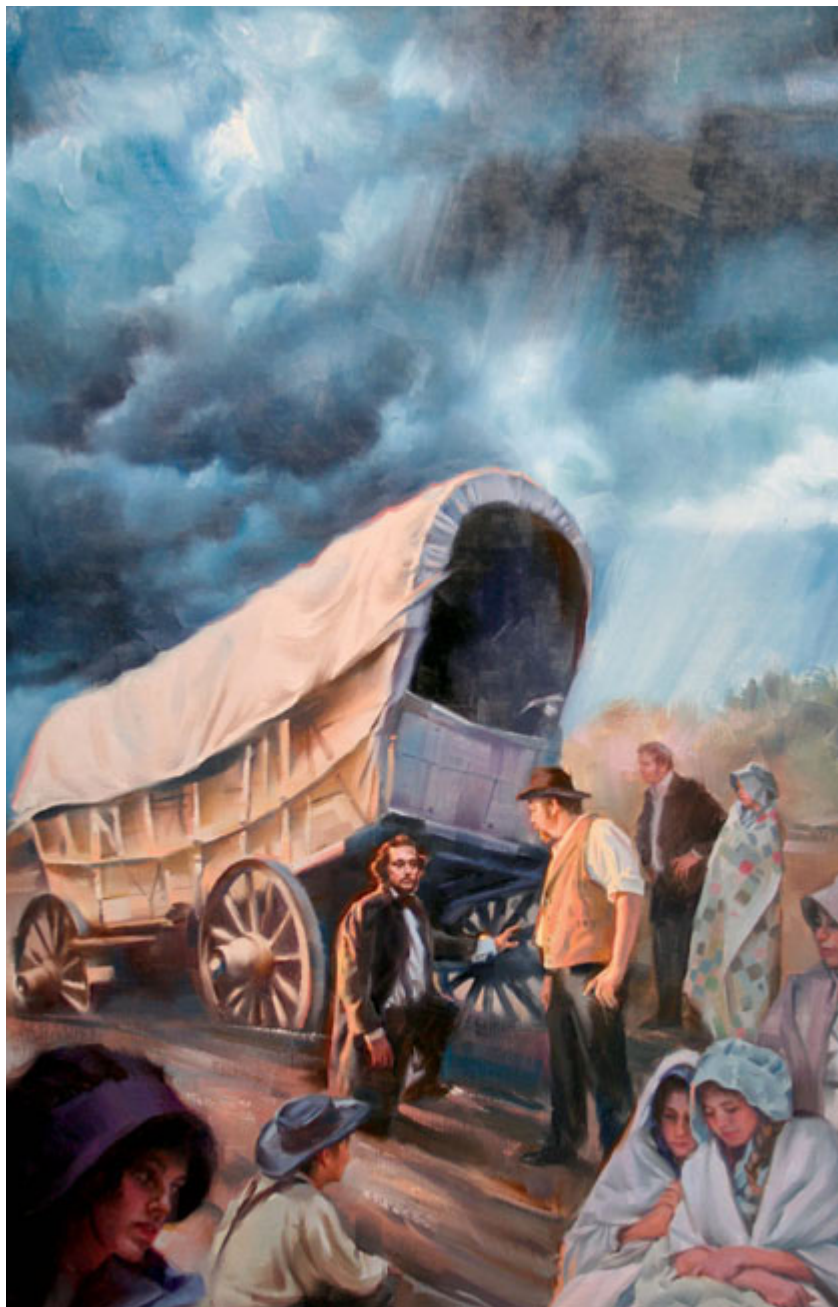
ロレンズ・スノーとその家族は、イリノイ州ノーブーを脱出した末日聖徒の最初の団に加わった。1846年2月、一行はアイオワ州を西に向かって進んでいた。天候に行く手を遮られながら、彼らは来る日も来る日も、雨と雪と泥の中を苦労して進んだ。

スノー家族が旅をしていたある日、同じ隊の一員が彼らに助けを求めてきた。ロレンズ・スノーは日記に次のように書いている。「〔その男性は〕自分のトランクをわたしの幌馬車ほろに載せてほしいと頼んできた。積める場所がほかにないのだという。」幌馬車は「何とか載るだろうと思って詰め込んだ荷物で完全にいっぱい」だったと、ロレンズは回想している。「それでも、わたしは彼にトランクを載せるように言い、わたしたちの荷物と一緒に運ぼうと言った。」

翌日の夜、スノー家族はロレンズが「とても嫌な出来事」と呼んだ災難に見舞われた。幌馬車の車軸が壊れたのである。ロレンズは次のように述べている。「そのときは雨がとても激しく降っていて、そのうえ非常に寒〔かった〕。わたしたちは直ちにテントを張り、火をおこした。ヒッコリーの木はよく燃えた。……幌馬車までは深い泥水の中を歩いて行かなければならなかった。……野営地からは約15マイル〔24キロ〕、最寄りの人家までは9-10マイル〔14-16キロ〕あり、家族の中に修理のできる者がいなかったため、幌馬車を直せようになかった。」

思いがけないことに、家族は前日に自分たちが助けた男性に救われた。ロレンズは次のように述べている。「自分の不運を嘆いていると、彼がやって来て、自分は馬車職人なので、わけなく修理できると言った。……天候が回復の兆しを見せるとすぐに、ウィルソン兄弟（前述の人物の名前である）は作業に取りかかり、壊れたものよりもはるかに立派な車軸を作ってくれた。幌馬車が直ると、雨と泥のために数日間とどまった後、その場所を出発した。」

ロレンズ・スノーにとって、この経験は奉仕と友情についての貴重な教えを再



アイオワ州を横断していたとき、スノー家族は前日に自分たちが助けた人から助けられた。

認識する機会となった。ロレンゾは日記に次のように書いている。「人に親切にすると自分も親切を受けることが度々ある。」¹〔237 ページの提案1 参照〕

ロレンゾ・スノーの教え

わたしたちは同じ天の御父の子供であり、
互いに善を行うために世に送られている

わたしたちは日の栄えの世界におられる同じ御父の子供です。……もし互いのことを十分よく知るならば、……わたしたちは今よりもっと思いやりを持つでしょう。そして、どのようにして同胞に善を行えばよいか、どのようにして彼らの悲しみを和らげ、彼らを真理のうちに強めればよいか、どのようにして彼らの心にある闇を取り除けばよいかを、自分自身の心の中でよく思い計りたいと一人一人が思うでしょう。もし互いに理解し合い、互いのほんとうの関係を理解するならば、わたしたちは今と異なる気持ちを抱くはずです。しかし、それを知るには、命の御霊を得なければならず、互いに義のうちに強め合いたいと望まなければなりません。²

わたしたちは人々に善を行うためにこの世に送られています。そして人々に善を行うことによって、自分に対して善を行います。夫は妻に関して、妻は夫に関して、子供は両親に関して、両親は子供に関して、いつもこのことを心に留めておくべきです。互いに善を行う機会は常にあります。³

わたしはイエスの御名によって神に祈ります。皆さんとわたしが日々もう少し忠実になろうと努力しますように。今日は昨日よりももう少し善い人になろうと努力しますように。隣人に対してもう少し大きな愛と優しい気持ちを抱こうと努力しますように。それは「勢力を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして主なるわたしたちの神を愛し、自分を愛するように隣人を愛すること」に律法と預言者がかかっていると、教えられているからです〔マタイ 22:37-40 参照〕。「人からしてほしいと望むように人にすること。」これは律法と預言者にかなっています〔マタイ 7:12 参照〕。これらはわたしたちが学ぶべき、そして学ばなければならない原則です。……わたしたちはあらゆる所で、あらゆる人の友であるべきです。世の人を憎む末日聖徒はいません。末日聖徒に関して言えば、わたしたちは世の人々の友であり、そうでなければなりません。慈愛の手を差し伸べ、全人類の益のために働くようにならなければなりません。これは末日聖徒の使命です。慈愛の働きを、自分たちだけに限定せず、世の人々に広げてください。全人類に慈愛の手を差し伸べることがどうしても必要だからです。⁴

正直であり、公正で憐れみ深くあり、すべての意図と決意において、すべての行いと交際において、気高さと神を敬う精神を発揮してください。慈愛の精神

をはぐくみ、もし逆の立場であったなら相手に期待するだろうと思う以上のことをいつでも行う準備をしてください。世俗的な人々の目ではなく、神の目に大いなる者となり、「勢力と思いと力を尽くして主なるわたしたちの神を愛し、自分を愛するように隣人を愛する」という点で大いなる者となる望みを持ってください。人類を愛さなければなりません。彼らは皆さんの同胞であり、神の子供たちだからです。この博愛の精神を持ち、このような思いと気持ちをはぐくめるように、また、メシヤの王国のために懸命に働くための力と能力を得られるように、熱心に祈ってください⁵ [237 ページの提案2 参照]。

わたしたちは人々が幸福を見いだせるよう助けるときに、いっそう幸福になる

わたしたちは人々に善を行いたいという強い望みを持つべきです。あまり自分のことを気にかけないでください。いつも自分以外の人にある程度の思いを向け、ほかの人がもっと幸福になり、もう少し主に近づけるように助けようと努めるならば、間違いなくわたしたちに幸福が訪れるでしょう。……少し気分がふさいでいるときには、周りに目を向け、自分よりも苦しい状況にある人を見つけてください。その人のところに行き、問題を突き止め、その後、主から授かっている知恵を用いてその問題を取り除くように努めてください。すると、ふさいだ気分はいつの間にか消えていて、気持ちが軽くなり、主の御霊が皆さんのうえにあり、すべてが照らされているように感じます⁶ [237 ページの提案3 参照]。

他人の必要を満たすことを第一に考えるときに、自分の進歩が早まる

大いなる者になることを望む若い男女にとって、最も考慮するとよいことの一つは、ほかの人も同じようになるよう助けることです。そして、ほかの人を高めるためにわずかな時間を割くのをいとわないことです。自分を高める最良の方法は、ほかの人に善を行うことによって自分を訓練することです。このことを常に心に留めていてください。⁷

どのような学問であろうと、学問を追究するときには勉強を続ける必要があります。一つの科目を終えたら別の科目を選び、その内容を習得するために勉強を続けなければなりません。そして学問を習得する最善の方法は、身に付けようとしている知識をほかの人に伝えることです。友を集めて、自分が知ったことを彼らに伝える努力をしてください。そうすると、知識をほかの人と分かち合う過程をたどらなければ決して知ることがなかったであろう事柄を、自分が理解し始めていることに気づきます。学校の教師をしたことのある人なら、この点についてわたしの言っていることがよく理解できるでしょう。……

暗闇くらやみの中にいる人々、まだあまり多くの知識と知恵と英知を得ていない人々が

いることを思い起こしてください。友や同胞^{ほらから}よりも多くの知識と英知と力を得ているならば、彼らと分け合ってください。そうすることによって、心が広がり、すでに得ていた光と知識がもっと急速に増し加えられていくことに、すぐに気づくでしょう。……

もし友の友情と愛情を手に入れたいならば、自分が受けている光で彼らを慰めるように努めてください。その際、それらの祝福が神から授かったものであること、また、このような行いはすべての人がなすべきことを行っているにすぎないことを覚えてください。……

さて、最も高く、最も大いなる祝福を得、全能者からの是認を受け、義にかわることにについて絶えず進歩するために、人はすべてのことをできるかぎり適切に行わなければなりません。友のために進んで犠牲を払ってください。自分自身を強めたいと思うならば、それを実現するための最良の原則は、友を強めることです。……

……周りにいる友の益となることを理解して彼らの益を図る広い心を持ってください。そして友に益をもたらすことができる場合には、そのように行ってください。そうすると、友の益に関心を寄せずにひたすら自分自身の必要を満たそうと努力するときよりも、自分に必要なものが早く手に入ることに気づくでしょう。わたしはこれが有益で大切な原則であることを知っています⁸〔237ページの提案4参照〕。

人々のために犠牲を払うときに、天の特質が身に付く

わたしたちは自分自身のほかにも人がいることを意識しなければなりません。ほかの人の心の中や気持ちに目を向け、今以上に神の性質を身に付けなければなりません。

……周りの人々のために、自分自身を犠牲にする必要があります。このような犠牲を、救い主やジョセフ兄弟に見ることができ、また〔ブリガム・ヤング〕大管長に見ることができます。イエスもジョセフ兄弟もブリガム兄弟も、自分が持つすべてのものをいつでも進んで人々のために犠牲にしてきました。ブリガム兄弟が神から力を受け、人々から力を受けているのは、大管長が常に示している自己犠牲の気持ちによるのです。これはほかの人々にも当てはまります。進んで人のために犠牲を払えば払うほど、神の性質が身に付き、永遠の世の祝福が注がれて、世の様々な権利を得るだけでなく、永遠の祝福を受けることでしょう。……何かを別の何かのために犠牲にすればするほど、皆さんは神にかかわる事柄において進歩するでしょう。さて、もし天の特質を身に付け、天国に入りたいならば、そこにいる天使に倣って同じ道を進むとよいでしょう。もしどのような方法で増し加えるのかを知りたいければ、お教えしましょう。それは自



「周りにいる友の益となることを理解して彼らの益を図る広い心を持ってください。」

分の内に神の性質を身に付けることによるのです。

……人は周りのあらゆる所で天の特質に触れることができます。わたしたちはそのために努力しなければなりません。悪に取り囲まれ、悪霊に取り囲まれているとはいえ、この地上に天国を築かなければなりません。悪事が横行していても、この地上に天国を築くように努めなければなりません。

どのようにして天の特質を身に付け、天の原則に基づいて行動するかを学ぶまでは、天の特質を受けることは決してできません。何人かの人を思い浮かべ、20年前に彼らを取り巻いていた状況を振り返ってみてください。……当時は不自由な環境であったにもかかわらず、彼らはかなりの喜びと平安と幸福を得ていました。今、彼らは快適な環境を得て、物質的な欲求や必要を満たす物質的な手段を得ているかもしれませんが、もし友を失い、同胞から良^{はらから}く思われていなければ、彼らは不幸であって、20年前よりも不幸な有様にいます。

……主が兄弟姉妹の皆さんを祝福してくださって、皆さんがこれらの事柄について考え、わたしたちが互いに愛し合いますように。そして、主から知恵と能力を授かるかぎり自分自身を高めるよう生活し、互いに信頼し合いますように⁹ [237ページの提案5参照]。

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。そのほかの提案については、v - vii ページを参照する。

1. 231 および 233 ページの話を読んでください。「人に親切にすると自分も親切を受けることが度々ある」ことを、あなたはどのようなときに目にしてきましたか。
2. スノー大管長は、わたしたちが皆神の子供であることを思い起こさせています (233 - 234 ページ)。この知識は、互いに対するわたしたちの行動にどのような影響を与えるでしょうか。扶助協会は姉妹たちが人々に善を行うように、どのような機会を提供しているでしょうか。神権定員会は兄弟たちが人々に善を行うように、どのような機会を提供しているでしょうか。
3. 234 ページの上から 10 行目から始まる段落について深く考えてください。ほかの人が幸福を見いだせるように助けるとき自分もいっそう幸福になるのはなぜでしょうか。子供がこの真理を学べるように、両親はどのような助けができるでしょうか。
4. 知識をほかの人と分かち合うときに知恵が増すのはなぜだと思いますか (例として、234 - 235 ページ参照)。この原則が真実であることを示している例として、あなたはどのような経験をしてきましたか。
5. 235 ページから始まる項を研究してください。ささやかな奉仕の行いにわたしたちを天に近づける力があるのはなぜだと思いますか。本章が伝えているメッセージについて深く考えながら、どうすれば自分の家庭をもっと天国に近づけられるかを考えてください。

関連聖句 —— マタイ 25 : 31 - 45 ; ルカ 6 : 36 - 38 ; モーサヤ 2 : 17 ; 4 : 14 - 27 ; 教義と聖約 81 : 5 ; 82 : 3

教える際のヒント —— 「手引きに書かれたことを何から何まで教えようとしてあわてるよりも、良いアイデアをほんの 2, 3 採り上げ、十分話し合い、学ぶ方がよいのです。……クラスの中に主の御霊^{みたま}がとどまるようにしたければ、穏やかな雰囲気は絶対に不可欠です。」(ジェフリー・R・ホランド「教会で教え、学ぶ」『リアホナ』2007年6月号、59)

注

1. Journal of Lorenzo Snow, 1841 - 47, 教会歴史図書館, 39 - 42
2. *Deseret News*, 1857年1月28日付, 371
3. Conference Report, 1899年4月, 2
4. *Salt Lake Daily Herald*, 1887年10月11日付, 2
5. エライザ・R・スノー・スマス, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow* (1884年), 486 - 487
6. Conference Report, 1899年4月, 2 - 3
7. *Improvement Era*, 1901年7月号, 714
8. *Deseret News*, 1857年3月11日付, 3: 原典では3ページが誤って419ページと表示されている
9. *Deseret News*, 1857年3月11日付, 4



預言者ジョセフ・スミスは「神の人であり、自分の召しを果たす決意を固めて」いた。



預言者ジョセフ・スミス

「ジョセフ・スミスは正直な人であり、誠実で、名誉を重んじ、忠誠を尽くす人でした。人類家族に真理を述べてきたことを諸天と世界に向けて証^{あかし}するために、自分の持っていたすべてを、命でさえも進んで犠牲にする人でした。」

ロレンゾ・スノーの生涯から

「**現**在生きている人の中で、わたしほど預言者ジョセフ・スミスと親しくしていた人は恐らくいないでしょう」と、1900年にロレンゾ・スノー大管長は述べている。「わたしはよくジョセフと一緒にいました。ジョセフの家を訪ね、ともに食卓に着き、様々な状況の下で行動を共にし、個人的に助言を求めました。」¹

ロレンゾ・スノーはそうした個人的な交わりに加えて、ジョセフ・スミスが人々の前で、聖徒たちの友として、また回復の預言者として務めを果たす姿を目にしている。ロレンゾは、ジョセフ・スミスが建設途中のノーブー神殿で開かれた集会に出席したときのことについて語っている。預言者はほかの宗派の牧師を伴って教壇に向かった。その牧師は「きわめてまじめな感じでした。だれかの言葉に聴衆がわいたり笑ったりしても、まったく沈黙を守り、表情一つ変えませんでした。」対照的に、ジョセフ・スミスは「その朝、とても気分が良かった」ようで、集会が始まる前に「人々の笑いを誘う」ような話をしていた。ロレンゾは次のように述べている。「開会后、スミス大管長が立ち上がりました。わたしは大管長がこのときほど力強く語るのを聞いたことがありませんでした。人々は喜びを覚え、スミス大管長は神の御霊^{みたま}に満たされて、力強く雄弁に語りました。」²

スノー大管長はジョセフ・スミスとの経験には感銘を受けたが、預言者ジョセフの使命について得た証は、そうした経験に基づくものではなかった。自身の証は聖霊から受けたものであることを、スノー大管長は繰り返し宣言している。「[ジョセフ・スミス]が誠実で名誉を重んじる人であったことに関しては、一瞬でも疑ったことはありません。それはジョセフのことを知っていた人ならだれでも同じです。しかし、それだからと言って、わたしはジョセフやほかのだれかから聞いたことだけを頼りに、この福音の原則を宣^のべ伝えに出て行ったことは一度もありません。ジョセフの言葉が神の靈感を受けた人から真理の言

業として自分に与えられたものであると信じていたのです。……神の御霊、すなわちすべての人が享受することのできる聖霊が、……ジョセフから聞いた事柄が真実であることを確認してください、それはわたしにとって、だれも与えることも奪うこともできない知識となりました。」³ [246 ページの提案 1 参照]

ロレンゾ・スノーの教え

ジョセフ・スミスはその神聖な召しを受けたとき、
純粋で誠実で正直な青年だった

この業を確立するために神がお選びになったジョセフ・スミスは、貧しく、無学であり、世の中で人気を集めていたキリスト教のどの教派にも属していませんでした。正直で、誠実さにあふれ、政治家や偽善的な宗教家が自分の目的を遂げるために用いていた策略も悪知恵も詭弁も知らない一介の少年でした。昔のモーセと同じように、ジョセフは宗教改革者として人前に立ち、務めを果たす能力も資格も自分にはないと感じました。それはだれもが敬遠する務めでした。長年にわたって存続し、人々から認められ、支持されてきた考えや信条、神学上の最も難解な理論や教義に戦いを挑むのです。それでも、神はあらゆる国の貧しい者と心の正直な者を霊的および物質的な束縛から解放する業にジョセフを召されました。そしてジョセフのメッセージを受け入れてそれに従う者、すなわち心からの望みをもって罪の赦しのためのバプテスマを受ける者はだれでも、神からの啓示を受け、聖霊を受けると約束されました。古代の使徒たちが教えを説いた時代に福音を通して約束され、授けられた祝福と同じものが回復されたのです。そしてこのメッセージ、この約束は、神の権能を持つ使者である長老たちがどこで、だれに伝えようと、常に効力を持つのです。ジョセフ・スミスはそう述べました。彼は無学で教養のない、ごく普通の純朴で正直な少年でした。⁴

初めて預言者ジョセフ・スミスに会ったとき、わたしは18歳ぐらいでした。1832年ごろの秋のことです。家から2マイル〔3キロ〕ほど離れたオハイオ州ポーター郡ハイラムで預言者が集会を開くというわさがありました。ジョセフについてたくさん話を聞いていたわたしはとても興味を覚え、この機会にジョセフを見に行き、話を聞いてみようと思いました。そこで、家族の何人かと連れ立ってハイラムに行きました。会場となった小さなあずまやに着くと、150人から200人くらいの人々が来ていました。集会はすでに始まっており、ジョセフ・スミスが〔ジョン・〕ジョンソンの家の戸口に立ち、あずまやに顔を向けて話していました。わたしは話に耳を傾けながら、ジョセフの容姿や服装や態度を事細かく観察しました。彼はおもに自身の体験、特に天使の訪れについて語り、それらの驚くべき現れについて力強い証^{あかし}を述べました。最初は少し気後れ

ジョセフ・スミスはいつも自然であり、きわめて穏やかで、周りの人や物事に混乱したりいら立ったりすることが決してありませんでした。多くの牧師がジョセフのもとを訪れ、ジョセフが無警戒なときに、非難の対象になりそうな行動を彼らは見つけようとしました。しかし、人がいない所でもジョセフの行動はいつも同じでした。決して偽善の罪を犯しませんでした。健康的なスポーツを何でも楽しみ、球技や徒競走など、屋外のスポーツを楽しむことが不適切であるとは考えませんでした。預言者の家を訪れていたある牧師がふと窓の外を見ると、預言者が庭で友人とレスリングをしていました。その様子や、ほかにも預言者が無邪気な遊びを楽しむところを見た牧師は、預言者が正直で、まったく偽善的なところのない人であることを確信しました。……

また別のときに、ジョセフ・スミスがノーブーで数人の若者たちとボール遊びを楽しんでいたことがありました。それを見た兄のハイラムは、預言者を正し、さらに叱責する必要があると考えて、そのような行いは主の預言者にふさわしくないと言いました。預言者は穏やかにこう答えました。「ハイラム兄弟、少年たちと一緒にたわいない遊びをすることで、わたしの名に傷がつくようなことはありません。むしろ、少年たちは喜び、わたしと心を通わせるのです。」¹⁰〔246ページの提案3参照〕

ジョセフ・スミスは聖霊によって強められ、霊的な力と影響力を増し加えた

偉大な預言者ジョセフ・スミスは、神に選ばれ、自分の使命を知らされたとき、学問のある人ではありませんでした。主は無学な者たちに霊的な賜物たまものと知識を授け、聖霊の力によって、王国の大いなることを知らされます。そして彼らは次第に神にかかわる事柄を深く知るようになるのです。¹¹

ジョセフ・スミスは、その生涯の終わりに近づくにつれて、周囲に大きな力と影響を及ぼすようになっていました。わたしがこのことを非常に強く意識したのは、ヨーロッパでの伝道から戻ったときでした。最後に会ったときと大きく変わっていることに気づき、そのことを彼に伝えたほどでした。強く、力にあふれていたのです。預言者はこのことを認めて、主がさらなる御霊みたまを授けてくださったのだと言いました。

ある日、預言者は十二使徒の兄弟たちと教会のそのほかの名立たる長老たちを、様々な務めや使命に任じるために呼び集めました。皆、席に着き、自分の今後の務めを告げる預言者の言葉を待ち構えていました。彼らは並外れて優れた人物と同席しているのを感じていました。カートランドにいたころ、預言者にそのような強さと力があるようには思われませんでした。……しかし後年、預言者は主の力がとても強くなり、人々がそれを感じるほどでした。このときもそうでした。長老たちはジョセフが優れた力を持っていることをはっきりと



ジョセフ・スミスは家族や友人と「無邪気な遊び」を楽しんだ。

理解しました。預言者は言いました。「ブリガム兄弟、あなたは東に行って東部諸州の教会の諸事を処理してほしいと思います。キンボール兄弟が同行します。」また別の者にはこう言いました。「あなたはわたしたちの新聞の発行を監督してください。」こうして一人一人に特別な任務を与え、すべての者がジョセフの言葉を主の思いとして受け入れました。……

預言者には、自分のもとに来るすべての人に驚くべき方法で感動を与える力がありました。相手の心に訴えかける何かがあったのです。福音を宣べ伝える務めに出て行く兄弟たちを任じるときは特にそうでした。ジョセフから注がれる靈感が兄弟たちの心をとらえ、ジョセフの言葉は彼らの魂の奥深くまで達しました。兄弟たちはジョセフを愛し、信じ、神の業を進めるためにジョセフから指示されることは何でも行う用意ができていました。ジョセフの存在自体が持つ迫力に圧倒され、預言者としての使命に対するジョセフの^{あかし}証に感動を覚えました。世の中には、出会うすべての人が感じるほど並外れた親しみやすさと

心のぬくもりを持っている人が大勢います。わたしはそのような人に何人も会ってきました。しかし、一緒にいて、預言者ジョセフ・スミスの前にいるときに感じたような独特の大きな影響力を感じる人には、いまだに会ったことがありません。ジョセフは神の御霊を豊かに受けていたからです。ジョセフと握手するだけで、人はこの影響力に包まれます。繊細な人であればだれでも、自分がたぐいまれな人物と握手していることが分かりました。¹² [00 [274] ページの提案 4 参照]

**わたしたちはジョセフ・スミスが預言者であり、彼を通して福音が
回復されたことについて、個人あかしの証を得ることができる**

わたしは清い心をもって、真理を知りたいと心から望み、[ジョセフ・スミスの] メッセージを受け入れました。この教義に従い、最も明白で満足のいく形で神からの啓示を受けました。約束された祝福を受け、この業について知ったのです。証人はわたし一人でしょうか。わたしが今、話している何千人もの皆さんはどのような経験をお持ちでしょうか。皆さんも証人でしょうか。¹³

わたしたちはどのような証を持っているのでしょうか。それはこのような証です。今は時満ちる神権時代です。黙示者ヨハネは、一人の天使が地上に住む者に、すべての国民、部族、国語の民、民族のに宣べ伝えるために、永遠の福音を携えて天のただ中を飛ぶのを見ました。その天使が現れて福音を地上に回復し、ジョセフ・スミスは回復をもたらすために使われる者となりました。〔黙示 14:6 参照〕¹⁴

ジョセフ・スミスは、ペテロとヤコブとヨハネの訪れを受け、彼らから福音の聖なる儀式を執行する権能を授けられたと断言しました。それらの儀式を通して、正直な心を持つすべての男女は聖霊を約束され、教義についての完全な知識を約束されました。¹⁵

ジョセフ・スミスは、人がこれらの事柄についての知識を授かることができるように、そのための道を開き、計画を定める権能を与えられました。わたしたちが預言者の証や、昔の使徒たちごんにちの証、今日の使徒たちの証、モルモン書、または何であろうと過去の出来事や言葉にしか頼れない状態に放置されるのではなく、自分自身で知ることができるようにするためです。それは個人として得るべき知識なのです。¹⁶

わたしはジョセフ・スミスが生ける神のまことの預言者であったことを知っています。ジョセフが神とその御子イエス・キリストにまみえ、御二方と話をしたことを証します。主がわたしにこの生きた証を授けてくださり、それ以来、この証はわたしの心の中で燃え続けています。今、その証を全世界の人々に授けます。わたしはジョセフ・スミスが神から遣わされたことと、ジョセフによって確立

された業が神の業であることを証します。それだけでなく、わたしは預言者が預言した事柄について地のすべての国民に警告し、それらが真実であると知っているとも最も厳粛に証します。¹⁷ [246 ページの提案 5 および 6 参照]

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。そのほかの提案については、v - vii ページを参照する。

1. 240 ページで述べられている出来事を思い浮かべてください。この話からジョセフ・スミスについてどのようなことが伝わってくるのでしょうか。
2. ジョセフ・スミスの人柄についてスノー大管長が述べている箇所を読んでください (241 - 242 ページ)。ジョセフ・スミスが持っていた特質は、主の御手に使われる者となるうえでどのように役立ったと思いますか。
3. ジョセフ・スミスが無邪気に遊ぶ時間を取っていたことについて、あなたはどのようなことを思い、感じますか (242 - 243 ページ)。娯楽によって、聖霊に満たされる能力を損なうのではなく、むしろ高めるには、どうすればよいのでしょうか。
4. ジョセフ・スミスはどのようにして「次第に神にかかわる事柄を深く知るようになる [った]」でしょうか (例として、243 - 245 ページ参照)。霊的に成長しようと努力するに当たって、どのように預言者の模範に従うことができるのでしょうか。
5. 245 ページの上から 10 行目から始まる段落を、スノー大管長が直接あなたに向かって話しているかのように考えながら読んでください。大管長の問いかけに、どのように答えますか。
6. 245 ページから始まる項を読んでください。福音が預言者ジョセフ・スミスを通して回復されたことを自分自身で知る必要があったときの経験として、どのようなものがありますか。この証を得たいと思っている家族や友人に、どのような助言ができますか。

関連聖句 —— 教義と聖約 1:17; 5:9 - 10; 35:17 - 18; 135:3; ジョセフ・スミス—歴史 1:1 - 26

教える際のヒント —— 「生徒から質問を受けたら、あなた自身が答えるのではなく、ほかの生徒に答えさせることを考えなさい。例えば、このように言うことができる。『興味深い質問です。ほかの人はどう思いますか。』あるいは『この質問に答えてくれる人はいますか。』」 (『教師、その大いなる召し』 64)

注

1. Conference Report, 1900年10月, 61
2. "Reminiscences of the Prophet Joseph Smith," *Deseret Semi-Weekly News*, 1899年12月29日付, 1
3. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1882年6月27日付, 1
4. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1886年3月9日付, 1
5. "Reminiscences of the Prophet Joseph Smith," 1
6. "The Grand Destiny of Man," *Deseret Evening News*, 1901年7月20日付, 22
7. Conference Report, 1898年4月, 64
8. *Millennial Star*, 1889年11月25日付, 738:1889年10月の総大会におけるロレンゾ・スノーの説教の詳細な記録から
9. *Millennial Star*, 1895年6月27日付, 402
10. "Reminiscences of the Prophet Joseph Smith," 1
11. *Journal History*, 1898年11月14日付, 4:1898年11月のボックスエルダーステーク大会におけるロレンゾ・スノーの説教の詳細な記録から
12. "Reminiscences of the Prophet Joseph Smith," 1
13. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1886年3月9日付, 1
14. *Deseret News*, 1882年11月22日付, 690
15. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1886年3月9日付, 1
16. *Deseret News*, 1882年11月22日付, 690
17. "Reminiscences of the Prophet Joseph Smith," 1



「わたしたちは全世界の人々に^{あかし}証します。イエスはキリストであり、生ける神の御子であります。……わたしたちは神の啓示によって、すなわち聖霊の示しによって、これらのことを知っています。」



イエス・キリストの使命について 思うこと

「わたしたちは皆、イエス・キリストを頼りとしています。
わたしたちが平安と幸福と昇栄を得ることができるのは、
主がこの世に来てその道を開いてくださったおかげなのです。」

ロレンゾ・スノーの生涯から

1872年10月、ブリガム・ヤング大管長は第一顧問のジョージ・A・スミス管長に、ヨーロッパと中東の国々を歴訪する割り当てを与えた。そしてヤング大管長と第二顧問のダニエル・H・ウェルズ管長は、スミス管長あてに次のように書き送った。「訪れる国々に福音をもたらすため、現在どのような機会があるか、あるいはどこでそれらの機会を生かすことができるかを注意深く見てきてください。」旅の最終目的地は聖地であり、スミス管長は「その地を主に奉献し聖別する」ことになっていた。ヤング大管長とウェルズ管長は次のように書いている。「主の御守りによって、心安らかに安全に旅を続けられるよう祈っています。聖なる福音について話すときにはいつも、知恵の言葉を豊かに授かり、雄弁に語るができますように。そして偏見を正し、人々の中に義の種をまくことができますように。」¹ スミス管長は少数の末日聖徒を率いていた。その中には当時十二使徒定員会の会員であったロレンゾ・スノー長老もいた。また、スノー長老の姉で、当時中央扶助協会会長を務めていたエライザ・R・スノー姉妹も含まれていた。

スノー長老は旅の間、頻繁に手紙を書いて、地形や建物、人々の風習や状態について知らせた。しかし、一行が聖地の史跡を訪れたとき、スノー長老の手紙に変化が見られた。何世紀も前にそれらの場所を度々訪れておられた、神の御子に思いをはせたためである。例えば、1873年2月には、一行がエルサレムに近づいたときの経験を次のように書いている。

「1時間ほどでエルサレムに到着する地点まで来ました。さらに進むと、小さい丘の頂上に達しました。『聖なる都』エルサレムをじっと見つめました。右手はるかにシオンの山、ダビデの町があります。左手には、荒涼としてそびえるオリブ山があります。そこはかつて救い主が好んで訪れられた場所であり、御父

のもとに昇られる前に、その聖なる御足^{みあし}を最後に地につけられた場所です。これらの興味深い史跡と、そこにまつわる神聖な出来事に、厳粛な思いや考えがわいてきて、胸を打たれます。そうです、イエスが住み、教えを説き、十字架につけられた地、『すべてが終わった』と叫び、首を垂れて亡くなられた地、エルサレムです。丘の曲がりくねった小道をゆっくりと物思いにふけりながら下りて行き、……ついに到着しました。』²

ヨルダン川を訪れた後、スノー長老は次のように書いている。「そのおいしい清涼な水を飲み、聖なる流れの中で体を洗っていると、子供のころの記憶がよみがえってきました。この場所で起きた重要な出来事をいつも聖書で読んでいました。聖なる箱を担いだ祭司たちが流れに足を踏み入れると、川が乾いた地となって、イスラエル人がそこを渡った話。エリヤが川を左右に分けて、乾いた川底を渡り、対岸の平原でつむじ風によって天に取り上げられた話。そしてエリシャが戻るときに、エリヤの身から落ちた外套^{がいたう}を取って水を打ち、『エリヤの神、主はどこにおられますか』と言って川を分けた話。ヨルダン川が分かれたのはこれで3度目でした。しかしもう一つ、この場所にまつわるはるかに興味深い出来事があります。救い主のバプテスマです。聖書には次のように記されています。『ヨハネが現れ、ユダヤの荒れ野で教えを宣べた。そしてイエスがガリラヤを出てヨルダンに現れ、ヨハネのところに来て、バプテスマを受けようとされた。』〔マタイ3章参照〕わたしたちはこれらすべての記念すべき出来事が起きたまさにその場所、もしくはその近くの岸辺^{あかし}に立ち、川を見下ろしました。そしてこれらの崇高な出来事を静かに証しているその川に入りました。』³
〔254ページの提案1参照〕

ロレンゾ・スノーの教え

イエス・キリストがこの世に来られたのは、御父の御心^{みこころ}を行い、わたしたちのために平安と幸福と昇栄への道を開くためである

この福音は様々な時代にこの世に伝えられてきました。預言者たちは福音を知っており、イエスが世の初めからほふられている小羊であられることをはっきりと理解していました〔黙示13:8; モーセ7:47参照〕。また、定められたときに主が人の子らに御自身を現されることと、人の子らの罪のために亡くなり、救いの計画を完成させるために十字架におかかりになることを理解していました。⁴

イエスはいばおけに寝かされていた無力な幼子であったとき、御自分が神の御子であることも、かつて地球を創造したことも知りませんでした。ヘロデの布告が出されたとき、そのことについて何も知りませんでした。幼子イエスに自分を救う力はなく、〔ヨセフとマリヤ〕はその布告の実施からイエスを守るため、幼子連れてエジプトに〔逃げ〕なければなりません。……イエスは成

長して大人になられました。その間に、御自分が何者であり、どのような目的のためにこの世にいるのかを知らされました。御自分がこの世に来る前に栄光と力を持っていたことを知らされたのでした。⁵

イエスは地を巡って、使命を果たしておられたとき、人々の間で行う奇跡は御自身の力や知恵によるものではなく、御自分がここにいるのは御父の御心を成し遂げるためであると人々にお告げになりました。主が来られたのは、人から称賛や敬意を受けるためではなく、御自分を遣わされた御父に誉れと栄光があるようにするためでした。主は次のように言われました。「わたしは父の名によってきたのに、あなたがたはわたしを受けいれない。もし、ほかの人が彼自身の名によって来るならば、その人を受けいれるのであろう。」〔ヨハネ5：43〕

さて、主の使命の特徴であり、世の人々の使命と異なっていたところは次の点です。すなわち、主が来られたのは、人から称賛や敬意を受けるためではなく、御父に誉れと栄光があるようにするためであり、御自分を遣わされた御父の業を成し遂げるためであったという点です。ここに主の成功の秘訣ひつがあり、同じ原則に基づいて力を尽くすすべての人の成功の秘訣があります。⁶

神の御子イエス・キリストはかつて、神の無数の子供たちに救いをもたらすうえで不可欠なことを成し遂げるために、この上ない努力を求められる状況に置かれました。厳しい試練を切り抜け、必要とされた犠牲をささげるために、神の御子は最大の努力を払い、決意を貫かなければならなかったのです。⁷

神の御子イエスがこの世に遣わされたのは、皆さんやわたしがこれらの驚くべき祝福を受けられるようにするためでした。主は大きな犠牲を払わなければなりません。御父から求められたことを成し遂げるために、あらんかぎりの力を尽くし、信仰を振り絞る必要がありました。……血が滴るほどの非常に厳しい試練を受けましたが、それでも主は成し遂げられました。……主の思いは言葉に表せないほどのものであったに違いありません。教義と聖約第19章に記録されているように、主は自ら次のように言っておられます。主の苦しみは非常に激しく、主でさえも「苦痛のためにおのき、あらゆる毛穴から血を流し、体と霊の両方に苦しみを受けたほどのものであった。そして主は、その苦い杯を飲まずに身を引くことができればそうしたいと思った。」しかし主は心の中で絶えず次のように言っておられました。「父よ、わたしの思いではなく、御心が行われるようにしてください。」〔教義と聖約19：15 - 19 参照〕⁸

わたしたちは皆、イエス・キリストを頼りとしています。わたしたちが平安と幸福と昇栄を得ることができるのは、主がこの世に来てその道を開いてくださったおかげなのです。もし主がこの業を成し遂げておられなかったならば、わたしたちは福音の中で約束されているこれらの祝福や特権を決して得ることができなかつたでしょう。イエス・キリストが必要な業を行ってくださったの



1872年の終わりから1873年の初めにかけて、ロレンゾ・スノー長老たちは聖地を訪れた。

で、主の仲立ちにより、これらを受けられるのです。……

……主は御自身を犠牲としてささげ、人の贖いのための計画における御自分の責務を果たされました。しかし、人は主と一つになるよう務めなければ、救いを成し遂げることはできません。⁹

わたしたちは次のことを十分に理解しています。すなわち、イエス・キリストはこの地上で肉体に宿ったように、その肉体を受け、現在、栄光を受けた体に宿っておられます。そしてわたしたちにも、同じ祝福、同じ昇栄、同じ栄光を受ける権利が与えられています¹⁰ [254 ページの提案 2 および 3 参照]。

イエス・キリストは末日に地上を訪れ、わたしたちの救いに必要な 天の真理を明らかにされた

かつて天に住み、世界が存在する前に天で統治し、地球を創造された御方、そして時の中間に、御自分の創造した者たちを完成させ、救うために降りて来られた御方が、この時代に人々に御自身を現されました。¹¹

わたしたちは全世界の人々に証します。イエスはキリストであり、生ける神の御子であります。昔、墓からよみがえった後に使徒たちに御姿を現したときと同じように、主はジョセフ・スミスに直接御姿を現されました。そして人類が救いを得られる唯一の道である天の真理をジョセフに知らされました。わたしたちは神の啓示によって、すなわち聖霊の示しによって、これらのことを知っています。¹²

カートランドの神殿で二人の人が主にまみえました。……ユダヤ人によって殺された御方である神の御子が彼らに御姿を現されたのです。二人は次のように述べています。「わたしたちの心の目から幕が取り去られ、理解が開かれた。わたしたちは、主がわたしたちに面して教壇の手すりの上に立っておられるのを見た。」……その足の下は純金でした。その顔は太陽の輝きに勝って光り輝いていました。その声は大水の奔流ほんりゅうのとどろきのようでした。それはエホバの声であって、次のように言われました。「わたしは最初であり、最後である。わたしは生きている者であり、殺された者である。わたしは父に対するあなたがたの弁護者である。見よ、あなたがたの罪は赦ゆるされており、あなたがたはわたしの前に清い。それゆえ、頭を上げて喜びなさい。あなたがたはわたしの名のためにこの家を建てた。わたしはこの家を受け入れ、わたしの戒めを守る者のうえにわたしの御霊みたまを注ぎ、この聖なる家が汚されるのを許さない。」〔教義と聖約 110：1－8 参照〕これは紛れもなくユダヤ人が拒んだ御方の声であり、その御方が神殿で御姿を現されたのです。さて、わたしは神がまことの御方であるのと同じように、これらのことが真実であることを知っています。しかし地のもろもろの国民は、神の御子イエスがおいでになって人に御姿を現されたことを知りません。そして福音を宣べ伝える権能と、これらの原則を信じてそれに従うすべての人は聖霊を受けて、それらの原則が真実であることを知るだろうと約束する権能を人々にお授けになったことを知りません¹³〔254 ページの提案 4 参照〕。

救い主は将来再びおいでになり、わたしたちは 主の来臨に備えなければならない

わたしたちにはキリストが間もなく地上に来て統治されるという証あかしがあります。¹⁴

イエスはやがておいでになり、地上でユダヤ人の間におられたころのように、わたしたちの中に御姿みすがたを現されるでしょう。そしてわたしたちとともに食べ、飲み、わたしたちに語りかけ、王国の奥義を説明し、現在は語る事が許されていない事柄についてお話しになるでしょう。¹⁵

走る列車に乗っていれば、席にじっと座っているかぎり、望む所まで列車が連れて行ってくれます。しかし、列車から降りてしまうと、目的地に着けなくなる恐れがあります。次の列車が来るのはずっと後かもしれません。わたしたちも同じです。正しい生活を送り、自分たちの務めを果たしているならば、前進しています。聖約を守っているならば、神の業を行い、神の目的を成し遂げています。そして神の御子イエスが誉れと栄光のうちにおいでになって、忠実であることを証明するすべての者に、彼らが期待するすべての祝福をお与えになる

ときに、その備えができていることでしょう。そして、その祝福は期待をはるかに上回るものとなるでしょう。……

……末日聖徒の皆さんに申し上げます。もし眠りかけている人がいるとすれば、その人は救い主が地上にいたときに10人のおとめについて語られた言葉を読んでください。そのうちの5人は賢く、明かりに油を用意していました。そして花婿が来たとき、迎えに出て行く準備ができていたのは半分だけでした〔マタイ25:1-13; 教義と聖約45:56-59参照〕。末日聖徒として、わたしたちはそうであってはいけません。自分たちが交わしている永遠の聖約に忠実であり、神に忠実であるように努めましょう。神が末日聖徒を祝福し、御霊を注いでくださいますように。皆さんが神に忠実であり、家族に忠実であり、あらゆることにおいて分別をもって振る舞い、神の王国のために働くよう願っています。わたしたちが愚かなおとめの中にいることなく、王や女王として冠を授けられ、永遠にわたって統治する者の中にいるにふさわしいと認められますように¹⁶〔255ページの提案5および6参照〕。

研究とレッスンのための提案

本章を研究する際、またはレッスンの準備をする際に、以下の項目について深く考える。そのほかの提案については、v-viiページを参照する。

1. 聖地での経験を語ったスノー大管長の言葉について深く考えてください(249-250ページ)。聖地にいたとき、「厳粛な」思いや考えがわいてきて「胸を打たれ[た]」のはなぜだと思いますか。聖地を訪れなくても救い主に対して同様の気持ちを抱くにはどうすればよいでしょうか。
2. イエス・キリストがあなたのために行われたことについて考えながら、250ページから始まる項を研究してください。「御父に誉れと栄光があるように」と救い主が願われたことについて深く考えながら、神の御心に従うために何をすればよいかを考えてください。
3. 251ページで、スノー大管長は「成功の秘訣」を紹介しています。わたしたちはこの秘訣をどのように自分に当てはめたらよいでしょうか。
4. 252ページから始まる項を読んでください。イエス・キリストに対するあなたの証は自分の人生にどのような影響を及ぼしていますか。イエス・キリストについての証を世界の人々と分かち合うために、わたしたちに見える様々なことについて深く考えてください。例えば、あなたの証を家族と分かち合うために、どのようなことができるでしょうか。ホームティーチャーや訪問教師として訪問先の人たちと分かち合うために、あるいは隣人や日々出会う人々と分かち合うために、どのようなことができるでしょ



スノー大管長は、救い主が語られた10人のおとめのたとえに出てくる
5人の賢いおとめの模範に倣うよう聖徒たちに勧めた。

うか。

5. イエス・キリストの再臨に自分を備えるために、どのようなことができるでしょうか（例として、253 - 254 ページ参照）。ほかの人々が備えるのをどのように助けることができるでしょうか。
6. スノー大管長の教えは、イエス・キリストに対するあなたの証にどのような影響を及ぼしてきましたか。自分の証を家族やほかの人々と分かち合う方法を探してください。

関連聖句 —— ルカ 12:31 - 48; 2 コリント 8:9; 2 ニーファイ 2:7 - 8; 25:23, 26; アルマ 7:11 - 13; 教義と聖約 35:2; ジョセフ・スミス—歴史 1:17

教える際のヒント —— 「参加者に、興味がある項を選んで黙読するように言う。同じ項を選んだ者同士で2, 3人のグループを作り、学んだことを話し合うように勧める。」(本書 vii ページ)

注

1. プリガム・ヤングとダニエル・H・ウェルズからジョージ・A・スミスへの手紙, *Correspondence of Palestine Tourists* (1875年), 1-2で引用
2. *Correspondence of Palestine Tourists*, 205で引用
3. *Correspondence of Palestine Tourists*, 236 - 237で引用
4. *Deseret News*, 1872年1月24日付, 597
5. Conference Report, 1901年4月, 3
6. *Deseret News*, 1869年12月8日付, 517
7. Conference Report, 1900年10月, 2
8. *Millennial Star*, 1899年8月24日付, 531
9. *Deseret News*, 1857年3月11日付, 3; 原典では3ページが誤って419ページと表示されている
10. *Deseret News*, 1882年11月22日付, 690
11. *Journal History*, 1884年4月5日, 9で引用
12. *Deseret News: Semi-Weekly*, 1877年1月23日付, 1.
13. *Millennial Star*, 1887年4月18日付, 245
14. *Deseret News*, 1888年4月11日付, 200。1888年4月の総大会でロレンゾ・スノーが行った説教の詳細な換言から
15. Conference Report, 1898年4月, 13 - 14
16. *Millennial Star*, 1887年4月18日付, 244 - 246



絵画・写真リスト

- 表紙- 「ロレンゾ・スノー」 ジョン・ウィ
ラード・クローソン画。大理石の模様、
© Artbeats
- iv ページ- 写真。教会歴史図書館の厚意に
より掲載
- 2 ページ- 版画。教会歴史図書館の厚意に
より掲載
- 5 ページ- 写真。教会歴史図書館の厚意に
より掲載
- 8 ページ- 「大管長会と十二使徒定員会、
1853年」の一部、版画／フレデリック・
ホーキングズ・ピアシー
- 12 ページ- 「シオンへ向かう船」グレン・S・
ホプキンソン画、© Glen S. Hopkinson
複写は禁じられています
- 13 ページ- 「傷ついた男性を癒すロレンゾ・
スノー」 ブライアン・コール画、© Brian
Call
- 17 ページ- 「ほろ馬車の開拓者」 ミネルバ・
タイカート画。教会歴史博物館の厚意に
より掲載
- 32 ページ- 「ロレンゾ・スノー」 ルイス・ラム
ジー画。教会歴史博物館の厚意により掲
載
- 38 ページ- 写真。教会歴史図書館の厚意に
より掲載
- 41 ページ- 「イエスにバプテスマを施すヨハ
ネ」 ハリー・アンダーソン画、© IRI
- 45 ページ- 「五旬節の日」 シドニー・キング
画。教会歴史博物館の厚意により掲載
- 53 ページ- 写真／フランク・ヘルムリック、
© 2009 Frank Helmrich
- 55 ページ- 「祈るロレンゾ・スノー」 ブライ
アン・コール画、© Brian Call
- 62 ページ- 写真／ウィリアム・アーリー・
コール
- 64 ページ- 「ロレンゾ・スノーを癒すウィリア
ム・クラフとアルマ・スミス」 サム・ロー
ラー画、© Sam Lawlor
- 67 ページ- 写真／ステイブ／バンダーソン、
© 2000 Steve Bunderson
- 73 ページ- 写真、© Corbis
- 79 ページ- 「使徒パウロ」 ジェフ・ワード
画、© Jeff Ward
- 83 ページ- 「山上の垂訓」 カール・ヘンリッ
ク・ブロック画。デンマーク、ヒレズのア
ンダーソンによるオリジナル作品に基づ
いて制作、© IRI
- 95 ページ- 「シュガークリーク、1846年」
の一部、グレゴリー・シーバーズ画、
© Gregory Sievers
- 98 ページ- デッサン／ピーター・O・ハンセ
ン、ヒーパー・C・キンボールの日記に描く
- 110 ページ- 「ヨナ」 ロバート・T・バレット、
© Robert T. Barrett
- 130 ページ- 「ゲツセマネのキリスト」の一
部。ハインリッヒ・ホフマン画。C・ハリ
ソン・コンロイ社の厚意により掲載
- 136 ページ- 「紅海を分けるモーセ」 ロバー
ト・T・バレット画、© 1983 IRI
- 146 ページ- 写真／アイバン・オルティズ・ポ
ンス、© 2002 Ivan Ortiz Ponce
- 156 ページ- 「盲目の男を癒されるイエス」
ウォルター・レーン画。教会歴史博物館の
厚意により掲載
- 164 ページ- 写真。教会歴史図書館の厚意

- により掲載
- 175 ページ- 「出ノブー」 グレン・ホプキンソン画, © Glen S. Hopkinson
- 180 ページ- 写真/ステイブ・バンダーソン, © 2006 Steve Bunderson
- 184 ページ- 写真 © Getty Images
- 191 ページ- 「メルキゼデク神権の回復」ウォルター・レーン画, © IRI
- 213 ページ- 「最初の示現」ミネルバ・タイカート画。レイ・M およびラフォンド・ポープ・ホールの厚意により掲載。複写は禁じられています
- 218 ページ- 「啓示を受けるジョセフ・スミス・ジュニア」ダニエル・A・ルイス, © 2007 Daniel A. Lewis.
- 223 ページ- 「カートランド神殿に姿を現された主」デル・バーソン画, © 2001 IRI
- 229 ページ- 「キリストと金持ちの若い役人」ハインリッヒ・ホフマン画。C・ハリソン・コンロイ社の厚意により掲載
- 232 ページ- 「平原を横断中に助けを受けるロレンゾ・スノーと家族」サム・ローラー画, © Sam Lawlor
- 239 ページ- 「ジョセフ・スミス」作者不詳。ミズーリ州インディペンデンスのキリストの共同体の厚意により掲載
- 244 ページ- 「子供と遊ぶジョセフ」ロバート・T・バレット画, © 1991 Robert T. Barrett
- 248 ページ- 「赤い衣のキリスト」ミネルバ・タイカート画, © IRI。歴史博物館の厚意により掲載
- 252 ページ- 「エルサレム」ジェームズ・フェアマン画。教会歴史博物館の厚意により掲載
- 255 ページ- 「10人のおとめのたとえ」ダレン・バー画, © IRI



索引

あ

愛

- この世よりも神を__する, 227
- 互いに対する__, 179 - 182, 233 - 234
- 伝道活動における__, 206
- 人々に対する宣教師の__, 209 - 210

証

- __は最良の出発点である, 55 - 56
- イエス・キリストについての__, 54, 166 - 167, 252 - 253
- ジョセフ・スミスと回復についての__, 245 - 246

い

イエス・キリスト

- __についての証, 52 - 54, 166 - 167, 252 - 253
- __の降誕, 250 - 251
- __の使命, 250 - 252
- __の贖罪, 全人類のための, 167
- __の贖罪の血による赦し, 47 - 48
- __のパプテスマ, 45 - 46, 250
- __の余任, 98 - 99
- __は, 御父の御心に従われた, 132 - 133, 250 - 252
- __は, カートランド神殿を訪れられた, 225 - 226, 252 - 253
- __は, 神権の奉仕の模範である, 167
- __は, 教会の頭であられる, 214 - 216
- __は, すべての人が一つになるよう祈られる, 177 - 178
- __は, 間もなく地上に来て統治される, 253 - 254
- __は, 誘惑に打ち勝つ模範である, 227 - 228
- __を通して昇栄する, 77 - 78, 251 - 252
- ロレンゾ・スノーは__の訪れを受けた, 25, 214 - 216

イエス・キリストの教会

- __は, 堅固な土台の上に建てられている, 217
- __は, 反対に遭っても前進する, 214 - 216, 217 - 219

「神の王国」「教会での奉仕」の項も参照

イタリア伝道部, ロレンゾ・スノーによって設立された, 18 - 21, 185 - 187

イングランド

- ロレンゾ・スノーの__での伝道, 9 - 14, 194, 196
- ロレンゾ・スノーの__へ船旅, 157 - 158

一致

- __によって, 光と英知がもたらされる, 182
- __は, 互いに仕え合うときにもたらされる, 179 - 181
- 家族内の__, 178 - 179
- 教会内の__, 178 - 179
- __することによって, 神のもとに住む備えができる, 182
- __することによって, 強い民になる, 182
- __することによって, 世に主の特性を示すことができる, 177 - 178
- 定員会や組織内の__, 178 - 179

え

- 永遠, __の栄光はこの世の富に勝る, 227 - 228
- 永代移住基金, 176 - 177

お

親

- __は, 命と救いの原則を身に付けるべきである, 119
- __は, 家庭において愛と優しさを深める, 116 - 117
- __は, 子供に什分の一を納めるよう教え

るべきである, 145 - 146
 __は, 子供に模範を示す必要がある, 118
 - 119

「家族」の項も参照

か

カートランド神殿

__が奉獻されたときの祝福, 225 - 226
 __へのイエス・キリストの訪れ, 122, 225
 - 226, 252 - 253

快活さ, 神に仕えるときの__, 171

改宗・改心

__は, 証を得ることから始まる, 55 - 56
 __は, 信仰を増すことによって得られる,
 56 - 58
 ロレンゾ・スノーの__, 5 - 6, 52, 54

回復

__に関するロレンゾ・スノーの証, 245 -
 246
 __は, ジョセフ・スミスを通してもたらさ
 された, 187 - 188, 245 - 246
 __は, 預言されていた, 216 - 217

確認。「聖霊」の項を参照

家族

__の一致, 116 - 117, 179
 __の関係は, 神聖であり, 永遠である,
 115
 __の祝福は, 忠実な人々すべてに与えられ
 る, 115 - 116
 __の中で福音を教える, 118 - 119
 __は神殿で結び固められる, 124 - 125
 扶助協会が__に良い影響を与える, 152

家族歴史, 犠牲を払ってでも__の活動を行
 う, 126

家庭。「家族」の項を参照

神の栄光, __にひたすら心を向ける, 161

神の王国

__は, 前進し続ける, 214 - 216
 __は, 倒されることはない, 217 - 219
 __への献身, 227
 __を建設する, 220, 228
 扶助協会の会員たちが__の益を増す, 151

- 152
 まず__を求める, 228

「イエス・キリストの教会」「教会での奉仕」
 の項も参照

神の御心, __を求め, __に従う, 132 - 136

完成

__に到達するには, 悔い改めが必要であ
 る, 88 - 90
 __に到達するには, 天の助けと支えが必
 要である, 85 - 87
 __に到達するには, 日々の努力が必要で
 ある, 88 - 90, 92 - 93
 __は, 試練を通して得られる, 99
 __を求めるように戒められている, 85 -
 87
 自分の力の及ぶ範囲においての__, 87 -
 88

完全, __になるために自制心が求められる,
 85 - 87

き

ギー, ジョセフ, ロレンゾ・スノーによって癒
 される, 186 - 187

儀式

__は, 永遠の賜物と祝福をもたらす, 47 -
 48
 __は, 神権によって施される, 47 - 49,
 187 - 188
 死者のための__, 124 - 126

犠牲

__を払うことは, この世で救いを得るため
 に必要である, 219 - 221
 __を払うことは, 主から求められる, 220
 - 221
 __を払うことは, 神殿活動に求められる,
 126
 __を払うことは, 宣教師にとって必要であ
 る, 205 - 206
 __を払う際に, 神の助けを受ける, 159 -
 160
 __を払って, ほかの人々を祝福する, 180
 - 181, 235 - 236

逆境。「試練」の項を参照

教育

- __には、信仰と努力と根気が必要である、34 - 35
- __は、ロレンゾ・スノーにとって重要であった、3 - 4, 33 - 35
- 霊的な__、35 - 36, 55 - 56

教会での奉仕

- __は、困難であるが、喜びをもたらす、172
- __は、ほかの人々が救いを受けるのを助ける、167
- __を、忠実に、精力的に果たす、171 - 172
- すべての召しが重要である、168 - 170
- 扶助協会は__の機会を提供する、152

「奉仕」の項を参照

教師

- __には、御霊の導きが必要である、36 - 39, 197 - 198
- __は、愛をもって奉仕するべきである、197 - 198
- __は、子供に什分の一を納めることを教えるべきである、145 - 146
- __は、人を教えることによって教化される、234 - 235

く

悔い改め

- __によって失敗を克服する、88 - 90
- __は、バプテスマと確認に結びついている、44
- __を通して前進する、109 - 110
- 什分の一を怠ったことに対する__、143 - 144

クラブ、ウィリアム、ロレンゾ・スノーの命を救う助けとなる、63 - 65

け

啓示

- __の岩の上に建てられた教会、65 - 66
- __は、困難の中で助けてくれる、65 - 66
- __を得るには、謙虚さが必要である、70

結婚

永遠の__、現世で結婚しない人々の場合、

115 - 116

永遠の__、奨励されるべきである、115

永遠の__、神殿において執り行われる、124 - 125

__関係における気持ちの一致、116 - 117

扶助協会は__における忠実さを奨励している、152

謙遜さ

- 指導者には__が必要である、199 - 200
- __は、御霊を受けるために必要である、70
- __は、業を成し遂げるために必要である、220 - 221

こ

幸福

イエス・キリストによって確約された__、251 - 252

__は、神権を通してもたらされる、188 - 189

__は、聖霊の光の中を歩くときにもたらされる、68

__は、福音を受け入れるときにもたらされる、204 - 205

試練のさなかの__、96 - 97

ほかの人が__を見いだせるように助けるときに、自分の__も増す、234

高慢、ある教会指導者の例、194, 196

子供

__は、什分の一の律法を学ぶべきである、145 - 146

__は、大切な受け継ぎである、115

さ

才能

指導者は、他の人の__を使う、198

タラントのたとえ、168 - 170

再臨、イエス・キリストの__、253 - 254

し

慈愛

すべての人に__の手を差し伸べる、233 - 234

扶助協会の会員は__の模範である、151

ジェンセン, エラ, ロレンゾ・スノーの癒しにより命を取り戻した, 23 - 24

使徒, __の責任, 17 - 18

指導者

- __は, 愛をもって奉仕するべきである, 197 - 198
- __は, 自分の栄光を求めてはならない, 194, 196
- __は, 主の羊を養うように命じられている, 197
- __は, 責任を委任するべきである, 198
- __は, 人々の福利に関心を持たなければならない, 194, 196 - 200
- __は, 御霊から導きを受ける必要がある, 199 - 200

従順

- 神の御心に対して__であることによって, 力を受ける, 133 - 136
- __は, 祝福をもたらす, 43

十二使徒定員会, __の召しを受けたロレンゾ・スノー, 17 - 18

10人のおとめのたとえ, 254

什分の一

- 親と教師は__を納める模範を示すべきである, 145 - 146
- 子供たちは__を納めるように教えられるべきである, 145 - 146
- __の律法は, 理解することも従うことも難しくない, 143 - 144
- __は, 教会を負債から解放する, 28, 142
- __は, 神殿のために納められている, 144 - 145
- __を納めることにより, 地が聖められる, 145
- __を納めることにより, 霊的にも物質的にも祝福される, 141 - 142, 143 - 145
- すべての末日聖徒は__を完全に納めるべきである, 140 - 142, 143 - 144
- ロレンゾ・スノーは, __について教えるように靈感を受けた, 28, 140 - 141

主の業

- __により, 繁栄がもたらされる, 161 - 162

__は時折困難である, 172

__は喜びをもたらす, 172

__を達成するには, 神の助けが必要である, 161 - 162

昇栄

- __の可能性, 75 - 78, 115 - 116
- __は, イエス・キリストを通して可能になった, 251 - 252

女性, 主の業の中の__, 149

「扶助協会」の項も参照

試練

- __のときに忠実である, 96 - 97, 100
- __のときに喜びを見いだす, 79 - 80, 96 - 97
- __は, 神への愛を示す機会である, 100
- __は, わたしたちを日の栄えの光栄に備える, 98 - 100
- __を通して, 神に近づく, 102 - 103
- 主はわたしたちが__を乗り越えられるよう強めてくださる, 100 - 102
- 聖霊は__に耐えられるよう助けてくれる, 68 - 70

人格

- 義にかなった__はわたしたちを主に近づける, 110 - 111
- 義にかなった__を保つ, 110 - 111
- 悔い改めることによって__がはぐくまれる, 109 - 110
- 聖文から__を改善する方法を学ぶ, 108 - 109
- __を徐々にはぐくんでいく, 109 - 110
- ふさわしい__を築く, 107 - 108

神権

- __は, ジョセフ・スミスを通して回復された, 187 - 188
- __は, 天から授けられた権能である, 187 - 188
- __は, わたしたちが幸福を見いだせるよう助ける, 188 - 189
- __は, わたしたちを導き, 完成に至らせる, 188 - 189
- __を持つ者は, 義の原則に従うべきであ

- る, 190 - 192
 __を持つ者は, 人々に仕えるべきである, 190 - 192
 __を持つ者は, 扶助協会の姉妹たちと協力するべきである, 151
 __を持つ者は, 霊的な賜物を求め, 行使するべきである, 190 - 192
- 信仰
 __は, 人格を築き, 強めてくれる, 109 - 110
 __は, 努力によって深められる, 56 - 58
 __は, バプテスマと確認に結びついてい
 る, 44
 __は, 御霊の賜物の一つである, 65
 __は, 霊的な知識によって増し加えられ
 る, 56
 __をもって, 割り当てを果たす, 171 - 172
- 人生の目的, 137
- 神殿
 __で奉仕するために犠牲を払う, 126
 __で結び固められた家族, 124 - 125
 __と, 死者のための儀式, 124 - 126
 __の中で奉仕することの祝福, 126, 128
 __は, 神の祝福について学ぶ場所である, 124 - 125
 __は, 誘惑を拒む備えをさせてくれる, 126, 128
 __への招き, 124
 __を大切にしたいロレンゾ・スノー, 22 - 23
 __を通して, 救い手となることができる, 125 - 126
 清い心で__に参入する, 128
 福千年の主要な務め, 126
- 信頼
 神への__, 153 - 154, 157 - 158
 主の約束に対する__, 220 - 221
- 真理, 聖霊の賜物がすべての__に導いてく
 れる, 63 - 65
- す
-
- 救いの計画
 イエス・キリストの生涯と死は, __の一部
 である, 250 - 252
 __は, 世界が創造される前から存在した, 216
 福音は__である, 216 - 217
- スノー, エライザ・R (ロレンゾ・スノーの姉)
 __には, 子供がなかった, 115 - 116
 __は, 第2代中央扶助協会会長を務め
 た, 149
 __は, ロレンゾ・スノーの聖地への旅に同
 行した, 249 - 250
- スノー, オリバー (ロレンゾ・スノーの父), 3
 - 4
- スノー, ロゼッタ・レオノラ (ロレンゾ・ス
 ノーの母), 3 - 4
- スノー, ロレンゾ
 __と神殿の業, 22 - 23
 __の改宗, 5 - 6, 52 - 54
 __の教育, 4 - 6
 __の子供時代, 3 - 4
 __のバプテスマ, 5 - 6, 42
 __は, 証を得た, 5 - 6
 __は, イエス・キリストの訪れを受けた, 25, 215 - 216
 __は, イタリア伝道部を開設した, 18 - 21
 __は, イングランドへの旅の途中で嵐に
 遭った, 157 - 158
 __は, 永代移住基金のために寄付を集め
 た, 176 - 177
 __は, エラ・ジョンソンを癒した, 24
 __は, 家族会を準備した, 113, 115
 __は, 教会の大管長となった, 25
 __は, 教会の大管長として支持された, 214 - 216
 __は, けがをした船の給仕係を癒した, 12 - 14
 __は, 自分が奉仕した人から助けられた, 231, 233
 __は, 十二使徒定員会の会員として召され
 た, 17 - 18
 __は, 什分の一の律法を教えた, 28, 140 - 142
 __は, 神権を尊んで大いなるものとした,

- 105, 107
 __は、聖地を訪れた, 249 - 250
 __は、専任宣教師として奉仕した, 6 - 14, 18 - 21, 63 - 65, 185 - 187
 __は、専任宣教師になる決意をした, 203 - 204
 __は、多妻結婚をした, 16
 __は、他の宗派の指導者たちと交流した, 26 - 27
 __は、ハワイ諸島で伝道中に命を助けられた, 63 - 65
 __は、扶助協会の集会で話した, 149
 __は、ブリガムシティーの聖徒を導いた, 21 - 22
 __は、ブリガム・ヤングの改革の呼びかけに応じた, 105, 107
 __は、ブリガム・ヤングの妻にお金を残した, 9 - 10
 __は、マルタの教会を組織した, 165 - 166
 __は、マウントピスガの聖徒を導いた, 16
 __は、学ぶことに飢えていた, 3 - 4, 33
 __は、ロンドンの神権指導者に手紙を送った, 194, 196
 __は、ワルドー派の少年を癒した, 186 - 187
 ジョセフ・スミスとの経験, 240 - 241
 __は、若いころ聴衆の前で話したときの困難と成功について語った, 84 - 85
 スミス, アルマ・L, ロレンゾ・スノーの命を救う助けとなる, 63 - 65
 スミス, ジョセフ
 __についてのロレンゾ・スノーの証, 241 - 242, 245 - 246
 __によって神権が回復された, 187 - 188
 __の殉教, 214
 __の神聖な召し, 241
 __は、偽善の罪を犯さなかった, 242 - 243
 __は、徳高い人であった, 242
 __は、ノーブー神殿で力強く語った, 240
 __は、無邪気な遊びを楽しんだ, 242 - 243
 __は、召しを受けたとき、誠実な青年だった, 241 - 242
 __は、霊的な力と影響力を増し加えた, 243 - 245
 ロレンゾ・スノーが初めて__に会う, 241 - 242
 ロレンゾ・スノーと__の交わり, 240 - 242
 スミス, ハイラム, __の殉教, 214
- ## せ
- ### 成功
- 神の業における__は、従順によってもたらされる, 171 - 172
 __は、御父の御心を行うことによってもたらされる, 132 - 136
- ### 聖文, __は、人の神聖な可能性を教えている, 76 - 78
- ### 聖約
- バプテスマの__を守ると祝福を受ける, 49 - 50
 __を守らない, 227
 __を守ることで、喜びが得られる, 172
- ### 聖霊
- __の促しが、ロレンゾ・スノーの命を救った, 63 - 65
 __の賜物は、信仰と悔い改めと結びついている, 44
 __の賜物は、正しい権能によって授けられる, 47 - 48
 __の導きは、祝福に導いてくれる, 49 - 50
 __は、あらゆる真理に導いてくださる, 65 - 66
 __は、按手により授けられる, 46 - 47
 __は、神に関することを明らかにされる, 66 - 67
 __は、勧告を与えてくださる, 66 - 67
 __は、義務を果たせるよう助けてくださる, 68 - 69
 __は、求道者の心に働きかけてくださる, 206
 __は、試練を耐えられるよう助けてくださる

- る, 68 - 70
 __は, 伝道を行うよう会員たちを促される, 206
 __は, 特異な状況の中で助けてくださる, 63 - 65, 69
 __は, 平安と幸福をもたらしてくださる, 68
 __は, わたしたちが前進するのを助けてくださる, 70
 __は, わたしたちの友であられる, 66 - 67, 69 - 70
 __は, わたしたちを日の栄えの栄光に備えてくださる, 69

 そ

俗世

- 永遠の栄光と引き替えに__の富を得るのを拒む, 227 - 228
 __と自分を隔てる, 91 - 92, 158 - 159, 227
 __に対する警告, 224 - 226
 __は, 永遠の原則に背を向けさせる, 225 - 226

 た

大管長の職の継承, 214 - 216

 ち

知識

- __を人に分かち合う, 234 - 235
 霊的な__を得るには, 努力が必要である, 56 - 58
 霊的な__を増す, 56

「学ぶ」の項も参照

父なる神

- イエス・キリストは__の御心を行われた, 250 - 252
 自分の行う善いことに__の御手があることを認める, 136 - 137
 すべての人は__の子供である, 233 - 234
 __の栄光を求めるなら, 必ず成功する, 132 - 133
 __の助けがあれば, どのような求めにも応じることができる, 158 - 159

- __の御心を行う, 132 - 133
 __のような者になる可能性, 74 - 78
 __は, 御自分の民を守ってください, 219
 __は, 忠実な者のために驚くべき祝福を備えておられる, 124

忠実な者, __の行く末, 74 - 76

 て

定員会における一致, 178 - 179

伝道活動

- __と隣人愛, 209 - 210
 __において主の助けを受ける, 203 - 204
 __に参加する会員たち, 165 - 166
 __に参加する喜び, 204, 209 - 210
 __は, 善と喜びの訪れをもたらす, 206 - 207
 どのように仕えるかについての勧告, 206 - 209
 __は, 福音の祝福を受けられるように人々を助けるものである, 204 - 206
 __を行う際に, 天から遣わされた使者として仕える, 208
 __を行うための犠牲, 204 - 206, 209 - 210
 __を専任で行う理由, 204 - 205

天の御父。「父なる神」の項を参照

 と

投機, カートランドの背教の原因となる, 225 - 226

 に

忍耐, __は, 完全になるために必要である, 86

 は

背教

- オハイオ州カートランドでの__, 224
 __は俗世への執着に続いて起こる, 223 - 226

迫害, 教会は__によって倒されない, 217 - 219

働く・努力する・〔神の〕業

主がわたしたちを置いてくださる場所で

__, 157
 託された__を成し遂げる, 220 - 221
 友に益をもたらすために__, 234 - 235
 パッテン, デビッド・W, ロレンゾ・スノーに
 証を述べる, 1, 3
 バプテスマ
 イエス・キリストの__, 49 - 50, 250
 正しい権能によって施される__, 47 - 49
 __の聖約を守るとき, 祝福がもたらされ
 る, 49 - 50
 __は聖霊の賜物に先立つ, 44
 __は罪の赦しのために必要である, 44,
 46 - 47
 水に沈める方法で行われる__, 45 - 46
 ロレンゾ・スノーの__, 6, 42
 繁栄, __の秘訣, 251
 反対勢力, 神の王国は__によって倒されな
 い, 217 - 219

 ひ

日の栄えの王国
 聖霊がわたしたちを__に備えてくださる,
 67 - 70
 __を得るために努力する, 80
 日の栄えの律法, 生活の中で__を確立する,
 172

 ふ

福祉, 他の人の__に献身する, 199 - 200
 福千年, __における神殿の業, 126
 扶助協会
 __が奉仕する機会は, 今後さらに増す,
 152
 __の使命, 151
 __は, 会員たちが日の栄えの栄光を目指せ
 るよう助ける, 153 - 154
 __は, 家庭に良い影響をもたらす, 152
 __は, 神の王国の益を増す, 151
 __は, 慈愛と清い信心の模範である, 151
 __は, 神権者と協力して働く, 151
 __は, 母親を強める, 152
 プリガム・シティー, __でのロレンゾ・ス

ノー, 21 - 22

 へ

平安

__は, イエス・キリストを通して得られる,
 251 - 252
 __は, 聖霊によってもたらされる, 68

 ほ

奉仕

__をすることを通して, 幸福になる, 234
 __をすることを通して, 祝福がもたらされ
 る, 231, 233
 __をすることを通して, 成長する, 234 -
 235
 __をすることを通して, 天の特質が身に付
 く, 235 - 236
 __をする際に才能を用いる, 198
 __をする際の動機を確認する, 196

「教会での奉仕」の項も参照

ホサナ斉唱, 123 - 124

 ま

マウントビスガ

__での娯楽, 96 - 97
 __を管理したロレンゾ・スノー, 16, 96 -
 97

学ぶ

信仰によって__, 34
 繰り返し__ことが有益である, 36
 __ためには根気が必要である, 34 - 35
 御霊によって__, 36 - 39

「知識」の項も参照

マルタ, __におけるロレンゾ・スノーの奉仕,
 165 - 166

 め

恵み, 157

召し

__は, どれも神の業の中で大切である,
 168 - 170
 __を尊ぶ, 168 - 170
 __を果たすには, 主の助けが必要である,

133 - 137, 157 - 158

も

模範

- 親は、子供に__を示すべきである, 118 - 119
指導者と教師は、救い主の__に従うべきである, 197 - 198
__は、雄弁な教師である, 199

ゆ

友情,

- 他の宗派・宗教の人々との__, 204 - 205
__を保つには、両者の努力が必要である, 179

誘惑

- 神殿の業により__を拒む備えができる, 126, 128
宣教師は__に近づいてはならない, 209
__から逃れる方法, 224
__に打ち勝つ, 225 - 226
__を受けても忠実であり続ける, 100
__を克服できるよう、主が強めてくださる, 100 - 102

赦し, 181

よ

喜び

- 真理の大義に献身するとき、__がある, 172
苦難の中にあって、__を見いだす, 79 - 80, 102 - 103

ら

落胆, __を乗り越える, 90, 153 - 154

れ

霊的な賜物, __を求めるべきである, 190 - 192

わ

ワルドー派, 19 - 21, 185 - 187

末日聖徒
イエス・キリスト
教会

